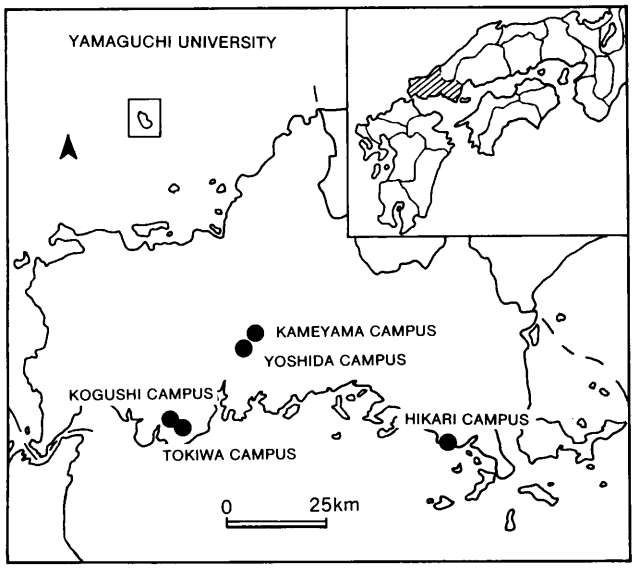
山口大学構内遺跡調査研究年報X

1992

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報X



1992

山口大学埋蔵文化財資料館

序　　文

埋蔵文化財資料館の年報Xを出版することが出来ることとなった。関係部局の方々の御配慮のお蔭と感謝している。ここ数年来の資料館の希望は、山口大学の各学部に収蔵されている貴重な資料を、考古資料も含めて一ケ所に収納し研究する施設の設置と、吉田地区内に保存されている弥生～古墳時代集落跡の遺跡整備である。後者については二度まで計画案を作成し、もう少しのところで実現可能という局面もあったが、残念ながらつぶれた。本年報には特にその点を考慮して、資料館の現在考えている整備のアウトラインがわかるような図面と短文を添えてある。検討の材料としていただければ幸いである。

13年近く山口大学埋蔵文化財資料館助手として勤務してくれた河村吉行氏が、山口県史編纂室に、4月1日より勤務することとなった。3年間教務補佐員として勤めてくれた古賀真木子氏も3月にその任期を終える。河村君の御苦労の結果が、大学施設の充実につながり、埋蔵文化財資料館の立場を学内外に認めていただけるようになったことは大きい。

両氏に感謝したい。

1992年3月

山口大学埋蔵文化財資料館
館長　近　藤　喬　一

例　　言

1．本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、平成２年度に山口大学構内で実施した調査の報告書である。また、付篇Ｉとして『昭和53・54・55年度の山口大学構内の発掘調査』を、付篇IIとして『山口大学構内の埋蔵文化財の分布』を、付篇IIIとして『化粧に用いる金属製の菊花形の皿』を掲載する。

2．現地における調査・研究は、資料館員河村吉行・古賀真木子が担当した。また、出土遺物の整理は同館員則近和佳代が行った。

3．調査・研究における事務一般は、事務局庶務課学事係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があたった。

4．現地における遺構等の実測は、河村が行った。

5．遺物の実測は、石器を除く第２章、第５章第３節を古賀、その他は河村が行い、製図は、則近が行った。

6．本文の執筆は、第２章、第５章第３節、第４節１および付篇IIIを古賀が行い、その他は河村が行った。

7．現地における写真撮影および遺物の写真撮影は河村が行った。

8．石器の石質鑑定は、主に理学部教授松本徑夫氏に依頼し、懇切な御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

9．本書の編集は館員が協力して行った。

10．調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。

11．調査組織は下記のとおりである（平成２・３年度）。

調査主体	埋蔵文化財資料館	館　長	近藤　喬一	
		館　員	河村　吉行	
		同	古賀真木子	
		同	則近和佳代	
事務局		事務局長	有地　成光	〔～平成３年３月31日〕
		同	宗形　郁夫	〔平成３年４月１日～〕
	本部庶務部	部　長	菊地　洋男	
	庶務課	課　長	佐野　　紀	〔～平成２年８月31日〕
		同	久保　鉄男	〔平成２年９月１日～〕
		課長補佐	宮原　　毅	〔～平成３年３月31日〕
		同	兵頭　欣二	〔平成３年４月１日～〕
	学事係	係　長	池田　圭介	
			多賀谷勇治	〔～平成３年３月31日〕
			宮崎　邦雄	〔平成３年４月１日～〕

12. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は平成２年度）。

事務局庶務部　人事課長　高崎治夫、同課長補佐　森屋　守、同係長　柳　洋二、同係　藤井純朗、高藤祐行

経理部　部長　真塩　実、主計課長　本間　実、同課長補佐　兵頭欣二、経理課長　小林政太郎、同課長補佐　河野繁之、総務係長　石崎啓介、予算係長　上谷克弘、監査係長　田中善人、管財係長　小林和生、用度係長　石川恒夫、同係　小室和輝、須藤　馨

施設部　部長　伊達昭三、企画課長　竹田忠文、建築課長　東山邦雄、同課長補佐　上田孝雄、設備課長　下村一成、総務係長　上田準一、同係　栗田年夫、企画係長　三浦幸一、建築第一係長　稲垣實造、同係　河田徹也、武市佳人、建築第二係長　川西智信、同係　澤谷弘美、電気係長　吉永峯生、同係　松田清司、岡野友資、機械係長　鈴木輝美、同係　鹿島正則、板垣健一

人文・理学部　事務長　原田政明、事務長補佐　竹腰直道、同　増谷　泰、会計係長　野澤章三、同係　上田幸作、田坂武男

教育学部　事務長　吉岡隆夫、事務長補佐　中村義満、会計係長　梅村　馨、附属山口中学校校長　和田　章、同副校長　田中健二、附属光小学校校長　岸　光城、同副校長　高山　清、附属光中学校校長　門前貞三、同副校長　中村恒愛、附属養護学校校長　岩崎貞徳、同副校長　鶴永幸夫、山口附属学校係係長　末成和憲、同係　山本恭子、片山美津枝、光附属学校係係長　三原秀脇、同係　桝野博之、寺西　智、川上けい子、古迫芳己、南ヒロ子、附属養護学校係係長　佐村研治

経済学部　事務長　西澤喜昭、会計係長　高林昭夫

医学部　事務部長　武田禎郎、同次長　金子作三、総務課長　原　國正、同課長補佐　野村宗成、管理課長　本田信一、同課長補佐　林　宏行、西野雅博、庶務係長　森田義富、管理係長　中村文穂、経理係長　伊藤敏穂、施設係長　小川賀津夫、同係　淺川紀秋、設備係長　山本安雄、同係　吉野高己、前田祐史、橋本一範、弘中智則、永冨　保、田中武敏、田村悦夫、環境係長　山本直行

工学部　事務長　元永道徳、事務長補佐　柳　等、庶務課係長　原　和男、会計係長　山本隆嗣

山口市シルバー人材センター

光市シルバー人材センター

宇部市シルバー人材センター

凡　　例

1．吉田構内における調査地区および層位・遺構の位置は、国土座標を基準として北から南へ１～24、西から東へＡ～Ｚの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のＡ－24区南西隅を起点（構内座標x＝０，y＝０）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第III系における座標値（Ｘ，Ｙ）と構内座標値（x，y）とは下記の計算式で変換される。

　　x＝Ｘ＋206,000

　　y＝Ｙ＋ 64,750

2．各遺構は下記の記号で表記することがある。

　　土壙　……　ＳＫ，溝・溝状遺構　……　ＳＤ

3．本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

4．標高数値は海抜標高を示す。

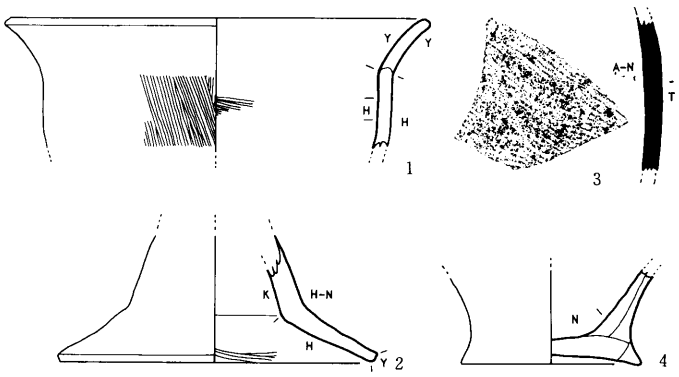
5．本文中の遺物番号は、挿図・図版・出土遺物観察表の番号と一致させた。

6．遺物・土層の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

7．土器の実測図は、下記のように器種分類した。

断面黒ぬり……須恵器，断面白ぬり……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器，断面網目……陶磁器

8．土器の器面調整については、断面周囲に調整の境界を記し、境界間に下記の略記号により明示した。ただし、風化等による不明部分は無記入とした。



【土器実測図の調整凡例】

〔種類〕

N…ナデ（Nhヘラナデ）

Y…横ナデ（Yhヘラ横ナデ）

H…刷毛目、M…ミガキ

K…ケズリ、T…タタキ

A…タタキ当て具痕、C…カキ目

J…条痕、U…施釉、X…条線

HK…底部ヘラ切り、IK…底部糸切り

I…板目圧痕、Oy…指おさえ

〔先後関係〕

H-N…刷毛目のちナデ

1：口縁部内外面横ナデ。胴部は外面縦刷毛目、内面は横刷毛目が一部にみられるが、調整不明。

2：外面刷毛目のちナデ。裾端部は横ナデする。内面は脚柱部へラケズリ、裾部横刷毛目。

3：外面平行タタキ、内面はのち当て具痕をナデ消す。

4：底部内面のみナデが観察できるが、その他は内外面とも調整不明。

本　文　目　次

第１章　平成２年度山口大学構内遺跡調査の概要 ……（河村）…… 1
第２章　亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う
　　発掘調査 ……（古賀）…… 5
　1　調査の経過 …… 5
　2　層位 …… 6
　3　遺構 …… 10
　4　出土遺物 …… 11
　5　小結 …… 35
第３章　光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査 …（河村） 47
　第１節　試掘調査
　　1　調査の経過 …… 47
　　2　層位 …… 48
　　3　出土・御手洗湾採集遺物 …… 51
　　4　小結 …… 53
　第２節　事前調査
　　1　調査の経過 …… 54
　　2　層位 …… 54
　　3　遺構 …… 55
　　4　出土遺物 …… 58
　　5　小結 …… 59
第４章　小串構内医学部附属病院動物・RI実験棟新営に伴う試掘調査 （河村） 63
　1　調査の経過 …… 63
　2　層位 …… 63
　3　出土遺物 …… 64
　4　小結 …… 64
第５章　平成２年度山口大学構内の立会調査 ……（古賀・河村）…… 67
　第１節　吉田構内の立会調査
　　1　大学会館前庭部環境整備に伴う立会調査 …… 67
　　2　第一学生食堂設備改修に伴う立会調査 …… 68

3　教育学部附属養護学校案内板設置に伴う立会調査 …… 69
第2節　常盤構内の立会調査
工学部ガス管改修に伴う立会調査 …… 70
第3節　亀山構内の立会調査
教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査 …… 71
第4節　その他構内の立会調査
1　人文・理学部7号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査 …… 81
2　経済学部3号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査 …… 82
付篇
付篇　I
昭和53・54・55年度山口大学構内の発掘調査 ……（河村）…… 83
第1章　昭和53年度山口大学構内の発掘調査 …… 83
吉田構内人文学部校舎新営に伴う試掘調査…… 83
第2章　昭和54年度山口大学構内の発掘調査 …… 85
第1節　吉田構内理学部校舎新営に伴う試掘調査 …… 85
第2節　吉田構内農学部動物舎新営に伴う試掘調査 …… 87
第3章　昭和55年度山口大学構内の発掘調査 …… 90
第1節　吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査 …… 90
第2節　吉田構内農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査 …… 94
第3節　昭和55年度山口大学構内の立会調査 …… 101
1　吉田構内本部環境整備に伴う立会調査…… 101
2　吉田構内農学部環境整備に伴う立会調査…… 102
付篇　II
山口大学構内の埋蔵文化財の分布 ……（河村）…… 103
1　はじめに …… 103
2　山口大学構内遺跡の調査の経過 …… 103
3　各構内の埋蔵文化財の分布状況 …… 104
吉田構内…… 104
小串構内…… 114
常盤構内…… 118
亀山構内…… 119

光構内…… 123
4　遺跡の整備・活用に向けて …… 126
5　おわりに …… 130
付篇　III
化粧に用いる金属製の菊花形の皿 ……（古賀）…… 133
1　はじめに …… 133
2　形式分類 …… 134
3　分布・出土遺構からみた所有者層 …… 139
4　菊花形皿の使用者と同時代の出土遺物 …… 140
5　化粧道具のセットからみた菊花形の皿 …… 141
6　おわりに …… 144
山口大学構内遺跡調査要項
山口大学埋蔵文化財資料館規則…… 147
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則…… 148
山口大学構内の主な調査…… 150
Summary …… 157

図　版　目　次

〈亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査〉　本文対応頁
ＰＬ．1　亀山構内（教育学部附属山口中学校）全景（南東から）
ＰＬ．2　(1) Ａ区完掘状況（北西から）…… 8
(2) Ａ区完掘状況（南東から）…… 8
(3) Ａ区西壁中央部土層断面（東から）…… 6
ＰＬ．3　(1) 第１号溝状遺構検出状況（北西から）…… 11
(2) 第１号溝状遺構完掘状況（北西から）…… 11
ＰＬ．4　(1) Ａ区第６層遺物出土状況（東から）…… 20～25
(2) Ａ区第８層遺物出土状況（西から）…… 25・26
ＰＬ．5　(1) Ｂ区完掘状況（北西から）…… 9
(2) Ｃ区完掘状況（北西から）…… 9
ＰＬ．6　(1) Ｄ区完掘状況（南東から）……9・10

(2) 第２号溝状遺構検出状況（北西から） …… 11
(3) 第２号溝状遺構完掘状況（北西から） …… 11
ＰＬ．７ (1) Ｅ区完掘状況（南西から） …… 10
(2) Ｆ区完掘状況（南東から） …… 10
ＰＬ．８ 出土遺物 (1)
ＰＬ．９ 出土遺物 (2)
ＰＬ．10 出土遺物 (3)
ＰＬ．11 出土遺物 (4)
ＰＬ．12 出土遺物 (5)
ＰＬ．13 出土遺物 (6)
ＰＬ．14 出土遺物 (7)
ＰＬ．15 出土遺物 (8)
ＰＬ．16 出土遺物 (9)
ＰＬ．17 出土遺物 (10)
ＰＬ．18 出土遺物 (11)
〈光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査〉
ＰＬ．19 光構内（教育学部附属光小学校・同光中学校）全景（北東から）
ＰＬ．20 (1) Ａトレンチ全景（北から） …… 48
(2) Ｂトレンチ全景（東から） …… 48・49
(3) Ｃトレンチ全景（東から） …… 49
(4) Ｄトレンチ全景（東から） …… 49
ＰＬ．21 (1) Ｅトレンチ全景（南から） …… 49・51
(2) Ｆトレンチ全景（南から） …… 51
(3) Ａトレンチ南壁土層断面（北から） …… 48
(4) Ｂトレンチ西壁土層断面（東から） …… 48・49
ＰＬ．22 (1) Ｃトレンチ西壁土層断面（東から） …… 49
(2) Ｄトレンチ西壁土層断面（東から） …… 49
(3) Ｅトレンチ北壁土層断面（南から） …… 49・51
(4) Ｆトレンチ北壁土層断面（南から） …… 51
ＰＬ．23 (1) 第２層検出遺構（南西から） …… 55
(2) 第３層検出遺構（南西から） …… 55～58

ＰＬ．24　(1) 第１号土壙遺物出土状況（北西から） …… 55
(2) 第１号土壙（北西から） …… 55
ＰＬ．25　(1) 第２号土壙（南東から） …… 55・56
(2) 第３号土壙（東から） …… 56・57
ＰＬ．26　(1) 第４号土壙（北西から） …… 57
(2) 第５号土壙（南東から） …… 57・58
ＰＬ．27　出土遺物 (1)
ＰＬ．28　出土遺物 (2)
〈小串構内医学部附属病院動物・ＲＩ実験棟新営に伴う試掘調査〉
ＰＬ．29　小串構内（医学部・同附属病院、医療技術短期大学部）全景（南西から）
ＰＬ．30　(1) Ａトレンチ全景（南から） …… 63・64
(2) Ｂトレンチ全景（南から） …… 64
(3) Ｂトレンチ北壁中央部土層断面（南から） …… 64
(4) 出土遺物
〈平成２年度山口大学構内の立会調査〉
ＰＬ．31　亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査出土遺物 (1)
ＰＬ．32　亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査出土遺物 (2)
ＰＬ．33　(1) 亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査出土遺物 (3)
(2) 人文・理学部７号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査出土遺物
付篇　Ｉ
〈昭和53・54・55年度山口大学構内の発掘調査〉
吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査
ＰＬ．34　吉田構内全景（北西から）
ＰＬ．35　(1) 調査区全景（東から）
(2) Ａトレンチ全景（東から） …… 90・91
(3) Ｂトレンチ全景（北から） …… 91
ＰＬ．36　(1) Ａトレンチ南壁東端部土層断面（北から） …… 90・91
(2) Ａトレンチ南壁中央部土層断面（北から） …… 90・91
(3) Ａトレンチ南壁西端部土層断面（北から） …… 90・91
(4) Ｂトレンチ南壁土層断面（北から） …… 91
吉田構内農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査

ＰＬ．37　(1) 調査区全景（東から）
(2) 第１号土壙（南東から） …… 95
(3) 第２号土壙（南西から） …… 95
(4) 第３号土壙（南東から） …… 96
ＰＬ．38　(1) 第４号土壙（北西から） …… 96
(2) 第５号土壙（北から） …… 96・97
(3) 第３号溝遺物出土状況(1)（南から） …… 97・98
(4) 第３号溝遺物出土状況(2)（南から） …… 97・98
ＰＬ．39　出土遺物
付篇　II
〈山口大学構内の埋蔵文化財の分布〉
ＰＬ．40　(1) 吉田構内教養部複合棟敷地落し穴（西から） …… 107
(2) 吉田構内教養部複合棟敷地縄文土器出土状況（東から） …… 108
ＰＬ．41　(1) 吉田構内遺跡保存地区第９号竪穴住居跡（弥生時代中期後半）(東から) …… 110
(2) 吉田構内遺跡保存地区第21号竪穴住居跡と環濠（弥生時代中期後半）(北西から) …… 110
ＰＬ．42　(1) 吉田構内遺跡保存地区第13号竪穴住居跡（弥生時代終末）(北西から) …… 112
(2) 吉田構内教養部複合棟敷地掘立柱建物跡（江戸時代）（北から） …… 114
ＰＬ．43　(1) 吉田構内教養部複合棟敷地井戸（江戸時代）（東から） …… 114
(2) 小串構内病棟敷地出土旧石器 …… 116
ＰＬ．44　亀山構内（教育学部附属幼稚園・同山口小学校）全景（東から）
ＰＬ．45　(1) 亀山構内教育学部附属山口小学校敷地溝状遺構木器出土状況（南から）……120
(2) 亀山構内教育学部附属山口小学校敷地竪穴住居跡（東から） …… 122
ＰＬ．46　光構内遠景（東から）
付篇　III
〈化粧に用いる金属製の菊花形の皿〉
ＰＬ．47 …… 133～139

挿　図　目　次

〈平成２年度山口大学構内遺跡調査の概要〉
Fig．1　山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図…… 2

Fig．2　山口大学小串・常盤両キャンパス位置図……3
Fig．3　山口大学光キャンパス位置図……4
〈亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査〉
Fig．4　調査区位置図……5
Fig．5　調査区設定図……6
Fig．6　土層断面図……7・8
Fig．7　第1号溝状遺構実測図……10
Fig．8　第2号溝状遺構実測図……11
Fig．9　A区第5層出土遺物実測図（1）……12
Fig．10　A区第5層出土遺物実測図（2）……13
Fig．11　A区第5層出土遺物実測図（3）……16
Fig．12　A区第5層出土遺物実測図（4）……17
Fig．13　A区第5層出土遺物実測図（5）……19
Fig．14　A区第6層出土遺物実測図（1）……20
Fig．15　A区第6層出土遺物実測図（2）……22
Fig．16　A区第6層出土遺物実測図（3）……23
Fig．17　A区第6層出土遺物実測図（4）……25
Fig．18　A区第8層出土遺物実測図……26
Fig．19　A区第10層・第13層出土遺物実測図……27
Fig．20　A区第15層出土遺物実測図……27
Fig．21　A区撹乱層・排土出土遺物実測図……28
Fig．22　B区出土遺物実測図（1）……29
Fig．23　B区出土遺物実測図（2）……30
Fig．24　C区出土遺物実測図……32
Fig．25　出土石器実測図（1）……33
Fig．26　出土石器実測図（2）……34
〈光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査〉
試掘調査
Fig．27　調査区位置図（1）……47
Fig．28　調査区位置図（2）……48
Fig．29　土層断面図……50

Fig．30　出土遺物実測図…… 52
事前調査
Fig．31　調査区位置図…… 54
Fig．32　土層断面図…… 55
Fig．33　遺構配置図…… 55
Fig．34　第１号土壙実測図…… 56
Fig．35　第２号土壙実測図…… 56
Fig．36　第３号土壙実測図…… 57
Fig．37　第４号土壙実測図…… 57
Fig．38　第５号土壙実測図…… 58
Fig．39　出土遺物実測図…… 59
〈小串構内医学部附属病院動物・ＲＩ実験棟新営に伴う試掘調査〉
Fig．40　調査区位置図…… 63
Fig．41　トレンチ設定図…… 64
Fig．42　土層断面図…… 65
Fig．43　出土遺物実測図…… 66
〈平成２年度山口大学構内の立会調査〉
吉田構内の立会調査
Fig．44　調査区位置図…… 67
Fig．45　調査区位置図…… 68
Fig．46　調査区位置図…… 69
常盤構内の立会調査
Fig．47　調査区位置図…… 70
亀山構内の立会調査
Fig．48　調査区位置図（１）…… 71
Fig．49　調査区位置図（２）…… 72
Fig．50　出土遺物実測図（１）…… 73
Fig．51　出土遺物実測図（２）…… 74
Fig．52　出土遺物実測図（３）…… 76
その他構内の立会調査
Fig．53　出土遺物実測図…… 81

Fig．54　調査区位置図…… 81
Fig．55　調査区位置図…… 82
付篇　I
〈昭和53・54・55年度山口大学構内の発掘調査〉
吉田構内人文学部校舎新営に伴う試掘調査
Fig．56　調査区位置図…… 83
Fig．57　トレンチ設定図…… 84
吉田構内理学部校舎新営に伴う試掘調査
Fig．58　調査区位置図…… 85
Fig．59　トレンチ設定図…… 86
吉田構内農学部動物舎新営に伴う試掘調査
Fig．60　調査区位置図…… 87
Fig．61　トレンチ設定図…… 88
Fig．62　Aトレンチ土層断面実測図…… 89
吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査
Fig．63　調査区位置図…… 90
Fig．64　トレンチ設定図…… 91
Fig．65　Aトレンチ土層断面実測図…… 92
Fig．66　Bトレンチ土層断面実測図…… 93
吉田構内農学部農業環境実験施設新営に伴う発掘調査
Fig．67　調査区位置図…… 94
Fig．68　土層断面実測図…… 95
Fig．69　遺構配置図…… 95
Fig．70　第1号土壙実測図…… 96
Fig．71　第2号土壙実測図…… 96
Fig．72　第3号土壙実測図…… 97
Fig．73　第4号土壙実測図…… 97
Fig．74　第5号土壙実測図…… 98
Fig．75　溝土層断面実測図…… 98
Fig．76　出土遺物実測図…… 99
Fig．77　出土銭貨幣拓影…… 99

昭和55年度山口大学構内の立会調査

Fig．78　調査区位置図…… 101
Fig．79　調査区位置図…… 102

付篇　II

〈山口大学構内の埋蔵文化財の分布〉

Fig．80　吉田構内の土層断面柱状図…… 105
Fig．81　ナイフ形石器実測図（吉田構内遺跡保存地区）…… 107
Fig．82　落し穴実測図（吉田構内教養部複合棟敷地）…… 108
Fig．83　弥生時代前期末～中期初頭の袋状竪穴実測図（吉田構内大学会館前庭部）… 109
Fig．84　弥生時代中期後半の竪穴住居跡実測図（吉田構内遺跡保存地区第9号竪穴住居跡）110
Fig．85　弥生時代終末の竪穴住居跡実測図（吉田構内遺跡保存地区第13号竪穴住居跡）… 112
Fig．86　室町時代の溝で囲まれた屋敷跡実測図（吉田構内本部２号館敷地）…… 114
Fig．87　小串構内旧石器時代の遺物出土地点位置図…… 115
Fig．88　旧石器時代の遺物実測図（小串構内病棟敷地）…… 117
Fig．89　常盤構内配置図…… 119
Fig．90　鳥形木製品実測図（亀山構内教育学部附属山口小学校敷地）…… 120
Fig．91　亀山構内（教育学部附属幼稚園・同山口小学校）の埋蔵文化財分布図…… 121
Fig．92　亀山構内（教育学部附属山口中学校）の埋蔵文化財分布図…… 123
Fig．93　光構内配置図…… 124
Fig．94　吉田構内遺跡保存地区の整備試案…… 128

付篇　III

〈化粧に用いる金属製の菊花形の皿〉

Fig．95　瑠璃光寺跡遺跡出土の銅製菊花皿…… 133
Fig．96　菊花形皿の法量分布…… 136
Fig．97　菊花形皿の変遷…… 138

Fig．98　山口大学吉田構内地区割および調査区位置図 …… 159・160
Fig．99　山口大学小串構内調査区位置図 …… 161・162
Fig．100　山口大学常盤構内調査区位置図…… 163・164
Fig．101　山口大学亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図…… 165・166

Fig．102　山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図…… 167・168
Fig．103　山口大学光構内調査区位置図…… 169・170

付図　1　吉田構内の埋蔵文化財分布図

表　目　次

〈平成2年度山口大学構内遺跡調査の概要〉
Tab．1　平成2年度山口大学構内遺跡調査一覧表…… 1
〈亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査〉
Tab．2　出土遺物観察表…… 40
〈光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査〉
Tab．3　出土遺物観察表…… 62
〈亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査〉
Tab．4　出土遺物観察表…… 79
付篇　I
〈昭和53・54・55年度山口大学構内の発掘調査〉
Tab．5　出土遺物観察表…… 100
付篇　III
〈化粧に用いる金属製の菊花形の皿〉
Tab．6　金属製の菊花形皿一覧表…… 134
Tab．7　化粧道具の中でのお歯黒皿・紅皿…… 143

Tab．8　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員…… 149
Tab．9　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員…… 149
Tab．10　山口大学構内の主な調査一覧表…… 150

第１章　平成２年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口（吉田・亀山構内）・宇部（小串・常盤構内）・光（光構内）の県内各市に分散している。各構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての複合集落遺跡として著名な吉田構内をはじめとして、旧石器時代のまとまった遺物が出土する小串構内など周知の遺跡が埋存している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各構内において現状変更を伴う諸工事に対し、埋蔵文化財保護の立場から調査・研究を行っている。埋蔵文化財の調査を必要とする場合は、工事地域周辺における既往の調査結果や工事の内容、埋蔵文化財に対する影響の度合等を勘案し、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、事前・試掘・立会の三種の調査方法によって調査を実施している。

平成２年度は下記のように、事前調査２件、試掘調査２件、立会調査７件の計11件の調査を実施した。

Tab. 1　平成２年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	調査面積(㎡)	調査期間	挿図番号
事前	教育学部附属山口中学校汚水排水管布設	亀山構内		70	８月１日～９月28日	Fig. 101—12
	教育学部附属光小学校運動場改修	光構内		23	11月１日～11月15日	Fig. 102— 9
試掘	教育学部附属光小学校運動場改修	光構内		15	７月５日～７月19日	Fig. 102— 8
	医学部附属病院動物・ＲＩ実験棟新営	小串構内		40	11月19日～11月30日	Fig. 98—20
立会	教育学部附属山口中学校汚水排水管布設	亀山構内		130	11月４日～12月29日	Fig. 101—13
	大学会館前庭部環境整備	吉田構内	M—15	2	２月18日	Fig. 97—118
	第一学生食堂設備改修	吉田構内	J—19・20	7	２月20日	Fig. 97—119
	人文・理学部７号職員宿舎公共下水道切替			1.2	２月26日 ３月５日	
	教育学部附属養護学校案内板設置	吉田構内	E—20	1	３月18日	Fig. 97—120
	経済学部３号職員宿舎公共下水道切替			1	３月25日	
	工学部ガス管改修	常盤構内		45	３月27日	Fig. 90— 9

吉田構内の調査(本部、人文・教育・経済・理・農の各学部、教養部：山口市大字吉田1677-1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在)

３件の立会調査を実施した。

構内のほぼ中央部で実施した、大学会館前庭部環境整備に伴う立会調査では、試掘調査時に検出した縄文～室町時代の遺物包含層と同一層を確認したが、調査面積が狭小なため遺物は出土しなかった。また、包含層の下位には地山を検出したが、遺構は確認できなかった。構内の南西部で実施した、教育学部附属養護学校案内板設置に伴う立会調査では、遺構は検出できなかったが、青灰色砂質粘土の地山を確認し、周辺地域とは異なるグライ化した地山の堆積がみられた。なお、構内の南端部付近で実施した、第一学生食堂設備改修に伴う調査では、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

Fig. 1　山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図

小串構内の調査(医学部、同附属病院、医療技術短期大学部:宇部市大字小串1144所在)

構内の南西部で医学部附属病院動物・ＲＩ実験棟新営に伴い試掘調査を実施したが、旧石器時代の所産と考えられる蛇紋岩製の縦長剝片が１点出土したにとどまった。調査区の北東に位置する病棟敷地で検出された、ナイフ形石器・削器・二次加工のある剝片・使用痕のある剝片など、比較的まとまった旧石器時代の遺物を包含する堆積層は構内造成による客土中に存在し、今回の調査地域には堆積していないことも確認された。しかし、旧石器時代の遺物を包含する堆積層は、確実に構内の南西部にも分布範囲をもつことが明かとなった。

常盤構内の調査（工学部：宇部市常盤台2557、尾山宿舎：同上野中所在）

構内の南西部で、ガス管の埋設に伴い立会調査を実施したが、造成による構内の削平が著しく、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

亀山構内の調査（教育学部附属幼稚園：山口市白石三丁目1-2、同山口小学校：同三丁目1-1所在）

山口中学校敷地で汚水排水管付設に伴い、事前調査、立会調査各１件の計２件の調査を実施した。事前調査は、試掘調査の結果を受けて、遺物包含層が分布している南西部の校舎周辺の路線について行った。遺構は校舎西側の昇降口付近で溝状遺構を検出したが、出土遺物がほとんどなく、また、残存状態も極めて悪いため、規模、流路方向、時期など不明な点が多い。遺物包含層は主に校舎の南西部に堆積しており、数層に分層される。主体となる時期は庄内併行期で、壺・甕・鉢・高坏・器台・手捏土器などの土器類のほか、粗製扁平打製石斧、剝片などがまとまって出土した。出土遺物には在地系、山陰系、畿内系など種々の系譜の土器類が含まれており、外来系要素の組成、流入経路、展開過程を明らかにする良好な資料となった。また、最下層の包含層は縄文時代晩期末の単純層であることもあらためて確認できた。なお、遺物包含層は校舎の反対側でも検出されたが、室町時代の遺物が若干出土したにすぎない。立会調査では、北西端部に位置するプール東側で遺物包含層を検出し、同じく庄内併行期の土器が多量に出土した。庄内併行期の遺物包含層は構内の西端部の谷状の落ち込みに厚く堆積していることが確認でき、分布範囲はさらに西側に広がるものと推察された。

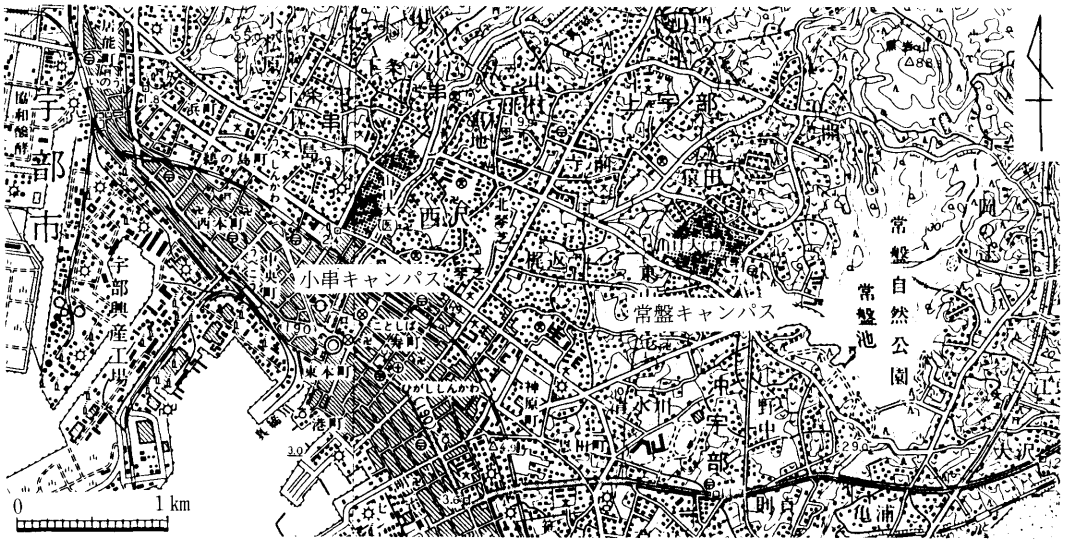


Fig. 2　山口大学小串・常盤両キャンパス位置図

光構内の調査（教育学部附属光小学校、同光中学校：光市大字室積浦1－１所在）

「御手洗遺跡」として周知されている地域で、光構内の西半部に位置する小学校の運動場改修に伴い調査を実施した。試掘調査では、運動場の北・東両縁に設定した４ヶ所のトレンチで、縄文時代晩期後半～室町時代の遺物包含層を検出した。遺物包含層は数層におよぶが、大半が同一層に大きく時期の隔たる遺物が混在しており、一括性に乏しいものであった。しかし、運動場の東縁南端部のトレンチでは５世紀代の遺物包含層が堆積しており、また、遺構の可能性のある落ち込みもあわせて検出したことから、この地域周辺では工事に先だって事前に発掘調査を実施する必要性が生じた。事前調査の結果、これまで19世紀代の遺構しか知られていなかった光構内で、古墳時代に遡る土壙５基を検出した。遺構面は上下二層あり、下層の土壙が切り合い関係にあることから、６世紀末～７世紀初頭、および６世紀代二時期の少なくとも三時期の土壙が存在することが明かになるとともに、出土遺物中に占める丹塗りの土器の多さが注目された。集落関連遺構の検出は、峨嵋山の北麓縁辺部に立地する光構内の南半部を中心に、６～７世紀代の集落が存在することを示唆する資料となった。

その他構内の調査

山口市石観音町1－25に所在する人文･理学部職員宿舎、および山口市香山町3－1に所在する経済学部職員宿舎において、公共下水道切替に伴い立会調査を実施した。

人文・理学部職員宿舎では地山を検出したが、顕著な遺構は確認できなかった。遺物には整地土から出土した近～現代の陶磁器類がある。経済学部職員宿舎では、安定した黄褐色粘質土の地山を検出したが、遺構は確認できなかった。調査地域周辺では遺跡は全く周知されておらず、埋蔵文化財の空白地となっているが、一の坂川の下流に近い右岸の低丘陵上に立地していることから、今後、遺構が検出される可能性も否定できない。

Fig. 3　山口大学光キャンパス位置図

第2章　亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査

1　調査の経過

附属山口中学校敷地ではこれまで散発的な調査に終始しており、本格的な埋蔵文化財の調査が行われるのは今回が初めてである。その契機となったのは公共下水道への切替工事で、教育学部附属山口学校の所在する亀山構内では先に附属幼稚園・小学校敷地で発掘調査を行っている[1)]。附属山口中学校敷地でも同事業計画に呼応して、埋設管路内の埋蔵文化財の有無を把握するため昭和61年度に試掘調査を実施した[2)]。その結果、２ｍ×２ｍを基本として設定したトレンチ８ヶ所のうち、敷地の南西部にあたるグラウンド以西の３ヶ所で遺物が出土した。特に、校舎西側の白石小学校間のトレンチ（第５トレンチ）では、庄内併行期および縄文時代後・晩期の遺物包含層が検出され、附属山口中学校敷地が埋蔵文化財包蔵地であることが周知されるに至った。他の５ヶ所のトレンチでは構内造成土の直下に黄褐色系のシルト質の地山を確認したが、遺構は検出できず、遺物も出土しなかった。

試掘調査の結果を受けて埋蔵文化財資料館運営委員会は、遺物包含層および遺物が分布する地域を中心に、汚水排水管の埋設に先立ち事前に発掘調査の必要があると判断した。当初、調査は遺物包含層の分布が第５トレンチと校舎を挟んで対峙する、第２トレンチでは認められないことから、校舎周囲を「コ」の字に巡る第２トレンチ以西の路線について行う予定であった。その後、昭和63年度の屋内消火栓設備改修に伴う立会調査[3)]で、試掘調査時には遺物が出土していなかった中庭部分から土師器、磁器などが出土したことから、新たに調査対象地域に加えることとなった。なお、試掘調査で遺物が全く認められなかったトレンチ周辺の路線は、調査結果および現況の地形などから後世の削平によって埋蔵文化財の分布する可能性が薄いと判断されたため、工事施工時に改めて立会調査を実施することとした。

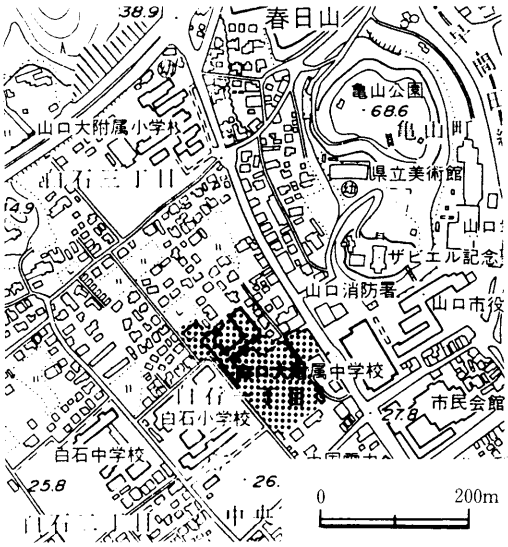


Fig. 4　調査区位置図

最終的な調査区は、新規の埋設管路内にある既設の集水桝や地下埋設物によって分断され、校舎南西部のＡ～Ｃ区、グラウン

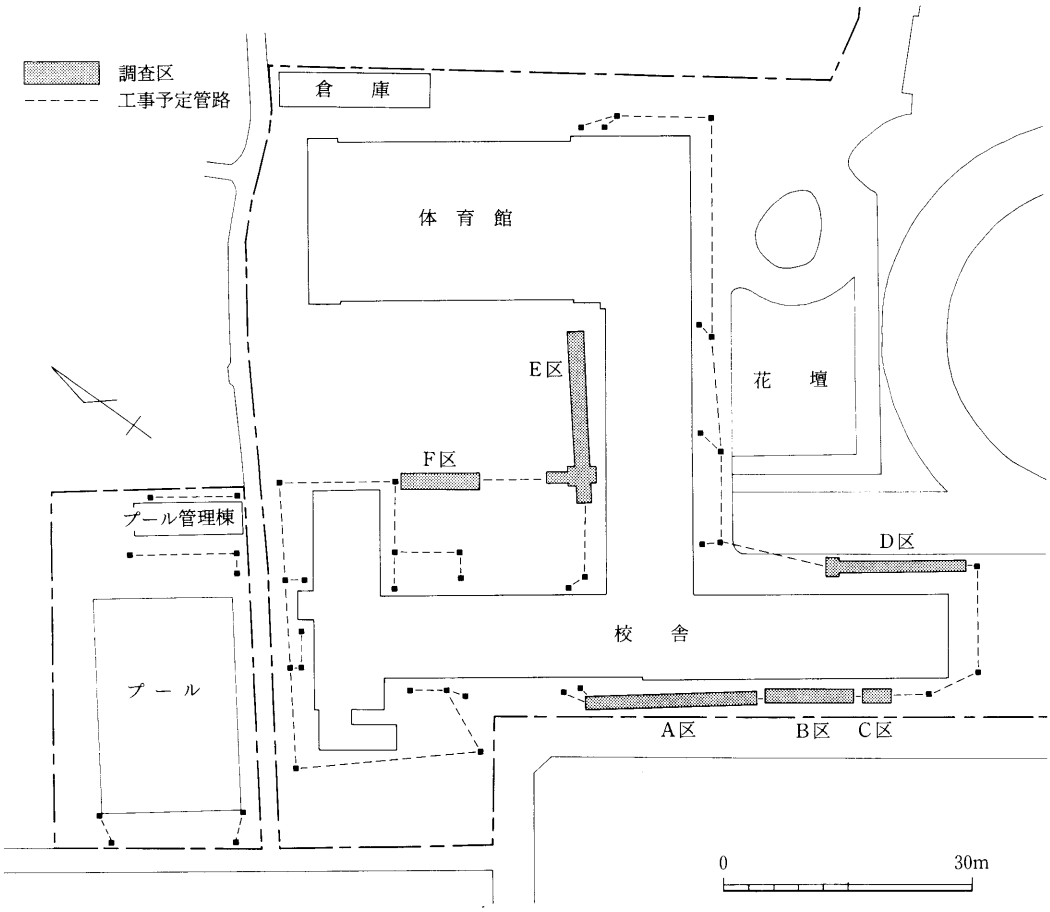


Fig. 5　調査区設定図

ド側のD区、中庭のF・E区の計6か所となった。調査期間は平成2年8月1日から9月28日までで、調査総面積は約70m²であった。

2　層位（Fig. 6，PL. 2 (3)）

A区

校舎南西部に設定した調査区。現地表面には厚さ8cmのアスファルトが敷設されている。埋め土は約30～40cmと薄く、その下位には客土である平均層厚約10cmの第4層：黄褐色粘質土が部分的に残存する。試掘調査では、弥生土器、土師器、須恵器を包含することが確かめられているが、本調査区では遺物は出土していない。第4層の下位には試掘調査時に検出した庄内併行期の遺物包含層が堆積する。包含層は第5層：黒褐色粘質土、第6層：黒褐色シルト、第7a層：黒褐色礫の三層に分層され、各層ともほぼ水平堆積している。

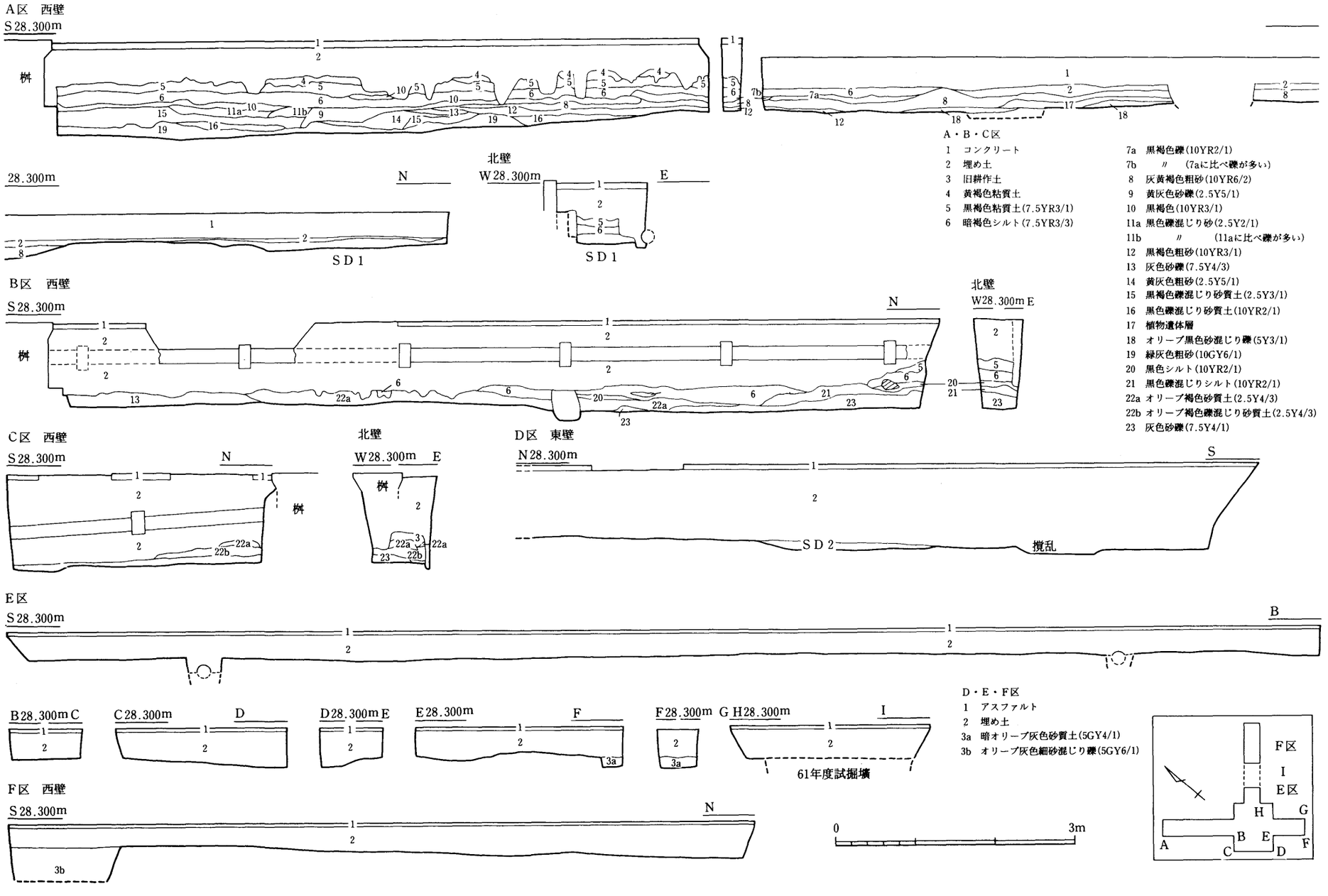

A区　西壁
S28.300m
桝
28.300m
N
北壁
W28.300m
E
SD1
SD1
B区　西壁
S28.300m
N
北壁
W28.300m E
桝
C区　西壁
S28.300m
N
桝
北壁
W28.300m　E
桝
D区　東壁
N28.300m
S
SD2
撹乱
E区
S28.300m
B
B28.300m C
C28.300m
D
D28.300m E
E28.300m
F
F28.300m
G H28.300m
I
61年度試掘壙
F区　西壁
S28.300m
N
0
3m
A・B・C区
1　コンクリート
2　埋め土
3　旧耕作土
4　黄褐色粘質土
5　黒褐色粘質土(7.5YR3/1)
6　暗褐色シルト(7.5YR3/3)
7a　黒褐色礫(10YR2/1)
7b　〃　(7aに比べ礫が多い)
8　灰黄褐色粗砂(10YR6/2)
9　黄灰色砂礫(2.5Y5/1)
10　黒褐色(10YR3/1)
11a　黒色礫混じり砂(2.5Y2/1)
11b　〃　(11aに比べ礫が多い)
12　黒褐色粗砂(10YR3/1)
13　灰色砂礫(7.5Y4/3)
14　黄灰色粗砂(2.5Y5/1)
15　黒褐色礫混じり砂質土(2.5Y3/1)
16　黒色礫混じり砂質土(10YR2/1)
17　植物遺体層
18　オリーブ黒色砂混じり礫(5Y3/1)
19　緑灰色粗砂(10GY6/1)
20　黒色シルト(10YR2/1)
21　黒色礫混じりシルト(10YR2/1)
22a　オリーブ褐色砂質土(2.5Y4/3)
22b　オリーブ褐色礫混じり砂質土(2.5Y4/3)
23　灰色砂礫(7.5Y4/1)
D・E・F区
1　アスファルト
2　埋め土
3a　暗オリーブ灰色砂質土(5GY4/1)
3b　オリーブ灰色細砂混じり礫(5GY6/1)
F区
I
E区
H
G
A
B
E
F
C
D

Fig. 6　土層断面図

各包含層とも層厚は約10cmであるが、遺物の包含量は最上位の第５層が最も多く、最下位の第７ａ層は上位二層に比べて極端に少ない。層位的には分層されるが、後述するように各層から出土する弥生土器は大きな時期差はなく、第５層と第６層との接合資料が存在することなどからも極めて近接した時期のもので、一型式の範疇に収まるものと理解できる。また、畿内系、山陰系、在地系など出自の異なる土器系統で構成されており、在地の土器文化圏への外来要素の展開課程を知る上で注目される。第７ａ層の下位には数層に分層される縄文時代晩期後半～終末の遺物包含層がブロック状に堆積する。包含層の最下層は第15層：黒褐色礫混じり砂質土で、無遺物層を介在して地山に達する。地山は、北端部が黄褐色礫混じり粘質土、以南がグライ度の高い緑灰色礫で、その色調・組成が大きく異なり、縄文時代の遺物包含層は、調査区北端部付近から次第に南へ下降する地山の落ち込み部分に堆積している。遺構は調査区北端部のやや高まりのある平坦部分から、弥生時代終末～庄内併行期の溝状遺構１条を検出した。

Ｂ区

Ａ区の南側に位置する調査区。埋め土は最大で約80cmの層厚をもち、その下位の堆積層には弥生土器、土師器を包含するが、量的にはＡ区に比べて少ない。既設の埋設管による削平、撹乱が著しく、特に、Ａ区に堆積が認められる第５層は北端部に残存するにすぎない。第６層は最大層厚約25cmでＡ区に比べ層厚を増すが、その分布は北半部に限定される。その下位にはＡ区では検出されなかった庄内併行期の遺物を含む層厚各約10cmの第20層：黒色シルト、第21層：黒色礫混じりシルトが北端部に堆積する。その下にはＡ区同様、第22ａ層：オリーブ褐色砂質土、第23層：灰色砂礫の縄文時代晩期後半～終末の遺物包含層が堆積し、緑灰色砂礫の地山に至る。後世の削平に起因して、南半部では埋め土の直下が縄文時代の遺物包含層である。

Ｃ区

Ｂ区の南側に位置する調査区。埋め土は層厚約70～100cmにわたり厚く客土されており、北端部ではその下位に旧耕作土が残存する。旧耕作土下には主として弥生土器、土師器などを包含する第22ｂ層：オリーブ褐色礫混じり砂質土が堆積するが、室町時代の遺物が混在しており、周辺からの二次堆積層である。その下位には基本的にＢ区南半部同様、縄文時代の遺物包含層である第23層：灰色砂礫が堆積し、緑灰色砂礫の地山に至る。

Ｄ区

グラウンド側に設定した調査区。現地表面には厚さ６cmのアスファルトが敷設されてお

り、その下位に埋め土が層厚約80～100cmにわたって厚く客土されている。埋め土の直下はグライ度の高いオリーブ灰色系の地山で、溝状遺構１条を検出した。出土遺物が小片で、量的にも極めて少ないため時期はわからない。

Ｅ区

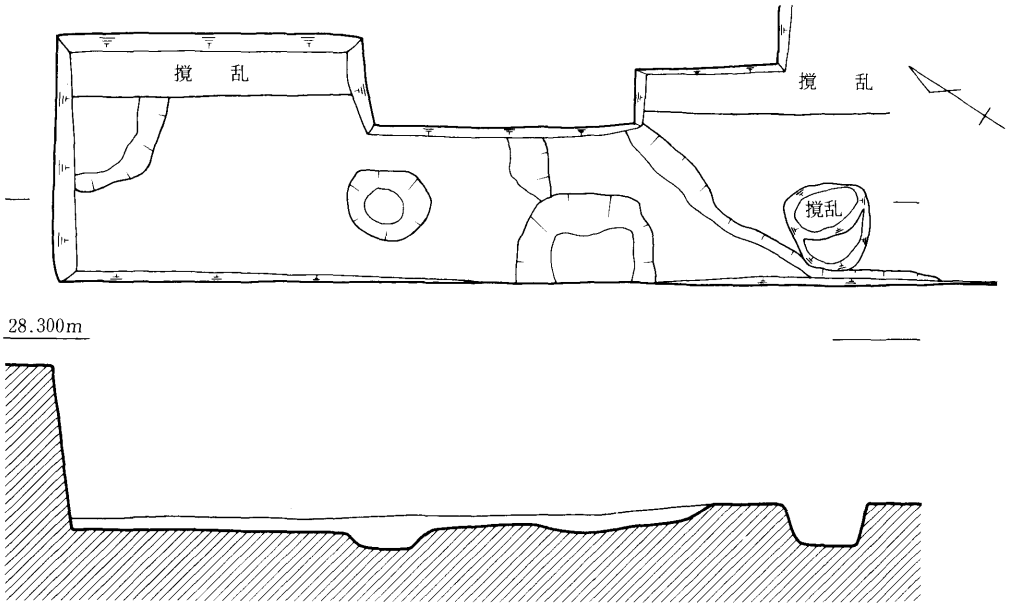
中庭に設定した調査区。現地表面には厚さ４cmのアスファルトが敷設されており、その下位に層厚約30～40cmの埋め土が客土されている。埋め土の直下がＤ区同様グライ度の高いオリーブ灰色系の地山あるが、東半部では細砂混じりの礫、西半部では砂質土で構成されており、粒度、組成が一様でない。河川の氾濫などに起因する堆積物と考えられる。遺構は検出されなかった。出土遺物には、埋め土内からの縄文土器、弥生土器、土師器若干がある。

Ｆ区

Ｅ区の北側に設定した調査区で、地山に至る層順、埋め土の堆積厚はＥ区と大差ない。地山を構成する堆積層は、Ｅ区東半部と同一のオリーブ灰色系の細砂混じりの礫で、最上位の検出面から約25cm下位で湧水する。遺構、遺物とも認められなかった。

３　遺構

溝状遺構



１　黒褐色砂質土（7.5YR2/1）木炭・直径５㎜前後の風化礫・角礫を含む。

Fig. 7　第１号溝状遺構実測図

溝状遺構・A区第5層出土遺物

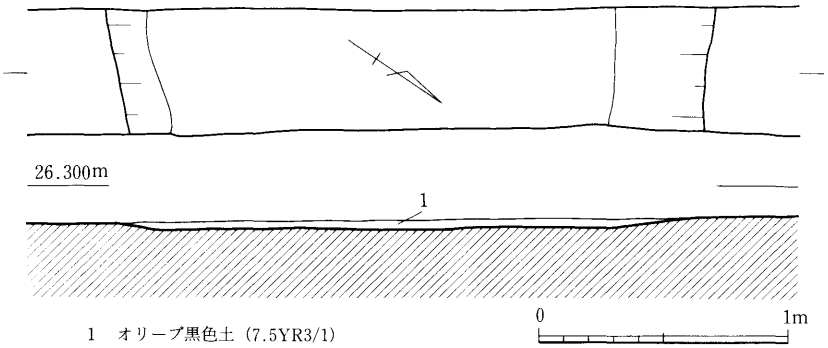


Fig. 8　第2号溝状遺構実測図

第1号溝状遺構（Fig. 7，PL. 3）

A区の北端部に位置し、調査区内を北－南に走行する。溝の西肩部は調査区外にあたるため検出していないが、上面幅2m以上の規模が想定される。溝の東側壁面は階段状に二段にわたって下降しており、検出面からの深さは平均5～7cm、調査区北壁付近の最深部で約10cmである。断面形は浅い皿状を呈し、内部には平面円形状の3か所の落込みが存在する。検出面の標高は約27.6m。埋積土は黒色砂質土（7.5YR2/1）で、弥生土器の小片約20点が出土した。溝検出面の直上層（第6層）の出土遺物の下限が庄内段階であること、また出土遺物中に後期終末を遡る弥生土器が出土していないことなどから、弥生時代後期終末～庄内段階の溝と考えられる。

第2号溝状遺構（Fig. 8，PL. 6 (2) (3)）

D区南端から北へ約3.4mの地点で北側の肩部を検出した。調査区内を北東－南西に走行し、上面幅約2.4mの規模をもつ。断面形は浅い皿状を呈し、後世の削平によって検出面からの深さは約5cmを残すにすぎない。検出面の標高は約26.2mで、埋積土はオリーブ黒色土（7.5YR3/1）である。土師器の小片約7点が出土したが、時期は明かでない。

4　出土遺物

土器

A区第5層（Fig. 9～13，PL. 8～11・17）

縄文土器の甕または深鉢、弥生土器の壺・甕・鉢・高坏・器台、土師器の壺・甕・高坏・器台・ミニチュア土器が出土した。

縄文土器（1～6）

1～6は晩期の粗製の土器。1は器形不明。器壁はやや薄く、内面に条痕風擦過を、外面に刷毛を同一工具で施したと考えられる。2・3・6は甕または深鉢。2は内面に板状

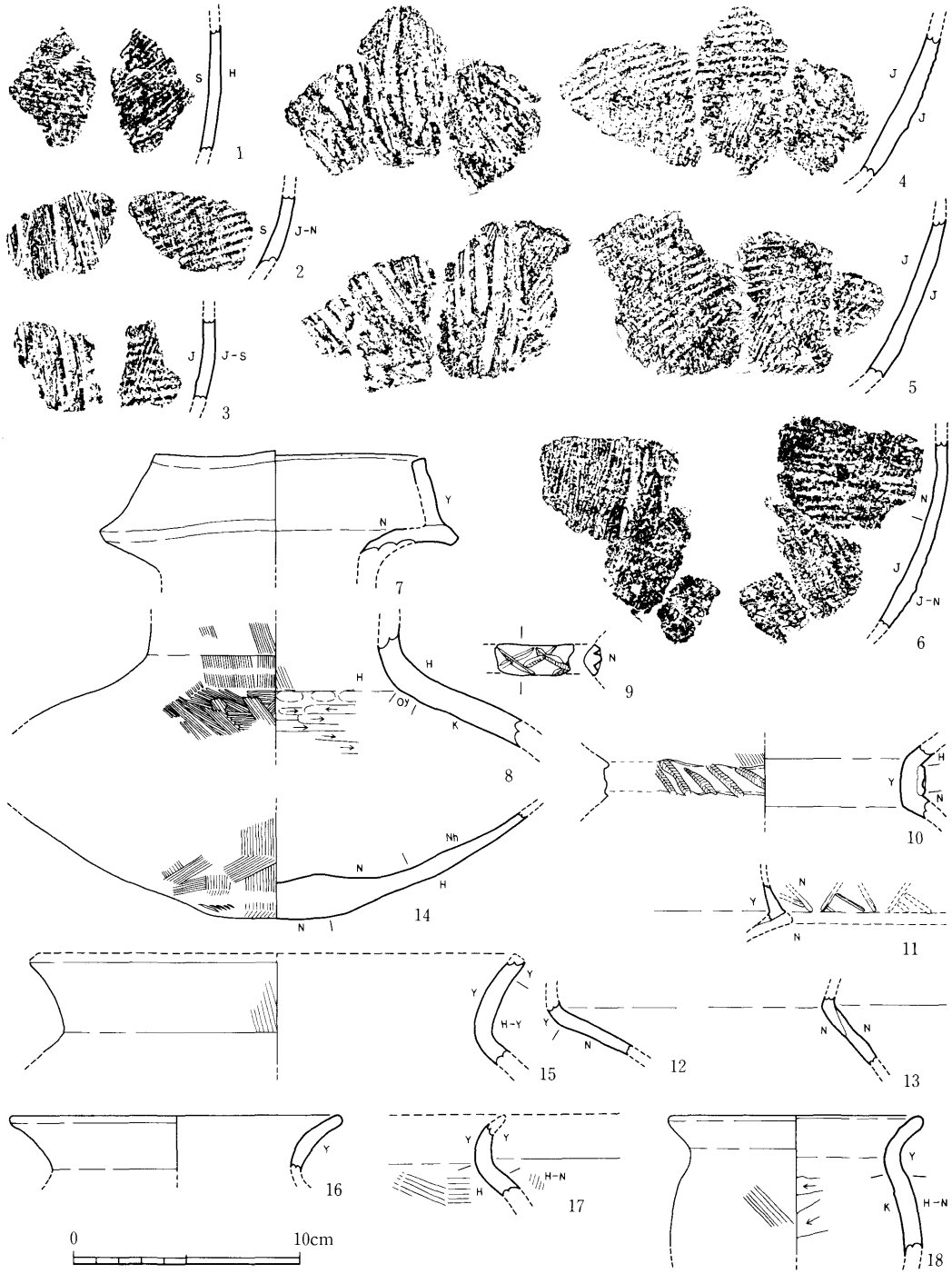


Fig. 9　A区第5層出土遺物実測図（1）

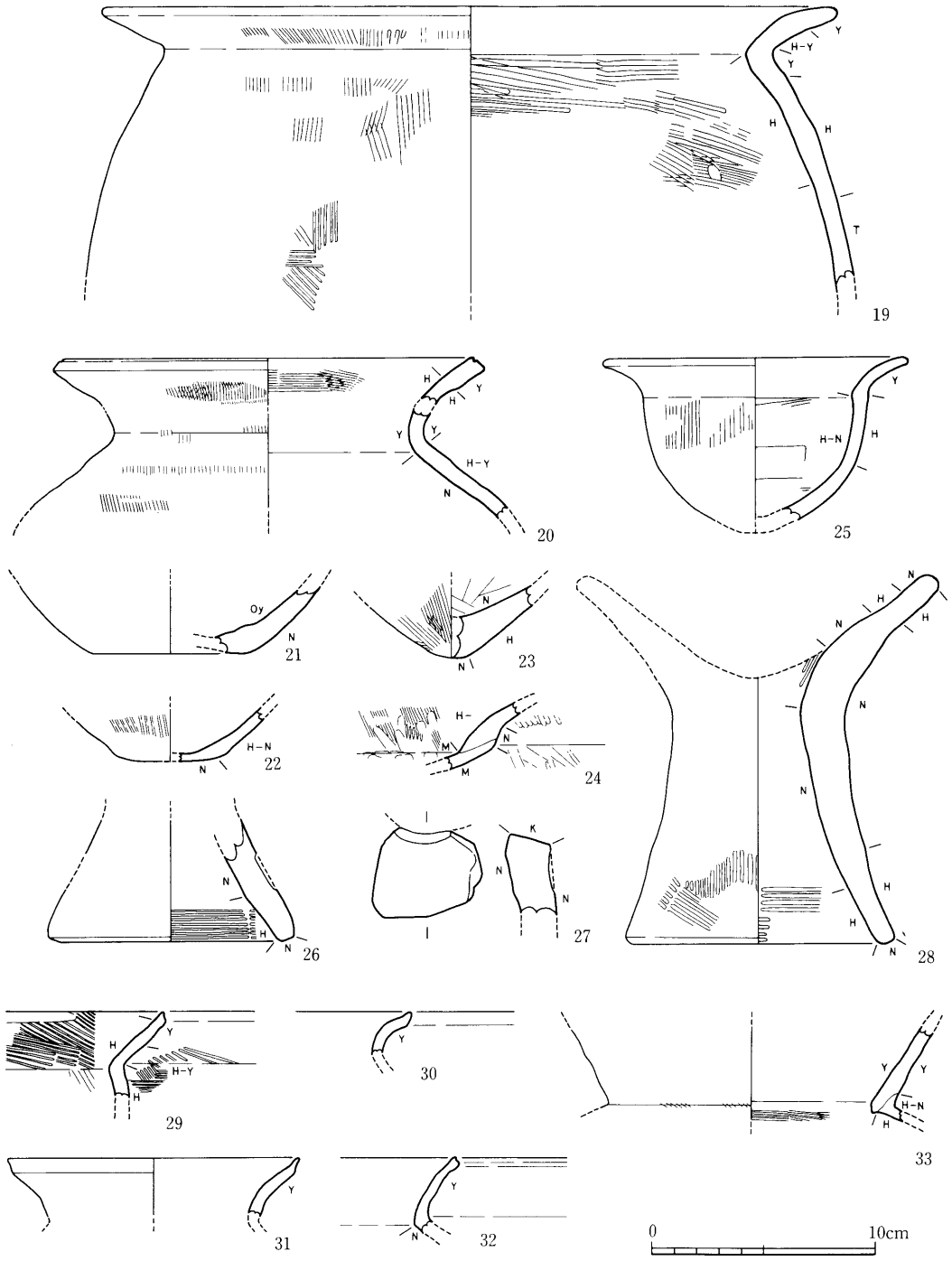


Fig. 10　A区第5層出土遺物実測図（2）

工具による縦方向の条痕風擦過が施され、外面は横方向の貝殻条痕のちナデ。3は内面に縦方向の貝殻条痕、外面に横方向の貝殻条痕のち右上がりの刷毛風擦過が施される。6はやや器壁が薄い。内面上部はナデ、下部は縦方向の細かい条痕、外面は貝殻条痕のちナデを施す。4・5は深鉢の底部付近と思われる。4は内面に縦方向の貝殻条痕、外面上部に横方向の貝殻条痕、下部に右上がりの斜めの貝殻条痕が施される。5は4と同一個体の可能性がある。内面には、下から上への貝殻条痕が、外面には横のち縦の2回の貝殻条痕が施される。

弥生土器（7～28）

7～14は壺。7・8はひずみが著しく、接合せず頸部径も異なるが同一個体と思われる。器壁がやや厚い。上段の口縁の長い複合口縁で、鍔状の部分がわずかに下垂する。端部は面をもち内傾する。9は剝離した頸部の突帯。接合面は丁寧にナデられ、擬口縁を呈す。刷毛状工具で格子状の深い刻みがつけられる。10は頸部に突帯を貼りつける。頸部は短く、突帯の幅分でおわる。突帯には、単位13本の刷毛状工具により左上がりの刻み目がつけられる。刻み目の間隔は均等ではなく、また角度にばらつきがある。11は複合口縁の内傾する口縁上部。下部は接合時の擬口縁となる。器壁が薄い。外面の文様はヘラ描きで下向きの鋸歯文の間に2本の左上がりの直線を刻む。12・13は頸部～胴上部。13は成形時の粘土帯の継ぎ目が明瞭にわかる。14は大型の壺の底部。わずかに平底の痕跡を残し、器壁が厚い。外面の刷毛はつんだ目と、粗い目の2種類がある。外面には煤が、内面には炭化物が付着している。

15～23は甕。15は口縁端部が斜め外方に面をもつ。頸部内面は、ゆるくカーブし稜が不明瞭。16は口縁がゆるく外反し、端部は肥厚して丸い。17は口縁端部を欠く。頸部はゆるくカーブして稜をもたない。外面の一部に、赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。18は器壁が厚く、口縁端部は肥厚して丸い。内面のケズリは主に右から左になされ、雑で大きくえぐれている部分もある。頸部はゆるくカーブして稜をもたない。19は大型の甕。器壁が厚く、口縁頸部の屈曲が強い。口縁端部は丸い。外面は頸部に強い横ナデを、胴中央にタタキを施す。外面に部分的に煤が付着する。20は口縁がやや長く、端部が肥厚し、凹線の巡る面を斜め外方にもつ。凹線は爪または細い工具によってつけられ、全周はしないと思われる。刷毛は細かく、口縁内面の刷毛は廉状文風に短い単位を左から右へ重ねていく。21は上げ底気味の底部。内面の指押えは雑になされる。22は痕跡的な平底となり、底部は薄く仕上げられる。外面の刷毛は1単位5本で目が粗く間隔にばらつきがみられる。外面

に煤が、内面に炭化物が厚く付着する。23は尖り気味の底部。内面のナデは、皮状の素材を使いごく細かい痕がつく。1単位は1.2cm幅。外面の刷毛は目が粗く、下から上へなされる。

24は高坏。坏の屈曲部付近。内面は粗・細2種類の刷毛が使われ、接合部はヘラで押さえる。外面のヘラナデはミガキの後に施すが、やや雑で一部削り状の痕跡となる。

25は鉢。底部を欠くが、痕跡的な平底になると思われる。外面の刷毛は1単位が1.8cmの幅広だが、風化が進み本数の確認はできない。

26～28は器台。26は基部で、内端面が接地する。内面の刷毛は粗い。27は受部で、上面はケズリで成形する。受け部と裾部が同角度で開き、全面の上から½～⅓を切り取る。28は器壁が厚く、器面の凹凸が大きい。上端部はヘラナデされたようにやや角張り、下端部は丸い。最小径付近には、シボリ目が残る。左右に大きな2枚の翼状突起、前方にやや小さい1枚の突起がつくと思われる。

土師器（29～86）

33は壺。口縁は長く伸びるが、上部を欠損する。頸部で胴と口縁を接合し、接合時の粘土の盛り上がりが内面に見られる。

29～32は甕。口縁端部が上方につまみ上げられる。29は刷毛の目が粗く強く押し付けられる。30は口縁が外反し、端部はやや丸い。31は内外面とも横ナデのち部分的に直交するナデを施す。32は端部が肥厚し、外側に面をもち中央に沈線が巡る。

34～41は甕。頸部が緩くカーブを描き、明瞭な稜をもたない。34は胴内面上部にほとんど調整がなされず、粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。粘土帯の幅は狭い。胴内面中央部に板状工具によるケズリが施され、刷毛目同様の木目痕がつく。外面には丁寧なヘラナデを施す。35は口が大きく開き、端部は肥厚し丸い。36は器壁がやや薄く、口縁端部内面が角張る。外面に部分的に煤が付着する。37は口縁が短い。内面の調整は、部分によりヘラでミガキ風にもナデ風にも仕上げる。外面にヘラ状工具の痕がついた部分がある。38は胴内面に粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。外面のナデは丁寧。39は風化が進むが、口縁内外面横ナデ、胴内面ケズリと思われる。40は口縁端部がやや尖る。41は胴内面に粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。頸部～口縁の横ナデは丁寧に施される。

42～44は口縁が直線的に外傾し、端部が尖る甕の口縁。42は内面に短い刷毛を重ねて調整する。43は端部から0.5cm下で内面が薄くなる。44は外面に強めのナデを施す。45～50は端部が丸い甕の口縁。34～41のいずれかと同一個体かもしれない。45は器壁が厚く、外面

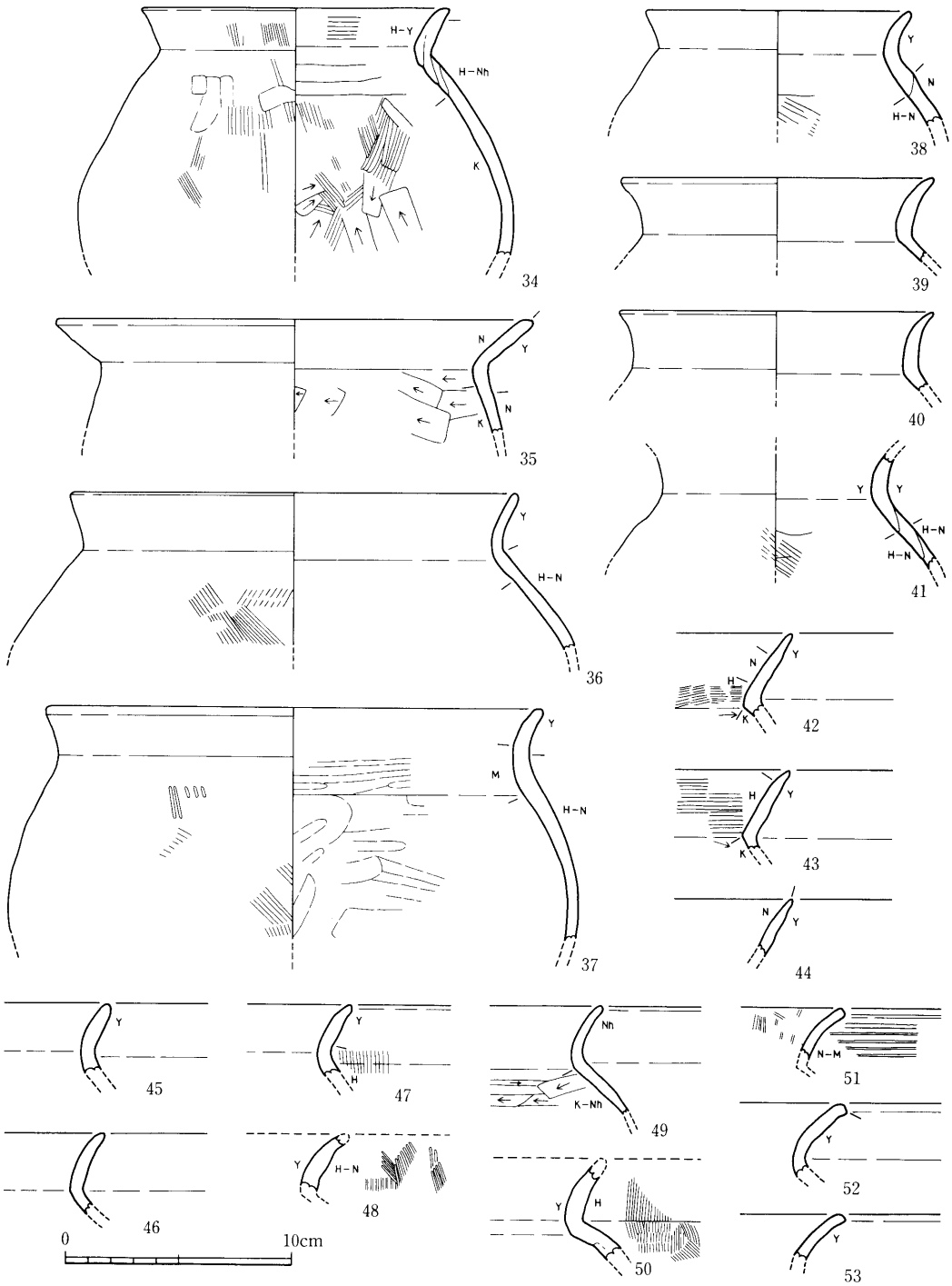


Fig. 11　A区第5層出土遺物実測図（3）

A区第5層出土遺物

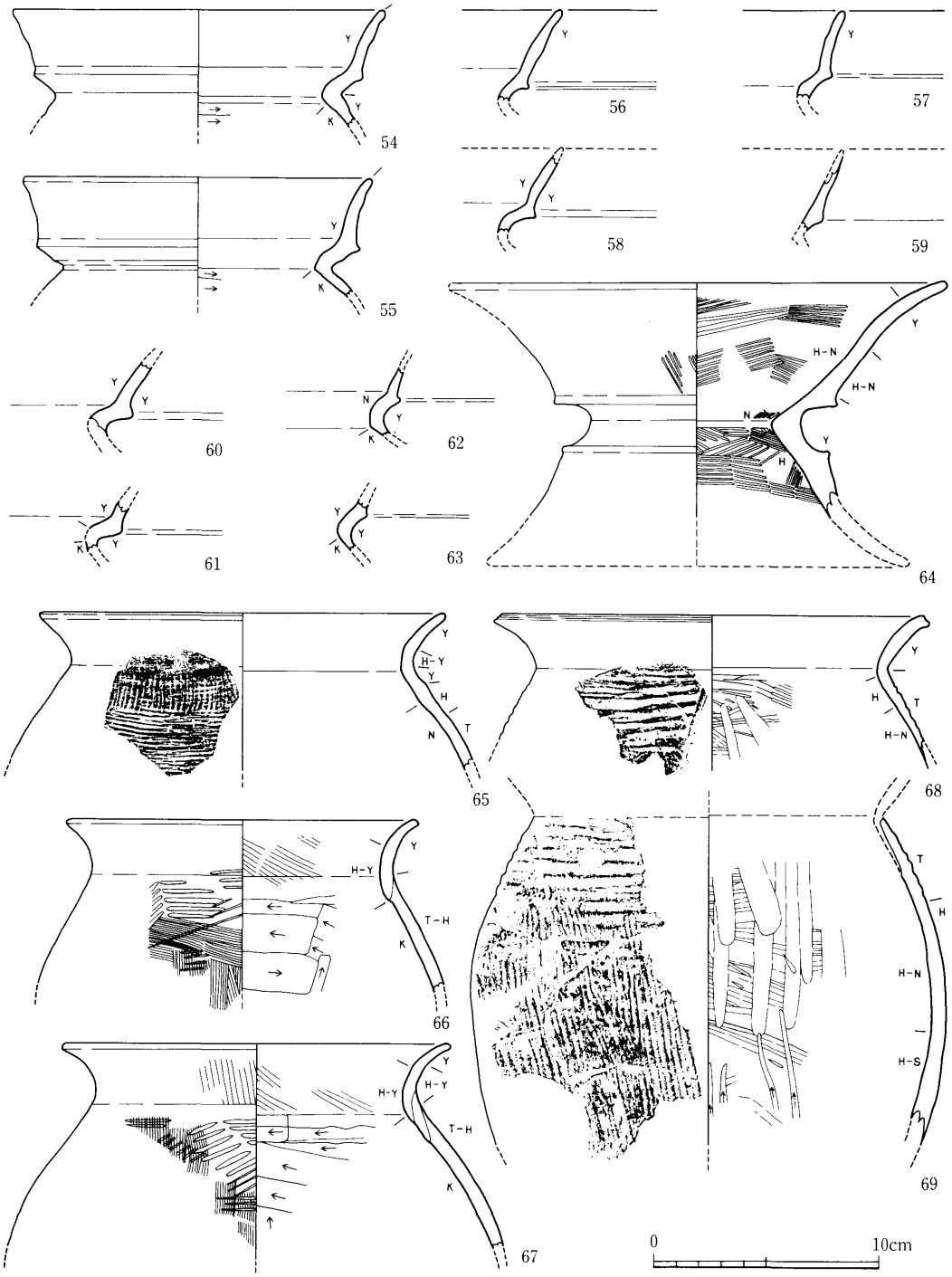


Fig. 12　A区第5層出土遺物実測図（4）

に煤が付着する。47の外面の刷毛はナデ残されたと思われる。48は外面に1単位7本の刷毛を下から上へ施す。49は器壁が薄い。胴内面は凸凹が大きく、低いところはケズリの面のまま残り、高いところだけヘラナデされる。51～53は斜め外方に面をもつ甕の口縁。51は端部の面の両角をヘラで押さえて面取りをする。端部中央は、押さえた際に両側が盛り上がる。内面は縦に外面は横に部分的にミガキを施す。52は外面を黒色にいぶす。

54～63は山陰系の複合口縁の甕。いずれも外面が黒くいぶされた結果煤が付着して、煮沸容器として使われたことを物語る。54は頸部上の稜がやや丸い。55は頸部上の稜が尖り、突出する。56は口縁が長く伸び、頸部上の稜を強くつまみ出す。57は頸部上の稜を上下からつまみ出す。58は頸部上の稜を強くつまみ出す。胎土は目はそろうが、全体に粗い。59は山陰系土器と思われるが、著しい風化ではっきりしない。60は頸部上の稜を丸く幅広につくり出す。63は頸部上の稜を細く強く上下からつまみ出す。

64は山陰系の鼓形器台。くびれの上下の稜を強く引き出すが、くびれ側は平で外側が窪む。上下の稜の間はやや狭い。刷毛は1本が細いものと幅広のものと2種類が使われ、外面は一部ナデ残される。

65～69は外面にタタキを残す庄内系の甕。65は頸部のくびれが明確ではない。口縁端部は面取りをする。細かいタタキが水平方向になされた後、刷毛、ナデの順に調整が行われる。口縁から胴部にかけ、部分的に煤が付着する。66も頸部のくびれが明瞭ではない。胴内面には、粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。口縁端部はわずかに肥厚する。外面調整は、幅広のタタキ、細いタタキ、刷毛の順に施され、細いタタキの部分には刷毛目が交差する。67は頸部のくびれが明瞭ではない。口縁は薄くなり、端部は斜め上方に面をもつ。胴部内面には、粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。頸部の粘土帯の幅は狭い。外面のタタキは、幅広のものと細いものがあり、細いタタキの部分には刷毛目が交差する。68・69は接合はしなかったが同一個体と思われる。器壁は薄く仕上げられ、口縁端部は肥厚する。端部は斜め上方に面をもち、浅い凹線が2本巡る。内面の調整は横方向に強めの刷毛調整を行ったのち上部は下から上へナデ、更に下部は下から上へ細いヘラ状の工具で掻き上げる。ヘラ状工具の痕は胴上半部にもわずかに認められる。外面は、上部が幅広のタタキ、そののち縦に刷毛を施す。外面は全面を黒くいぶしている。

70は布留系の甕と思われる。口縁端部は外面に面をもつ。刷毛は1単位6本。外面に煤が付着する。他にも布留系の土器と考えられるものもあるが、細片のため決定できない。

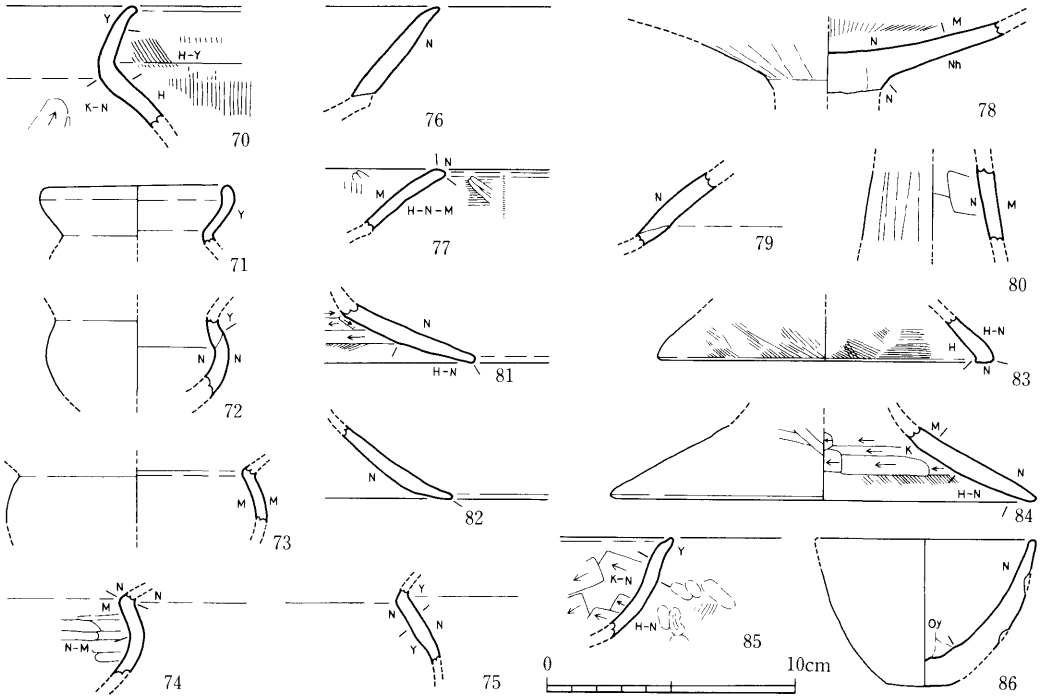


Fig. 13　A区第5層出土遺物実測図（5）

71～75は小形丸底土器と考えられる。71は口縁が内反して外傾し、端部は丸く肥厚する。72は胴上部で粘土帯を接合し、内面に盛り上がる。73は器壁が薄い。内外面ともきわめて丁寧なミガキで単位はわからない。74は下部に部分的に煤が付着する。

76～84は高坏。76～79は坏部。76は下部が擬口縁をなす。直線的に伸び、端部で急に細くなる。77はわずかに外反し、端部はやや肥厚する。外面調整は、横刷毛、ナデ、ミガキの順に行い、刷毛は左から右へ施し、終点に工具端部の細かい痕がつく。78は脚上部に粘土を充塡している。脚と坏の接合ははっきりとしないが、脚の周囲に坏を貼りつけたと考えられる。79は粘土帯の継ぎ目が明瞭で剝離しかけている。80は脚柱部。内面のナデは、皮状の素材を使い1.7cm幅でなされる。外面のミガキは縦に丁寧に施される。81～84は脚裾部。81は器壁が厚く、端部はやや角張る。刷毛は1単位10本。82は端部がゆるく外反する。83は端部がゆるく内弯し、内側に小さくつまみ出す。84は器壁が厚く、端部はやや尖る。

85は椀あるいは台付鉢の口縁。体部はゆるく内弯して立ち上がり、口縁部で外反する。端部は丸く上方につまみ出す。外面のナデは指の痕が目だつ。

86は手捏のミニチュア土器の鉢。口縁端部はやや尖る。

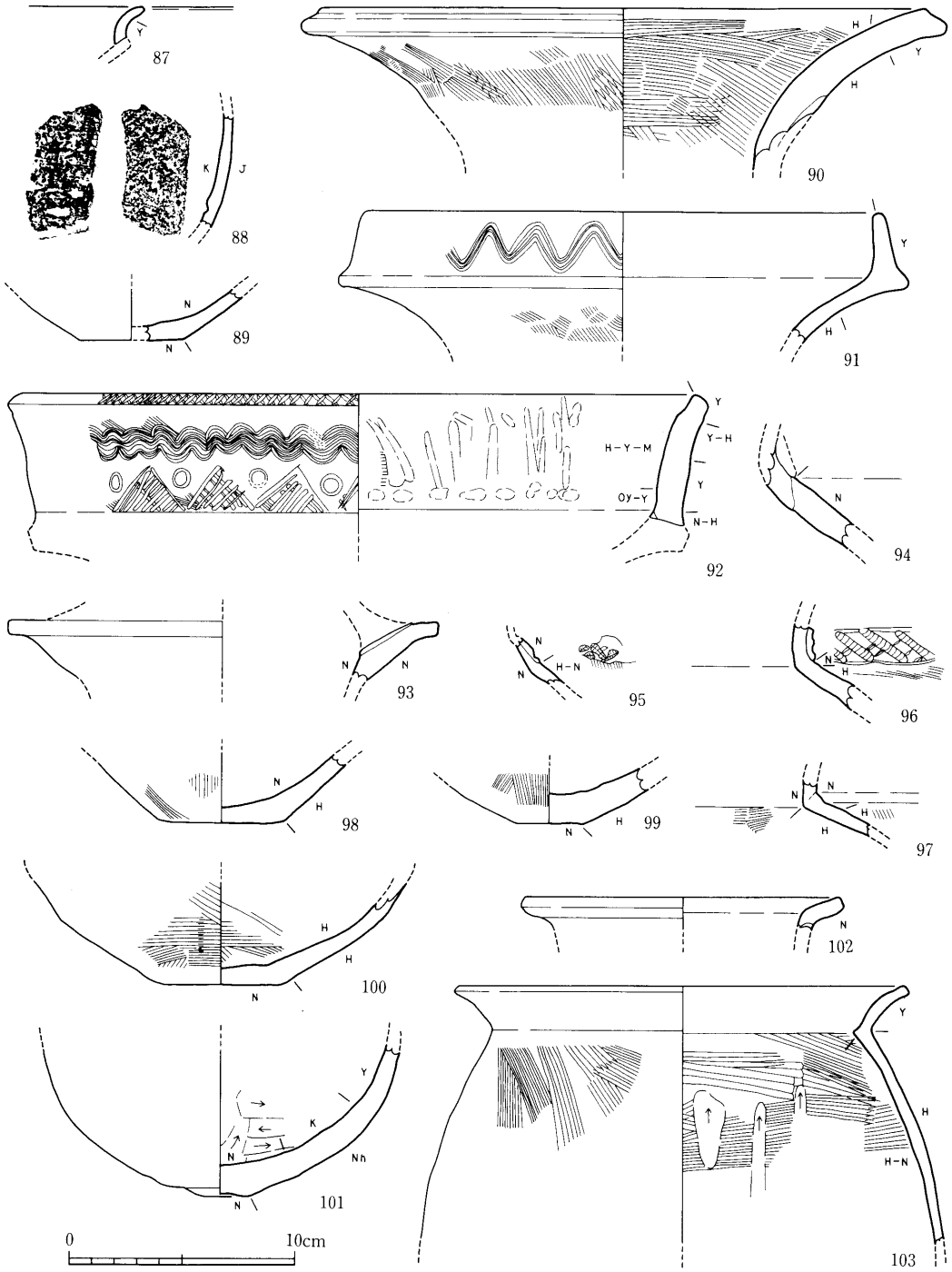


Fig. 14　A区第6層出土遺物実測図（1）

A区第6層（Fig. 14～17, PL.12～15・17）

縄文土器の甕・浅鉢、弥生土器の壺・甕・鉢・高坏・器台、土師器の壺・甕・高坏が出土した。

縄文土器（87～89）

87は粗製の浅鉢。比較的丁寧に作られる。口縁端を接合し、下部は擬口縁となる。口縁はきつく外反し、端部はわずかに肥厚し丸い。88は粗製で器形は不明。外面に煤が厚く付着し、調整不明。89は粗製の甕の底部。胎土は、粘土が粗く軽石状に隙間がある。内面に炭化物が厚く付着する。

弥生土器（90～114）

90～101は壺。90は口縁が外反しながら外傾し、ラッパ状に開く。端部は丸くつくり、上方にゆるいカーブながら幅広の隆起で突帯を引き出す。頸部には、粘土帯の接合痕が見られ、突帯を貼りつけていたと考えられる。口縁端部の内外面に煤が付着する。91は複合口縁だが、上下の口縁の接合部ははっきりしない。上段の口縁はわずかに内傾し、端部は丸い。外面に3本1単位の櫛描波状文を施す。92は複合口縁の上段で、下部は擬口縁をなす。わずかに外反して外傾する。接合点近くの内面は、指で押さえたのち横ナデ。文様は、上部に施文具の両端を交互に基点として扇形をつなぐように7本1単位の櫛描波状文を施し、下部にヘラ描きの鋸歯文、その中に斜格子文を施す。鋸歯文の間には竹管文を押す。端部はカマボコ形で、斜め外方に面をもつ。端部の斜格子文は、右下がりを先に、右上がりを後に刷毛状工具でつける。93は複合口縁の下段。上段は接合点の上で欠損する。鍔状に水平にやや長く伸びる。94は突帯が剝落したと思われる頸部。器壁は厚く、粘土帯の接合部に段差ができる。95は平たい突帯を貼り付けた頸部。突帯には刷毛状工具で斜格子文を刻む。工具は目が粗く、他の原体とは別の物と思われる。96は突帯を貼り付けた頸部。突帯上の斜格子文は、先に右下がりに角の丸い刷毛状工具で、後に右上がりに細い工具で切るように刻む。97は頸部で、突帯は貼り付けない。立ち上がり部分に粘土帯の接合痕が見られる。98は平底の底部。外面に煤が、内面に炭化物が厚く付着する。99は底部の小さな平底。内面に炭化物が厚く付着する。100は平底の底部。胴部はゆるく内弯して立ち上がる。外面の一部に煤が付着する。刷毛は1単位8本。101は痕跡的に残る平底。底部は長径が1.9cm短径が2.7cmの楕円形を呈し、わずかに上げ底となる。胴部外面に焼成時の黒斑が見られる。

102～106は甕。102は口縁端部外側に面をもつ。103は器壁がやや薄い。口縁は外反して

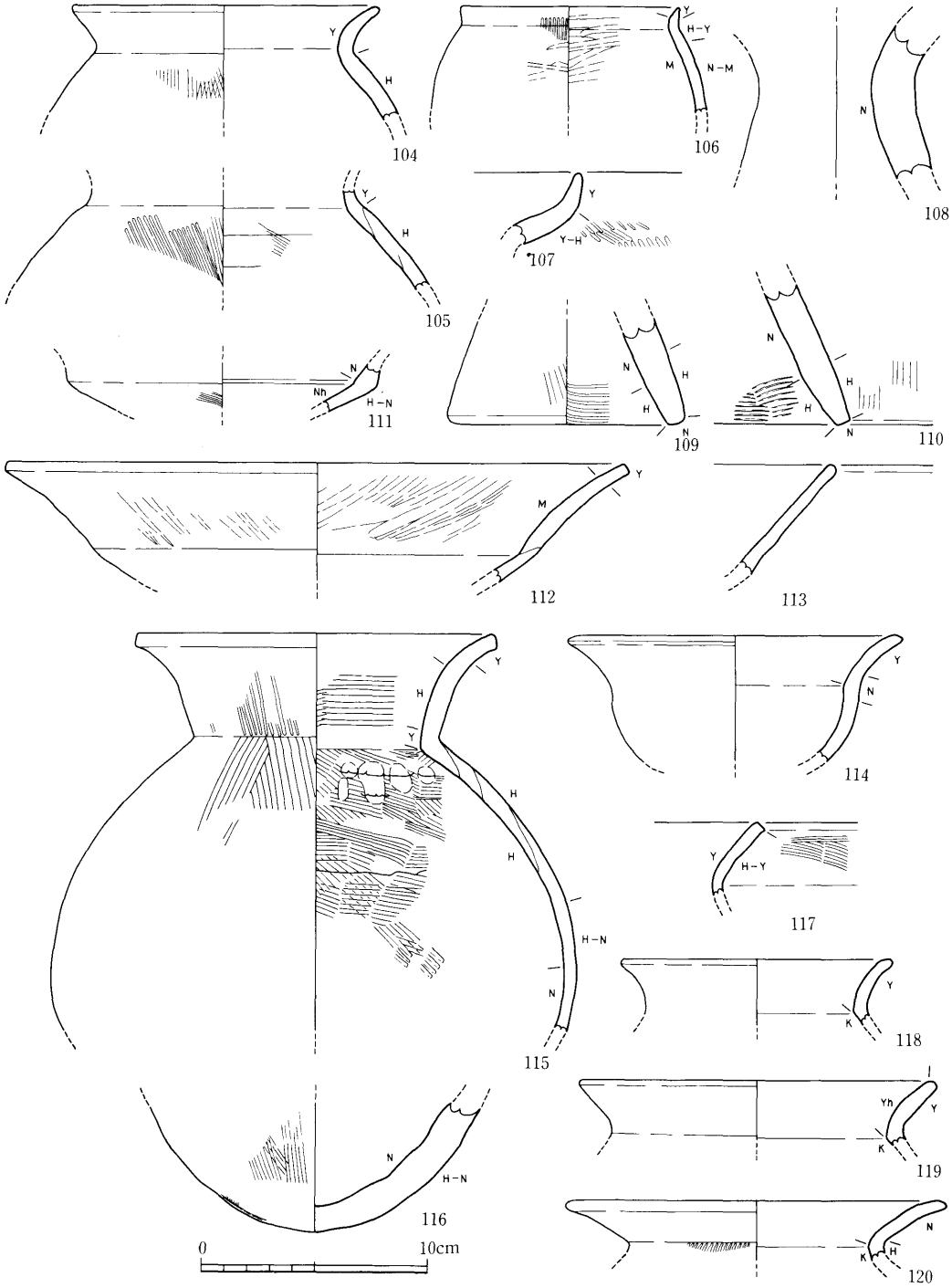


Fig. 15　A区第6層出土遺物実測図（2）

A区第6層出土遺物

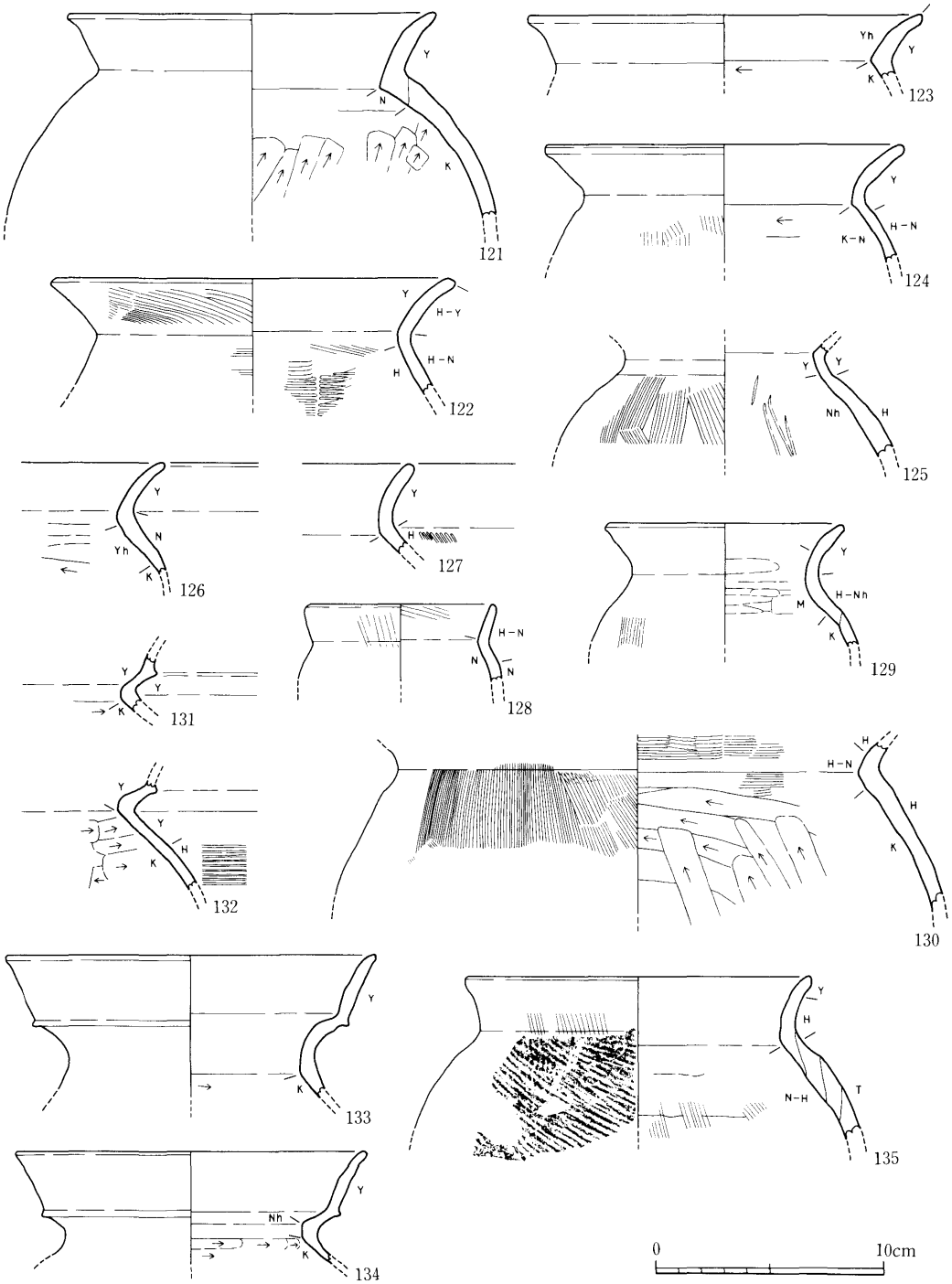


Fig. 16　A区第6層出土遺物実測図（3）

外傾し、端部で上方につまみ外側に面をもつ。口縁は歪みが大きい。内面の刷毛は、目のつんだもの、粗いものの2種類がある。内面は刷毛のち下から上へ部分的にナデる。外面全面に煤が付着する。104は頸部が明瞭な稜をもたず、ゆるいカーブを描く。口縁端部は丸い。胴部に刷毛を施した後、頸～口縁をナデる。105は頸部が明瞭な稜を持たずゆるいカーブを描く。内面は粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。外面の刷毛は1単位7本。外面全体に煤が付着する。106はごく短い口縁がつき、端部は尖る。全体が丁寧につくられる。外面に煤が付着する。

107は器台または台付鉢の口縁と思われるが、器形不明。器壁が厚い。口縁は内弯気味に立ち上がり、端部は丸い。

108～110は器台。108・109は風化が進む。110は108と同一個体かもしれない。端部がやや細くなり、内端面が接地する。内面の刷毛原体は年輪幅がよくわかる。

111～113は高坏。111は刷毛目が細かく9本1単位で幅1.0cm。112は大型の坏部。坏中央で粘土帯を接合し成形する。内外面ともかなりの剝落があり、調整がわかりにくい。

114は鉢。頸部はゆるいカーブを描き稜をもたず、やや長い口縁がつく。端部は上方に面をもつ。外面に煤が付着する。

土師器（115～141）

115・116は壺。115は口縁が長く、端部付近で外反して外傾する。端部は角張り、外面に面をもつ。胴部は球形に膨らみ、最大径は中央部よりやや下にある。胴部内面は粘土帯の継ぎ目が明瞭に残り、成形時に強く押さえた部分は、刷毛目がつかない。116は丸底の底部。器壁が厚い。外面に焼成時の黒斑がみられる。

117～127・130は甕。117は口縁端部に向け徐々に肥厚し、外側につまみ出す。斜め上方に面をもつ。外面を黒くいぶす。118は口縁が外反しながら外傾し、端部は丸い。外面の一部に煤が付着する。119は器壁が厚く、端部が丸い。120は頸部での屈曲がきつく、口を大きく開く。口縁端部は丸い。外面に煤が厚く付着する。121は胴部が球形に張り、口縁はわずかに外反しながら外傾する。頸部は粘土帯を接合して厚く、内側につまみ出して稜をもつ。粘土帯の継ぎ目痕が明瞭に残る。外面の胴中央部付近に煤が厚く付着する。122は頸部が「く」の字に曲がるが、明瞭な稜はもたない。端部は肥厚し、斜め上方に面をもつ。口縁に部分的に煤が付着する。123は器壁が厚い。口縁端部は外面に面をもち、上端が角張り、下端は丸い。124は頸部内面の稜がやや突出し、外面は押さえられ、器壁が薄くなる。口縁端部は、側面と上方に面をもち肥厚する。125は胴部中央の器壁が厚く、頸部は薄い。

内面には縦方向のヘラナデを施すが、部分的にヘラの痕がはいる。126は頸部付近の器壁が厚い。頸部はゆるいカーブを描き、明瞭な稜はもたない。口縁端部は丸い。127は口縁端部が丸い。外面に煤が付着する。130は大形品。内面のケズリは、胴中央付近に最初強く横にのちに弱く縦に施す。外面の刷毛は細かく、1単位11本。内外面に部分的に煤が付着する。

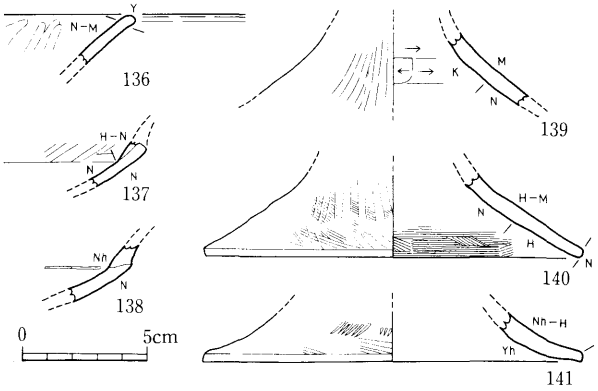


Fig. 17　A区第6層出土遺物実測図（4）

128・129は小形丸底壺と考えられる。128は口縁端部が斜め上方に面をもち、内側は尖り、外側は丸みを帯びる。129は頸部がゆるいカーブを描き、明瞭な稜はもたない。口縁端部は外側に面をもつ。胴中位に粘土帯の継ぎ目と見られる凹凸がある。外面に煤が付着する。

131～134は山陰系の複合口縁の甕。131は頸部の器壁が薄い。外面の一部に煤が付着する。132は刷毛が1単位11本で、1本の幅が広い。133は頸部上の稜を細くつまみ出し、口縁端部も外側につまみ出す。外面の一部に煤が付着する。134は頸部上の稜を細く強く引き出す。口縁内外面に部分的に煤が付着する。

135は庄内系の甕。胴部の器壁は厚く、内面には粘土帯の継ぎ目が目立ち、凹凸も大きい。口縁は外反し端部は上方に面をもつ。胴部外面には右下がりのタタキを施す。

136～141は高坏。136は直線的に伸びる坏口縁で、端部は肥厚し丸い。137は坏部の傾きの変換点付近で、下部は擬口縁をなす。上部の粘土で包み込むように接合する。138は坏部の傾きの変換点付近で、内側はヘラを連続して押しつけ、沈線をつくる。139はわずかに外反する脚中央部。140は端部が面をもち、内端面が接地する。内面の刷毛は上部がやや粗い刷毛、端部付近は1単位14本で幅1.0cmの目のつんだ刷毛を用いる。141は器壁が厚い。端部は面をもつが、140ほど稜ははっきりしない。接地面をつまみ出す。

A区第8層（Fig, 18, PL. 15）

縄文時代晩期の単一層。142・143は精製の浅鉢。142の口縁は粘土を接合して成形し、外反しながら外傾する。体部は直線的。143は端部を貼り付けわずかに内傾する玉縁となる。体部側は滑らかな擬口縁を形成する。器壁は薄い。

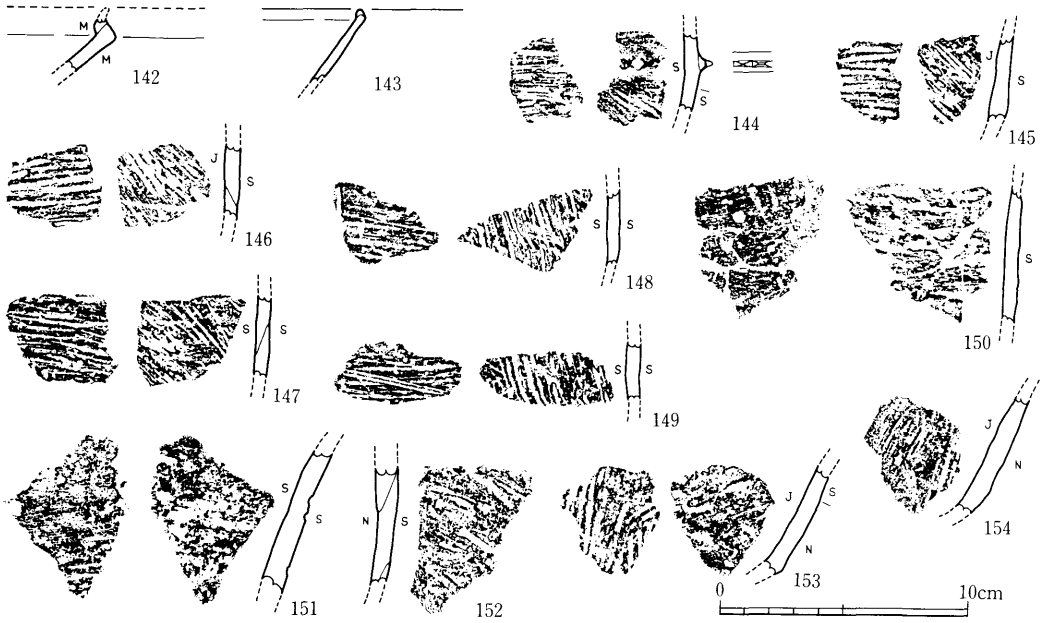


Fig. 18　A区第8層出土遺物実測図

144・150は粗製の甕。144は幅が狭く高い突帯を貼り付ける。突帯には刻み目を施す。150は外面を板小口によるカキトリで条痕風に調整し、器壁の凸凹が激しい。

145～149・151～154は粗製の深鉢と考えられる。いずれも小片で、上下や傾きははっきりしない。145・146は内面に貝殻条痕、外面に条痕風擦過がつき、互いの方向は斜交する。147は内面に幅0.9cmの板小口で擦過を施す。148の内面調整に使用した工具は幅1.2cmでわずかに外側へ湾曲する。149は内面の擦過がミガキ状に丁寧に施される。使用した工具は細く幅0.4cm程度であろう。151は器壁が厚い。外面には部分的に条痕状のくぼみが残る。152は粘土帯を接合した部分の内側が肥厚する。153は底部付近と考えられる。一部が焼成時の火ぶくれをおこしている。154は底部付近と考えられる。外面に条痕は認められず、粗いナデで調整を行う。

A区第10層（Fig.19－155～157，PL.15）

縄文時代晩期の単一層。155は精製の浅鉢と考えられる。器壁は薄く、胎土はよく締まる。156・157は粗製の甕または深鉢と考えられる。156は風化が進み器面調整が判断できない。157は粘土帯を接合した内側が肥厚する。

A区第13層（Fig.19－158～160，PL.15）

縄文時代晩期の単一層。158～160は粗製の甕または深鉢と考えられる。158は器壁が厚

く、粘土帯を接合した部分の内側が肥厚する。159は内面に丁寧にヘラナデをするが、部分的にヘラがのめり込んでいるところがある。

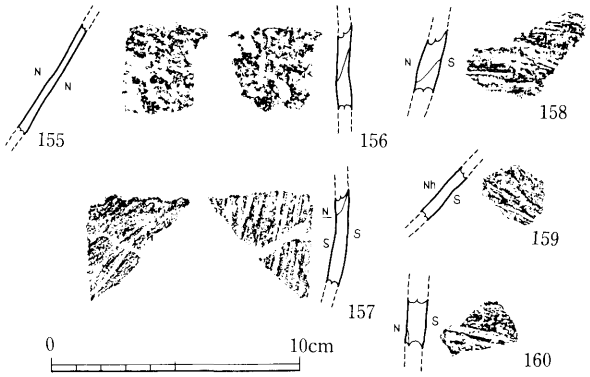


Fig. 19　A区第10層・第13層出土遺物実測図

A区第15層（Fig. 20, PL. 15）

縄文時代晩期の単一層。161・162は精製の浅鉢。161は口縁は体部に粘土帯を接合して成形し、体部側は擬口縁をなす。口縁はきつく外反し、端部は玉縁状に肥厚する。162は口縁部。外面は直線的で、内面は肥厚する。163は精製の甕。口縁は屈曲部で接合し、端部は丸い。肥厚させた屈曲部と口縁端部に刻目を施す。

164は粗製の甕。肥厚させた屈曲部に刻目を施す。刻目は小さくて浅く、砂粒にあたるところもあり明瞭ではない。165・166は刻目突帯文をもつ粗製の甕。165は突帯の断面が台形。突帯を貼り付けた部分の上下がくぼみになっている。刻み目は下ぶくれの洋梨型で、カーブのきつい工具か2回に分けて施したかの可能性が考えられる。端部は斜め上方に面をもつ。外面は下部はにぶい黄橙色だが、端部寄りはオリーブ黒色に近くなる。166は突帯の断面が三角形で高さがあまりない。刻目が不揃いで胎土が粗いため、刻目ははっきりしない。内面上部は板状工具で丁寧な横ナデを施す。167～169は粗製の甕または深鉢と考えられる。167は粘土帯を接合した部分の内側が肥厚する。168は外面にヘラなどの工具による痕が入り、粘土帯の接合時のオサエとも考えられる。169は風化が進み器面調整が判

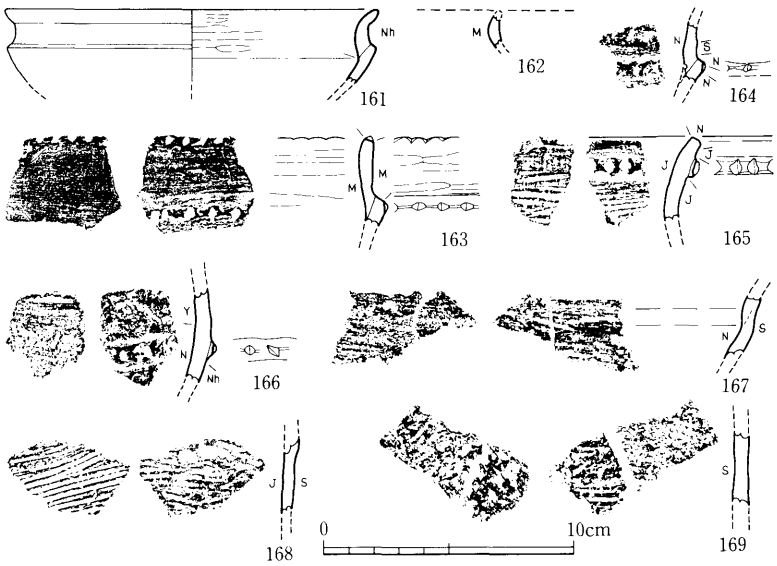


Fig. 20　A区第15層出土遺物実測図

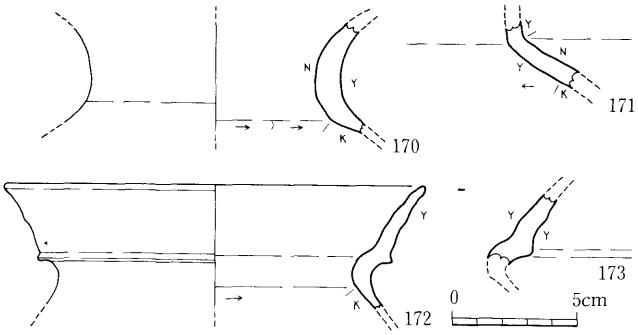


Fig. 21　A区撹乱壙・排土出土遺物実測図

断できない。

A区撹乱壙・排土（Fig. 21, PL. 16）

170・171は弥生土器の壺。170は頸部の器壁が厚く胴部は薄い。外面は白っぽく、化粧土を塗った可能性も考えられる。171は器壁が厚い。172・173は土師器の山陰系の複合口縁の甕。172は頸部上の稜を強く細くつまみ出す。口縁部は成形時のナデの凹凸が大きい。外面に煤が付着する。173は器壁が厚く、頸部上の稜もはっきりしない。外面に煤が付着する。173は配水管工事に伴う撹乱壙から、他は排土から出土した。

B区（Fig. 22・23, PL. 16）

縄文土器の甕・深鉢、弥生土器の壺・甕・高坏、土師器の壺・甕・鉢・皿、土師質土器の鍋が出土した。

縄文土器（174～180）

174～176は粗製の深鉢。174は口縁外面に粘土帯を貼り付け、肥厚させる。端部はやや尖る。175は口縁の器壁が厚く、端部は丸い。外面下部にはわずかに条痕風擦過が見られる。176は器壁が薄い。口縁は外反し、口縁端部は肥厚して玉縁状に丸くおさめる。177は粗製の甕。胴上部の外傾から内傾に傾きが変わる部分で、上部は擬口縁をなす。接合部の内面には長さ6cm余りの沈線がある。178は粗製の甕または深鉢。

179・180は甕の底部。上げ底で、179は外端面が、180は内端面が接地する。

176は第23層、178は表面採集、他は第6層から出土。

弥生土器（181～191）

181～184は複合口縁の壺。181は鍔の上部に沈線が巡る。櫛描波状文は左から右へ描き、基本は3本だが、継目で描き足し4本の部分もある。施文がぎこちなく角が多い。182・183は上段の口縁下部が擬口縁をなす。口縁端部上面に面をもつ。波状文はともに4本単位で左から右へ描くが、183は描き損じのやり直しがみられる。184は頸部からラッパ状に開き、口縁がT字形となる。下垂する部分で上段の口縁が接合される。端部は内面に面をもち、傾斜する。櫛描波状文は5本単位で、右から左へ施される。内面の上部には焼成時の黒斑が見られる。

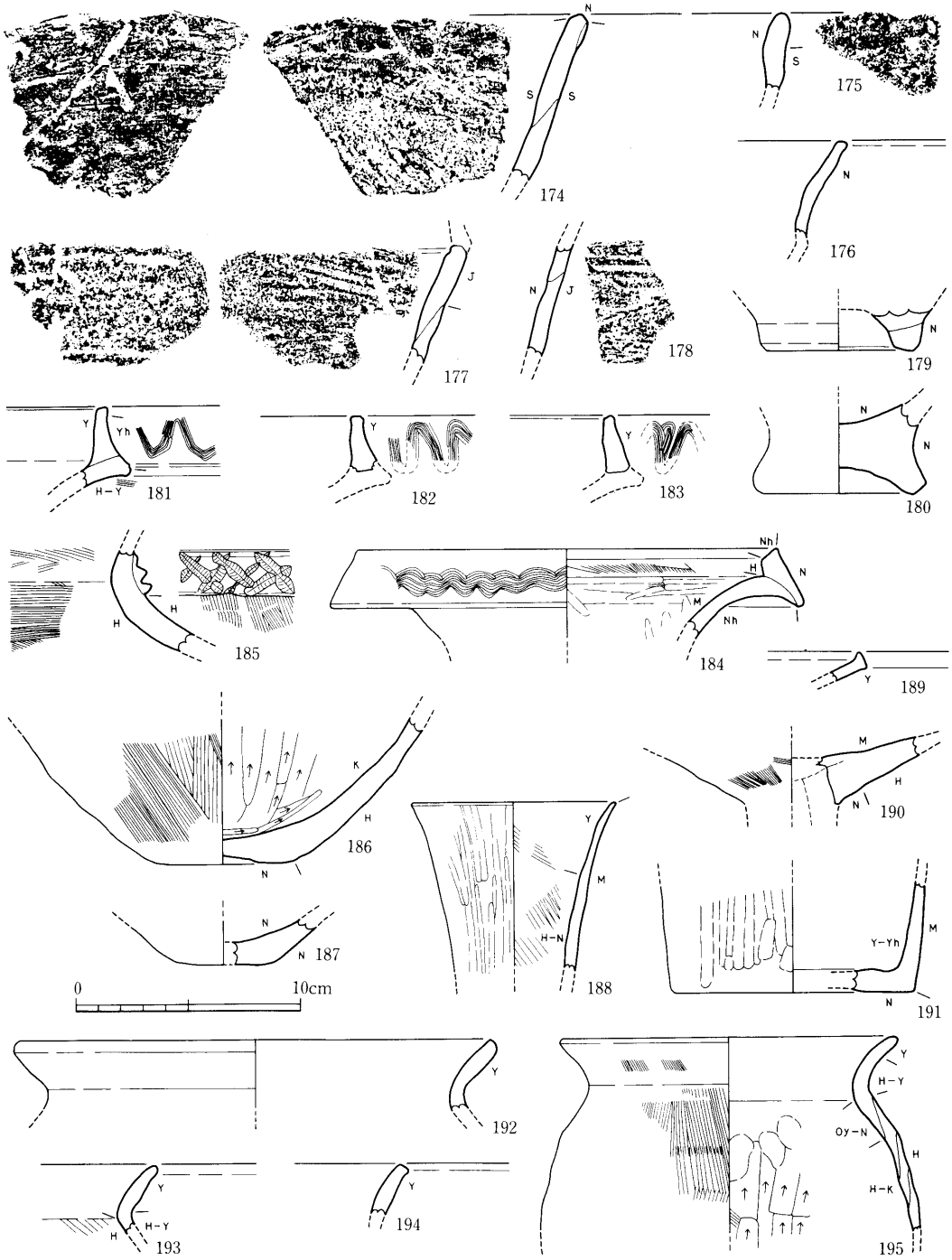


Fig. 22　B区出土遺物実測図（1）

185は突帯を貼り付けた壺の頸部。突帯は下側が厚く、斜格子文の刻みも深い。刻みは刷毛状工具で、先に右上がり、後に右下がりの順に施す。

186•187は壺の底部。186はわずかに上げ底になる。外面に黒斑があり、内面には炭化物が厚く付着する。187は内面に少量の炭化物が付着する。

188は長頸壺。きわめて丁寧なつくりで、器壁が非常に薄い。口縁はゆるく外反しながら外傾し、端部はやや角張る。外面のミガキは上下両方向から施し、中央部で痕跡がうすくなる。内面上部は皮状の素材を使ってナデて、刷毛目状の痕跡が残る。

189は跳ね上げ口縁の甕。

190は高坏。坏部は、脚の外周を先に接合した後、坏中央を充塡する方法が採られていると思われる。坏側の接合面は擬口縁をなす。

191は器形不明。平底で、胴部はほぼ直立する。外面には丁寧なミガキが施される。下関市伊倉遺跡9号土壙出土の甕[4]もしくは大分県国東町安国寺遺跡出土の皮袋状土器[5]などに近いかと思われる。

土師器（192～208）

192～198は甕。192は口縁外面が肥厚する。端部は斜め上方に面をもち、外側は丸く、内

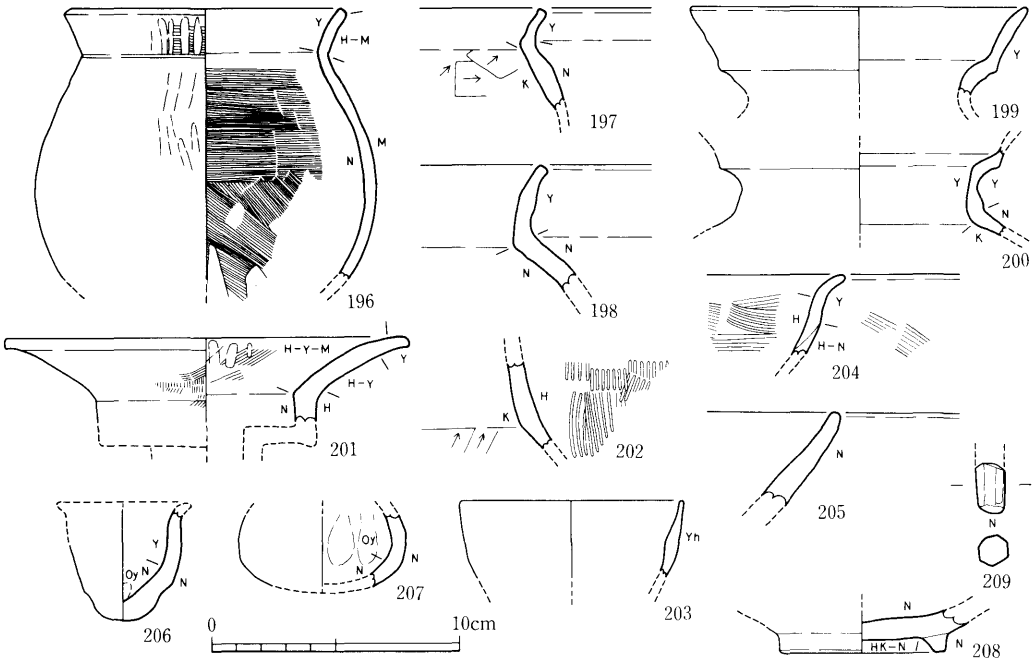


Fig. 23　B区出土遺物実測図（2）

側はつまみ上げる。193は口縁中位がやや膨らみ、端部外面が肥厚する。外面に煤が付着する。布留系かと考えられるが、小片のため判断できない。194は口縁端部外面をつまみ出し、斜め上方に面をもつ。195は頸部がゆるいカーブを描き、明瞭な稜をもたない。胴部内面はきれいにナデられているが、粘土帯の継ぎ目は凹凸となって表われている。口縁端部は丸い。外面に煤が厚く付着している。196は頸部がゆるいカーブを描き、明瞭な稜をもたない。胴部は球形で器壁が薄い。口縁はやや厚く、外面斜め上方に面をもつ。頸部外面は棒状の工具で沈線を巡らす。外面のヘラミガキは丁寧になされ、単位がつかめない部分が多い。内面は皮状の素材でナデられ、刷毛目状の細かい線がつく。197は胴部の器壁が厚く、口縁は薄い。口縁端部は斜め外方に面をもち、内面をつまみ出す。外面に煤が付着する。198は布留系の甕。口縁外面の中位と端部が肥厚する。端部は斜め上方に面をもつ。

199・200は山陰系の複合口縁の甕。接合はしないが、同一個体と思われる。頸部上の稜ははっきりしない。口縁の器壁の厚さは、部分によりばらつきがみられる。

201・202は高坏。201は畿内系と思われる。器壁は厚い。ほぼ直立する部分から外反して大きく外傾する。端部は丸い。全体に丁寧なつくりで、内面は特にきれいに仕上げる。202は脚中位。外面の刷毛は1単位7本で1本ずつが幅広。内面にはヘラナデ風の滑らかなケズリが施される。

203は直口壺もしくは小形丸底壺と思われる。わずかに内弯して伸びる。器壁は薄いが、口縁端部は丸くつくる。外面に淡い黒斑が認められる。

204は鉢。体部がゆるく内弯し、口縁が外反する。端部は丸い。205は台付鉢。器壁が厚く、体部は直線的に伸び、口縁端部は丸い。

206・207は手捏のミニチュア土器。206は甕形。底部は楕円形で長径2.0cm、短径1.5cmを計る。器壁が厚く、形は左右非対称である。207は椀形と思われる。内面の指オサエは下から上へ施される。

208は皿。底部はヘラ切リのち高台を貼り付け、内端面が接地する。11世紀頃と考えられる。

191・196・207は第21層、194は第23層、205は表採、208は撹乱層、他は第6層から出土。

土師質土器（209）

209は土師質土器の足鍋の脚端部。先端は丸くおさめられ、猫足にはならない。中世。

C区（Fig. 24, PL. 16）

210～212は第22a層から出土。210は土師器の甕。直線的に伸び、端部が肥厚し、中央が

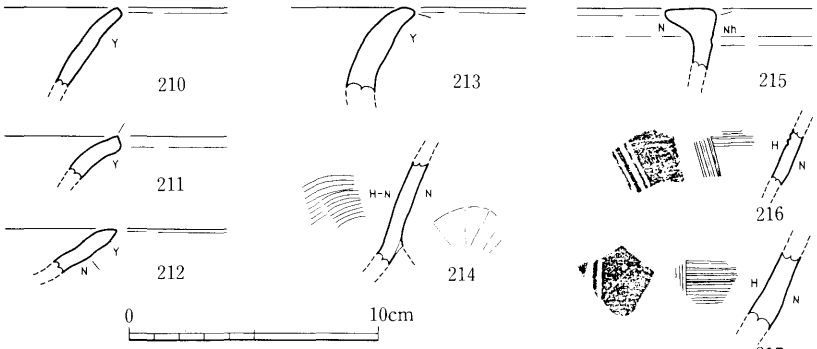


Fig. 24　C区出土遺物実測図

くぼむ面を外側にもつ。211は土師器の甕。口縁は外反気味に外傾する。端部は肥厚し、中央がくぼむ面を外側にもち、上方につまみ出す。外面に煤が付着する。212は土師器の皿。口縁は肥厚し、端部はやや尖る。内面に黒斑が見られる。山口盆地内の大内氏関連遺跡で多量に検出される製品と同一と考えられる。

213～217は表土層から出土。213は弥生土器の甕。器壁が厚い。口縁端部はやや尖り、上方に面をもつ。214は瓦質土器の足鍋。脚は剝落し、接合面は丁寧にナデられている。215は土師質土器の火鉢。口縁は肥厚し、内側へほぼ直角に折り曲げられる。外面の口縁の下1.1cmに沈線が巡るが、スタンプ文は認められない。216は瓦質土器の擂鉢。器壁が薄い。オロシ目は3本以上認められ、断面はそれぞれV字形をする。217は土師質土器の擂鉢。粗い横刷毛のちオロシ目を刻む。

石器（Fig.25・26，PL.18）

218・219はサヌカイト製の石鏃。218は凹茎無茎式。脚の片端を欠損する。器幅に比べ器長が長い二等辺三角形。背面中央部の4枚の剝離面は、素材面の可能性がある。腹面茎部側の調整加工は比較的粗い。抉りは円弧状で浅く変曲する。弥生時代のものと思われる。A区第7a層から出土。219は平茎無茎式に近い。脚の片端を欠損する。背面中央部および腹面下半部には素材面を残す。調整加工は背面に見られるように、比較的粗雑。腹面中央部には左側縁側からフルーティング状の調整加工が施される。抉りはきわめて浅く、脚部はつくり出されない。縄文時代後期～晩期の可能性が高い。A区第13層から出土。

220・221は二次加工のある剝片。共にサヌカイト製。220は上半部を欠損する。背面右側縁にやや粗い二次加工がみられる。腹面側がネガ面。A区第10層から出土。221は下端部を欠損する。単設打面の石核から剝離された小形の縦長剝片を素材とし、左右両側縁に背腹両面から二次加工を施す。ネガティブバブルが残存する。二次加工は素材に比べて大きな剝離面によって構成される。A区第8層から出土。

出土石器

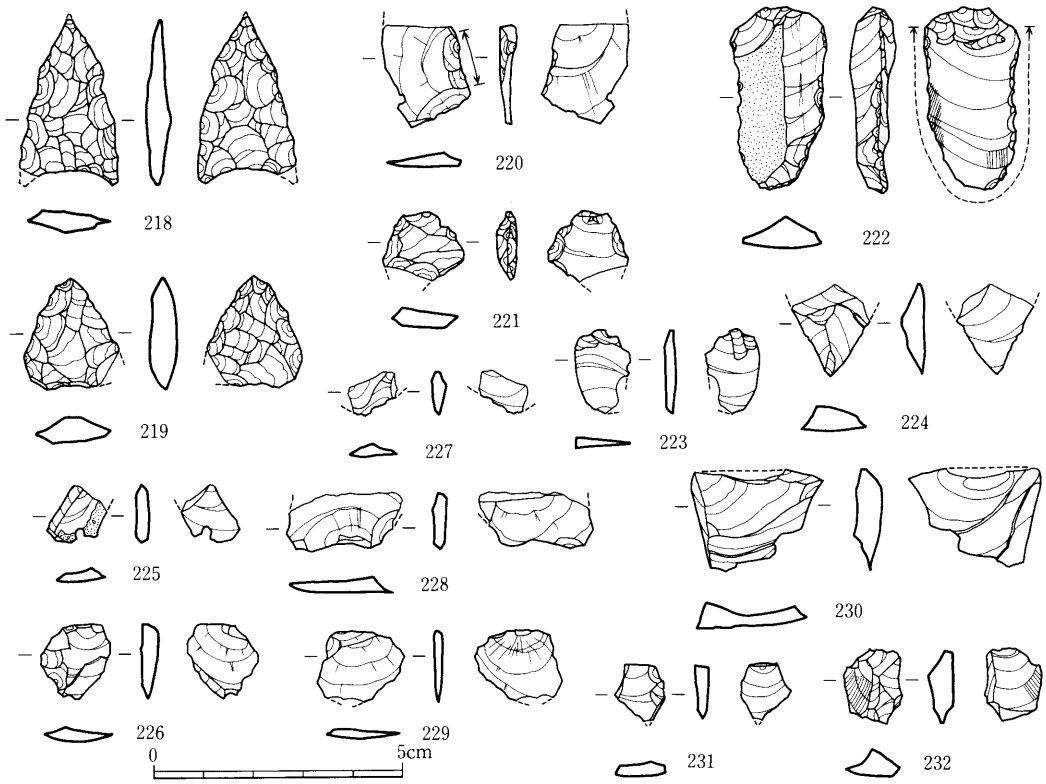


Fig. 25　出土石器実測図（1）

222は腰岳産黒曜石の使用痕のある剝片。縦長剝片を素材とし、剝片剝離後、調整加工によってネガティブバルブを除去する。左右両側縁に連続する微細な剝落痕が認められる。背面左半には自然面が残存する。素材の打面は複剝離打面。A区第13層から出土。

223は腰岳産黒曜石の調整剝片。黒曜石は不純物をわずかに含んでいる。打面を180転位する石核からつくり出された小形の縦長剝片。腹面のネガ面にバルブを除去するように調整加工を施す。A区第10層から出土。

224は姫島産黒曜石の縦長剝片。上半部を欠損する。打面を頻繁に転位する石核からつくり出す。腹面側がネガ面。背面右半の剝離面は階段状剝離となる。A区第6層から出土。

225～232は剝片。225は淀姫産黒曜石と考えられ、226・228～230はサヌカイト、227・231・232は姫島産黒曜石である。225は上半部を欠損する。背面右半、下端に自然面が残存する。226は寸づまりな縦長剝片。打面は複剝離打面。227は上半部の大部分を欠損する。背面の3枚の剝離面の打撃方向は大きく異なる。228はリングの集合状態からみて寸づまりな横長剝片と考えられる。腹面側がネガ面。背面側にはポジティブバルブが残存し、背腹両面の

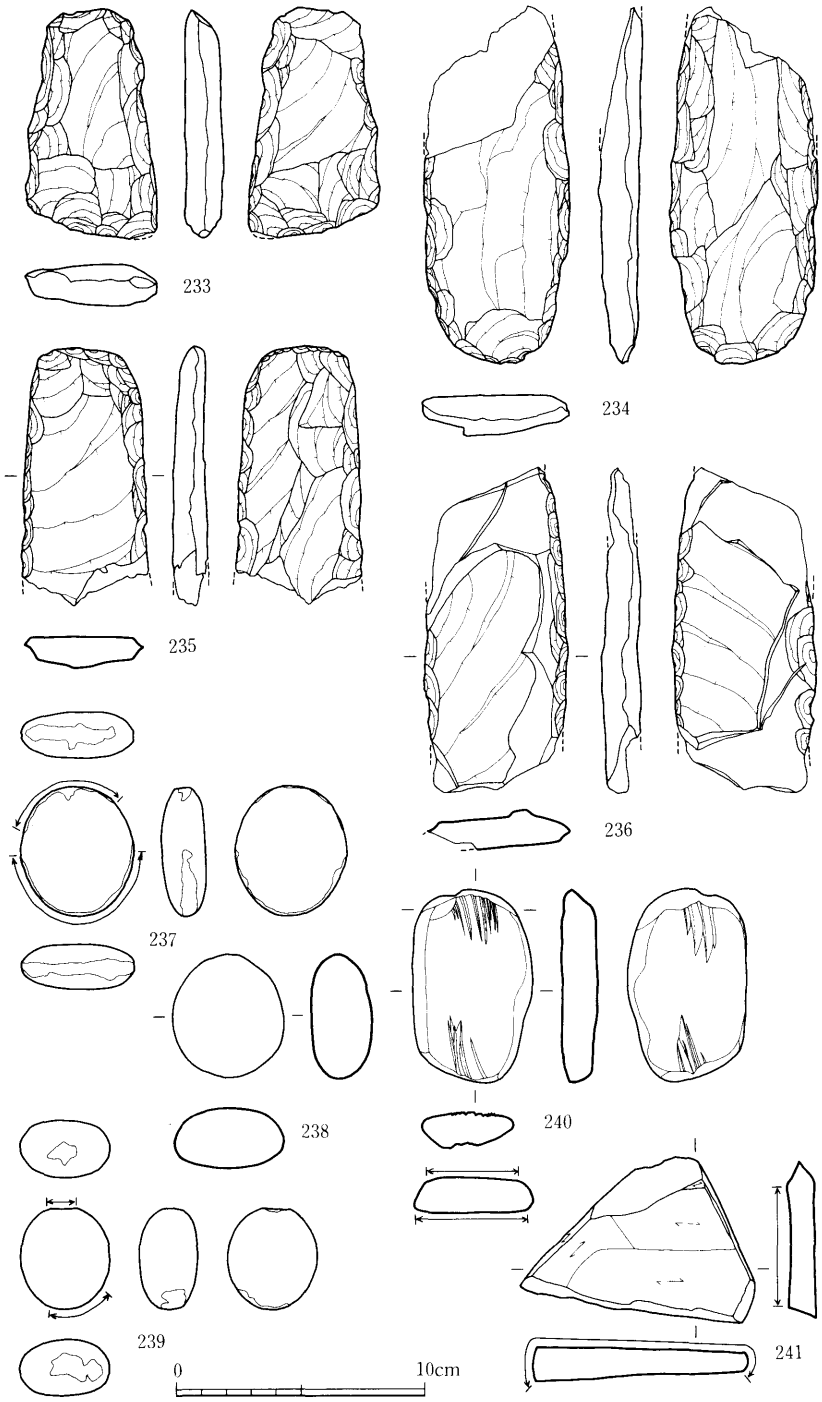


Fig. 26　出土石器実測図（2）

大きな2枚の剥離面の打撃方向は180°ずれている。229は寸づまりな小形の縦長剥片。下端部を欠損する。打面は狭い平坦打面。230は寸づまりな横長剥片。打面を一部欠損し、背面側に傾斜する。腹面側がネガ面。231は寸づまりな小形の縦長剥片。下端部を若干欠損する。自然面を打面とする。腹面側がネガ面。232は小形の縦長剥片。打面を頻繁に転位する石核からつくり出される。腹面側がネガ面で、ネガティブバルブ、打点が残存する。225～227はA区第13層、228はA区第

10層、229～232はA区第15層から出土した。

233～236は結晶片岩製の粗製扁平打製石斧。233は背腹両面のネガ、ポジは不明。両面中央部の大きな剝離面は素材面。両側縁、刃部とも調整加工は対向剝離に近い。各剝離面はやや大きく粗雑。刃部は片縁に直線的に傾く。A区第6層から出土。234は頭部を欠損する。背面がネガ面。短冊形で、刃部は孤状に弯曲する。調整加工は両側縁に限定され、中央部の大半は素材面をそのまま残す。両側縁とも交互に剝離する。A区第13層から出土。235は刃部を欠損する。頭部の調整加工は交互剝離で、腹面側に背面側から特に丁寧に行われ、孤状の頭部をつくり出す。背面側がネガ面。両側縁の調整加工は1～2枚の剝離面によって構成される。A区第15層から出土。236は刃部と頭部を欠損する。両側縁の調整加工は縁辺に沿って各1枚の剝離面によって構成される。対向剝離による。剝離面に沿った素材の剝落が著しい。A区第11a層から出土。

237・239は敲打痕のある円礫。238はその素材。237は円転礫素材の河原石を用い、側面中央部を除いて連続する浅いあばた状の敲打痕が認められる。239は円転礫素材の河原石を用い、上下両端に浅いあばた状の敲打痕が認められる。237に比べ敲打の部位は少ない。238は円転礫の河原石を用い、敲打痕のある円礫の素材と考えられる。敲打痕は認められない。237はA区第7a層、238・239はA区第8層から出土。

240・241は砥石。240は転礫利用の砥石で、周縁を除く正裏2面を研砥面とする。正裏両面の上下両端中央部には、小形品の刃部の研磨による断面V字形の小溝が連続する。その他の部位の研砥は不定方向。石器、鉄器のいずれに用いたかはわからない。D区表土層から出土。241は裏面側は素材面のままで研砥面として利用されていない。研砥面は正面、左右両側面の3面にある。正面は少なくとも3方向の研砥が認められる。正面上半の剝離面のパティナは新しく欠損している。他の剝離面はパティナが古く、素材面の可能性が大きい。各研砥面は緻密で仕上げ砥と考えられる。B区第6層から出土。

5　小結

ここでは本章の発掘調査の成果と、ほぼ同区域を調査し、本書第5章第3節（71～80ページ）に掲載した教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査の成果とをまとめて述べたい。

2回の調査で検出した遺構は、溝状遺構2条のみであった。ともに削平が著しく、包含される出土遺物も小片のため時期決定の要素に欠ける。A区第1号溝状遺構は直上層の第5層および第6層が、弥生時代後期後半から古墳時代初頭を下限とする遺物包含層となっ

ていることから、弥生時代後期終末から庄内併行期にかけて埋没したと考えられる。この2層は第6層が第5層に比べ、弥生土器の比率が土師器に比べやや高いが、包含する遺物の時期はどちらも縄文時代晩期から布留式併行期まであり、厳密な時期差を示すことはできない。A区第8層以下第15層までは縄文晩期後半の包含層を形成している。また、C区と立会調査で調査したプール管理棟周辺のD・E路線は、近代の埋め土の直下に、室町時代のものと思われる遺物を含む中世の包含層が薄く堆積している。中世の包含層の遺物はやや小片であるが、いずれの包含層に含まれる遺物も比較的摩耗は進んでおらず、接合可能な遺物もあることから、附属山口中学校敷地からそう遠くはない地点の集落遺跡から遺物が流れ込んだと考えられる。時期は縄文時代晩期の短期間に数回にわたり、次に弥生時代後期後半から古墳時代初頭に徐々ではあるが大規模に、最後に室町時代に小規模な流れ込みが推定できる。方向は、鴻峰山東麓の五十鈴川および一の坂川に沿った谷筋が考えられるが、現在のところ縄文時代から古墳時代の集落遺跡として周知されている遺跡は上流域には存在しない。中世の遺跡は、鴻ノ峯城跡・古城ヶ岳城跡が知られているが、距離的にやや離れ、これらの遺跡からの流れ込みと考えるのは無理がある。

B区はA区とは約5mしか離れていないが、ヘラナデやミガキなどを施した丁寧に作られた、祭祀的性格を含む遺物を若干出土している。188の長頸壺、191の筒形の製品、201の高坏である。また、立会調査のD路線でも台付鉢や鼓形器台を検出しており、生活遺跡の一部に祭祀的要素を含む遺構があった可能性も考えられるが推測の域を出ない。堆積状況から考えて同一遺跡からの流れ込みであり、2か所以上の遺跡からの流入と見るのは困難であろう。

出土遺物の中にいくつか特徴的なものが見られる。刻目をもつ縄文土器、弥生土器の複合口縁壺、器台、庄内系の甕、山陰系の甕・鼓形器台、中世の瓦器・土師器などである。

刻目をもつ縄文土器は、屈曲した胴部に刻目をもつもの（A区第15層163・164）、164は欠損していてわからないが、さらに口縁端部にも刻目をもつもの（163）、刻目突帯文をもつもの（A区第8層144、A区第15層165・166）がある。山口盆地内で縄文時代晩期の土器を出土する遺跡は当遺跡の北東3.2kmに位置する桜畠遺跡[6]、北東2.2kmに位置する屋敷遺跡[7]、盆地南西端の西遺跡[8]などがあり、桜畠遺跡、屋敷遺跡は縄文時代晩期前半の月崎上層I[9]に、西遺跡I区河川跡出土の遺物は縄文時代終末に位置づけられ、附属山口中学校出土の土器はその間の時期にあたる。そして防府市奥正権寺遺跡第III区土壙出土遺物[10]とほぼ同じく、月崎上層III、岩田遺跡五類[11]に対応する縄文時代後期後半と考えられる。

小結

弥生土器の複合口縁壺は、a)立ち上がり部が短く、外面に櫛描波状文を飾るもの、b)立ち上がり部が長くやや外傾し、櫛描波状文・鋸歯文・竹管文を飾り、口縁端部に斜格子文を飾るもの(A区第6層92)、c)立ち上がり部がやや長く、無文のものがある。aは更に立ち上がり部をT字状に頸部とつなぐ、山本一朗氏の編年[12]の防長7式にあたるもの(B区184)、防長8式にあたる立ち上がり部を頸部の上で接合し屈曲部が鍔状に張り出すもの(B区181～183、立会調査15)、頸部から口縁端まで一体で作り出すもの(A区第6層91)があり、cは口縁端部が外反するもの(A区第5層7、立会調査13)と直線的に伸びるもの(立会調査14)がある。櫛描波状文をもつaは周防部の土器の影響を受け、無文のcは北部九州～長門の土器の影響を受けたものと思われる。bの立ち上がり部が外反する器形は、北部九州の影響のある複合口縁壺の形であるが、文様構成は安国寺式と呼ぶ周防灘沿岸の愛媛、大分の土器と共通する要素をもち、防長10式に相当すると思われる。

弥生土器の器台は器形の推定できるもので筒形、翼状突起をもつものが出土した。翼状突起の破片は昭和61年の試掘調査でも出土している。27は筒形で受部と裾部が同角度で開き、上から½～⅓を切り取る防府市右田一丁田遺跡のS-BbⅠ形[13]に近いものと思われる。28は左右に大きな2枚の翼状突起、前方に小さい1枚の突起が付く右田一丁田遺跡のS-DaⅠ形に近いと思われる。

胴部外面のタタキを特徴とする庄内系の土器は6点あるが、タタキのち刷毛を施すもの(A区第5層66・67)、幅広の横方向のタタキ(A区第5層68・69)、右下がりのタタキ(A区第5層67、A区第6層135)が見られ、一定していない。また、内面の調整は、ケズリを行わずナデや刷毛を施すもの(65・68・69・135)が多く、在地の土器との折衷形で、搬入品とは考えられない。山口盆地内の西遺跡の調査では湯田楠木町遺跡出土遺物もあわせ、いわゆる山陰系及び外面にタタキ目をもつ土器の胎土分析を行っている[14]。その結果、山陰系の土器は周防領域の胎土から外れるが、タタキ目をもつ土器は周防領域の胎土と分析されており、タタキ目をもつ土器を在地産と考えても矛盾はしない。

山陰系土器の鼓形器台(A区第5層64)は、推定復元で器高12.6cm、くびれ部径9.4cmとなり、藤田憲司氏の鼓形器台の計測データ[15]に基づくと、高さ／くびれ径＝1.34となり、鍵尾式と小谷式の中間のほぼ秋里Ⅰ(出雲の知井宮)に相当する時期と考えられる。甕はいずれも複合口縁で、くりあげ口縁となるものはない。畿内の庄内期に並行すると考えても差し支えないであろう。山陰系土器は図化できたもので甕22点、鼓形器台2点の計24点出土し、全出土土師器の17%を占め周辺の遺跡の中では最も高率である。山口盆地への山陰

系土器の流入経路は、従来からいわれているように弥生時代後期後半以降、石見の高津川流域から阿武川水系、椹野川水系を伝わったと考えられる[16][17]。器種は甕・器台に限られ生活用具のセットをなさないが、器面の調整技法は庄内系の甕のように個体ごとの乱れはなく、模倣であってもオリジナルにかなり忠実で、多少なりとも製作集団の移動または断続的な交易者の来訪が考えられる。当遺跡の遺物は胎土分析を行っていないが、先に述べた湯田楠木町遺跡、西遺跡の分析結果もあり、製作集団の移動に伴う土器の搬入も同時に考えられる。しかし、現時点では搬入品と、移住先での製作品との区分はできない。流入経路の阿武川水系にある徳佐盆地では数か所の遺跡が発掘調査されている[18]が、突抜遺跡[19]で庄内期まで下る遺物が出土するものの、他の遺跡は弥生時代後期前半の遺物を中心とする。これらの石見に隣接する山口県北部の遺跡から、後期後半に山口盆地への集団の移動の可能性も考えられる。

湯田楠木町遺跡では山陰系２点、庄内系16点、附属幼稚園・山口小学校を含めた白石遺跡では山陰系37点、庄内系６点を出土し、その比率は逆転している。また盆地内の他の庄内併行期の遺跡[20]では庄内系が山陰系に優る傾向がある。白石遺跡の現象は流れ込んだ遺跡の性格によるもので明確にしがたいが、山陰系の土器を作る技術を持った集団の拠点となる集落が存在した可能性が高いといえるであろう。

中世の遺物は、Ｂ区で１点、立会調査のＤ路線で１点、Ｅ路線で１点検出し多くはないが、Ｃ区では全出土８点中５点が該当する。小片が多く時期を決定する要素に欠けるが、Ｃ区出土の土師器の皿（212）は口縁が肥厚し、端部がやや尖り、大内Ｂ式土師器[21]の特徴を備えている。大内Ｂ式と考えられる土師器は、附属山口中学校で今回の分を含め２点[22]、附属山口小学校で１点出土している。微量ではあるが、この土器が大内氏関連遺跡や大内氏の家臣団に関わる遺跡に偏在することを考慮すると、遺物の流入元の遺跡は確定できないものの、使用集団は限られてくるものと思われる。この土器が16世紀中葉の室町時代後期に比定されることから、今回検出した中世の遺物も大半がこの時期のものと思われる。

注〕

１）山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う発掘調査」「教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』、1991年）。

２）山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査」（『山口

大学構内遺跡調査研究年報VI』、1989年)。

3) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VIII』、1990年)。

4) 山口県教育委員会『伊倉遺跡』(1973年)。

5) 国東町教育委員会『安国寺遺跡』(1989年)。

6) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会『桜畠遺跡』(1991年)。

7) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会『屋敷遺跡』(1990年)。

8) 山口市教育委員会『西遺跡』(1986年)。

9) 潮見浩「月崎遺跡」(宇部市教育委員会、『宇部の遺跡』、1968年)。

10) 山口県教育委員会・山陽工業株式会社『奥正権寺遺跡Ⅰ』(1985年)。

11) 潮見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」(『広島大学文学部紀要』第18号、1960年)。

12) 山本一朗「防長の土師器」(周陽考古学研究所、『山口県の土師器・須恵器』、1981年)。

13) 山口県教育委員会「右田・一丁田の調査」(『右田・一丁田遺跡　的場・宮の馬場遺跡　久米市遺跡』、1975年)。

14) 三辻利一「西遺跡出土土器の螢光X線分析」(山口市教育委員会、『西遺跡』、1987年)。

15) 藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」(『考古学雑誌』第64巻第4号、日本考古學會、1979年)。

16) 渡辺一雄「山口県におけるいわゆる「山陰系土器」について」(『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について　発表記録』、第18回埋蔵文化財事務局、1986年)。

17) 高下洋一「山口県出土のいわゆる山陰系土器について」(『RELICS』第3号、山口大学考古学研究室、1986年)。

18) 阿武郡阿東町坂手沖尻遺跡、宮ヶ久保遺跡、羽波遺跡、馬場遺跡などが挙げられる。

19) 山口県教育委員会『よみがえる弥生のムラ－突抜・馬場遺跡－』(1985年)。

20) 赤妻遺跡、下東遺跡、西遺跡などが挙げられる。

21) 山口市教育委員会『大内氏館跡VIII』(1991年)。

22) 前掲　1)、2)。

Tab. 2　出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量（cm） (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎　土	焼　成	備　考
A区　第5層（Fig. 9～13）						
1	縄文土器　不明		灰褐免(7.5YR5/2)	やや不良	不　良	粗製
2	縄文土器　甕or深鉢		①黒褐色(10YR2/2) ②黒褐色(10YR1.7/1)	やや不良	不　良	粗製
3	縄文土器　甕or深鉢		①黒褐色(10YR2/2) ②黒褐色(10YR1.7/1)	やや不良	不　良	粗製
4	縄文土器　深鉢		①黒褐色(10YR2/2) ②黒褐色(10YR1.7/1)	やや不良	不　良	粗製
5	縄文土器　深鉢		①黒褐色(10YR2/2) ②黒褐色(10YR1.7/1)	やや不良	不　良	粗製
6	縄文土器　甕or深鉢		①黒褐色(10YR2/2) ②黒褐色(10YR1.7/1)	やや不良	不　良	粗製
7	弥生土器　壺	①11.9	にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	やや不良	複合口縁
8	弥生土器　壺		にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	やや不良	7と同一個体
9	弥生土器　壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	良　好	
10	弥生土器　壺		浅黄橙色(10YR8/3)	不　良	やや不良	
11	弥生土器　壺		浅黄橙色(7.5YR8/4)	不　良	やや不良	複合口縁
12	弥生土器　壺		にぶい橙色(10YR7/3)	やや不良	やや不良	
13	弥生土器　壺		浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	やや不良	
14	弥生土器　壺	②4.6	にぶい橙色(5YR7/3)	やや不良	やや不良	
15	弥生土器　甕		浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	やや不良	
16	弥生土器　甕	①(14.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	不　良	やや不良	
17	弥生土器　甕		浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
18	弥生土器　甕	①(11.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	やや不良	
19	弥生土器　甕	①(32.0)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	良　好	
20	弥生土器　甕	①(18.2)	灰黄褐色(10YR6/2)	良　好	精　良	
21	弥生土器　甕	②(6.8)	明褐色(7.5YR7/2)	良　好	良　好	
22	弥生土器　甕	②(4.1)	黒色(7.5YR1.7/1)	良　好	やや不良	
23	弥生土器　甕		①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②褐灰色(10YR5/1)	良　好	良　好	
24	弥生土器　高杯		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	やや不良	
25	弥生土器　鉢	①(13.2)	浅黄橙色(10YR8/4)	不　良	やや不良	
26	弥生土器　器台	②(10.0)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	やや不良	不　良	
27	弥生土器　器台		浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	やや不良	
28	弥生土器　器台	②(11.3)　③16.3	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	やや不良	
29	土師器　甕		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	
30	土師器　甕		①褐灰色(7.5YR/1) ②灰褐色(5YR5/2)	良　好	良　好	
31	土師器　甕	①(11.9)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	良　好	良　好	
32	土師器　甕		灰黄褐色(10YR5/2)	やや不良	やや不良	
33	土師器　壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	良　好	
34	土師器　甕	①(12.9)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	やや不良	
35	土師器　甕	①(20.8)	①浅黄橙色(7.5YR8/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	不　良	やや不良	
36	土師器　甕	①(19.6)	浅黄橙色(7.5YR8/6	やや不良	良　好	
37	土師器　甕	①(21.6)	①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	

出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量（cm） （①口径②底径③器高）	色　調 （①外面　②内面）	胎　土	焼　成	備　考
38	土師器　甕	①(11.4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	良　好	
39	土師器　甕	①(13.6)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	不　良	不　良	
40	土師器　甕	①(13.8)	橙色(5YR7/8)	不　良	不　良	
41	土師器　甕		浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	
42	土師器　甕		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	良　好	44と同一個体？
43	土師器　甕		灰白色(10YR8/2)	良　好	良　好	
44	土師器　甕		浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	
45	土師器　甕		浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
46	土師器　甕		橙色(7.5YR7/6)	不　良	不　良	
47	土師器　甕		浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	やや不良	
48	土師器　甕		橙色(7.5YR6/6)	やや不良	やや不良	
49	土師器　甕		浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	
50	土師器　甕		にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	やや不良	やや不良	
51	土師器　甕		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②橙色(7.5YR7/6)	良　好	やや不良	
52	土師器　甕		①赤黒色(2.5YR1.7/1) ②橙色(2.5YR6/8)	不　良	良　好	
53	土師器　甕		明褐灰色(7.5YR7/2)	やや不良	やや不良	
54	土師器　甕	①(16.5)	浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	山陰系
55	土師器　甕	①(15.4)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②橙色(7.5YR8/6)	やや不良	やや不良	山陰系
56	土師器　甕		①明褐灰色(7.5YR7/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	良　好	山陰系
57	土師器　甕		灰黄褐色(10YR6/2)	良　好	良　好	山陰系
58	土師器　甕		灰白色(7.5YR8/2)	良　好	良　好	山陰系
59	土師器　甕		①浅黄橙色(10YR8/4) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	不　良	不　良	山陰系？
60	土師器　甕		浅黄橙色(10YR8/3)	不　良	やや不良	山陰系
61	土師器　甕		①黒色(7.5YR1.7/1) ②浅黄橙色(7.5YR8/6)	良　好	良　好	山陰系
62	土師器　甕		①黒色(7.5YR2/2) ②浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	やや不良	山陰系
63	土師器　甕		①黒色(7.5YR1.7/1) ②浅黄橙色(10YR8/4)	良　好	良　好	山陰系
64	土師器　鼓形器台	①(21.9)	橙色(5YR7/8)	やや不良	やや不良	山陰系
65	土師器　甕	①(16.8)	明褐灰色(7.5YR7/2)	良　好	やや不良	庄内系
66	土師器　甕	①(15.2)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	不　良	やや不良	庄内系
67	土師器　甕	①(16.9)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	不　良	やや不良	庄内系
68	土師器　甕	①(18.8)	①黒色(7.5YR2/1) ②明褐灰色(7.5YR7/2)	良　好	良　好	庄内系
69	土師器　甕		①黒色(7.5YR2/1) ②明褐灰色(7.5YR7/2)	良　好	良　好	庄内系 68と同一個体
70	土師器　甕		①褐灰色(7.5YR4/1) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	布留系？
71	土師器　小型丸底壺	①(7.3)	灰白色(7.5YR7/2)	良　好	良　好	
72	土師器　小型丸底壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	良　好	
73	土師器　小型丸底壺		①浅黄橙色(10YR8/3) ②黒色(10YR1.7/1)	良　好	良　好	
74	土師器　小型丸底壺		にぶい黄橙色(10YR7/2)	良　好	良　好	
75	土師器　小型丸底壺		浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	

法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量（cm） （①口径②底径③器高）	色　調 （①外面　②内面）	胎　土	焼　成	備　考
76	土師器　高坏		浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	
77	土師器　高坏		①橙色(5YR7/8) ②にぶい橙色(5YR7/4)	やや不良	良　好	
78	土師器　高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	やや不良	
79	土師器　高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	やや不良	
80	土師器　高坏		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい赤褐色(5YR5/4)	良　好	やや不良	
81	土師器　高坏		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	良　好	
82	土師器　高坏		浅黄橙色(7.5YR8/4)	やや不良	やや不良	
83	土師器　高坏	②(13.3)	①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	精　良	
84	土師器　高坏	②(16.6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	やや不良	
85	土師器　壺or台付鉢		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	良　好	
86	手捏土器　鉢	①(8.7)②2.5③5.8	褐灰色(10YR6/1)	良　好	やや不良	
A区　第6層　(Fig. 14～17)						
87	縄文土器　浅鉢		灰黄褐色(10YR5/2)	やや不良	不　良	粗製
88	縄文土器　不明		褐灰色(5YR4/1)	良　好	不　良	粗製
89	縄文土器　甕	②(4.6)	①暗赤褐色(5YR3/3) ②黒色(5YR1.7/1)	やや不良	不　良	粗製
90	弥生土器　壺	①(26.8)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	良　好	良　好	
91	弥生土器　壺	①(22.6)	浅黄橙色(10YR8/4)	不　良	やや不良	複合口縁
92	弥生土器　壺	①(30.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	複合口縁
93	弥生土器　壺		浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	不　良	複合口縁
94	弥生土器　壺		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②灰白色(10YR7/1)	良　好	不　良	
95	弥生土器　壺		①橙色(5YR7/6) ②橙色(5YR6/6)	やや不良	やや不良	
96	弥生土器　壺		浅黄橙色(10YR8/4)	不　良	やや不良	
97	弥生土器　壺		にぶい黄橙色(10YR6/3)	やや不良	やや不良	
98	弥生土器　壺	②(5.6)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	やや不良	
99	弥生土器　壺	②(2.9)	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②黒褐色(7.5YR2/2)	良　好	やや不良	
100	弥生土器　壺	②(4.8)	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良　好	やや不良	
101	弥生土器　壺	②2.7～1.9(楕円形)	①明褐灰色(7.5YR7/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	やや不良	
102	弥生土器　壺	①(14.0)	①明褐灰色(7.5YR7/2) ②にぶい橙色(5YR7/3)	良　好	やや不良	
103	弥生土器　甕	①(19.8)	浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
104	弥生土器　甕	①(13.3)	浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
105	弥生土器　甕		浅黄橙色(7.5YR8/6)	やや不良	良　好	
106	弥生土器　甕	①(9.6)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	やや不良	
107	弥生土器　器台or台付鉢		にぶい黄橙色(10YR6/3)	良　好	良　好	
108	弥生土器　器台		浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
109	弥生土器　器台	②(9.0)	浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
110	弥生土器　器台		浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
111	弥生土器　高坏		橙色(7.5YR6/6)	やや不良	不　良	
112	弥生土器　高坏	①(27.0)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	

出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量（cm） （①口径②底径③器高）	色　調 （①外面　②内面）	胎　土	焼　成	備　考
113	弥生土器　高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	
114	弥生土器　鉢	①(14.0)	浅黄橙色(10YR8/4)	不　良	やや不良	
115	土師器　壺	①(15.6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	
116	土師器　壺		にぶい黄橙色(10YR8/4)	良　好	やや不良	
117	土師器　甕		①赤灰色(2.5YR4/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	
118	土師器　甕	①(11.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	
119	土師器　甕	①(15.8)	橙色(5YR7/6)	良　好	良　好	
120	土師器　甕	①(16.2)	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	やや不良	やや不良	
121	土師器　甕	①(16.0)	①黒色(7.5YR1.7/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	やや不良	
122	土師器　甕	①(17.4)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰褐色(7.5YR6/2)	良　好	やや不良	
123	土師器　甕	①(17.4)	①にぶい褐色(7.5YR5/3) ②橙色(5YR7/6)	良　好	良　好	
124	土師器　甕	①(15.5)	黄橙色(7.5YR8/8)	良　好	良　好	
125	土師器　甕		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	良　好	
126	土師器　甕		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	
127	土師器　甕		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	やや不良	
128	土師器　小型丸底壺	①(8.0)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	やや不良	
129	土師器　小型丸底壺	①(10.1)	浅黄橙色(10YR8/4)	良　好	良　好	
130	土師器　甕		にぶい黄橙色(10YR7/2)	良　好	良　好	
131	土師器　甕		灰黄褐色(10YR6/2)	良　好	良　好	山陰系
132	土師器　甕		①橙色(2.5YR7/6) ②褐灰色(5YR5/1)	良　好	良　好	山陰系
133	土師器　甕	①(16.3)	①橙色(2.5YR7/6) ②浅黄橙色(7.5YR8/6)	やや不良	良　好	山陰系
134	土師器　甕	①(15.2)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	不　良	山陰系
135	土師器　甕	①(14.8)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	庄内系
136	土師器　高坏		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	良　好	
137	土師器　高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	
138	土師器　高坏		浅黄橙色(7.5YR8/6)	良　好	良　好	
139	土師器　高坏		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良　好	良　好	
140	土師器　高坏	②(15.0)	にぶい橙色(5Y7/4)	良　好	良　好	
141	土師器　高坏	②(15.1)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	良　好	
A区　第8層　(Fig. 18)						
142	縄文土器　浅鉢		①明褐灰色(7.5YR7/2) ②黒褐色(7.5YR3/1)	良　好	精　良	精製
143	縄文土器　浅鉢		にぶい黄橙色(10YR7/2)	良　好	良　好	精製
144	縄文土器　甕		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黒色(10YR1.7/1)	良　好	やや不良	粗製
145	縄文土器　深鉢		①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒褐色(10YR3/1)	良　好	やや不良	粗製
146	縄文土器　深鉢		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黒色(10YR1.7/1)	良　好	やや不良	粗製
147	縄文土器　深鉢		①明褐灰色(7.5YR7/2) ②黒色(7.5YR1.7/1)	良　好	やや不良	粗製
148	縄文土器　深鉢		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黒色(10YR1.7/1)	良　好	やや不良	粗製
149	縄文土器　深鉢		①黒褐色(7.5YR3/1) ②黒色(7.5YR1.7/1)	良　好	やや不良	粗製

法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量（cm） （①口径②底径③器高）	色　調 （①外面　②内面）	胎　土	焼　成	備　考
150	縄文土器　甕		①灰白色(10YR8/2 ②浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	やや不良	粗製
151	縄文土器　深鉢		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②黒褐色(7.5YR3/1)	やや不良	不　良	粗製
152	縄文土器　深鉢		①黒褐色(7.5YR2/2) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	やや不良	不　良	粗製
153	縄文土器　深鉢		①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒褐色(10YR3/1)	良　好	やや不良	粗製
154	縄文土器　深鉢		①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒褐色(10YR3/1)	良　好	やや不良	粗製
A区　第10層　(Fig. 19)						
155	縄文土器　浅鉢		①灰褐色(7.5YR6/6) ②褐灰色(10YR4/1)	良　好	良　好	精製
156	縄文土器　甕or深鉢		褐灰色(7.5YR4/1)	良　好	不　良	粗製
157	縄文土器　甕or深鉢		①灰白色(2.5YR8/2) ②褐灰色(10YR5/1)	良　好	やや不良	粗製
A区　第13層　(Fig. 19)						
158	縄文土器　甕or深鉢		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②褐灰色(7.5YR5/1)	良　好	やや不良	粗製
159	縄文土器　甕or深鉢		①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②褐灰色(7.5YR5/1)	良　好	良　好	粗製
160	縄文土器　甕or深鉢		①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	やや不良	粗製
A区　第15層　(Fig. 20)						
161	縄文土器　浅鉢	①(11.6)	①浅黄橙色(10YR8/3) ②黄灰色(2.5Y5/1)	良　好	不　良	精製
162	縄文土器　浅鉢		浅黄色(2.5Y8/4)	良　好	良　好	精製
163	縄文土器　甕		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②明褐灰色(7.5YR7/1)	良　好	精　良	精製
164	縄文土器　甕		褐灰色(10YR6/1)	やや不良	やや不良	粗製
165	縄文土器　甕		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②オリーブ黒色(5Y3/1)	良　好	良　好	粗製
166	縄文土器　甕		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	不　良	粗製
167	縄文土器　甕or深鉢		①にぶい橙色(7.5YR6/3) ②黒褐色(10YR3/1)	やや不良	不　良	粗製
168	縄文土器　甕or深鉢		①灰白色(10YR8/2) ②黒褐色(7.5YR3/1)	良　好	やや不良	粗製
169	縄文土器　甕or深鉢		①浅黄橙色(10YR8/3) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	やや不良	粗製
A区　撹乱壙・排土　(Fig. 21)						
170	弥生土器　壺		①灰白色(2.5Y3/2) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	排土から出土
171	弥生土器　壺		①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	良　好	やや不良	排土から出土
172	土師器　甕	①(16.9)	①黒褐色(10YR3/2) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良　好	良　好	排土から出土 山陰系
173	土師器　甕		①灰白色(7.5YR8/2) ②浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	やや不良	撹乱壙出土 山陰系
B区　(Fig. 22・23)						
174	縄文土器　深鉢		①灰褐色(7.5YR6/2) ②褐灰色(10YR5/1)	良　好	やや不良	粗製
175	縄文土器　深鉢		①浅黄橙色(10YR8/4) ②褐灰色(10YR5/1)	良　好	不　良	粗製
176	縄文土器　深鉢		①灰褐色(5YR6/2) ②明褐灰色(7.5YR7/2)	良　好	やや不良	粗製
177	縄文土器　甕		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②褐灰色(7.5YR6/1)	良　好	不　良	粗製
178	縄文土器　甕or深鉢		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	不　良	粗製
179	縄文土器　甕	②(6.5)	浅黄色(2.5Y8/3)	良　好	やや不良	粗製
180	縄文土器　甕	②6.7	①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②褐灰色(7.5YR5/1)	良　好	不　良	粗製
181	弥生土器　甕		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良　好	良　好	複合口縁
182	弥生土器　甕		浅黄橙色(10YR8/4)	良　好	やや不良	複合口縁

出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量（cm） (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎　土	焼　成	備　考
183	弥生土器　壺		浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	良　好	複合口縁
184	弥生土器　壺	①(18.7)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②灰褐色(7.5YR6/2)	良　好	良　好	複合口縁
185	弥生土器　壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	やや不良	
186	弥生土器　壺	②(6.2)	①明褐色(7.5YR7/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	良　好	やや不良	
187	弥生土器　壺	②(4.2)	①浅黄橙色(10YR8/3) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	不　良	
188	弥生土器　長頸壺	①(9.0)	①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/3)	良　好	良　好	
189	弥生土器　甕		橙色(5YR7/8)	良　好	良　好	跳ね上げ口縁
190	弥生土器　高坏		①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	良　好	やや不良	
191	弥生土器　不明	②(10.4)	①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	良　好	良　好	
192	土師器　甕	①(21.1)	①褐灰色(7.5YR4/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	
193	土師器　甕		①黒褐色(7.5YR3/1) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	良　好	良　好	
194	土師器　甕		①黒褐色(10YR3/2) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	
195	土師器　甕	①(14.9)	①黒褐色(7.5YR3/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	良　好	
196	土師器　甕	①(10.9)	①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	良　好	良　好	
197	土師器　甕		①褐灰色(7.5YR6/1) ②浅黄橙色(10YR8/4)	良　好	やや不良	
198	土師器　甕		にぶい橙色(7.5YR6/4)	良　好	不　良	布留系
199	土師器　甕	①(13.5)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	やや不良	山陰系
200	土師器　甕		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	やや不良	山陰系 199と同一個体
201	土師器　高坏	①(16.2)	灰黄褐色(10YR6/2)	良　好	良　好	畿内系
202	土師器　高坏		①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	良　好	
203	土師器　直口壺or小型丸底壺	①(8.9)	灰白色(10YR8/1)	良　好	良　好	
204	土師器　鉢		①橙色(5YR6/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	
205	土師器　台付鉢		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	不　良	
206	手捏土器　甕	②1.5～2.0(楕円形)	灰黄色(2.5Y7/2)	良　好	良　好	
207	手捏土器　壺		橙色(5YR7/6)	やや不良	良　好	
208	土師器　皿	②5.9	①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/4)	良　好	良　好	
209	土師質土器　足鍋		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	やや不良	
C区　(Fig. 24)						
210	土師器　甕		①明褐灰色(7.5YR7/2) ②にぶい橙色(5YR7/3)	良　好	良　好	第22b層出土
211	土師器　甕		①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良　好	やや不良	第22b層出土
212	土師器　皿		淡黄色(2.5Y8/3)	良　好	良　好	第22b層出土 大内氏館跡B式土師器
213	弥生土器　甕		にぶい黄橙色(10YR7/4)	良　好	やや不良	表土層から出土
214	瓦質土器　足鍋		黄灰色(2.5Y6/1)	良　好	良　好	表土層から出土
215	土師質土器　火鉢		①上黒褐色(2.5Y3/1)下浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	良　好	良　好	表土層から出土
216	瓦質土器　擂鉢		①灰白色(2.5Y8/2) ②灰色(7.5Y4/1)	良　好	良　好	表土層から出土
217	土師質土器　擂鉢		①褐灰色(10YR6/1) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	表土層から出土

法量（　）は復原値

番号	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石　質	備　考
A区　第6層							
224	縦長剝片	(18.5)	(16.0)	(4.5)	0.79	姫島産黒曜石	
233	粗製扁平打製石斧	91.5	53.5	16.5	99.20	結晶片岩	
A区　第7a層							
218	石鏃	(33.0)	19.5	5.0	2.08	サヌカイト	
237	敲打痕のある円礫	51.5	45.0	17.5	56.92		河原石
A区　第8層							
221	二次加工のある剝片	(14.0)	(16.0)	(4.0)	0.77	サヌカイト	
238	敲打痕のある円礫の素材	50.0	44.0	24.0	75.93		河原石
239	敲打痕のある円礫	40.0	35.5	23.0	45.29		河原石
A区　第10層							
220	二次加工のある剝片	(20.5)	(17.5)	(3.5)	0.77	サヌカイト	
223	調整剝片	17.0	11.0	2.0	0.25	腰岳産黒曜石	
228	剝片	(11.0)	(23.0)	(3.0)	0.52	サヌカイト	
A区　第11a層							
236	粗製扁平打製石斧	(129.0)	(58.0)	(14.5)	137.03	結晶片岩	
A区　第13層							
219	石鏃	(22.5)	(19.0)	(5.5)	2.06	サヌカイト	
222	使用痕のある剝片	37.0	19.0	9.0	4.41	腰岳産黒曜石	
225	剝片	(11.5)	(12.0)	(2.5)	0.23	淀姫産黒曜石	
226	剝片	15.0	14.0	3.0	0.49	サヌカイト	
227	剝片	(9.0)	(10.0)	(2.5)	0.13	腰岳産黒曜石	
234	粗製扁平打製石斧	(142.0)	(59.0)	(16.0)	147.47	結晶片岩	
A区　第15層							
229	剝片	(14.0)	17.5	2.0	0.34	サヌカイト	
230	剝片	(20.0)	27.0	5.5	1.83	サヌカイト	
231	剝片	(11.5)	(10.0)	(2.5)	0.20	腰岳産黒曜石	
232	剝片	15.0	11.5	5.0	0.54	腰岳産黒曜石	
235	粗製扁平打製石斧	(102.5)	(51.0)	(14.5)	94.35	結晶片岩	
B区　第6層							
241	砥石	(66.5)	(94.5)	(13.5)	88.02	結晶質凝灰岩	
C区　表土							
240	砥石	(76.5)	(48.5)	(14.5)	96.29	石英斑岩	

第3章　光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査

第1節　試掘調査

1　調査の経過

光構内は山口県光市大字室積浦に所在し、同構内およびその付近は「御手洗遺跡」として周知されている。構内に遺跡が埋存していることが明白になったのは、昭和40年、附属中学校の体育館の建築工事中のことである[1)]。遺物が発見されたのは工事による掘削の最終段階で、遺構は検出されなかったが、遺物包含層から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器など各時期の遺物が多量に出土した。その後、光構内では散発的に小規模な立会調査が行われているにすぎず、御手洗遺跡の性格・規模・時期など不明な点が多い。

今回の調査は、小学校体育館の北東に位置する小学校の運動場改修に伴い、工事範囲内の埋蔵文化財の有無、分布範囲を把握することが目的であった。調査の主な対象地域は、

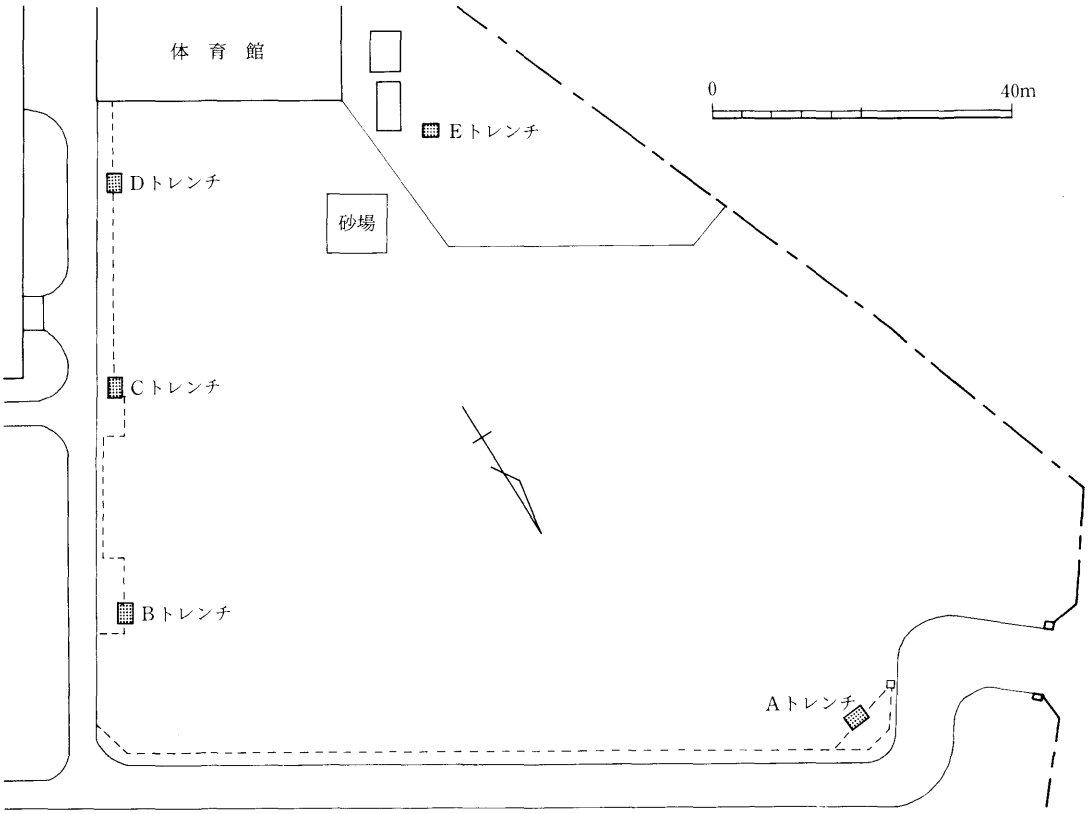


Fig. 27　調査区位置図（1）

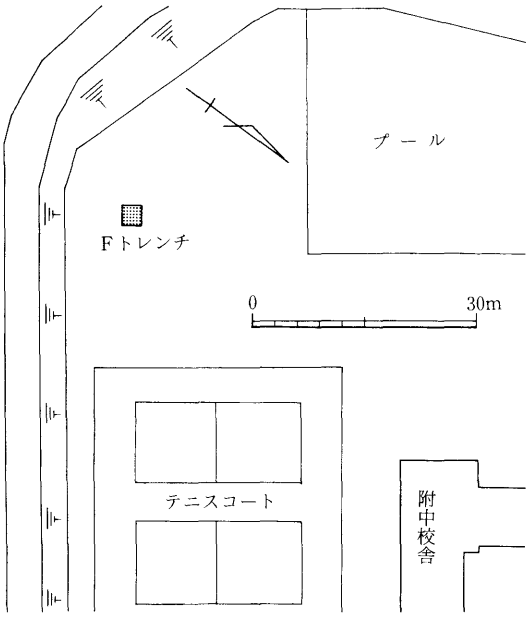


Fig. 28　調査区位置図（2）

運動場の東縁をめぐる側溝部分と北縁の排水管の埋設地域である。

試掘調査は、1.5m×2.5mのトレンチを運動場の北端部に1ヶ所(Aトレンチ)、東縁に3ヶ所（B・C・Dトレンチ)、南端部に1ヶ所（Eトレンチ）の計5ヶ所設定して行った。また、これと並行して光構内の南端部にも将来の新営計画に先だって2m×2mのトレンチを1ヶ所(Fトレンチ)設定して試掘調査を実施した。調査期間は平成2年7月5日から7月19日までで、調査面積は約23m²である。

2　層位（Fig. 29, PL. 21(3)(4)・22)

Aトレンチ

運動場の北端部に設定したトレンチ。現地表面から約40～70cmまでは運動場および構内の造成に伴う表土。その下には上位から、最大層厚約15cmの木炭を含む第2層：黒褐色細砂、最大層厚約25cmの第3層：褐色礫混じり細砂、第4層：褐色粗砂混じり礫が順次堆積する。第2層の検出面の標高は約3.30mで、トレンチ東半部に堆積するが、第3層と同じく構内の造成によって西半部が削平されたと考えられる。第2層にも円礫を若干含むが、下層になるにしたがって礫径を増す。

遺物は他のトレンチに比べて多く、表土を除く各層から出土した。しかし、第4層は包含量が少なく、また、検出面から最大で約90cm掘削した段階では出土遺物が皆無であったため、それ以下の掘削は断念した。遺物の組成は、第2層が土師器、須恵器、瓦質土器、土錘など42点、第3層が土師器60点、第4層が土師器14点で、小片が大半を占める。

Bトレンチ

運動場の東縁北端部に設定した。現地表面から約70cmまでは運動場および構内の造成に伴う表土。その下には第2層：オリーブ褐色細砂、第3層：暗褐色粗砂がブロック状に堆積する。第4層：黒褐色細砂混じり礫は最大層厚約30cmで、トレンチ南端部に部分的に存在する。検出面の標高は約3.10m。第5層：暗オリーブ褐色礫混じり細砂は最大層厚約40cmで、北側にいくにしたがって層厚を増し、第6層：にぶい黄褐色粗砂、第7層：砂礫と同

様に、北側に落ち込みながら堆積する。層厚は第6層が最大25cm、第7層が最大5cmである。第8層：黒褐色粗砂はBトレンチでは最も厚く堆積している。検出面から約55cm掘削したが、出土遺物はなかった。

遺物は第4・5・6各層から出土した。第4層と第5層の遺物は一括して取り上げており、第4・5層からは縄文土器、土師器、須恵器など36点、第6層からは土師器28点が出土した。各層とも小片が多い。

Cトレンチ

運動場の東縁の中央部、Bトレンチの南西約28mに設定したトレンチ。運動場および構内の造成に伴う表土は薄く、現地表面から約35cm下位までである。トレンチの北西隅には前身の山口師範学校の校舎に伴う基礎が残存する。その下には木炭を若干含む最大層厚約30cmの第2層：暗褐色砂質土、最大層厚約20cmの第3層：黄褐色礫混じり砂質土が堆積する。第2層の検出面の標高は約3.50m。遺物は第2層、第3層に包含される。第4層：黄褐色砂混じり礫以下は無遺物層で、第5・6層：砂礫、第7層：灰白色砂と堆積する。

遺物は他のトレンチに比べて極めて少なく、第2層から縄文土器、土師器など6点、第3層から土師器4点が出土した。両層とも小片が多い。

Dトレンチ

運動場の東縁の南端部、Cトレンチの南西約25mに設定したトレンチ。現地表面から約35cmまで運動場および構内の造成に伴う表土で、層厚はCトレンチと大差ない。その下には層厚約25～35cmの第2層：褐色砂質土が堆積する。第2層の検出面の標高は約3.35m。木炭を多量に含み、なかには径約5cmで最大長が約15cmにおよぶ炭化材も認められる。西壁中央部の断面では幅約60cm、深さ約40cmの落ち込みが観察されるが、掘削段階では掘り方はわからなかった。落ち込みの内部には木炭が多く含まれており、第3層もしくは第4層を掘り込み面とする遺構の可能性がある。第3層：明黄褐色細砂は最大層厚約25cmで南半部に堆積する。第4層：明黄褐色細砂混じり礫はトレンチ内では最も層厚があり、最大で約45cmである。以下、第5層：黄色礫混じり粗砂、第6層：浅黄橙色粗砂、第7層：淡黄色粗砂と色調の若干異なる粗砂が堆積する。

遺物は第2層から土師器10点、鉱滓1点が出土した。土師器のうち高坏は残存状態が良好で、他の遺物に比べて摩滅も少ない。

Eトレンチ

運動場の南端中央部、Dトレンチの西約40mに設定したトレンチ。現地表面から約30～35

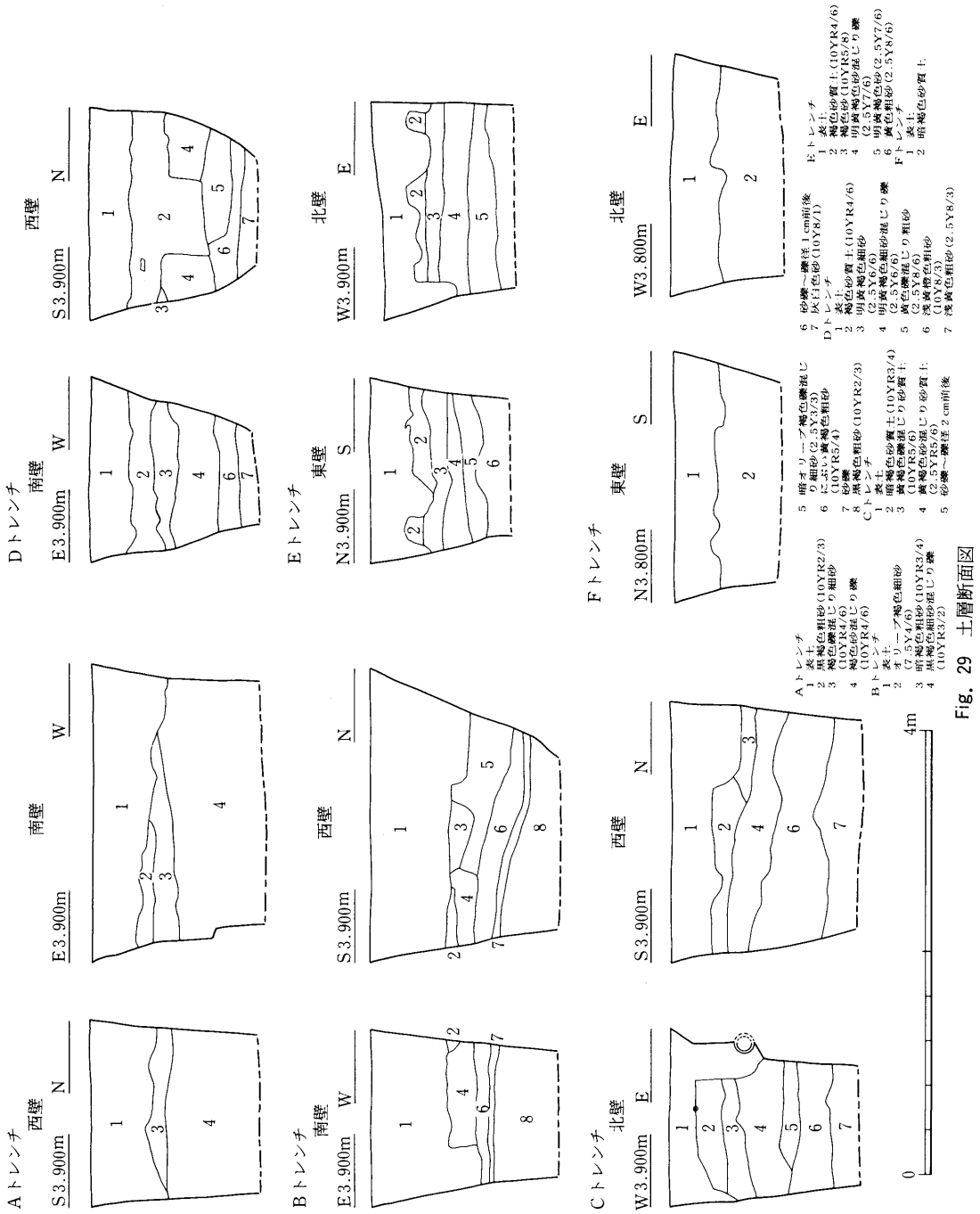

Aトレンチ
西壁
S3.900m N
南壁
E3.900m W
Bトレンチ
南壁
E3.900m W
西壁
S3.900m N
Cトレンチ
北壁
W3.900m E
西壁
S3.900m N
Dトレンチ
南壁
E3.900m W
西壁
S3.900m N
Eトレンチ
東壁
N3.900m S
北壁
W3.900m E
Fトレンチ
東壁
N3.800m S
北壁
W3.800m E
0
4m
Aトレンチ
1 表土
2 黒褐色粗砂(10YR2/3)
3 褐色礫混じり細砂(10YR4/6)
4 褐色砂混じり礫(10YR4/6)
Bトレンチ
1 表土
2 オリーブ褐色細砂(7.5Y4/6)
3 暗褐色粗砂(10YR3/4)
4 黒褐色細砂混じり礫(10YR3/2)
5 暗オリーブ褐色礫混じり細砂(2.5Y3/3)
6 にぶい黄褐色粗砂(10YR5/4)
7 砂礫
8 黒褐色粗砂(10YR2/3)
Cトレンチ
1 表土
2 暗褐色砂質土(10YR3/4)
3 黄褐色礫混じり砂質土(10YR5/6)
4 黄褐色砂混じり砂質土(2.5YR5/6)
5 砂礫～礫径2cm前後
6 砂礫～礫径1cm前後 灰白色砂(10YR8/1)
7 表土
Dトレンチ
1 表土
2 褐色砂質土(10YR4/6)
3 褐色砂(10YR5/8)
4 明黄褐色砂混じり礫(2.5Y7/6)
5 明黄褐色砂(2.5Y7/6)
6 黄色粗砂(2.5Y8/6)
Eトレンチ
1 表土
2 褐色砂質土(10YR4/6)
3 褐色砂(10YR5/8)
4 明黄褐色砂混じり礫(2.5Y7/6)
5 明黄褐色砂(2.5Y7/6)
6 黄色粗砂(2.5Y8/6)
Fトレンチ
1 表土
2 暗褐色砂質土
7 浅黄色粗砂(2.5Y8/3)

Fig. 29 土層断面図

cmまで運動場および構内の造成に伴う表土で、随所に撹乱壙が存在する。その下にはDトレンチの第2層に相当する、最大層厚約20cmの第2層：褐色砂質土が堆積するが、遺物は出土していない。第2層の検出面の標高は約3.40mである。第3層：褐色砂層は第2層と粒度で分層される。以下、第4層：明黄褐色細砂混じり礫、第5層：明黄褐色粗砂、第6層：黄色粗砂は、それぞれDトレンチの第3、4、5層に対応する堆積層である。

各堆積層からの出土遺物はない。

Fトレンチ

光構内の南端部、プールの東側に設定したトレンチ。現地表面から約40cmまで構内の造成に伴う表土で、その下には第2層：暗褐色砂質土が堆積する。礫をほとんど含まず、しまりがない。湧水が激しく検出面から約60cm掘り下げた段階で掘削を断念した。光構内の南に位置する峨嵋山からの伏流水が当地域で噴出するものと思われる。第2層の検出面の標高は約3.25mである。

遺物は第2層から土師器23点、須恵器、施釉陶器、磁器、剝片各1点が出土し、大きく時期の隔たる遺物が混在している。

3　出土・御手洗湾採集遺物（Fig.30，PL.27・28）

Aトレンチ出土遺物（1～5・11）

1・2は土師器。1は小形の坏で、体部が直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反するものと思われる。底部外面は丁寧な静止ナデが施される。2は椀で、しっかりした断面方形の高台を貼付する。底部外面には板目圧痕が残る。3は糸切り底の須恵器の坏。ベタ高台の底部をもち、体部は内弯して立ち上がる。4は瓦質土器の甕で、口縁部は肥厚し、やや垂れ下がりぎみの玉縁となる。5は土師器の甕。頸部内面に稜をもたず、口縁部は直線的に外反する。口縁端部は内面への強い横ナデによって上方に突出ぎみになる。11は棒状土錘。断面形は楕円形で、身部に比べてやや肥大した頭部は裏面側に弯曲する。穿孔は焼成前に行われるが、下半部を欠損するため、両端に施されたかどうかわからない。1～4・11は第2層、5は第3層出土。

Bトレンチ出土遺物（6）

粗製、有文の縄文土器。外面の地文はわからないが、ナデののち、錯綜斜行する沈線を施文する。第4・5層出土。

Cトレンチ出土遺物（7）

粗製、有文の縄文土器で、錯綜斜行する沈線を施文する。6と同一個体の可能性がある。

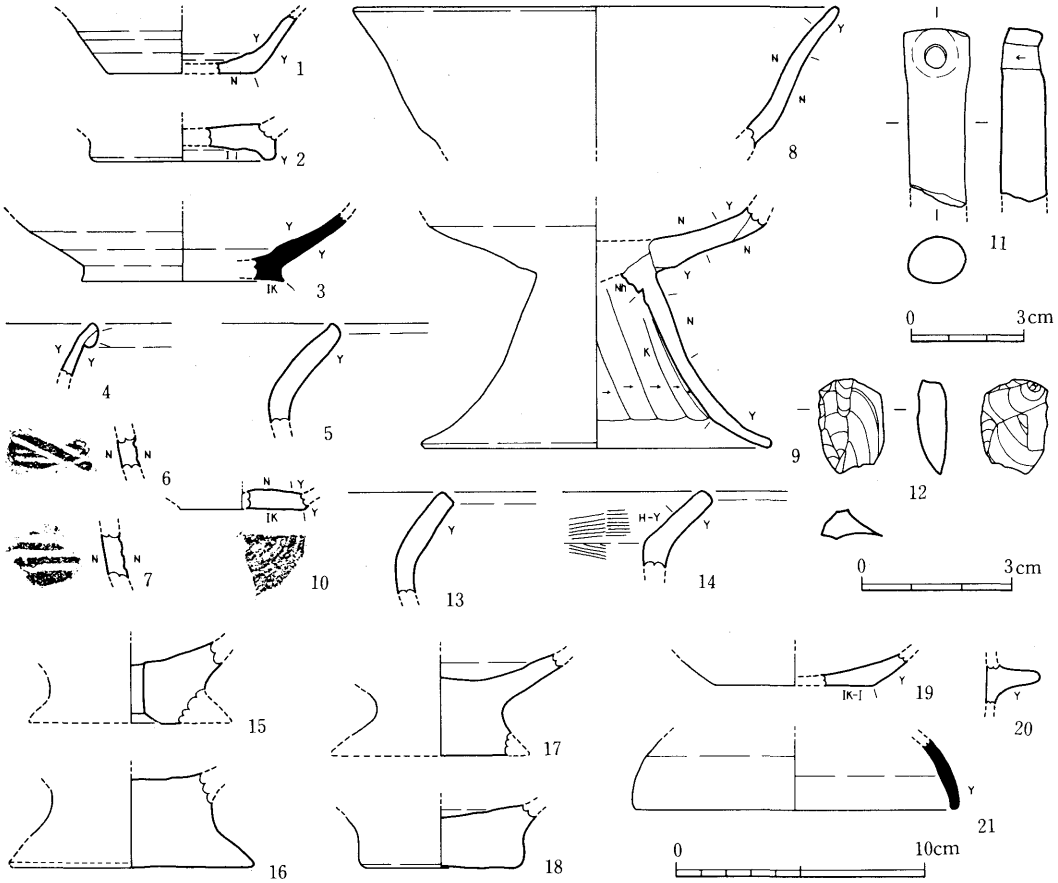


Fig. 30　出土遺物実測図

Dトレンチ出土遺物（8・9）

同一個体の土師器の高坏。8は丹塗りの坏部。長く深い上半部で、内弯して立ち上がり、口縁部はやや外反して開く。口縁端部は丸い。9は脚部で、脚部内面を除いて丹塗りする。脚部側面に坏部を接合し、坏部の中央部を円板充塡法により成形する高坏で、坏部の下半部は浅く、中位より下位で外面に稜をもち反転する。脚部は裾部までゆるやかに開き、端部付近で内面に稜をもちながら屈曲する。屈曲部は接地点よりかなり上位にあり、裾端部には平坦な面をもつ。内面は反時計回りに横方向に連続して手持ちヘラケズリする。第2層出土。

Fトレンチ出土遺物（10・12）

10は土師器の皿。底部と体部の境は明瞭で、糸切り底。12は姫島産黒曜石製の縦長剝片。

腹面側がネガ面で、上半部の剝離面がネガティブな剝離面である。背腹両面の剝離面の剝離方向は90°もしくは180°ずれている。

御手洗湾採集遺物（13～20）

光構内の面する御手洗湾での採集品。現存する護岸用の石垣が組まれる前に構内に堆積、露出していた遺物包含層が波濤によって削られ、遺物が遊離したものである。

13～20は土師器。13・14は甕。13はしまりのない頸部をもち、口縁部は直線的に外反する。14は張りのない胴部をもつものと思われ、口縁部は直線的に「く」の字に外反する。15～18は台付皿で、底部端が大きく外方へ開くもの（15～17）と円盤状の底部をもつもの（18）とがある。いずれも糸切り底と思われ、成形が粗雑で、器面の凹凸が激しい。15は底部中央に外面から焼成前穿孔がなされる。19は糸切り底の皿。底部と体部との境はやや不明瞭で、底部外面には板目圧痕が残る。20は鍋。やや長めの鍔部は水平に貼付され、端部は丸く終わる。21はやや小形の須恵器の坏蓋。

4　小結

今回の調査では、運動場の南端部を除く北・東両縁の４ヶ所、および光構内の南端部１ヶ所のトレンチで遺物が出土した。Ｄトレンチを除く各トレンチでは、大きく時期の隔たる遺物が同一層から出土している。一括性に乏しいが、注目しておきたい資料がある。

まず、時期的に最も遡るのはＢ・Ｃトレンチで出土した、有文の鉢形土器と思われる縄文土器である。小破片のため弧状の沈線かどうかわからないが、錯綜斜行する沈線を施文する。県内東部で、比較的まとまった縄文土器が出土しているのは熊毛郡岩田遺跡で、後～晩期の土器が一類から五類に区分されている[2)]。今回の調査で出土した土器は粗製であるが、文様の特徴から岩田四類に相当するもので、晩期前半に位置づけられる。御手洗湾をはさんで光構内の対岸に所在する、後期後半の横樋遺跡[3)]に後続する時期の資料である。

また、Ａトレンチから出土したベタ高台の須恵器は、県内では極めて類例が少なく、わずかに防府市周防国府跡[4)]で出土例があるにすぎない。10世紀後半頃に位置づけられているが、供給地、流入経路はわかっていない。

以上のように、試掘調査の結果、小学校体育館の北西に設定したＤトレンチでは、５世紀前半の丹塗りの高坏が良好な状態で出土し、遺物の出土状況も他のトレンチと異なり大きく時期の隔たる遺物を同一層に包含していないことが予想された。また、トレンチ内での第２層の落ち込みは遺構の埋積土である可能性があり、Ｄトレンチ周辺での遺構の有無、分布状況の把握が課題となった。

第２節　事前調査

１　調査の経過

試掘調査の結果、小学校体育館の北西に設定したＤトレンチでは、他のトレンチと色調・粒度の異なる堆積層が存在し、５世紀代前半の丹塗りの高坏が良好な状態で出土した。また、Ｄトレンチでは大きく時期の隔たる遺物は同一層からは出土しておらず、Ａ～Ｃ・Ｅトレンチでみられる縄文時代から室町時代の遺物が、包含層から混在して出土する状況と大きく異なっていることが判明した。試掘調査の結果をうけて、埋蔵文化財資料館運営委員会は、Ｄトレンチ内の第２層の落ち込みは遺構の埋積土である可能性があり、遺構の有無、分布状況の把握するために、Ｄトレンチ周辺では運動場改修工事に先だって事前に発掘調査が必要であると結論づけた。

埋蔵文化財資料館は同運営委員会の指示を受け、試掘調査時のＤトレンチと小学校体育館の間の地域、幅約２ｍ、長さ約7.5mの工事路線について発掘調査を実施した。調査期間は平成２年11月１日から11月15日までで、調査面積は約15m²である。

２　層位（Fig. 32, PL. 23）

層位的には試掘調査時のＤトレンチの層順と同じである。現地表面から約30cmまで運動場および構内の造成に伴う表土で、北端部には前身の山口師範学校の校舎に伴う基礎によって撹乱を受けている。その下には層厚約20～40cmの第２層：褐色砂質土が堆積する。木炭を多量に含み、北に向かうにつれて次第に堆積厚を増す。出土遺物には土師器63点、須恵器３点がある。

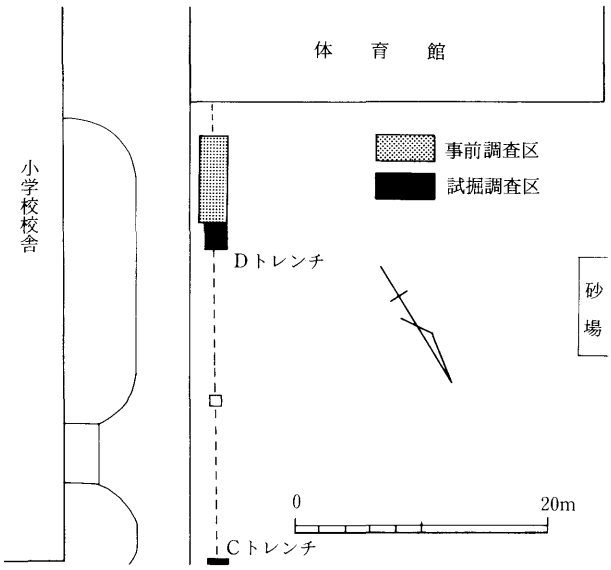
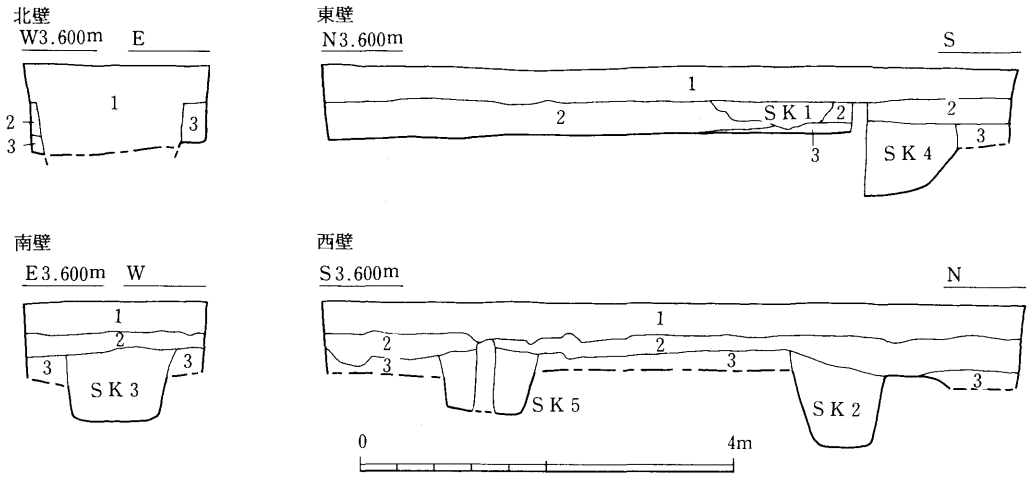


Fig. 31　調査区位置図

また、中央部よりやや南では第２層を検出面とする土壙１基を検出した。その下位には、第３層：明黄褐色細砂が堆積し、南北両端部で同層を検出面とする４基の土壙を検出した。このうちの２基は切り合い関係にあり、調査区内では少なくとも三時期の遺構が存在することが明かとなった。

土壙



1　表土　　2　褐色砂質土（10YR4/5）　　3　明黄褐色細砂（2.5Y6/6）

Fig. 32　土層断面図

3　遺構

第1号土壙（Fig.34，PL.24）

調査区の中央部よりやや南に位置し、第2層を検出面とする。東への延長部分は調査区外にあたるため完掘していないが、平面形態は不整形な楕円形状を呈するものと思われ、長軸140cm、短軸96cm以上、検出面からの深さ19cmの規模をもつ。検出面の標高は約2.3mである。西縁部には壁面に沿って底面から約10cm上位に弧状に巡る狭い平坦面をもつ。底面の中央部からやや西には不整形な落ち込みが存在する。埋積土は木炭を若干含む暗褐色細砂（7.5YR3/3）である。

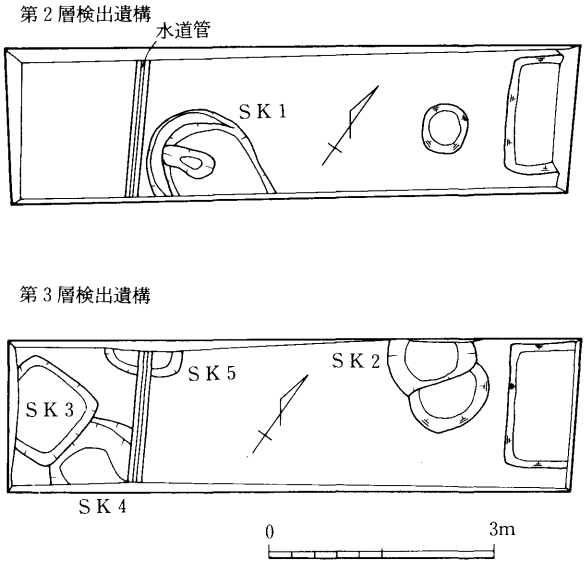


Fig. 33　遺構配置図

遺物は土師器甕・器台、須恵器坏身・高坏、須恵器模倣土師器の甕など50点が出土した。大半が土師器で壙底からわずかに上位で出土し、丹塗りの土師器10点が含まれている。

第2号土壙（Fig.35，PL.25（1））

調査区の北端部に位置し、第3層を検出面とする。西への延長部分は調査区外にあたる

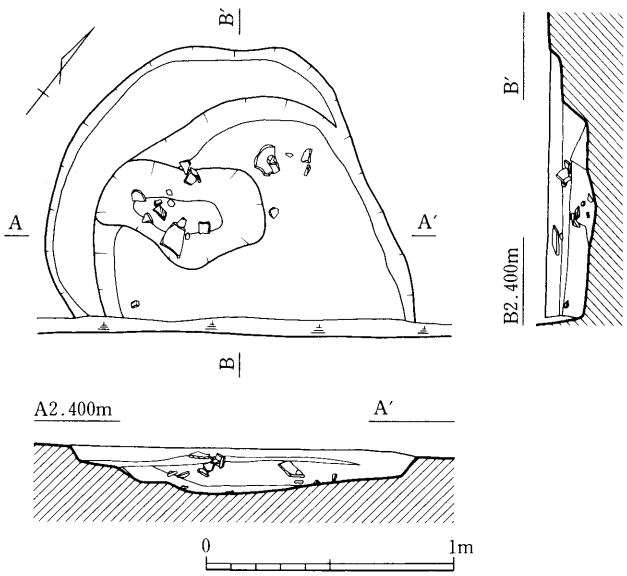


Fig. 34　第1号土壙実測図

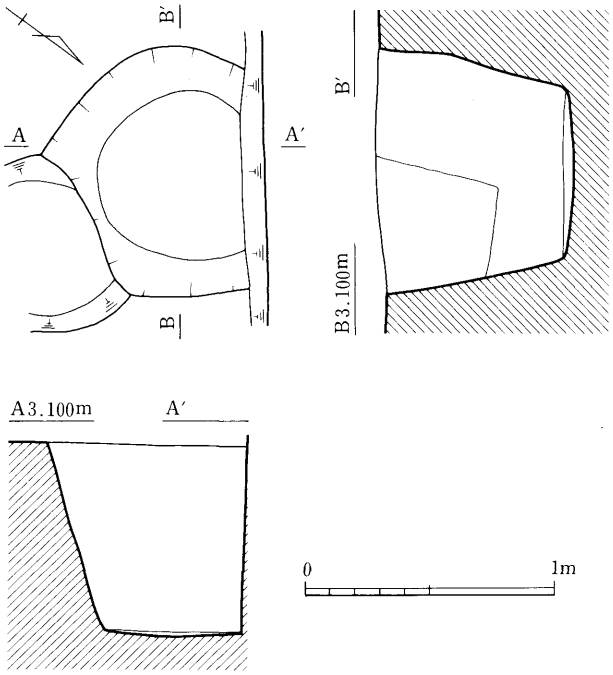


Fig. 35　第2号土壙実測図

ため完掘していないが、平面形態は円形を呈するものと思われる。東縁部は撹乱を受けており、全体の規模は明かでないが、長軸100cm、短軸80cm以上、検出面からの深さ77cmの規模をもつ。検出面の標高は約3.0mである。壙底は平坦で、壁面の立ち上がりは急である。埋積土は木炭を若干含む黒褐色細砂(10YR2/2)である。

遺物は壙底から出土したものはなく、土師器が7点あるにすぎない。このうちには丹塗りの土師器3点が含まれている。

第3号土壙

(Fig.36, PL.25 (2))

調査区の南端部に位置する。第3層を検出面とし、第4号土壙を切っている。西への延長部分は調査区外にあたるため完掘していないが、平面形態は他の土壙と異なり、隅丸方形を呈するものと思われる。長軸118cm、短軸115cm、検出面からの深さ63cmの規模をもつ。検出面の標高は約2.8mである。第2号土壙同様、壙底は平坦で、壁面の立ち上がりは極めて急である。埋積土は木炭を若干含む黒褐色細砂

(10YR2/2) である。

出土遺物は遺物が出土した他の土壙に比べて極めて少なく、土師器、須恵器各1点があるにすぎない。

第4号土壙

(Fig.37, PL.26 (1))

調査区の南端部に位置し、第3層を検出面とする。第3号土壙に切られている。南への延長部分は調査区外にあたり、また、東側には既設の埋設管が存在するため、平面形態はわからない。長軸113cm以上、短軸90cm以上の規模をもつが、既設の埋設管の東側では上面が検出されないため、東側への広がりは少ないと考えられる。検出面の標高は約2.8mである。壙底はほぼ平坦であるが、東端部でわずかに東へ下降する。検出面からの深さは平坦部分で43cmである。埋積土は木炭を若干含む褐色細砂 (10YR4/6) である。

出土遺物には土師器甕など13点、須恵器1点がある。

第5号土壙

(Fig.38, PL.26 (2))

調査区の南端部、第3・4

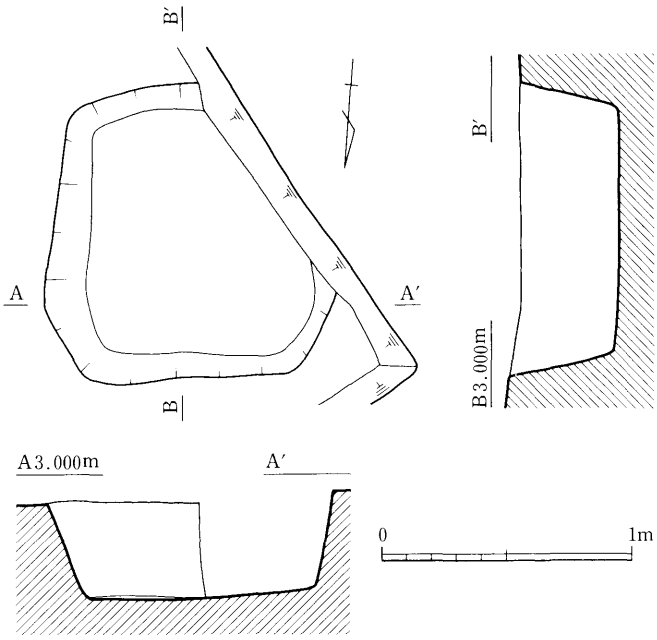


Fig. 36 第3号土壙実測図

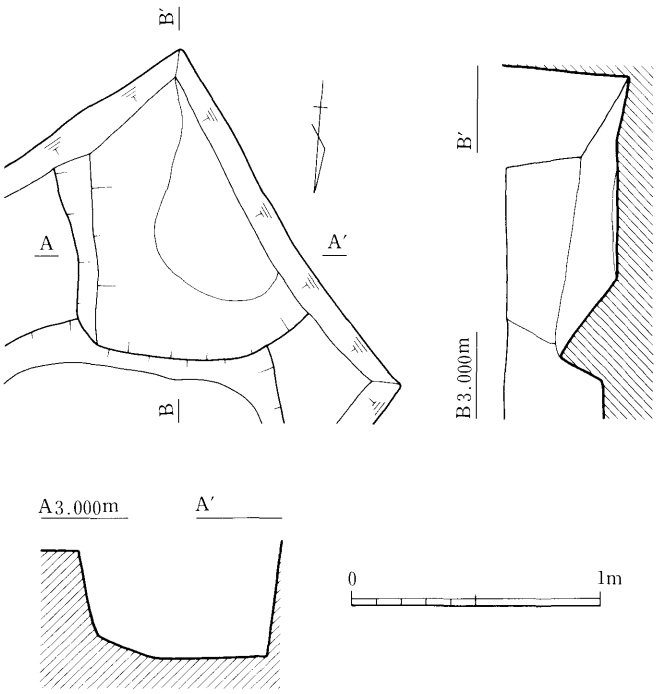


Fig. 37 第4号土壙実測図

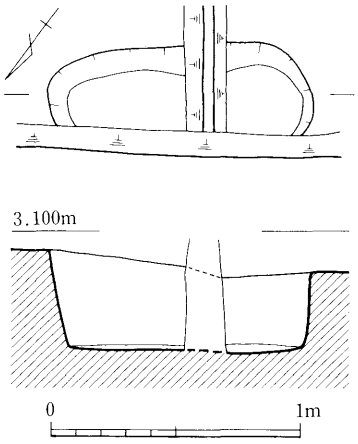


Fig. 38　第５号土壙実測図

号土壙のすぐ北に隣接し、第３層を検出面とする。土壙中央部の上位には既設の埋設管が貫通し、また、北への延長部分は調査区外にあたるため完掘していないが、平面形態は楕円形状を呈するものと考えられる。長軸106cm、短軸37cm以上、検出面からの深さ40cmの規模をもつ。調査区北壁付近で上面が弧状にカーブしていることから、規模はあまり大きくならないと思われる。検出面の標高は約3.0m。壙底は平坦で、壁面の立ち上がりは急である。埋積土は木炭を若干含む黒褐色細砂（10YR2/2）である。出土遺物はない。

4　出土遺物（Fig.39，PL.27・28）

第１号土壙出土遺物（22～27）

22～24は土師器。22・23は甕。22はしまりのあまりない頸部をもち、口縁部は直立ぎみに外傾しながら直線的に立ち上がる。23は丸底の底部。成形が粗雑で器面の凹凸が激しい。内外面とも粗な刷毛工具で縦刷毛目仕上げする。24は受け部、裾部が大きく開く中空の器台と思われる。内外面丹塗りで、粗な刷毛工具で内面横、外面縦刷毛目仕上げする。25・26は須恵器。25は坏身。短い立ち上がりは強く内傾し、受部は外上方に開く。天井部の約2/3をヘラケズリする。ロクロ回転は反時計回り。26は高坏の脚裾部で、端部近くで水平に開く。裾端部の断面は鳥嘴状を呈する。27は須恵器模倣土師器。大形の甕の胴部で、外面は格子タタキし、上端部にはカキ目が巡る。内面には同心円の当て具痕が残り、器面の凹凸が激しい。

第４号土壙出土遺物（28・29）

土師器の甕。28は張りの少ない胴部に、「く」の字に外反する口縁部をもつ。胴部内面には粘土帯接合痕が明瞭に残る。29はわずかに内弯ぎみに外反する口縁部で、口縁端部には面をもつ。内面は横ナデされず、横・斜め刷毛目のまま仕上げる。

第２層出土遺物（30～36）

土師器63点、須恵器３点が出土した。30～34は土師器の甕。30は口縁部が内弯しながら開き、端部付近で直立ぎみに立ち上がる。口縁端部には狭い面をもち、胴部内面はヘラケズリ、外面は刷毛目仕上げされる。31・33は外弯ぎみに屈曲する口縁部で、33は頸部内面に稜をもたない。32は端部を丸く仕上げる口縁部で、器壁が厚い。34は頸部内面に明瞭な

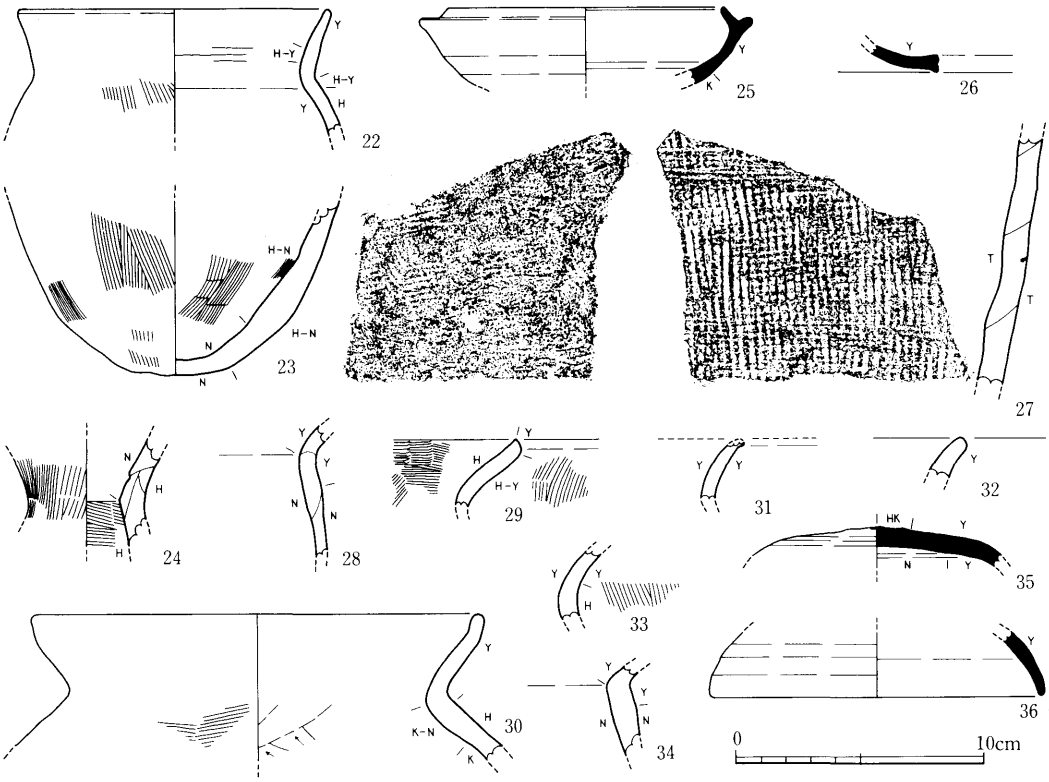


Fig. 39　出土遺物実測図

稜をもつ。35・36は須恵器の坏蓋。35は天井部の狭い範囲をヘラケズリし、緩やかに体部に移行する。36は口縁部がゆるやかに開き、端部は尖りぎみに終わる。35・36ともロクロ回転は時計回り。

5　小結

今回の調査の最大の成果は、5基の土壙を検出したことである。

検出面は上下二層あり、第2層：褐色砂質土を検出面とする第1号土壙は6世紀末～7世紀初頭に位置づけられる。第3層：明黄褐色細砂を検出面とする第2～5号土壙は良好な出土遺物がなく、時期決定の決め手を欠く。しかし、第2層からは、口縁部が内弯しながら開き、端部にわずかな面をもつ布留型の甕や体部と口縁部が不明瞭な須恵器の坏蓋など、5世紀前半～7世紀初頭の時期幅のある遺物が混在して出土し、その下限を7世紀初頭に求めることができる。このうち、第3・4号土壙からは須恵器が出土しており、光構内では今回の調査を含めて、これまで5世紀に遡る須恵器は出土していないことから、現段階では6世紀代に位置づけておくことにする。なお、第3号土壙は第4号土壙を切って

おり時期差が存在することから、調査区内では6世紀末～7世紀初頭、および6世紀代二時期の少なくとも三時期の土壙が営まれていたことになる。

土壙の検出面は砂質土および砂層で、台地や丘陵上に掘削される一般的な土壙の立地とは異なることも注目される。そのため、掘削は比較的容易と考えられるが逆に壁面の崩落が著しく、維持・管理が極めて困難である。掘削のサイクルが短いとされる貯蔵用土壙と比較しても、機能した期間はより短期間のものであったに違いない。また、第1号土壙と第2～5号土壙では、規模、断面形が異なることも注目しておきたい。第1号土壙は他の土壙よりも規模が大きく、断面形が浅い皿状を呈するが、第2～5号土壙は断面形が台形状を呈する。規模、断面形の差異が土壙の性格の差を示すものかどうかわからないが、遺物の出土状況から各土壙が廃絶後に土器捨て場として利用されことは明かである。しかし、今回の調査では土壙の掘削当初の性格を示す資料は得られず、遺構の分布状況の把握とともに今後の課題となった。

また、従来、光構内での遺構の検出例は、海岸部との境界付近での近世後半～近代前半の石垣状遺構があるだけで、他に全く遺構の存在が知られていなかった。しかし、今回の集落関連遺構の検出は、峨嵋山の北麓縁辺部に立地する南半部を中心に、6～7世紀代の集落が存在することを示唆していると言える。御手洗湾の対岸では、東之庄遺跡[5]、市延遺跡[6]などの古墳時代の遺物散布地が数カ所知られている程度で、現在まで集落関連遺構は検出されていない。しかし、この時期にげんべい山古墳[7]、岩屋古墳群[8]などの多くの古墳が築造されるようになり、集落の形成が大きく進んだことを裏づけている。光構内の集落の性格は、光構内が陸繋島である峨嵋山縁辺の極めて狭隘な可耕地しか確保できない立地条件にあることや試掘調査時に出土した土錘などから、半農半漁の集団が想定される。第1・2号土壙でみられるように、出土遺物中に占める丹塗りの土器の多さは、不安定な生産基盤・生業形態を背景とする様々な祭祠の反映かもしれない。

さらに、試掘調査時に時期的に一括性が高い遺物包含層と考えられた第2層は、やや時期差のある遺物を包含していることが明かとなった。昭和40年、光構内の東部に位置する中学校体育館敷地で検出された、縄文時代晩期～室町時代の各時代の遺物を包含する黒褐色砂礫層とは色調・遺物組成が異なり、数層におよぶ遺物包含層が光構内に広く分布していることが確認された。

以上述べたように、光構内には海浜部とその背後にある丘陵縁辺部に立地する6～7世紀代の集落が存在することが予想されるに至った。また、遺物包含層からは縄文時代晩期

～弥生時代の遺物も出土していることから、古墳時代以前の集落の存在した可能性もある。光構内での埋蔵文化財の発見の歴史は比較的古いが、発掘調査は緒についたばかりで、集落の性格・分布範囲・展開期間など、今後の解明すべき課題は多い。

［注］

1）福本幸夫「御手洗遺跡」（『先原始時代の光市』、光地方史研究会、1966年）。

2）潮見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」（『広島大学文学部紀要』第18号、1960年）。

3）福本幸夫「横樋遺跡」（『先原始時代の光市』、光地方史研究会、1966年）。

4）防府市教育委員会「周防国府跡昭和55年度発掘調査概報」（『防府市文化財年報IV』、1982年）。

5）a　山口大学島田川遺跡学術調査団『島田川』（山口大学、1953年）。

b　福本幸夫「東之庄神田遺跡」（『先原始時代の光市』、光地方史研究会、1966年）。

標高約20m前後のゆるやかな丘陵上に立地する。調査は行われていないが、遺物包含層から弥生土器、土師器、須恵器、磨製石斧などが出土している。

6）a　山口大学島田川遺跡学術調査団（『島田川』、山口大学、1953年）。

b　福本幸夫「市延遺跡」（『先原始時代の光市』、光地方史研究会、1966年）。

千坊山南麓の標高約10～40mのゆるやかな丘陵上に立地し、土師器、須恵器、棒状土錘が出土した。土師器には丹塗りのものが多い。

7）弘津史文『周防国熊毛郡上代遺蹟遺物発見地調査報告書』（山口高等学校歴史教室、1927年）。

墳形はわからないが、横穴式石室を内部主体とし、環頭太刀、鏡、銅椀、土師器などが出土した。

8）光市史編纂委員会編『光市史』（光市役所、1975年）。

Tab. 3　出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備考
1	土師器　坏	②(5.8)	にぶい橙色(5YR6/4)	良好	良好	胎土に金雲母含む
2	土師器　椀	②(7.0)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	良好	
3	須恵器　坏	②(8.2)	暗青灰色(10BG4/1)	良好	良好	ベタ高台
4	瓦質土器　甕		①青灰色(10BG5/1) ②灰白色(5Y8/2)	良好	良好	
5	土師器　甕		にぶい橙色(7.5YR6/4)	良好	良好	外面煤付着 胎土に金雲母含む
6	縄文土器　甕or鉢		①にぶい赤褐色(5YR4/3) ②黒褐色(7.5YR3/1)	良好	やや不良	
7	縄文土器　甕or鉢		①にぶい赤褐色(5YR4/3) ②黒褐色(7.5YR3/1)	良好	やや不良	
8	土師器　高坏	①(19.6)	にぶい橙色(2.5YR6/3)	良好	やや不良	丹塗り
9	土師器　高坏	②(14.0)	にぶい橙色(2.5YR6/3)	良好	やや不良	丹塗り
10	土師器　皿	②(5.0)	にぶい橙色(5YR6/4)	良好	やや不良	糸切り
13	土師器　甕		①にぶい褐色(7.5YR5/3) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	良好	良好	
14	土師器　甕		橙色(2.5YR6/6)	良好	不良	
15	土師器　台付皿		にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	良好	底部中央に穿孔 胎土に金雲母含む
16	土師器　台付皿	②(9.4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
17	土師器　台付皿		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	
18	土師器　台付皿	②(5.8)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	やや不良	胎土に金雲母含む
19	土師器　皿	②(6.2)	①橙色(5YR7/6) ②橙色(7.5YR7/6)	良好	やや不良	
20	須恵器　坏蓋	①(12.8)	暗青灰色(5PB4/1)	良好	良好	
21	土師器　甕	①(12.4)	橙色(5YR6/8)	良好	良好	
22	土師器　羽釜		明赤褐色(5YR5/6)	良好	やや不良	
23	土師器　甕		橙色(7.5YR6/6)	やや不良	良好	
24	土師器　器台		赤褐色(2.5YR4/6)	良好	良好	丹塗り 胎土に金雲母含む
25	須恵器　坏身	①(11.0)	灰色(7.5Y4/1)	良好	堅緻	
26	須恵器　高坏		灰色(10Y6/1)	やや不良	堅緻	
27	須恵器模倣土師器　甕		橙色(5YR7/6)	やや不良	良好	
28	土師器　甕		①橙色(5YR6/6) ②橙色(7.5YR6/6)	やや不良	良好	
29	土師器　甕		浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	良好	
30	土師器　甕	①(17.9)	にぶい橙色(5YR6/4)	やや不良	良好	
31	土師器　甕		橙色(5YR6/6)	良好	良好	
32	土師器　甕or壺		灰褐色(5YR4/2)	良好	良好	
33	土師器　甕		橙色(5YR6/6)	良好	良好	
34	土師器　甕		にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	やや不良	良好	
35	須恵器　坏蓋		灰白色(7.5Y7/1)	良好	堅緻	
36	須恵器　坏蓋	①(13.4)	赤褐色(10YR5/4)	良好	良好	

法量(　)は現存値

番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
11	棒状土錘	(47.5)	18.0	12.5	11.86	—	穿孔径6.5mm 胎土・焼成良好
12	剝片	19.0	13.5	0.55	1.26	姫島産黒曜石	

第4章　小串構内医学部附属病院動物・ＲＩ実験棟新営に伴う試掘調査

1　調査の経過

小串構内の南西部、基礎第一研究棟と第二研究棟間の敷地に、建面積約500m²の規模をもつ動物・ＲＩ実験棟の新営が計画された。小串構内では近年の調査で、中央部周辺の埋蔵文化財の分布状況を知る成果が得られている。新営予定地の北東に位置する病棟、ＭＲＩ棟両敷地の調査で、二次加工のある剝片・使用痕のある剝片・剝片・敲石など、旧石器時代に属すると考えられる遺物が出土している[1)2)]。両敷地での調査結果からも、小串構内では中央部に近接するほど良好な遺物の出土状態を示しているとともに、遺物を包含する堆積層も数層に限定されていることが次第に明らかになりつつある。しかし、同層の分布範囲は必ずしも明確に把握できているとは言い難く、特に、今回の新営予定地のように調査のあまり及んでいない、南部から南西部にかけての地域では極めて不明瞭である。

新営計画の具体化を受けて、以上述べたような所見に基づき、埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、新営予定地内の埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施した。トレンチは新営予定地内に存在する共同溝や消火栓等に伴う給水管など、既設の埋設物を回避して二ヶ所設定した。便宜上、東側の3.2m×3.7mのトレンチをＡトレンチ、西側の3.7m×7.5mのトレンチをＢトレンチと呼称した。Ａトレンチは当初、さらに北側に延長する予定であったが、構内造成等の埋め土を除去する際に埋設管が障害となったため延長を断念した。調査期間は平成２年11月19日から11月30日までで、調査面積は約40m²である。

なお、構内造成等に伴う埋め土は機械を使用して排除し、それ以下は手掘りによる分層発掘を行った。

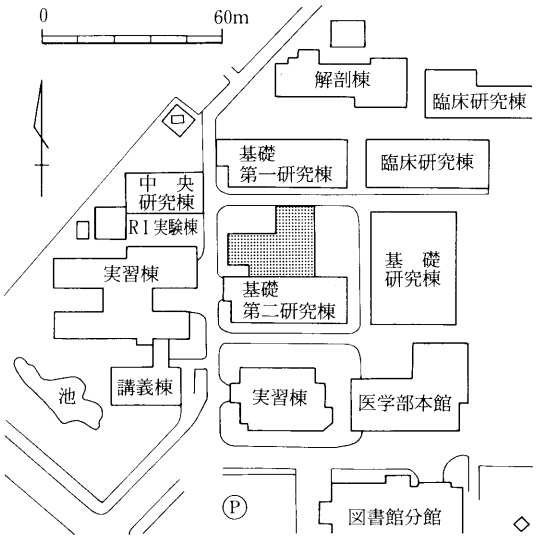


Fig. 40　調査区位置図

2　層位（Fig. 42，PL. 30(3)）

Ａトレンチ

現地表面から約240cm下位まで、構内造成等による埋め土が厚く客土されている。現地表面から約50cm掘り下げたところで、

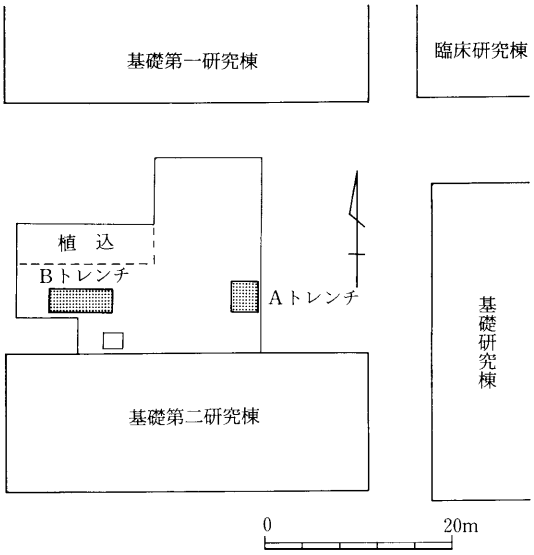


Fig. 41　トレンチ設定図

病棟敷地で検出された旧石器時代の遺物を包含する灰色砂層が検出された。層厚約60～70cmでトレンチ内全面に堆積する。旧耕作土等は認められず、埋め土の直下には第２層：緑灰色粘質土が堆積する。層厚は約20cmで、湧水が激しい。検出面の標高は約0.30m。その下には、植物遺体を若干含む第３層：青灰色粘質土が堆積する。約30cm掘削したが層位に変化はみられない。第２、３層とも遺物は出土していない。

Ｂトレンチ

Ａトレンチ同様、構内造成等による埋め土が層厚約200cmにわたって厚く客土されている。

また、現地表面から約60cm下位には、Ａトレンチでも認められた灰色砂層が最大約50cmの厚さでブロック状に堆積している。埋め土の下位には植物遺体を若干含む第３層：青灰色粘質土が堆積する。Ａトレンチでみられた第２層：緑灰色粘質土は堆積していない。検出面の標高は約0.75m。同層は完掘していないが、検出面から約30cm掘削した段階でも剝片１点が出土したにすぎない。

3　出土遺物（Fig. 43, PL. 30(4)）

盤状の縦長剝片で打面、打点を欠損する。腹面側がネガ面で、背面２面、腹面の剝離面の打撃は同一方向からなされ、ほぼ一定した打面を準備する石核から剝離されたものと考えられる。現存最大長23.5mm、現存最大幅22.0mm、現存最大厚6.0mm、重量2.56ｇ。蛇紋岩製。Ｂトレンチ第３層出土。

4　小結

今回の調査では、先に実施した病棟敷地の調査で確認された灰色砂層は良好な状態で検出できなかった。Ａ・Ｂ両トレンチとも構内造成等による埋め土内に混入していることから、小串構内のこれまでの調査の所見から、病棟敷地周辺からの造成による搬入土である可能性が高い。

Ａトレンチの東約40mで実施した基礎研究棟新営に伴う試掘調査では、第２層：緑灰色粘

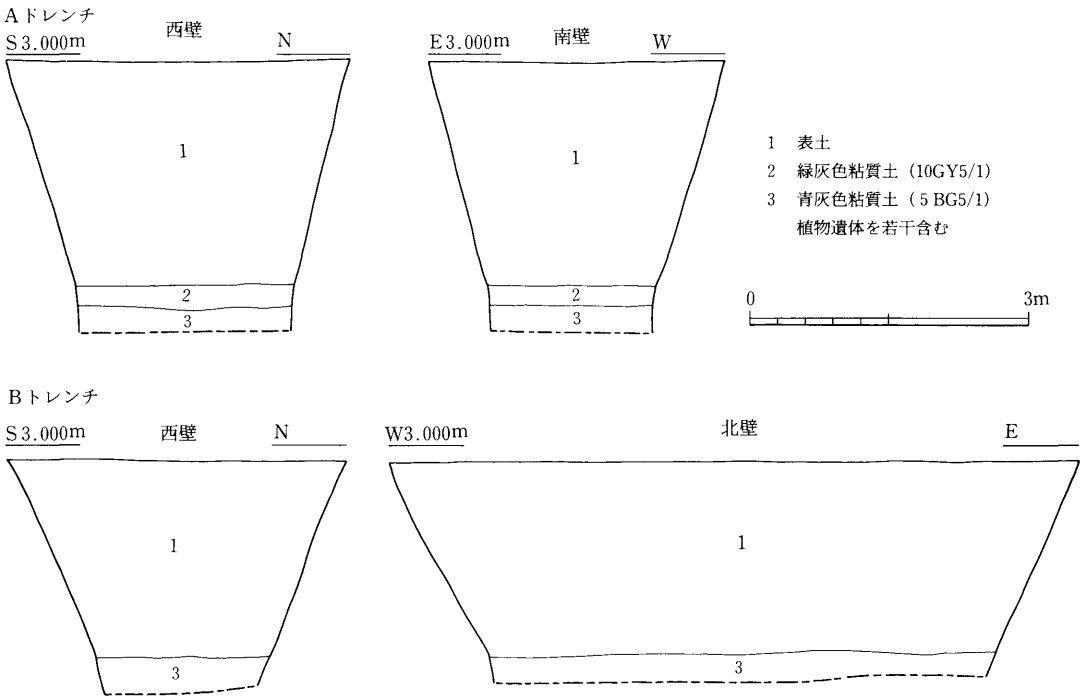


Fig. 42 土層断面図

質土が標高約－0.2m、第3層：青灰色粘質土が標高約－0.4mで検出されている。すなわち、埋め土以下の各堆積層は、Bトレンチから基礎研究棟に向かうにつれてその検出面がより低位に存在しており、西から東への旧地形の下降状況を示唆している。Bトレンチでの第2層の欠落は後世の削平によるものではないと考えられる。

出土遺物は、わずかにBトレンチ第3層から出土した、蛇紋岩製の剝片が1点あるにすぎない。小串構内ではこれまで積極的に縄文時代に属する石器として認定できる資料が皆無であること、病棟敷地やMRI棟敷地では二次加工のある剝片・使用痕のある剝片・剝片がナイフ形石器と同一層から出土していることなどから、今回出土した剝片も旧石器時代の所産と考えられる。剝片剝離技術や打面の形状については、出土点数、欠損資料であることなどから言及することは困難である。

なお、今回の調査地域の北東に位置する病棟敷地やMRI棟敷地では、同質の石材を用いた各種の石器が出土している。両敷地ではチャート、蛇紋岩、水晶、安山岩、玻璃質安山岩など、使用される石材は多様であるが、蛇紋岩の全石器中に占める割合は半数近くにのぼっている。今回の出土資料も、このような石材選択率の反映として理解できないであ

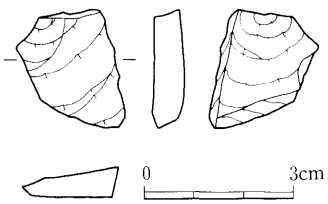


Fig. 43　出土遺物実測図

ろうか。

また、調査のもうひとつの成果は、遺物を包含する堆積層が小串構内の中央部から南西部にかけても分布していることが明かになったことである。周辺からの二次堆積層で、これまでの調査ではその色調、組成などから、その堆積地点によって数層存在していると考えられる。例えば、小串構内の東部に位置する体育館の敷地の調査で、青黄色粘質土からの出土が知られており、旧耕作土にも遺物を包含している[3)]ることもその傍証となるであろう。さらに、病棟敷地と体育館は直線にして約190mの距離があるが、その間の地域の調査では同時期の遺物は出土していない。小串構内全域にわたる調査は現在までのところ行われていないが、以上のことから現状では、小串構内での旧石器時代に属すると考えられる石器群は、北東部の体育館周辺地域と中央部に位置する病棟周辺地域から南西部にかけての、大きく二つの地域に堆積する土壌に包含されていると理解できる。詳細な分布範囲の把握が今後の課題であろう。

［注］

1）a　山口大学埋蔵文化財資料館「医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年）。

b　山口大学埋蔵文化財資料館「医学部附属病院病棟新営に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、1989年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「医学部附属病院ＭＲＩ棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』、1990年）。

3）山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

第5章　平成2年度山口大学構内の立会調査

第1節　吉田構内の立会調査

1　大学会館前庭部環境整備に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　M－15

調査期間　平成3年2月18日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約2㎡

調査結果　工事は上下二段にわたって造成されている大学会館前庭部の下段部分に、暗渠用の排水管を埋設するものである。排水管本体の埋設に伴う掘削は、過去の試掘調査[1)]の結果、埋蔵文化財に直接影響がないと判断された。しかし、付随する排水桝の埋設地点二ヶ所については掘削深度がやや大きく、また、下段の北西部分が比較的遺構の分布密度が希薄であることなどから、工事規模を勘案して立会調査を実施した。

二地点とも現地表面から約20cm下位までは構内造成時の埋め土で、その下位には黒褐色粘質土が検出された。層厚は約40cmで、試掘調査時に検出した縄文時代から室町時代にかけての遺物が混在する遺物包含層と同一層と考えられるが、調査面積が狭小なため、遺物は出土しなかった。

また、遺物包含層の下位には黄褐色粘質土の地山が検出されたが、遺構は検出できなかった。

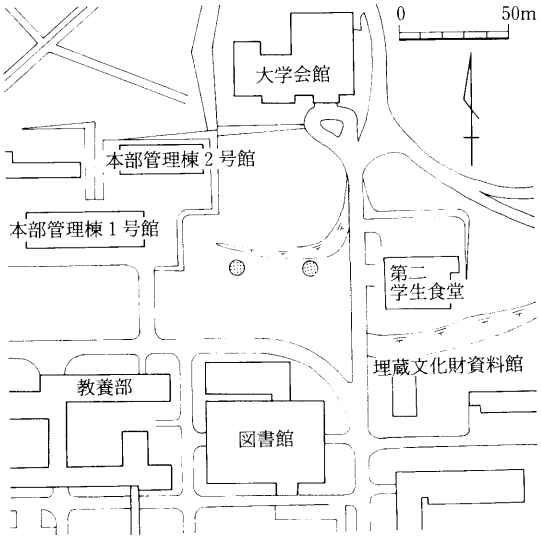


Fig.44　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

2　第一学生食堂設備改修に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　Ｊ－19・20

調査期間　平成３年２月20日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約７㎡

調査結果　工事地域は弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡21棟が現地保存されている「遺跡保存地区」に近接しており、また、工事地域から教育学部校舎棟に至る地域では、河川跡あるいは溝の埋積土と考えられる黒褐色粘質土が検出されており、弥生時代中期の土器が出土している[1)]。

工事は第一学生食堂の設備改修に伴い、同敷地の北側に排水管を埋設するもので、その掘削規模は、東西に長さ約17.5m、幅約40cmの路線について、現地表面から約90cmであった。弥生時代中期の遺物を包含する黒褐色粘質土は、現地表面から約75cm下位で検出されいることから、工事によって同層が掘削されるおそれがあったため、工事規模を勘案して立会調査を実施した。

その結果、工事による掘削基底面まではすべて構内造成等に起因する埋め土で、顕著な遺物は確認できなかった。工事地域は既設の埋設管が東西方向に走行し、また、第一学生食堂にも隣接していることから、過去に遺物包含層、遺構が存在していたとしてもこれらの工事によってすでに消滅している可能性が高い。

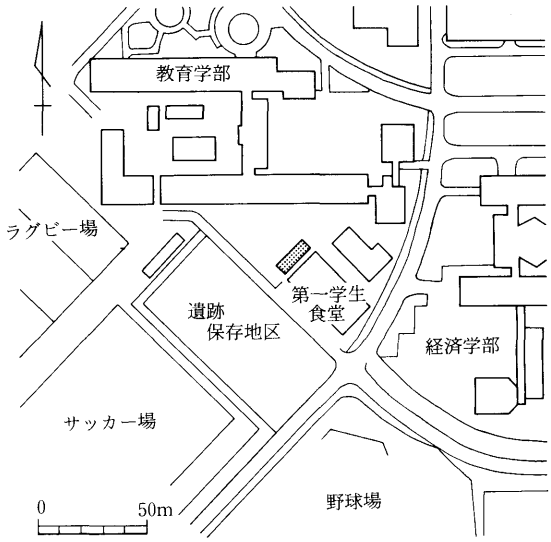


Fig.45　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「山口銀行現金自動支払機設営に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。

3　教育学部附属養護学校案内板設置に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　E－20

調査期間　平成3年3月18日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約1㎡

調査結果　案内板設置に伴う工事地点には、テニスコート北西隅二ヶ所、陸上競技場南西隅の計三ヶ所が選定された。前者は、テニスコートフェンス新営の際実施した調査の範囲内に設置されるため、今回の調査対象から除外した。しかし、後者については過去に調査事例がなく、また、附属養護学校敷地における試掘調査時に検出された、弥生時代から平安時代の遺物包含層[1)]の分布範囲内にあたることが予想されたため、工事規模を勘案して立会調査を実施した。

工事による掘削は現地表面から約1.8mであった。構内造成等に起因する埋め土は層厚約1.7mで、吉田構内の他の地域と比較して極めて厚い客土がなされている。この堆積土は工事地点に近接して、南東から北西に走行する側溝の工事に伴う撹乱の可能性が高い。埋め土の直下には、青灰色砂質粘土（5BG5/1）が堆積しており、湧水が激しい。地山と考えられるが、遺構は検出できなかった。

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』、1991年）。

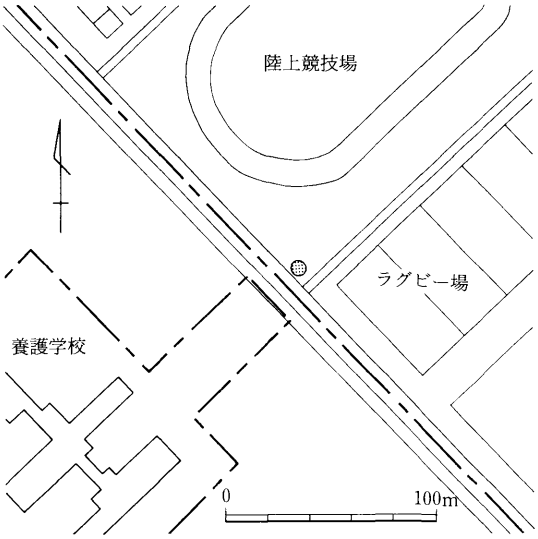


Fig.46　調査区位置図

第２節　常盤構内の立会調査

工学部ガス管改修に伴う立会調査

調査地区　常盤構内

調査期間　平成３年３月27日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約45㎡

調査結果　常盤構内は他の山口大学構内と比較して過去の調査事例が少なく、しかも、断片的な調査にとどまっているのが現状である。そのため、埋蔵文化財の有無、分布範囲について不明瞭な点も多い。今回、実施したような一定地域内の埋蔵文化財の有無、分布範囲を明らかにする手がかりとなる立会調査は今後、有効な手段となるであろう。

今回実施した工事の内容は、常盤構内の南西部に位置する電気工学科棟の南側を、東西に幅約40cm、長さ約112mにわたって現地表面から約75cm掘削し、ガス管を埋設するものである。工事地域はほぼ平坦であるが、その南側に存在する講義棟との境界付近で階段状に造成されており、講義棟に比べ約１m高所に位置している。

工事路線内の土層の堆積状況は極めて単純で、構内造成等の埋め土が層厚約30～35cmにわたりほぼ水平に客土されている。その直下が赤褐色粘土の地山となるが、遺構は検出できなかった。なお、工事基底面では蛇紋岩の岩盤が確認された。したがって、今回の調査地域の南西に位置する講義棟周辺では、後世の削平によって地山の削平が大規模に行われており、遺構が存在していたとしてもすでに消滅している可能性が高い。

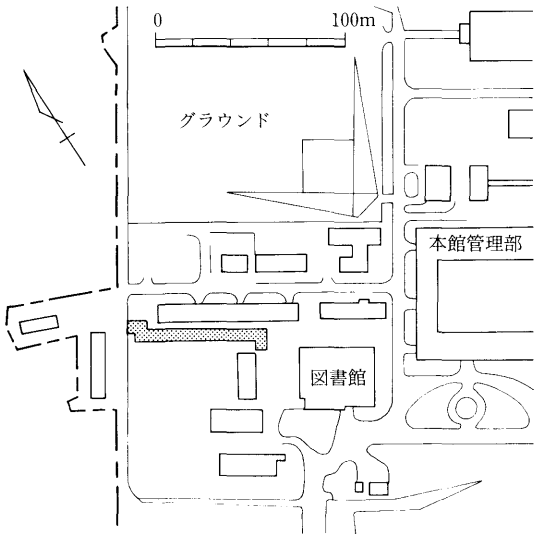


Fig.47　調査区位置図

第３節　亀山構内の立会調査

教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査

調査地区　亀山構内

調査期間　平成２年11月13日～12月29日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約130m²

調査結果　同構内における汚水排水管布設に伴う発掘調査の成果は第２章で述べた。今回の立会調査では、昭和61年度の試掘調査の結果[1]を受けて、埋蔵文化財の分布が希薄と予想され、試掘調査を実施しなかった工事路線で若干の遺物を、また、前回試掘調査を行えなかった北側のプール部分で包含層から多くの遺物が出土した。遺構はいずれも検出していない。工事に伴い順次、ＡからＥ路線の立会調査を行った。

Ａ路線は校舎の周囲を西側から北側を通り中庭に至る路線で、工事掘削面まで攪乱層と埋め土層だけであった。遺構は近代の廃棄された井戸が校舎北側にあったのみで、遺物は中庭の西寄りの校舎基礎近くで弥生土器の高坏と若干の土師器片が出土した。

Ｂ路線は、第２章で述べたＡ～Ｃ調査区とほぼ重なるもので、新たに遺構は検出しなかった。北側は基本層序が厚さ６cmのコンクリート、厚さ約35cmの埋め土、厚さ約10～20cmの黒褐色粘質土（第２章の第５層･第６層に対応）、灰色砂層で、黒褐色粘質土から弥生土器と土師器の甕、高坏が出土した。校舎南側は、すべて埋め土の範囲内で、中世の土師器の皿と近世の磁器が出土した。

Ｄ･Ｅ路線は、他の調査区から約１m高い段上に位置するプールの管理棟周囲である。基本層序は上から厚さ25cmの表土・埋め土、中世の遺物を包含すると思われる厚さ10cmの黄灰色砂質土、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物を包含する厚さ35cmの黒褐色粘質土、砂礫層の５層に分かれる。黒褐色粘質土の包含層は残りがよく、弥生土器、土師器が多く出土し、器形では高坏や台付鉢、椀などの供膳形態を示すものが比較的

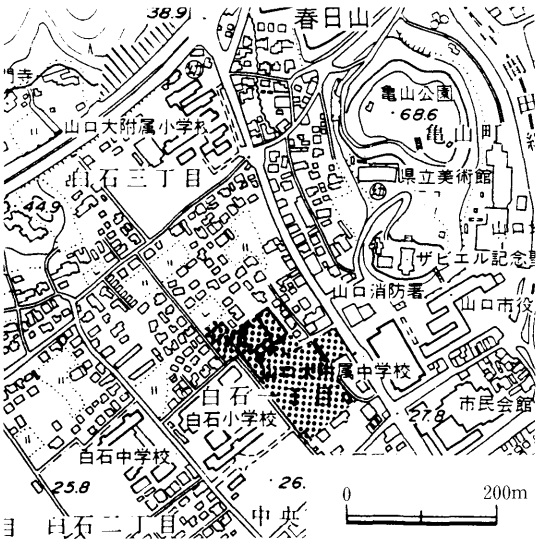


Fig.48　調査区位置図（１）

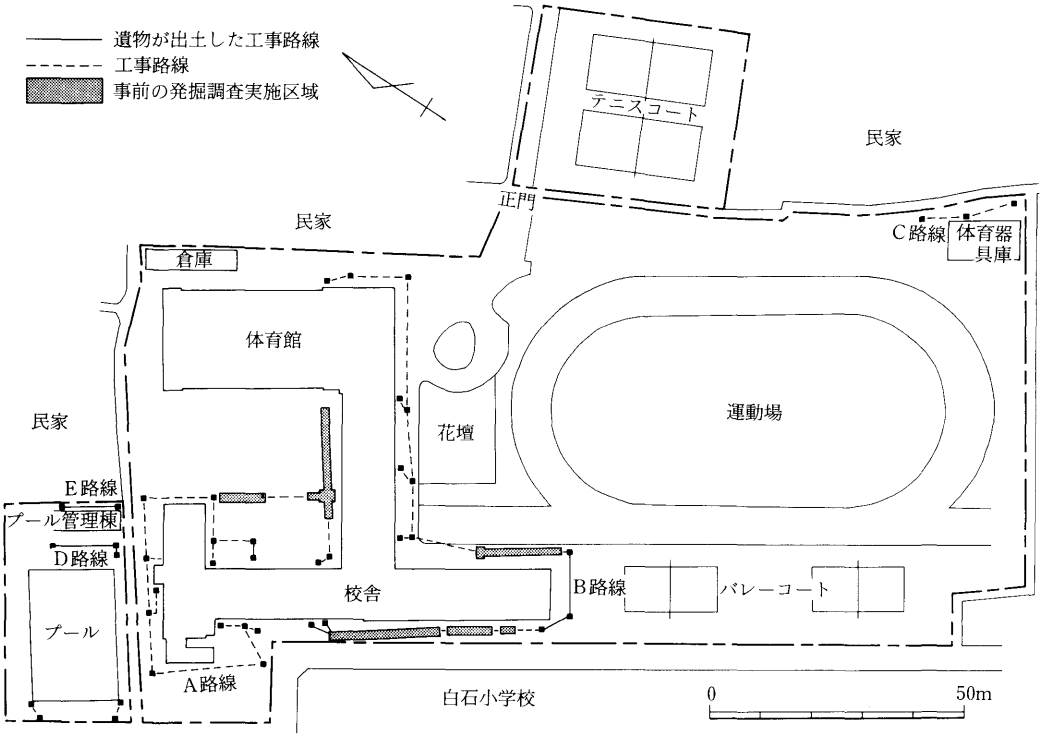


Fig.49　調査区位置図（２）

多い。また、第２章の調査も含め、附属山口中学校敷地では初めて須恵器が出土した。D・E路線のあるプール管理棟周辺の現標高は、学外の北側の畑地とほぼ等しく、ここでも土師器を表面採集することができた。

出土遺物

A路線（Fig.50－1･2，PL.31・33）

１・２は中庭の校舎寄りで出土した弥生土器の高坏。接合はしないが、同一個体と思われる。１は坏部で、体部は屈曲点で接合して成形する。屈曲点から上は外反しながら外傾し、端部は角ばり外側に面をもつ。内外面とも風化のため調整不明。２は脚部。上部は円筒形で裾部のみ広がる。３方に焼成前の穿孔がなされるが、粘土が少し固くなってから施され、内面がささくれだっている。外面は縦に調整痕が残るが、ミガキかヘラナデか摩滅のため判断できない。他に、瓦質土器、土師質土器各１点が出土した。

B路線（Fig.50－3～12,PL.31・33）

３～10は路線の北端で出土し、３・５～７は黒褐色粘質土から出土した。３は土師器の

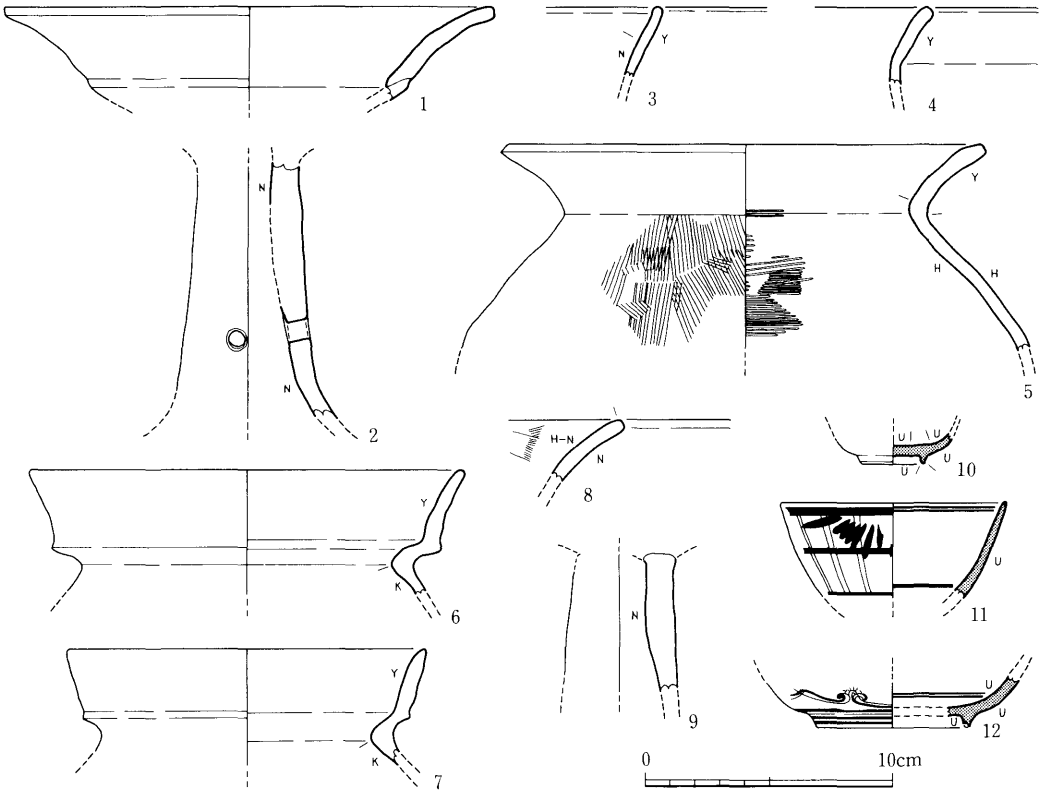


Fig.50　出土遺物実測図（1）

小形丸底壺。器壁が薄い。端部は内側が玉縁状にやや肥厚し、斜め外方に面をもつ。4・5は土師器の甕。頸部ははっきりとした稜をもたず、胴から口縁へゆるいカーブを描く。端部はやや厚く、斜め上方に面をもつ。5の器面調整は、外面に不定方向の刷毛が、内面にやや幅広の刷毛が施される。6・7は山陰系の土師器の複合口縁の甕。器壁がやや厚く、頸部の上の稜は丸く明瞭ではない。8・9は土師器の高坏。8は坏口縁部。ゆるく外反しながら外傾し、端部は外側に面をもつ。9は円筒形を呈する脚上半部。上端は、坏接合のための擬口縁をなすが、接合方法は不明。内面に成形時のシボリ痕が残る。10は近世磁器のぐいのみ。高台は削り出し、体部はゆるく内弯して立ち上がる。内面は釉の掻き取りで蛇の目を作るが、中心から釉が流れている部分がある。畳付も釉を掻き取る。

11・12は校舎南端より出土した。ともに国産の近世磁器の染付の碗。11はやや径が小さく深い。内面の文様は上部に2条の圏線、見込み付近に1条の圏線がみられる。外面は縦横の線に半裁された花弁を描き、垣根と菊花とを意匠していると思われる。

他の出土遺物には、中世土師器の皿の細片がある。

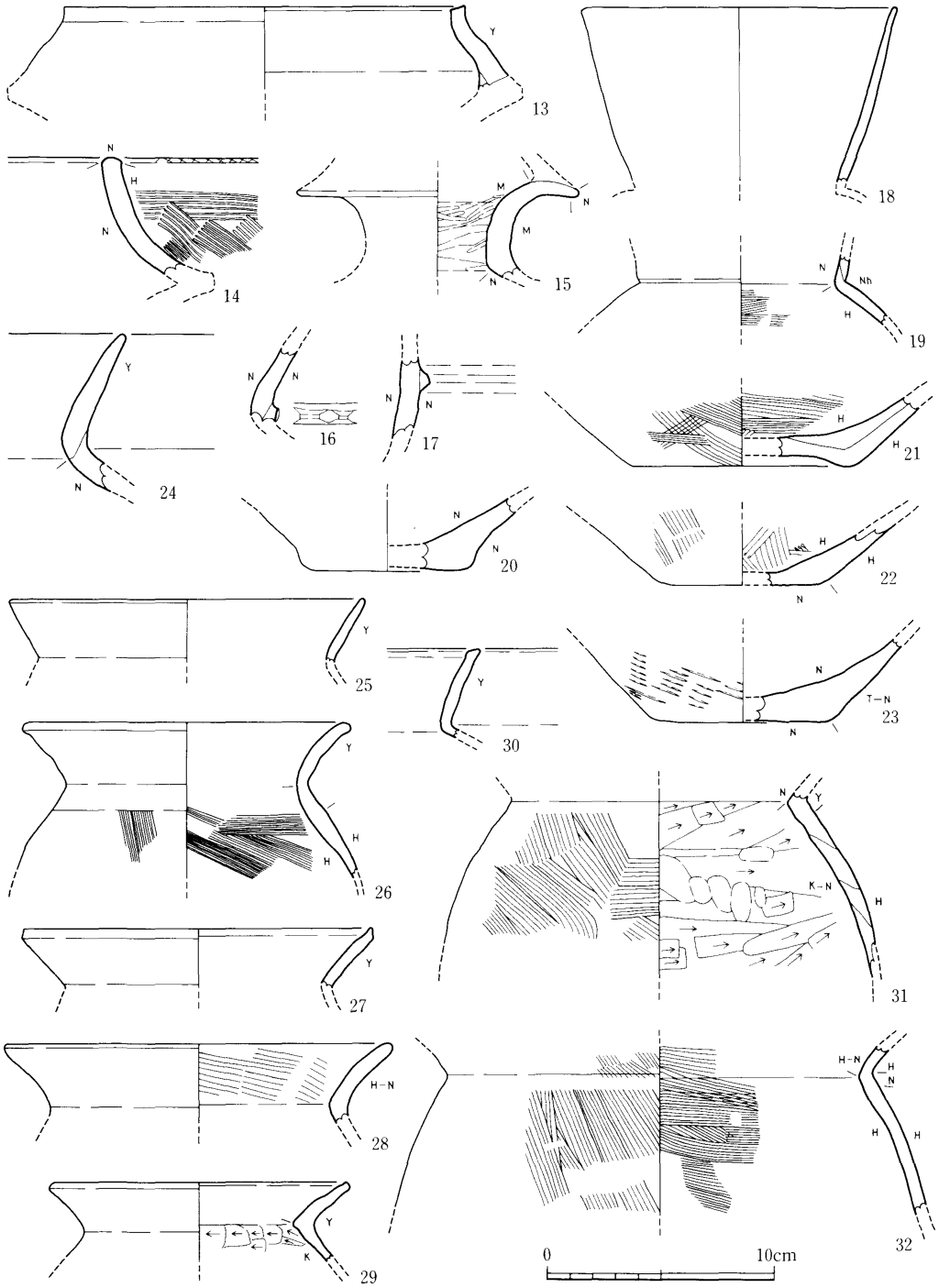


Fig.51　出土遺物実測図（２）

D路線（Fig.51・52－33～48・52・53，PL.31～33）

13～15は、弥生土器の壺。いずれも複合口縁で、上段部は大きく内傾する。13は、上段部の口縁の継ぎ目が擬口縁をなし、内面は下段部の粘土の貼付け痕が残る。口縁はまず内弯して内傾し、上部は外反しながら直立する。端部は内下がりの段をもつ。14は上段部が外反しながら内傾する。端部はカマボコ形に角張り、ヘラ描きの斜格子文を施す。外面に化粧土を塗ったと思われる。15は下段部の口縁が残存し、きついカーブで外反する。上段部との接合面は擬口縁となる。内外面とも丁寧なミガキが施され、特に外面は細かく単位がつかめない。16・17は弥生土器の壺。16は頸部の屈曲点に浅い刻み目をもつ突帯が貼り付ける。17は胴部に２～３条の突帯が巡る壺と思われる。突帯の上面は平坦。18は弥生土器の直口壺。器壁は薄く、口縁は直線的に伸びる。口縁端部はやや角張る。内外面とも風化のため調整不明。19は土師器の壺もしくは甕。胎土や調整は小形丸底壺に似るが、径が大きすぎ不適当と思われる。器壁は薄く、胎土はよくしまっている。頸部外面には、粘土帯接合のための段差が明瞭にあらわれる。20～22は弥生土器の壺の底部。20はわずかに上げ底となり、底部から胴部への変換点がやや高いところにある。21も上げ底気味。底部は２枚の粘土板を貼り合わせて成形されたと思われる。内面の刷毛は目が細かく、皮状のものでナデた痕跡かもしれない。外底面にも刷毛を施す。22は内面の刷毛の目の幅が広い。内外面に化粧土を塗ったと思われる。23は庄内系。タタキはやや細めで、右下がり。在地産と思われる。

24～26は弥生土器の甕。24は口縁がやや長く、直立する。端部はやや尖る。頸部で粘土帯を接合する。25は器壁が薄い。口縁は直線的に伸び、端部はやや丸く斜め上方に面をもつ。26は頸部に明瞭な稜をもたず、胴から口縁へゆるくカーブを描く。端部はやや肥厚し、先端をわずかに外側につまみ出す。27～32は土師器の甕。27は口縁が直線的に伸び、端部をつまみ出し上方に引き上げる。28は器壁がやや厚く、端部は丸い。口縁内面に刷毛目が残る。29は口縁が直線的に伸び、端部はやや角張り、斜め上方に面をもつ。頸部は内側に肥厚する。胴部内面は短い単位のケズリが施される。30は口縁がやや長い。端部は肥厚し、外側につまみ出され、面取りされる。ヘラによる成形の可能性も考えられる。外面に煤が付着している。32は胴部の粘土帯の接合痕が明瞭に残る。焼成はきわめて良く、堅く焼きしまり、表面は黒色を呈し炭素を吸着させたように平滑になっている。胴部外面のナデは、皮状の素材によると考えられ、目がそろわない。胴部内面は、ケズリの後、部分的に下から上へナデを施す。頸部外面は強い横ナデによって刷毛目が消失している。

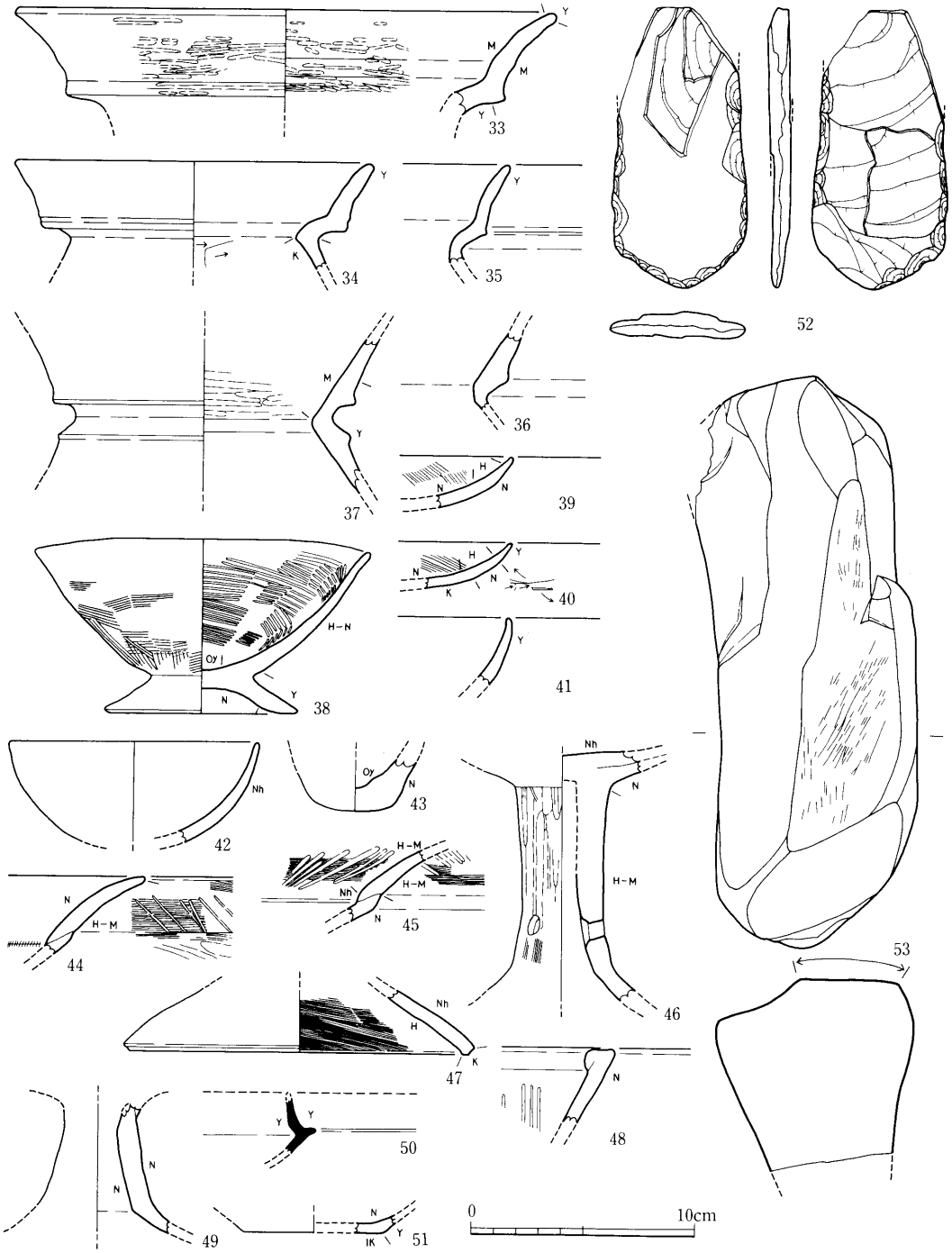


Fig.52　出土遺物実測図（３）

33は、畿内系の２重口縁の土師器の壺。器壁が厚くしっかりしたつくりである。端部は丸い。内外面にやや深さはあるものの幅が狭く短いミガキが施される。内面に部分的に褐色の物質が付着しているが、成分は不明。34～36は山陰系の土師器の複合口縁の甕。34は頸部上の稜が丸くはっきりせず、稜の更に上には、浅い沈線が巡る。端部は斜め上方に面をもつ。外面全面に煤が付着し、特に胴部は厚く付着している。35は頸部上の稜を鋭くつまみ出し、端部もやや角張る。36は風化が著しくはっきりしないが、いずれの稜ももともと丸みを帯びていたと考えられる。37は山陰系の鼓形器台。くびれの上下の稜はかなり強くつまみ出すが、幅が広く鋭さはない。くびれ部の復原径は11.4cm。

38は土師器の台付鉢。鉢の半分を欠損する。脚台部は直線的に伸び、端部はわずかに反り尖る。体部はゆるく内弯して伸び、端部は丸い。口縁はかなりゆがむ。体部内面の刷毛目はやや幅が広く１単位が６本で、比較的強く施されナデの後もはっきりと痕跡が認められる。39～42は弥生土器もしくは土師器の鉢。39・40はゆるく内弯し、端部はやや尖る。ごく浅い径の小形の椀と思われる。41は39・40に比べると体部の立ち上がりが急で深めの鉢と思われる。42は台付椀の可能性が高い。ゆるく内弯しながら立ち上がり、端部はやや尖る。43は手捏のミニチュアの甕と思われる。外面は平底を呈するが、内面は狭く、中央のみ小さくくぼむ。胎土は悪く直径７㎜くらいの小石も含む。

44～47は弥生土器の高坏。44は坏上部が残存。屈曲点では粘土帯を接合し、内面は粘土の継ぎ目を刷毛の工具で押さえる。外面の刷毛は１単位が８本確認できる。外面は焼成時にいぶしたようにやや黒くなる。45は坏の屈曲点付近で粘土を接合し、内面はヘラで押さえる。仕上げは丁寧。46は脚上部で、ほぼ円筒形。裾部が急に広がる器形であろう。上下２段の３方に焼成前に穿孔が外側からなされる。下の穿孔は、上の穿孔に対し約20°左に振る。脚と坏の接合は、脚の上部を円盤状に充塡し、更に下部を補強すると考えられる。47はわずかに内弯する脚裾部。端部は内側につまみ出した後、ケズリで面を取り、内端面が接地する。

48は瓦質土器の擂鉢。口縁端部は肥厚し、内側に折り返す。上面はややくぼむ。カキ目は３本以上。

52は結晶片岩製の粗製扁平打製石斧。頭部を欠損する。背面の大半は節理面に沿って剝落するが、調整加工は残存する。調整加工は縁片に沿って１枚の剝離面によって構成されている。腹面下端部の大きな剝離面は、使用時における剝離面と思われる。53は１面の研砥面を有する砥石で、裏面は欠損する。石の目は密で、仕上げ用の砥石と考えられる。研

砥方向は、ほぼ長軸に沿う痕跡が両端にあり、中央は長軸に対し約30°斜めの痕跡が残る。

Ｅ路線（Fig.52－49～51，PL.32・33）

49は土師器の高坏。脚中央に屈曲点をもち、裾部が広く開く。脚上部は円筒形でおわり、坏の接合は、円盤充填と下方からの貼り付けの２方法を併用すると思われる。

50は附属山口中学校敷地で初めて出土した須恵器の坏身。かえりはやや長く、受け部はほぼ水平に開く。

51は、中世土師器の皿。底部は回転糸切りを行う。内面の底部から体部への立ち上がりは明瞭ではない。

小結

今回は立会調査であり、土層の確認と遺物の採集しかできなかった。その中で、プール管理棟周囲のＤ・Ｅ路線では試掘調査が不可能だったこともあって、予想外に多くの遺物が出土した。出土遺物については事前調査を行った第２章の小結にまとめて記述した。プール管理棟周辺のＥ・Ｄ路線の黒褐色粘質土から出土する弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器は、高坏、台付鉢、椀、器台などの供膳形態を示すものが比較的多いことから、祭祀的性格をもった遺構からの流れ込みも考えられる。また、その上層の黄褐色砂質土層から室町時代に属すると考えられる遺物も出土し、２時期にわたる流れ込みが確認できた。

調査地周辺の地形は、学外の北側の畑地からプール付近にかけては、標高約29.4mの舌状台地上に位置し、校舎のある面の北側の地域は、この台地を削り標高約28.3mに造成されている。その結果１m以上の段差がつき、包含層は完全に削平されている。Ｂ路線の部分まで南下すると舌状台地の先端にあたることから削平が少なく、包含層が残存していると考えられる。学外の地域を含めたプール付近の高位の段上での工事の際は細心の注意が必要といえよう。

〔注〕

１）山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部山口附属学校汚水配水管布設に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』1989年）

Tab. 4　出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量 (cm) (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎　土	焼　成	備　考
A路線						
1	弥生土器　高坏	①(19.4)	橙色(5YR7/8)	良　好	良　好	
2	弥生土器　高坏		橙色(5YR7/6)	良　好	良　好	1と同一固体?
B路線						
3	土師器　小型丸底壺		灰白色(10YR8/2)	良　好	良　好	
4	土師器　甕		橙色(5YR7/8)	やや不良	良　好	
5	土師器　甕	①(19.0)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	やや不良	やや不良	
6	土師器　甕	①(17.4)	浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	良　好	山陰系
7	土師器　甕	①(14.2)	①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②浅黄橙色(7.5YR8/6)	やや不良	やや不良	山陰系
8	土師器　高坏		①橙色(2.5YR7/8) ②橙色(2.5YR7/6)	良　好	良　好	
9	土師器　高坏		淡橙色(5YR8/4)	やや不良	良　好	
10	磁器　ぐいのみ	②(2.4)	素地－灰白色 釉－白色	精　良	堅　緻	
11	磁器　染付　碗	①(9.0)	素地－白色 釉－淡青色	精　良	堅　緻	
12	磁器　染付　碗	②(6.1)	素地－白色 釉－淡青色	精　良	堅　緻	
D路線						
13	弥生土器　壺	①(17.6)	橙色(5YR7/8)	不　良	やや不良	
14	弥生土器　壺		①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	良　好	
15	弥生土器　壺		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	
16	弥生土器　壺		にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	良　好	
17	弥生土器　壺		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②褐灰色(10YR6/1)	やや不良	やや不良	
18	弥生土器　直口壺	①(13.8)	橙色(5YR7/8)	良　好	良　好	
19	土師器　壺or甕		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	良　好	良　好	
20	弥生土器　壺	②(6.6)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	良　好	
21	弥生土器　壺	②(9.5)	①灰褐色(7.5YR6/2) ②にぶい黄橙色(10YR6/2)	良　好	良　好	
22	弥生土器　壺	②(6.0)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	良　好	
23	土師器　壺	②(7.6)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄褐色(10YR5/2)	やや不良	良　好	庄内系
24	弥生土器　甕		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良　好	良　好	
25	弥生土器　甕	①(15.4)	①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②橙色(5YR7/5)	やや不良	良　好	
26	弥生土器　甕	①(13.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	
27	土師器　甕	①(15.2)	①にぶい橙色(2.5YR6/3) ②淡赤橙色(2.5YR7/3)	良　好	良　好	
28	土師器　甕	①(16.8)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい橙色(5YR7/4)	良　好	良　好	
29	土師器　甕	①(12.8)	浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	良　好	
30	土師器　甕		①黒褐色(7.5YR3/1) ②浅黄橙色(10YR8/4)	良　好	良　好	
31	土師器　甕		①黒色(10YR2/1) ②灰黄褐色(10YR6/2)	不　良	良　好	
32	土師器　甕		①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②明褐灰色(7.5YR7/2)	やや不良	良　好	畿内系
33	土師器　壺	①(23.6)	①橙色(7.5YR7/6) ②黒色(7.5YR2/1)	良　好	良　好	山陰系？
34	土師器　甕	①(15.6)	①褐色(7.5YR3/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	山陰系
35	土師器　甕		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	良　好	山陰系

平成２年度山口大学構内の立会調査

法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量（cm） (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎　土	焼　成	備　考
36	土師器　甕		淡黄橙色(7.5YR8/3)	不　良	やや不良	山陰系
37	土師器　鼓形器台		①淡橙色(5YR8/3) ②にぶい橙色(5YR7/3)	やや不良	やや不良	山陰系
38	土師器　台付鉢	①(14.8)　②(8.7) ③(7.75)	にぶい橙色(5YR7/4)	良　好	良　好	
39	弥生土器　鉢		①淡橙色(5YR8/3) ②淡赤橙色(2.5YR7/4)	精　良	良　好	
40	土師器　鉢		にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや不良	良　好	
41	土師器　鉢		淡黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	
42	弥生土器　鉢	①(11.0)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	良　好	
43	手捏土器　甕	②3.2	浅黄橙色(10YR8/3)	不　良	良　好	
44	弥生土器　高坏		①灰色(5Y4/1) ②にぶい赤褐色(5YR5/3)	精　良	良　好	
45	弥生土器　高坏		にぶい橙色(5YR6/4)	良　好	良　好	
46	弥生土器　高坏		淡赤褐色(2.5YR7/4)	良　好	良　好	
47	弥生土器　高坏	②(14.5)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	精　良	良　好	
48	瓦質土器　擂鉢		灰色(10Y4/1)	良　好	良　好	
E路線						
49	土師器　高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	
50	須恵器　坏身		青灰色(5B5/1)	良　好	堅　緻	
51	土師器　皿	②(6.2)	灰白色(10YR8/2)	精　良	良　好	

法量（　）は現存値

番号	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石　質	備　考
D路線							
52	粗製扁平打製石斧	(123.5)	(60.5)	(11.0)	141.15	結晶片岩	
53	砥　石	254	99.5	(85)	1132.25	硅長石	

第４節　その他構内の立会調査

１　人文・理学部７号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査

調査地区　山口市石観音町１－25

調査期間　平成３年２月26日　３月１・５日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約1.2m²

調査結果　工事は宿舎敷地の北側に公共下水道に伴い排水管を埋設するもので、工事規模を勘案して立会調査を実施した。調査地は大内氏関連町並遺跡の範囲内にあたる。

Ａ地点では深さ90cmまでの掘削で、13cmまで黒褐色砂質土の表土、その下層が大内氏館跡周辺でみられる地山である明黄褐色粘質土であった。Ｂ地点は、深さ55cmまで掘削し、すべて褐色粘質土の埋め土であった。Ｃ地点は、深さ62cmまで掘削し、上層から黒褐色粘質土、暗オリーブ褐色土、礫を含む黒褐色粘質土の３層に分層されるがすべて埋め土であった。Ｂ、Ｃ地点とも近代の投棄壙の範囲内と思われる。各地点とも遺構は検出できなかったが、Ｂ・Ｃ地点で若干の土師質土器、陶器、磁器が出土した。

出土遺物（Fig.53，PL.33）

Ｃ地点より出土。伊万里系の近世磁器の紅皿。外面に菊花を型押しするが、ずれて２重になる。胎土・焼成とも良好で、素地は灰白色（7.5Y8/1）、釉は明緑灰色（7.5GY8/1）を呈する。内面にのみ施釉する。口径4.9cm、底径1.8cm、器高1.4cm。

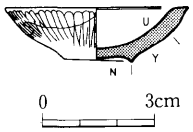
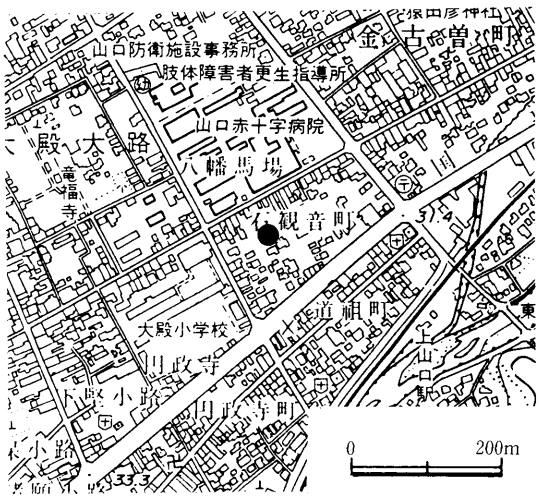


Fig.53　出土遺物実測図



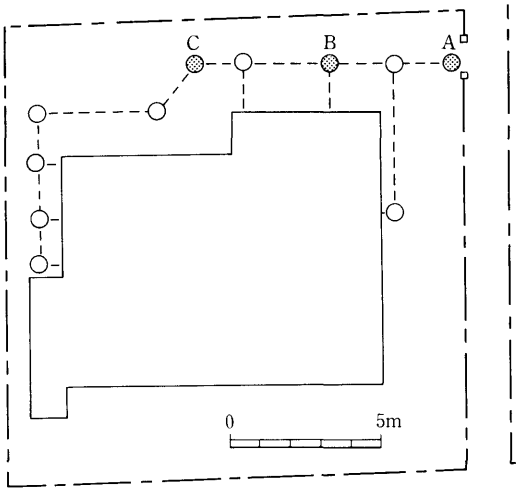


Fig. 54　調査区位置図

2　経済学部３号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査

調査地区　山口市香山町３－１

調査期間　平成３年２月25日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約0.5m²

調査結果　工事地域は一の坂川の下流に近い右岸の低丘陵上に位置する。工事は宿舎敷地の西半部に公共下水道の使用に伴い排水管を埋設するもので、工事規模を勘案して立会調査を実施した。

調査は比較的掘削規模の大きい集水桝のうち、後世の掘削が及んでいない二ヶ所を選定して、土層の堆積状況、遺物包含層および遺構の有無を観察した。その結果、両地点とも現地表面から約50cmまでは後世の撹乱土で、その下位はしまりの強い黄褐色粘質土の地山であった。最終的に現地表面から約１mほど掘り下げたが、層位に変化はみられなかった。なお、調査時に周辺に存在する畑地で表面採集を試みたが、遺物は採集できなかった。

今回の調査地域周辺では現在までに遺跡は全く周知されておらず、埋蔵文化財の空白地となっている。民家が密集している現状では、遺物包含層は存在していたとしても削平によって消失している可能性が高いが、安定した地山面が存在していることから今後の調査によって遺構が検出される可能性も否定できない。

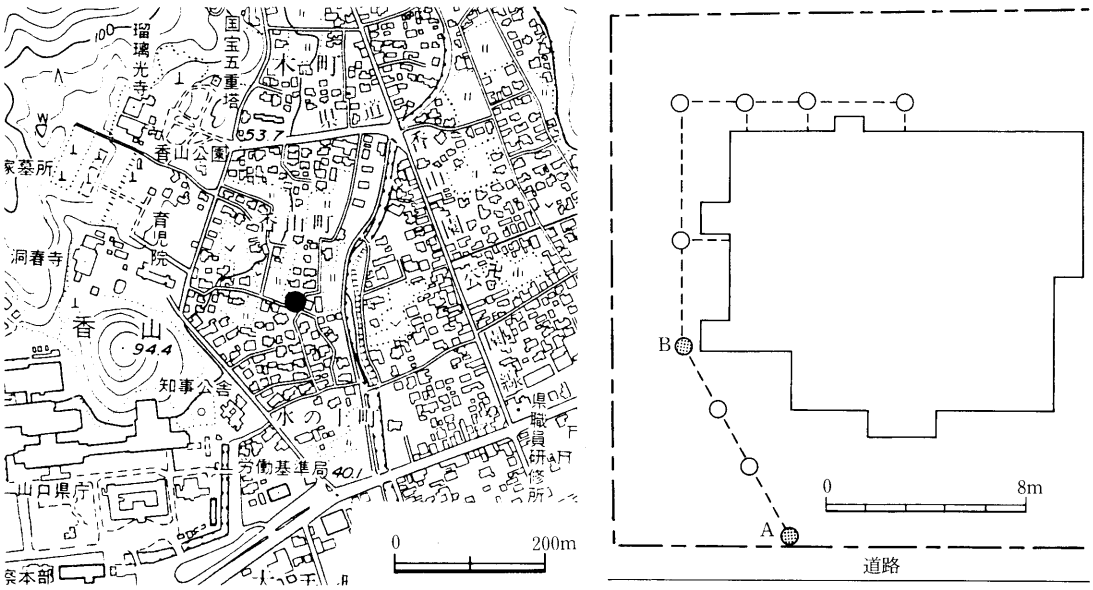


Fig. 55　調査区位置図

付　　篇

付篇Ⅰ　　昭和53・54・55年度山口大学構内の発掘調査

付篇Ⅱ　　山口大学構内の埋蔵文化財の分布

付篇Ⅲ　　化粧に用いる金属製の菊花形の皿

付篇Ⅰ

昭和53・54・55年度山口大学構内の発掘調査
第1章　昭和53年度山口大学構内の発掘調査

吉田構内人文学部校舎新営に伴う試掘調査

1　調査の経過

新営建物は2棟で、吉田構内の南端中央部に計画された。新営予定地は約900m²で、周辺は東から西に延びる標高約25～30mの洪積段丘[1]が、構内造成工事等によって階段状に削平され、標高約20mの平坦面を形成している。周辺地域では過去に埋蔵文化財の調査がほとんど行われておらず、工事に先立ち事前に遺構の有無を確認する必要があった。調査時点では埋蔵文化財資料館は機能していなかったため、関係部局と協議の結果、調査は人文学部近藤喬一氏に依頼することとなった。調査の方法は、構内造成による埋め土を機械を使用して除去し、それ以下は手掘りによる分層発掘を行った。調査期間は昭和53年12月11日から19日までで、調査面積は約160m²である。

2　調査結果

Aトレンチ

北側の新営建物のほぼ中央に、東西方向に幅3m、長さ21mのトレンチを設定した。構内造成による埋め土（表土）は地表面下約1.3～1.4mまで厚く客土されている。その下には層厚10～20cmの旧水田耕作土と考えられる第3層：黒色粘質土が堆積し、黄橙色粘土の地山に続く。地山はトレンチ西側付近で西に向かって緩やかに下降する。遺構はトレンチ西端部で柱穴状の掘り込みを検出した。出土遺物はなく、時期は不明。遺物はトレンチ中央部付近の旧水田耕作土から須恵器小片3点が出土したほかは顕著な出土遺物はない。

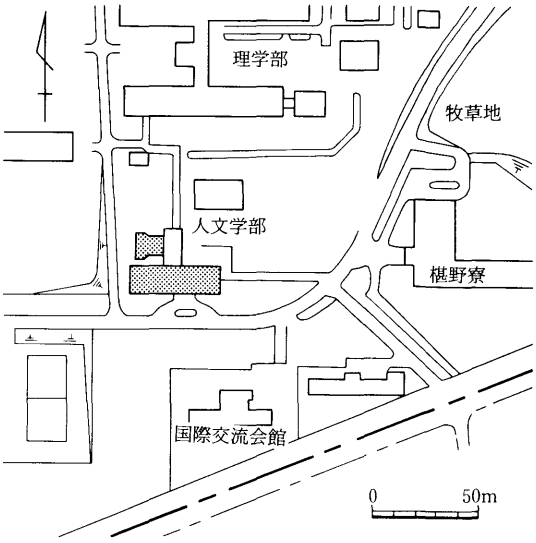


Fig. 56　調査区位置図

Bトレンチ

南側の新営建物の東側に、東西方向に

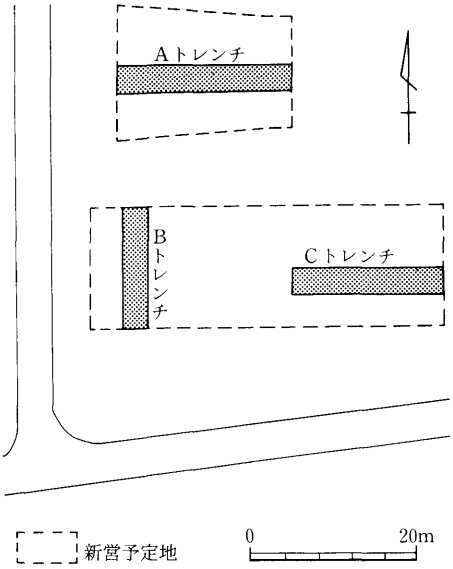


Fig. 57　トレンチ設定図

設定した幅3m、長さ18mのトレンチ。地表面下約80cmまでは構内造成による埋め土で、その下には上位から旧表土と考えられる層厚8cmの第2層：黒色土、旧水田耕作土と考えられる層厚10～15cmの第3層：黒色粘質土が認められる。第3層：黒色粘質土は遺物を包含せず、その直下は黄褐色粘土の地山である。遺構はトレンチ中央部で黄褐色粘土を検出面とする柱穴状の掘り込み2個を検出し、そのうちの1個から土師器片および寛永通宝各1点が出土した。

Cトレンチ

A・B両トレンチの所見から、遺構の埋存する可能性が高いと判断された、南側の新営建物の西端寄りに南北方向に設定した幅3m、長さ14mのトレンチ。堆積層順はBトレンチと同様で、地表面下約1mまで構内造成による埋め土で、その下位には層厚6cmの第2層：黒色土（旧表土）、層厚10～14cmの第3層：黒色粘質土（旧水田耕作土）が堆積する。第3層の直下は黄褐色粘土の地山で、トレンチ北端部では北に向かって下降している。遺物は第3層：黒色粘質土から須恵器小片若干が出土したにすぎず、遺構は検出できなかった。

3　小結

試掘調査は建物新営予定地面積の2割弱について行ったにすぎないが、地下の状況の概要を把握することができたと考えられる。遺構は極めて希薄で近世のものと考えられる柱穴状の掘り込み3個を検出したにとどまり、また、出土遺物の大半は旧水田耕作土中からのものであった。さらに地山が各トレンチとも本学統合移転前の旧水田耕作土の直下に認められたこと、また、新営予定地の東側に所在する洪積段丘が、新営予定地付近でほぼ平坦に造成されていることなどから、過去に遺物包含層、遺構が分布していたとしてもすでに消失している可能性が高い。なお、Aトレンチ西側およびCトレンチ北西端部での地山の落ち込みは、新営予定地の東側から西に張り出す洪積段丘の裾部の可能性がある。

［注］1）河野通弘・高橋英太郎「山口大学とその付近の第四紀層」（『山口大学教育学部研究論叢』第27巻第2号、1977年）。

第２章　昭和54年度山口大学構内の発掘調査

第１節　吉田構内理学部校舎新営に伴う試掘調査

１　調査の経過

新営予定地は第１章で述べた、人文学部校舎新営予定地の北西約80mに位置する。新営建物は２棟で、その面積は約1060m²である。調査対象地域一帯は東から西へ延びる標高約25～30mの洪積段丘[1]が、新営予定地の東側を南北に走る構内循環道路付近で階段状に造成され、標高約20mの平坦面を形成している。人文学部校舎新営に先立つ試掘調査では近世のものと考えられる柱穴状の掘り込みを検出しているが、トレンチ内の土層の堆積状況、遺物の出土状態は周辺一帯にわたる後世の大規模な削平を暗示するものであった。

調査は遺構の有無を確認するため新営予定地内に幅３mのトレンチを４本設定して行った。調査にあたっては人文学部考古学研究室の協力を得、構内造成等による埋め土は機械を使用して除去した。調査期間は昭和54年６月11から18日までで、調査面積は216m²である。

２　調査結果

Ａトレンチ

西側建物の中央部に、南北方向に設定した幅３m、長さ20mのトレンチ。地表面下約20～40cmで人文学部校舎新営予定地のＡトレンチで地山と認定された黄橙色粘土が検出された。しかし、検出面では不純物を多く含み地山と判断し難いこととから、部分的にトレンチを設定して掘り下げた。その結果、不純物が含まれるのは検出面から約20cm下位までで、同層はごく最近の土器を包含していることが判明した。したがって、同層は周辺地域の地山の削平に伴う客土で、不純物を含まない黄橙色粘土以下を地山と判断した。なお、トレンチ内での遺構、出土遺物は皆無であった。

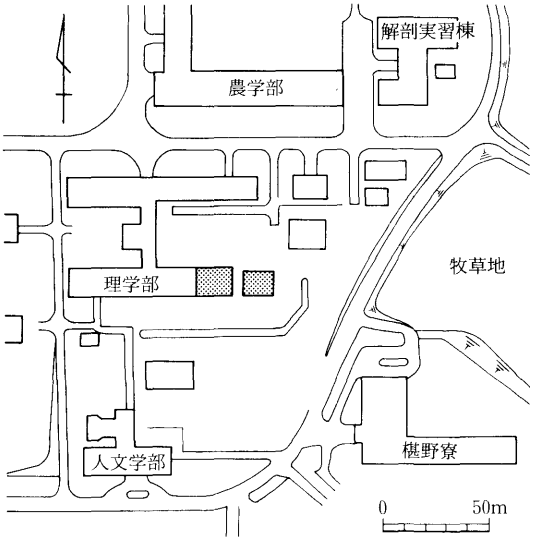


Fig. 58　調査区位置図

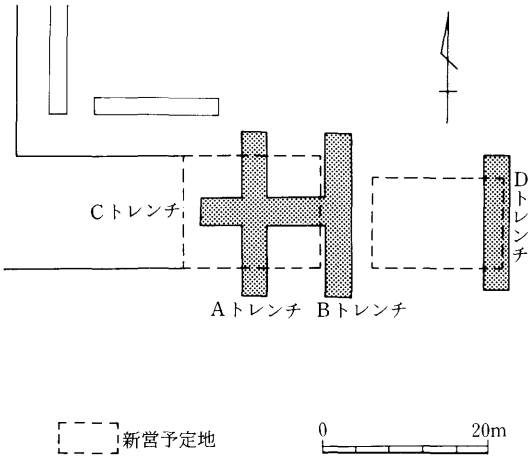


Fig. 59　トレンチ設定図

Bトレンチ

2棟の校舎間に、南北方向に設定した幅3m、長さ19mのトレンチ。層序的にはAトレンチと同様で、地表面下約10cmで層厚約20cmの地山の客土である黄橙色粘土の堆積が認められ、その下位が地山であった。遺構、遺物は認められなかった。

Cトレンチ

西側建物の中央部に、A・B両トレンチと直交して東西方向に設定した幅3m、長さ16mのトレンチ。層序的にはA・B両トレンチと同様で、地表面下約15～25cmで層厚約10cmの地山である黄橙色粘土の客土が認められ、地山へと続く。遺構、出土遺物は皆無であった。

Dトレンチ

東側建物の東端部に南北方向に設定した幅3m、長さ17mのトレンチ。層序的には他のトレンチと同様で、地表面下約30cmで層厚約5cmの地山である黄橙色粘土の客土が認められる。その直下が地山であるが、遺構、遺物は認められなかった。

3　調査結果

各トレンチの土層の堆積層順は極めて単純で、構内造成による埋め土の直下が黄橙色粘土の地山である。地山は標高約20.1mで検出され、地表面からわずか30～40cm下位である。また、各トレンチ相互での検出面の高低差はほとんどない。人文学部校舎新営に伴う試掘調査の所見では、構内造成に伴う埋め土は地表面下約0.8～1mまで厚く客土されており、旧表土、旧水田耕作土を介在して地山に達している。このことから、調査地域はその東側に存在する東から西へ延びる洪積段丘の頂部付近が大規模に削平されていることが予想される。したがって、過去に遺物包含層もしくは遺構が分布していたとしてもすでに消滅している可能性が高い。

［注］1）河野通弘・高橋英太郎「山口大学とその付近の第四紀層」（『山口大学教育学部研究論叢』第27巻第2号、1977年）。

第2節　吉田構内農学部動物舎新営に伴う試掘調査

1　調査の経過

新営予定地は第1節で述べた理学部校舎新営予定地の北方約70mに位置する。調査対象地域一帯は東から西に延びる標高約25～30mの洪積段丘[1]が、新営予定地の東側を南北に走る構内循環道路付近で階段状に削平され、標高約20mの平坦面を形成している。同一平坦面の南側に位置する、理学部および人文学部の各校舎新営予定地での試掘調査の所見では、顕著な遺構、遺物は認められず、この平坦面は本学統合移転前の水田開作および構内造成によって、地山が大規模に削平された結果であることが明らかとなっている。

調査は遺構の有無および地山の削平状況を確認するため、南北に隣接する2棟の新営建物予定地内に、それぞれ幅3mのトレンチを1本づつ設定して行った。構内造成等による埋め土は機械を使用して除去し、その後は手掘りを行った。調査は人文学部考古学研究室の協力を得て、昭和54年7月2日から6日まで行った。調査面積は96m²である。

2　調査結果

Aトレンチ

北側の建物予定地内の中央部からやや北寄りに、東西方向に設定した幅3m、長さ23mのトレンチ。構内造成による埋め土は、地表面から東側で約60cm、中央部で約80cm、西側で約110cm下位まで厚く客土されている。東西両端部ではその下に層厚10～20cmの砂礫層が堆積し、黄橙色粘質土の地山に至る。砂礫層は湧水し、遺物は包含していない。トレンチ中央部付近は後世の削平が著しく、埋め土の直下が地山である。地山面の標高は、東部で約19.9m、西部で約19.5mで、地山は東から西へ向かって緩やかに下降する。遺構は認められず、トレンチ中央部付近で本学統合移転前の旧水田に伴う暗渠1条を検出したにすぎない。

Fig. 60　調査区位置図

遺物は同じくトレンチ中央部付近で、

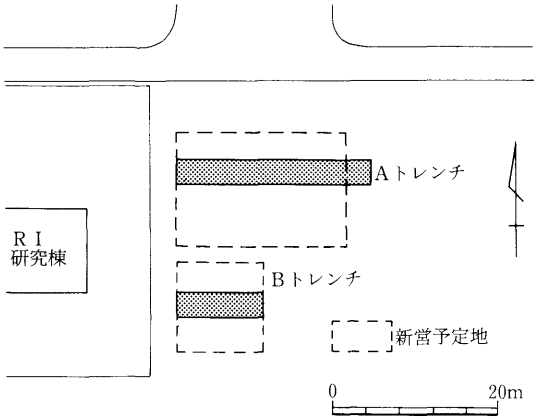


Fig. 61　トレンチ設定図

地山に貼り付いた状態で須恵器小片1点が出土した。

Bトレンチ

南側の建物予定地内の中央部に、東西方向に設定した幅3m、長さ9mのトレンチ。構内造成による埋め土は、地表面から東側で約70cm、西側で約90cm下位まで厚く客土されている。その下位は直接黄褐色粘質土の地山となる。Aトレンチで検出された砂礫層は認められない。地山面の標高は東部で約19.7m、西部で約20.1mで、Aトレンチ同様、地山は東から西に向かって緩やかに下降する。遺構、出土遺物は皆無であった。

3　小結

検出された地山は本学では弥生時代以降の遺構の掘り込み面と同一の色調、組成であり、立地的にも当該期の遺構が分布する可能性が十分にあった。しかし、試掘調査の結果、建物新営予定地内では顕著な遺構、遺物は認められなかった。南側の建物新営予定地では埋め土の直下が地山であることや周辺の地形がかなり変容していることなどから、調査地域一帯は過去に本学統合移転等に伴う造成による大規模な削平が行われたと考えられる。

新営建物北側のAトレンチで検出した、地山直上に堆積する砂礫層の性格は不明確であるが、検出面の標高がBトレンチの地山面の標高とほぼ同一であることから、南側から北側に向かって下降する谷状の落ち込みへの堆積物と考えられる。また、地山に貼り付いた状態で出土した須恵器はかなり摩滅しており、周辺の高位、とりわけ調査地域の東側に位置する附属農場の牧草地からの流入品と考えられる。附属農場の牧草地では遺物包含層は認められなかったが、古代から中世にかけての柱穴群や溝などの遺構が検出されており[2)]、今回出土した須恵器は、構内造成によってこれらの遺構から遊離し搬入された可能性が強い。

今回の調査地域周辺では、昭和53・54年度に人文学部校舎新営予定地と今回の調査地域間ですでに2件の試掘調査を実施している[3)]が、各調査地点とも顕著な遺構、遺物は認められていない。各調査地点の土層の堆積状態や現在の地形・土地利用の状況から、東側に位置する標高約25～30mの洪積段丘の西への延長部分が、各調査地点付近で構内造成によって

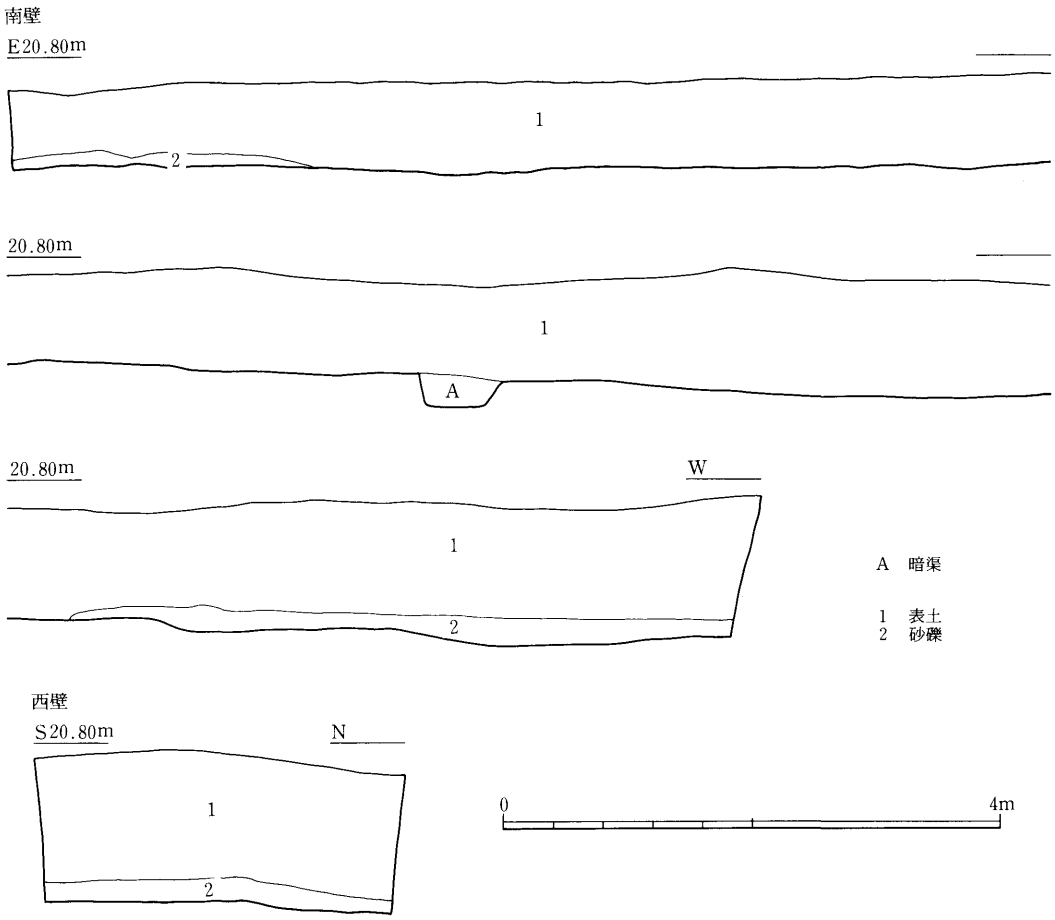


Fig. 62 Aトレンチ土層断面実測図

削平されたことにより、過去に遺構が存在していたとしてもすでに消失している可能性が高いことを示していると考えられる。したがって、少なくとも各調査地点以東、構内循環道路間の地域には埋蔵文化財の分布は極めて希薄であると判断される。

［注］

1）河野通弘・高橋英太郎「山口大学とその付近の第四紀層」(『山口大学教育学部研究論叢』第27巻第2号、1977年)。

2）山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)。

3）付篇Ⅰ第1章、第2章第1節参照。

第３章　昭和55年度山口大学構内の発掘調査

第１節　吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査

１　調査の経過

新営予定地は吉田構内の南端中央部よりやや北側に位置する。西方約50mの地点には弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居跡群が検出された「遺跡保存地区」が所在し、新営予定地にも集落関連遺構が分布する可能性が考えられたため試掘調査を実施した。

調査は遺構の有無を確認するために、新営予定地内に幅２mのトレンチを２本設定して行った。構内造成等による埋め土は機械を使用して除去し、それ以下は手掘りによる分層発掘を行った。調査は人文学部考古学研究室の協力を得、昭和55年12月１日から16日まで行った。調査面積は66m²である。

２　調査結果

Ａトレンチ

新営予定地の南端部付近に、東西方向に設定した幅２m、長さ22mのトレンチ。地表面の標高は東部および中央部で約20.4m、西部で約21.3mで、トレンチ中央部から西側は東側に比べてやや高位に位置する。構内造成による埋め土は層厚約10～40cmで、トレンチ中央部では極めて薄く客土されている。埋め土の下には旧水田耕作土、旧水田床土が残存する。

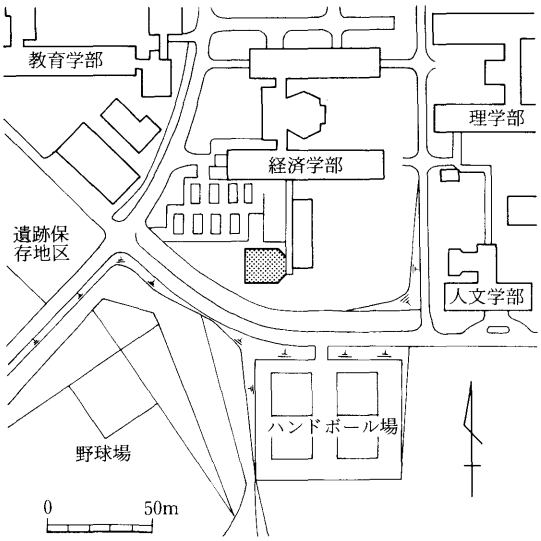


Fig. 63　調査区位置図

その下位には本学統合移転前の水田に伴う暗渠の検出面である層厚10～30cmの第４層：灰色砂質土が堆積する。それ以下は層厚20～40cmにわたって砂、シルト、砂礫が互層をなしてブロック状に堆積し、青灰色粘土の地山へと続く。礫の粒径は３～５mmで、さほど大きくない。第４層以下の堆積層は湧水の激しい自然堆積層で、最下層の第14層：暗茶褐色有機質土は自然木や木葉等の植物遺体を多く含む。地山面の標高はトレンチ東側で約19.4m、中央部で約19.2m、西側で約19.6mで、地山はやや起伏をもっている。

遺構は認められず、遺物も第４層から須恵器、土師器、陶器小片各１点が出土したにすぎない。

Ｂトレンチ

新営予定地の西側に、Ａトレンチと直交して南北方向に設定した幅２m、長さ11mのトレンチ。構内造成等の埋め土は、地表面から約40～100cm下位まで厚く客土されている。その下には旧水田耕作土、旧水田床土が存在するが、旧水田耕作土は南端部で認められるにすぎない。それ以下はＡトレンチ同様、湧水の激しい自然堆積層で、層厚20～60cmにわたって砂、シルト、砂礫、粘質土が互層をなして堆積し、灰色粘土の地山に至る。地山面の標高はトレンチ北側で約19.3m、南側で約19.0mで、地山は北から南へ向かってわずかに下降し、南端部ではさらに南東方向に落ち込む。

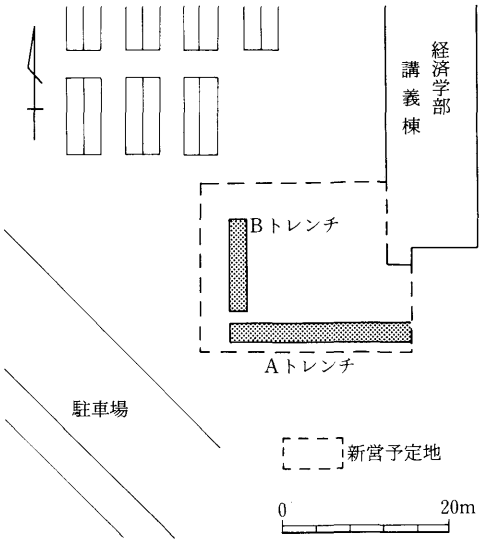


Fig. 64　トレンチ設定図

遺構は認められず、遺物も第９層：灰色砂質土から土師器小片２点が出土したにすぎない。

３　小結

新営予定地内では調査当初予想された集落関連遺構は検出できなかった。しかし、当該地域一帯の旧地形を推定する手がかりが得られた。すなわち、地山は灰色および青灰色を呈する強い還元状態の粘土で、今回の調査地域の西方に位置する「遺跡保存地区」での集落遺構の掘り込み面である黄褐色粘質土の地山とは大きく異なっている。また、「遺跡保存地区」での竪穴住居跡等の遺構の検出面の標高は約19.3～19.4m[1)]で、Ａ・Ｂ両トレンチの地山の検出面の標高と大差ない。しかし、竪穴住居跡等の検出面から床面までの深さは、約10～20cmであることから、「遺跡保存地区」の旧地形は現状よりもかなり高位に位置していたことが予想される。また、周辺では今回の調査地域のすぐ北東に位置する経済学部校舎Ｄ棟の東側、および南側に位置するハンドボールコート北端部で、黄褐色粘質土の地山が検出されている[2)]。したがって、当該地域はトレンチ内での地山上位の堆積層および出土遺物からも窺えるように、少なくとも弥生～古墳時代にかけては小規模な沼沢地あるいは谷状のやや落ち込んだ地形であったことが推察される。時期差のある遺物の出土は、このような周辺高所からの流れ込みによるものであろう。

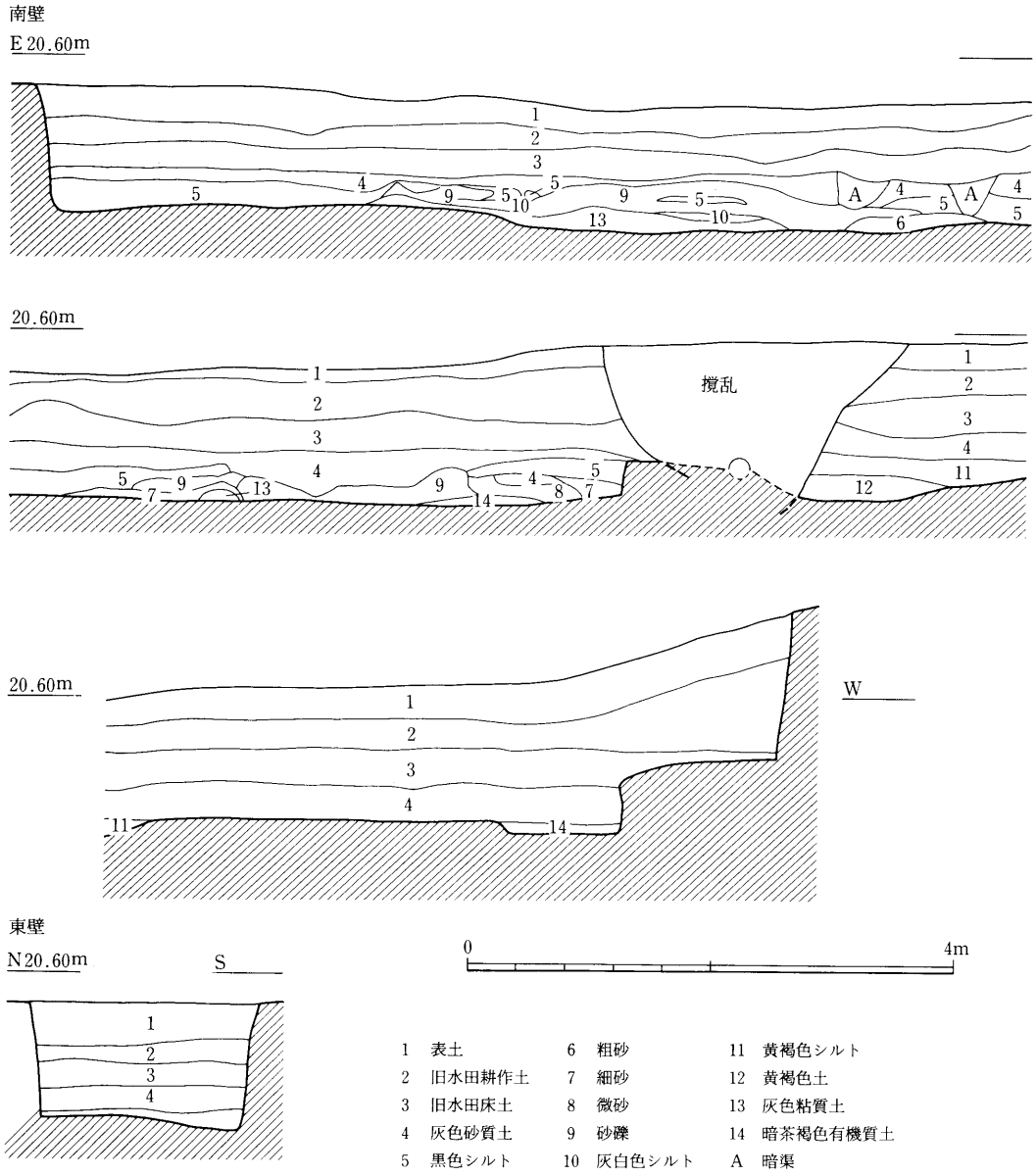
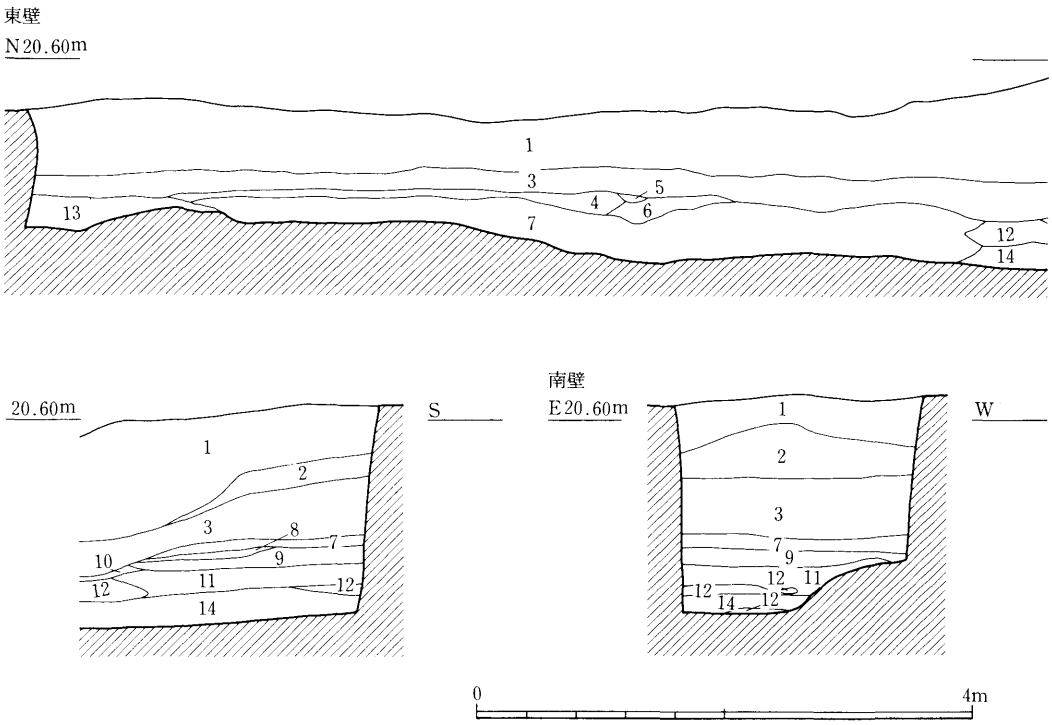


Fig. 65 Aトレンチ土層断面実測図

［注］

1）a 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

b 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。



1	表土	4	茶褐色粘質土	7	暗褐色粘質土	10	黄褐色砂質土	13	灰褐色礫混じり砂質土
2	旧水田耕作土	4	淡褐色礫混じり砂質土	8	黒褐色粘質土	11	黄褐色シルト	14	砂
3	旧水田床土	6	淡褐色砂質土	9	灰色砂質土	12	砂礫		

Fig. 66　Bトレンチ土層断面実測図

c　山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、1989年）。

2）a　山口大学埋蔵文化財資料館「経済学部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

b　山口大学埋蔵文化財資料館「防火用水配管布設に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』、1991年）。

第2節　吉田構内農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査

1　調査の経過

新営予定地は吉田構内の中央部からやや東に位置する。西方約85mに所在する第二学生食堂敷地では古墳時代前期の竪穴住居跡6棟が検出されている。距離的にも極めて近接した位置関係にあることから、当初から新営予定地内にも集落関連遺構が分布する可能性が考えられた。新営建物の面積は約50m²と小規模であること、また、周辺での遺構・遺物の分布状況が極めて濃密であることなどから、当初から新営予定地全面について発掘調査を行った。

調査は人文学部考古学研究室の協力を得、昭和56年1月19日から2月2日まで行った。その結果、東端部では南北に溝状の撹乱が認められたが、7～8世紀代のものと思われる土壙5基、溝3条を検出した。

2　層位（Fig. 68）

地表面の標高は約23.3mで、調査区全域にわたってほぼ平坦に造成されている。土層の堆積層順は極めて単純で、構内造成による埋め土は地表面から約20～40cm下位までで、その下には撹乱土である第2層：灰褐色土が客土されている。層厚は調査区の南西部ではわずか10～15cmであるが、東部では最大50cmにわたって堆積する。その供給源は調査地域よりやや高所に位置する、西側の農学部害虫学実験畑付近と考えられる。第2層からは土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器、寛永通宝など約130点が出土したが、須恵器がその大半を占める。南西部では第2層の下位に旧水田耕作土が残存し、南西方向への地山の落ち込み部分には、最大層厚20cmの第4層：暗褐色粘質土が堆積する。同層は遺物を包含しておらず、自然堆積と思われる。南西部以外では第2層の直下が黄褐色粘土の地山である。地山の検出面の標高は約22.5～22.7mで、調査区西側が若干低い。

Fig. 67　調査区位置図

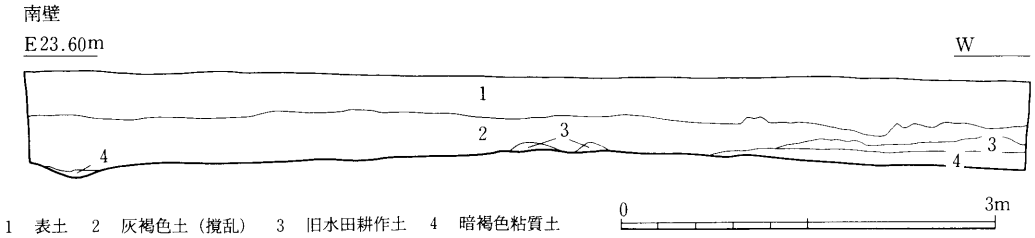


Fig. 68 土層断面実測図

3 遺構

土壙

第1号土壙(Fig.70,PL.37(2))

調査区の北西部に位置するが、北への延長部分は調査区外にあたるため完掘していない。平面形態は円形もしくは楕円形を呈するものと思われ、長軸120cm以上、短軸67cm以上の規模をもつ。土壙の南北部分には、検出面から15cm下位に平坦面をもち、中央部分は壙底まで平坦面から擂鉢状にさらに22cm落ち込んでいる。埋積土は4層に分層され、土壙底よりやや上位には、結晶片岩を主体とする10～15cmの自然石が投棄されている。検出面の標高は約22.7m。遺物は南部の平坦面からやや上位に堆積する、第3層：灰褐色粘質土から須恵器の坏蓋1点が出土した。7世紀前半。

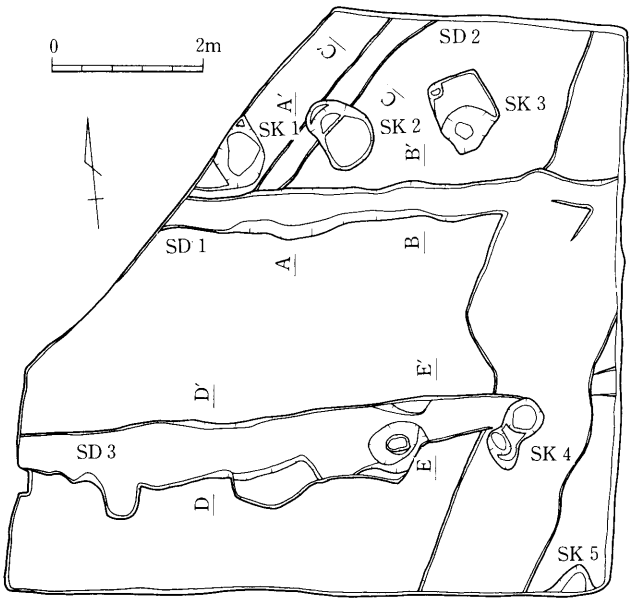


Fig. 69 遺構配置図

第2号土壙 (Fig. 71,PL. 37 (3))

第1号土壙のすぐ東側に並列して位置し、第1号溝を切っている。平面形態は楕円形で、長軸100cm、短軸74cmの規模をもつ。検出面からの深さは35cmで、北端部では壙底から15cm上位にせまい平坦面をもつ。南端部では壙底からやや上位に、投棄によると思われる自然石の集石が存在する。埋積土は6層に分層されるが、出土遺物はない。検出面の標高は約22.7m。第1号土壙との位置関係、自然石の集石などから、第1号土壙と同時期のものと考えられる。

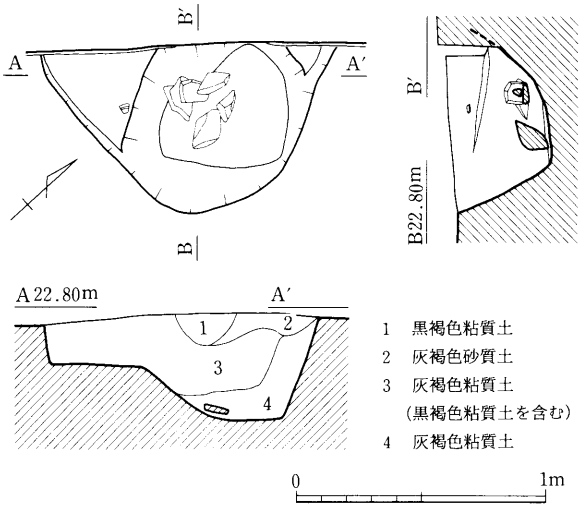


Fig. 70 第1号土壙実測図

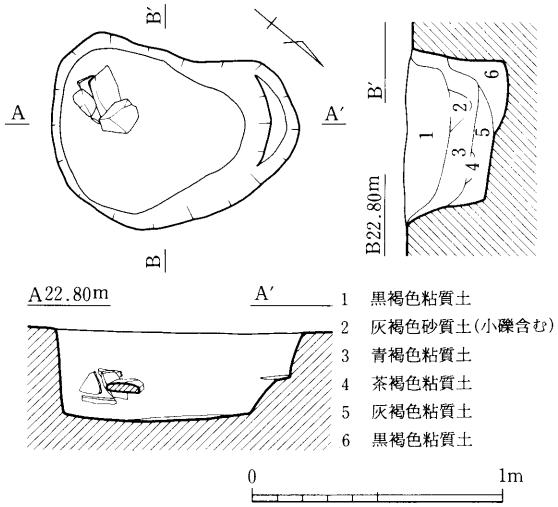


Fig. 71 第2号土壙実測図

第3号土壙(Fig. 72,PL. 37(4))

調査区の北端中央部、第2号土壙のすぐ東側に位置し、第1・2号土壙と並列して存在する。平面形態は五角形状を呈し、長軸102cm、短軸80cmの規模をもつ。壙底は南半部が大きく落ち込み、検出面からの深さは45cmである。北半部ではそれより35cm上位に平坦面をもつ。検出面の標高は約22.8m。埋積土は暗褐色粘質土で、須恵器、土師器、陶器が出土したが、陶器は後世の流入であろう。第1・2号土壙との位置関係、出土遺物などから、第1・2号土壙と同時期のものと考えられる。

第4号土壙(Fig. 73,PL. 38(1))

調査区の南東部に位置する。第3号溝と切り合い関係にあるが、先後関係は明らかにできなかった。平面形態は不整楕円形で、長軸96cm、短軸36cmの規模をもつ。中央部付近には検出面から25cm下位に平坦面をもつが、北東部および南西部ではこの平坦面から若干落ち込む。壙底は最深部で検出面から34cmである。検出面の標高は約22.6m。埋積土は3層に分層され、上層の灰褐色粘質土および中層の灰色砂質土から須恵器、土師器若干が出土した。7～8世紀のものと考えられる。

第5号土壙 (Fig. 74,PL. 38 (2))

調査区の南東端部に位置するが、南への延長部分は調査区外にあたるため完掘していない。平面形態は円形系統で、長軸70cm、短軸36cm以上の規模をもつ。壙底は平坦で検出面

からの深さは11cmである。埋積土は暗褐色粘質土で、検出面の標高は約22.6m。内部からの出土遺物はない。時期不明。

溝

第1号溝（Fig. 69・75,PL. 37（1））

調査区の北部を直線的に東－西に走行する溝で、東端部付近は後世の溝状の撹乱によって一部消失している。検出長は約6.2mで、溝幅は45～65cm、平均約50cmである。検出面からの深さは東部で5～8cm、西部で15～18cmである。検出面の標高は約22.7m。埋積土は上位から黄色粘質土、黄灰色砂質土の2層に分層されるが、上層の黄色粘質土は部分的に堆積するにすぎない。遺物は下層の黄灰色砂質土から須恵器、陶器小片若干が出土した。

第2号溝（Fig. 69・75,PL. 37（1））

調査区の北西部を直線的に北東－南西に走行する溝で、第1号溝に切られている。第1号溝以南への延長部分は削平によって消失している。検出長は約3.3m、溝幅は30～35cmで、検出面からの深さは5cmである。検出面の標高は約22.7m。埋積土は黄色粘質土で、内部からの出土遺物はない。

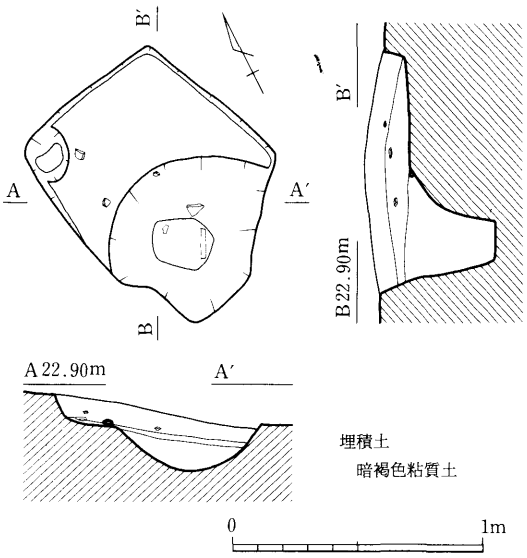


Fig. 72　第3号土壙実測図

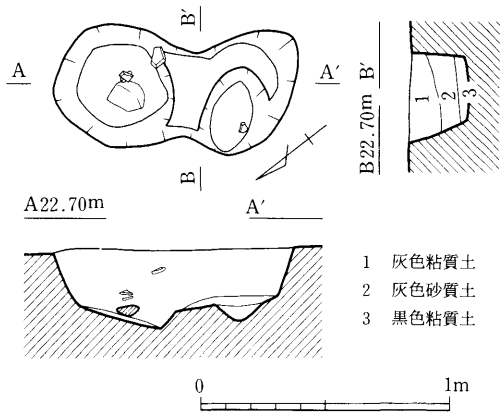


Fig. 73　第4号土壙実測図

第3号溝（Fig. 69・75,PL. 37（1）・38（3）（4））

調査区の南部を直線的に東－西に走行する溝で、東端部付近は後世の溝状の撹乱によって一部消失している。検出長は約8.1mで、南側の肩部では部分的な張り出しが3ヶ所に認められる。溝幅は最大の中央部で約90cm、平均50～60cmである。検出面からの深さは調査区西側の削平が東側に比べて少ないため、東部で10cm、西部で20cmである。検出面の標高

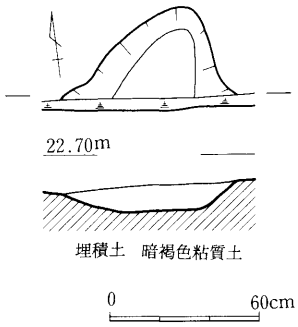


Fig. 74　第5号土壙実測図

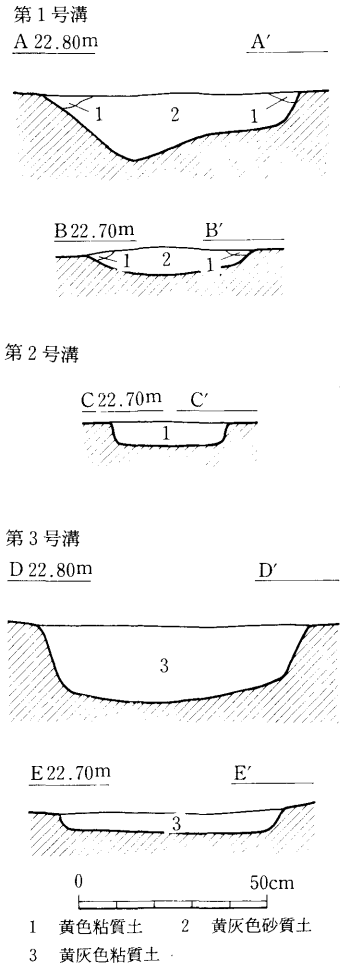


Fig. 75　溝土層断面実測図

は東部で約22.6m、西部で約22.7mである。埋積土は黄灰色粘質土で、内部から弥生土器、土師器、須恵器などが出土した。7世紀初頭。

4　出土遺物（Fig. 76・77,PL. 39）

第1号土壙出土遺物（1）

須恵器の坏蓋。口縁部内面には短いかえりをもつが、口縁端部より下方へは延びない。第3層：灰褐色粘質土出土。

第3号溝出土遺物（2～4）

2～4とも須恵器。2・3は坏蓋で体部から口縁部まで緩やかに移行しながら開く。2は口縁端部がわずかに外反する。4は短頸壺の蓋と思われる。口縁部はわずかに外反し、端部内面には面取りぎみの面をもつ。端部は尖る。

第2層出土遺物（5～24・Fig. 77）

5～24とも須恵器。5～9は坏蓋。5・6は口縁部内面にかえりをもたないもの。5は外面の体部と口縁部の境に退化した不明瞭な段をもつ。口縁端部内面には面取りぎみの面をもち、端部は尖る。6は体部から口縁部まで緩やかに移行する。7～9は口縁部内面にかえりをもつもの。7・9はかえりの位置が口縁端部付近にあるもので、7はかえりが口縁端部より下方に延び、端部は尖る。9はかえりが口縁端部より下方に延びず、端部は丸く終わる。8はかえりが口縁端部からやや離れてあるもので、短いかえりが垂直ぎみに下方に延びる。10～19は坏身。10～14は高台をもたないもので、11は底部と体部との境が不明瞭。13は内面の底部と体部の境にヘラによる沈線が巡る。15～19は高台をもつもの。17は不明であるが、他はいずれも底部と体部の境より内側に高台を貼付し、高台は外方に「ハ」の字に開く。18は端部内面にかえりをもつ。20・21は壺。20は外弯しながら外反する口縁部で、端部内面は強い横ナデにより窪む。21は体部が底部から緩やかに立ち上がる。22は短

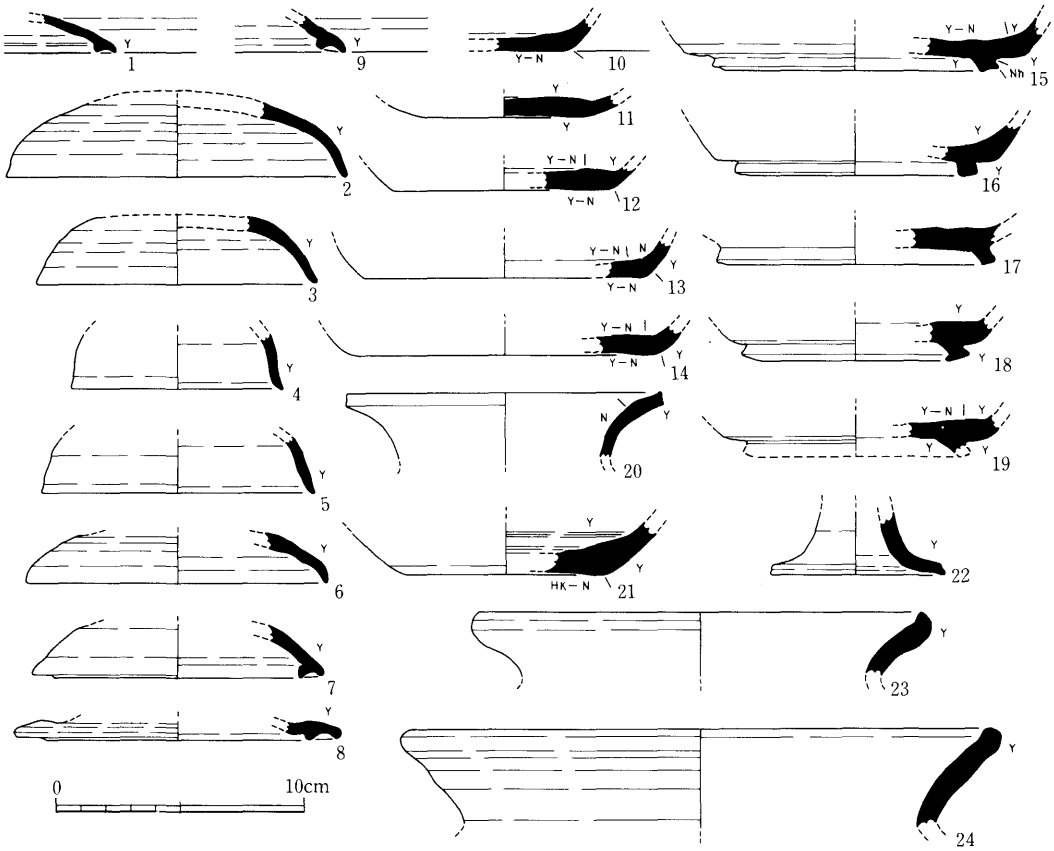


Fig. 76　出土遺物実測図

脚の高坏の脚部で、裾端部は鳥嘴状を呈する。23・24は甕の口縁部。23は口縁端部付近がわずかに肥厚し、内弯して立ち上がる。24は直線的に開く口縁部をもち、端部は内弯ぎみに立ち上がる。

出土した須恵器は7～8世紀代におさまる。

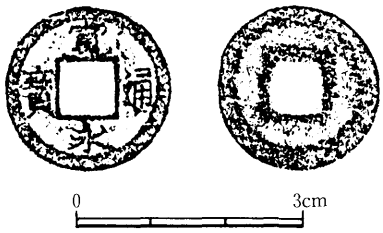


Fig. 77　出土銭貨拓影

5　小結

今回検出した遺構は土壙5基、溝3条である。土壙のうち、第1～3号土壙の3基は一定の間隔をおいて北東－南西に並列する。長軸方向もほぼ同一で、第1・2号土壙のように内部に集石をもつなど共通する点が多いことなどから、第2・3号土壙も第1号土壙同様、7世紀前半のものと考えられる。溝は東－西および北東－南西に走行する。前者は第1・3号溝で、調査区の東方に位置する東から西へ開く谷、後者は第2号溝で、調査区の

Tab. 5　出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備考
第1号土壙						
1	須恵器　坏蓋		明青灰色(5B7/1)	良好	良好	
第3号溝						
2	須恵器　坏蓋	①(13.8)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	良好	良好	
3	須恵器　坏蓋	①(11.4)	明青灰色(5B7/1)	精良	良好	
4	須恵器　短頸壺蓋	①(8.6)	明青灰色(5PB7/1)	精良	堅緻	
第2層（撹乱層）						
5	須恵器　短頸壺蓋	①(11.0)	青灰色(5B6/1)	良好	堅緻	
6	須恵器　坏蓋	①(12.2)	①灰白色(N7/1) ②灰色(N6/1)	精良	堅緻	
7	須恵器　坏蓋	①(10.0)	明青灰色(5PB7/1)	不良	堅緻	
8	須恵器　坏蓋	①(10.6)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	良好	良好	
9	須恵器　坏蓋		明青灰色(5B7/1)	精良	堅緻	
10	須恵器　坏身		灰白色(N8/1)	やや不良	良好	
11	須恵器　坏身	②(5.8)	明青灰色(5B7/1)	精良	不良	
12	須恵器　坏身	②(8.6)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	良好	良好	
13	須恵器　坏身	②(11.2)	明青灰色(5B7/1)	不良	良好	
14	須恵器　坏身	②(11.6)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	やや不良	やや不良	
15	須恵器　坏身	②(10.2)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	精良	堅緻	
16	須恵器　坏身	②(8.4)	①明青灰色(10BG7/1) ②灰白色(5Y8/1)	精良	不良	
17	須恵器　坏身	②(10.4)	明青灰色(5PB7/1)	精良	やや不良	
18	須恵器　坏身	②(7.4)	青灰色(5B6/1)	良好	堅緻	
19	須恵器　坏身		①明青灰色(5B7/1) ②青灰色(5B6/1)	精良	良好	
20	須恵器　壺	①(12.6)	青灰色(5B6/1)	精良	堅緻	
21	須恵器　壺	②(8.0)	①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	不良	堅緻	
22	須恵器　高坏	②(7.0)	①灰色(N6/1) ②青灰色(5B6/1)	やや不良	堅緻	
23	須恵器　甕	①(18.0)	明青灰色(5BG7/1)	精良	堅緻	内外面自然釉
24	須恵器　甕	①(23.2)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	不良	良好	

北方に位置する北東から南西に開く谷の各々の落ち込みに対応して掘削されたものであろう。切り会い関係から前者のほうが新しく、第3号溝は7世紀初頭の時期が与えられる。

遺物がまとまって出土したのは、地山の直上に客土されている第2層：灰褐色土で、出土遺物の大半は7～8世紀代の須恵器である。今回の調査区周辺でも過去に同時期の須恵器が採集されており[1)]、周辺一帯に古代の集落関連遺構が分布している可能性が高い。

［注］1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内汚水排水管等総改修に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年）。

第3節　昭和55年度山口大学構内の立会調査

1　吉田構内本部環境整備に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　E・F－15・16、F－20・21、G・H－12・19

調査期間　昭和56年3月10・16日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　1815m²

調査結果　調査地域は吉田構内の北東端部に位置するサークル棟東方の地点（第1地点）、西端部のプール敷地（第2地点）、南西端部のラグビー場（第3地点）の3地域に分散する。第1地点は門衛所から西に分岐する汚水排水管の埋設、第2地点はプール周囲の舗装に伴うものある。前者は幅約60cm、長さ25mの工事路線について地表面から50cm、後者は20cmの掘削を行ったが、両地点とも構内造成による埋め土であった。第3地点はラグビー場のポール移設に伴い、地表面から約80～90cmの掘削を4ヶ所行うものである。B・C両地点では地表面から20cm下位で旧水田耕作土が認められ、その下に旧水田床土が残存する。その下は青灰色粘土の地山で、地表面から約50cm下位で検出された。A・D両地点では旧水田耕作土、旧水田床土の下位に弥生土器を含む黒褐色粘質土が堆積する。検出面の高さはB・C地点と大差なく、層厚は少なくとも30cm以上ある。出土遺物がなく時期はわからないが、B・C地点の土層の堆積状況から遺構の埋積土である可能性が高い。

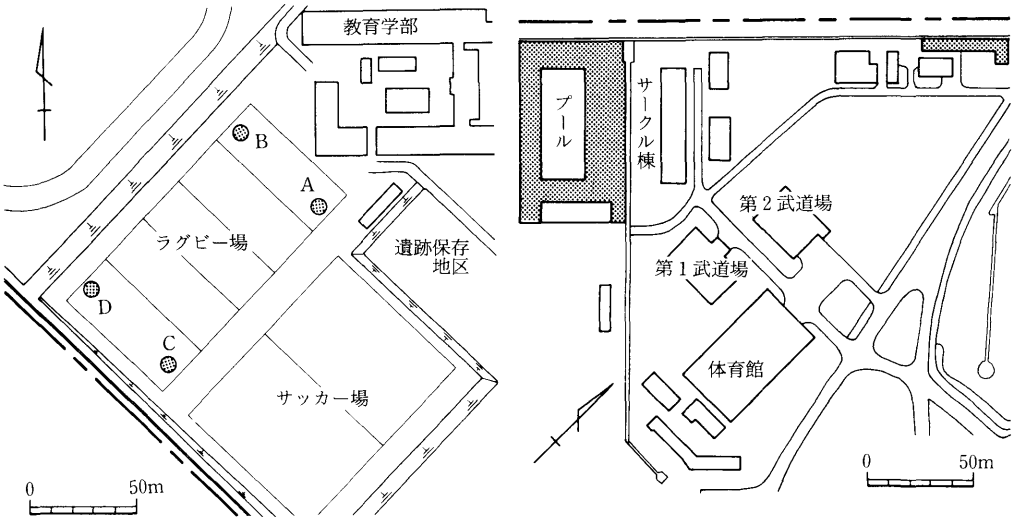


Fig. 78　調査区位置図

2　吉田構内農学部環境整備に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　L・M－12・13、N・O・P－10～12、P・Q－17・18

調査期間　昭和56年3月12・24日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　135m²

調査結果　工事内容は吉田構内の北部に位置する飼料園での暗渠排水溝の掘削、および農学部解剖実習棟周辺での汚水排水管の埋設である。前者の掘削は地表面から約60～70cm下位までで、2地点について行われた。循環道路以東の地域は幅60cm、長さ160mの掘削規模である。耕作土、構内造成に伴う埋め土は地表面から50～60cm下位までで、その直下は南半部では黄褐色粘質土の地山、北半部では北から南へ延びる丘陵の岩盤であった。なお、南端部では地表面から65cm下位で、黒色粘質土を埋積土とする柱穴1個を検出した。埋積土の色調から弥生～古墳時代のものと思われるが、出土遺物がなく時期は不明。循環道路以西の地域は幅60cm、長さ38mの掘削である。層厚20～30cmの耕作土の下位には、上位から層厚10～20cmの暗褐色粘質土、層厚約20cmの黒褐色粘質土の2層の遺物包含層が堆積する。両層とも微細な弥生土器、土師器を包含する。なお、工事基底面では地山は検出できなかった。後者は解剖実習棟の東西両側の2地点について立会調査を行った。両地点とも地表面から80～90cmまで構内造成による埋め土で、その直下がグライ度の高い青灰色粘土の地山であった。遺構は認められなかった。

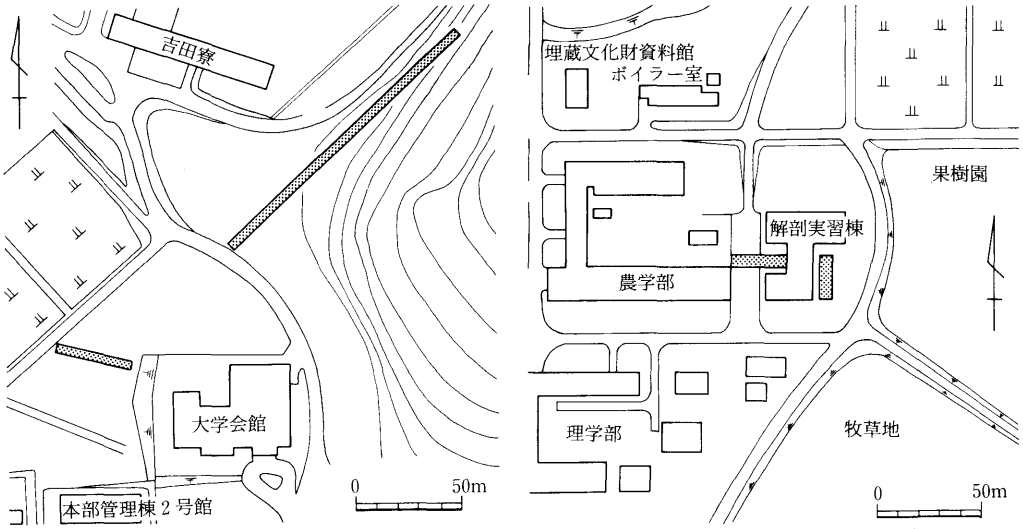


Fig. 79　調査区位置図

付篇　II

山口大学構内の埋蔵文化財の分布

河　村　吉　行

1　はじめに

山口大学のキャンパスは山口県のほぼ中央部に位置する山口市、その山口市と吉敷郡小郡町、阿知須町を挟んで南西に位置する宇部市、および県の南東部に位置する光市の３市に分散している。山口市内には本部・人文学部・経済学部・教育学部・理学部・農学部の各学部および教育学部附属養護学校で構成される吉田構内(山口市大字吉田1677－１所在)と吉田構内の北約３kmに位置し、教育学部附属幼稚園・山口小学校・同中学校の敷地である亀山構内（山口市白石３丁目１－１・２、同１丁目９－１所在）が存在する。宇部市には医学部・同附属病院、医療技術短期大学部で構成される小串構内（宇部市大字小串1144所在）と小串構内の東約２kmに位置し、工学部および同職員宿舎の占地する常盤構内（宇部市常盤台2557所在）を擁する。また、光市には教育学部附属光小学校・同中学校の敷地である光構内（光市室積浦１－１所在）が存在する。

以上のように、山口大学構内遺跡は吉田・亀山・小串・常盤・光の各構内に埋存する個々の遺跡の総称である。なお、この他にも職員宿舎などの関連諸施設においても調査を実施しており、将来的に新たな遺跡が発見された場合、山口大学構内遺跡として包括する予定である。

本稿では、山口大学構内遺跡の調査の経過、現段階までに蓄積された個々の構内の調査成果[1)]および遺跡の分布状況、また、残された課題などについてまとめることを目的とする。

2　山口大学構内遺跡の調査の経過

山口大学は昭和41年１月、総合大学としての整備、発展を最大要因として下関市長府に所在する農学部、旧山口市街地に所在する本部・文理学部・経済学部・教育学部を施設統合し、現在の吉田の地へ統合移転工事を開始した。吉田構内では昭和20年代から遺物の散布が知られており、早くから遺跡の存在が予想されていた。その事実が明白となったのはまさに統合移転工事の着手された昭和41年のことで、構内の造成中に遺物が出土し、「吉田遺跡」として周知されたのであった。これが契機となって吉田構内の埋蔵文化財の調査・研究が開始され、文化庁の前身である文化財保護委員会の提言および大学の要請に基づき、早速、教育学部小野忠熙氏は構内に埋存する遺跡の性格の把握や範囲確認のための調査を

実施した。翌昭和42年７月には学長を団長に、小野氏を中心とした学内外の関連分野の専門家によって「山口大学吉田遺跡調査団」が組織され、統合移転に伴う埋蔵文化財の調査が組織的に実施されるに至った。

統合移転当初計画された諸施設の整備が完了する昭和48年まで、山口大学吉田遺跡調査団は精力的に調査を行い、統合移転の円滑な推進に寄与したことはいうまでもない。また、構内の南西部に分布する竪穴住居跡群を弥生時代から古墳時代の集落のモデルケースとして現状保存し、遺跡の保存と活用を積極的に指向した。昭和53年には埋蔵文化財資料館が設立され、吉田構内の整備に対応した埋蔵文化財の調査・研究を継続的に行っている。昭和58年度以降は各構内での調査も開始し、亀山、小串両構内のように新たに遺跡として周知されるに至った構内も存在する。

3　各構内の埋蔵文化財の分布状況

吉田構内

1　立地

吉田構内の総面積は約71万５千㎡で、南北約12㎞、東西最深部約４㎞の紡錘形に開く山口盆地の南東縁辺部に位置する。山口盆地は構造線に沿った中国山地の隆起に伴う断層作用によって生じた盆地で、周辺の山塊からの河川の流入による土砂の排出作用によって広く埋積が行われ県下最大の盆地平野を形成している[2)]。吉田構内の地形については、先に河野通弘・高橋英太郎両氏の指摘[3)]があり、ボーリングデータに基づき構内の地形を上下２段の洪積段丘とその下位に広がる椹野川の侵食によって形成された沖積低地との大きく２地形に区分している。洪積段丘は標高約17～20mの下位の段丘面を閏面（うるう）、標高約25～30mの上位の段丘面を馬木（まぎ）面と呼称している。構内の北東には標高約200mの姫山、南東から南にかけては標高約285mの今山、標高約380mの高倉山などの山地が存在し、構内の東部はこれらの山塊から西および北へ派生する洪積段丘、西部は沖積低地に立地する。

ここでは遺跡の立地、集落の展開を検討するうえでの基礎作業として、地質学的な見地に加え、これまで行った調査の所見をもとに微視的に吉田構内の旧地形の復原を試みる。その手段として、埋蔵文化財の調査によって遺物包含層あるいは地山（基盤）が検出できた数地点について、本学構内を東－西、北－南に分断する土層断面ラインを設定して考えてみることにする。

まず、構内北部のＡ－Ａ′ライン。最高所に位置するのは姫山の南麓斜面の北から南へ延びる標高約25mの洪積段丘上に立地する第二学生食堂（Ⓐ地点[4)]）付近である。同段丘は低い

吉田構内（立地）

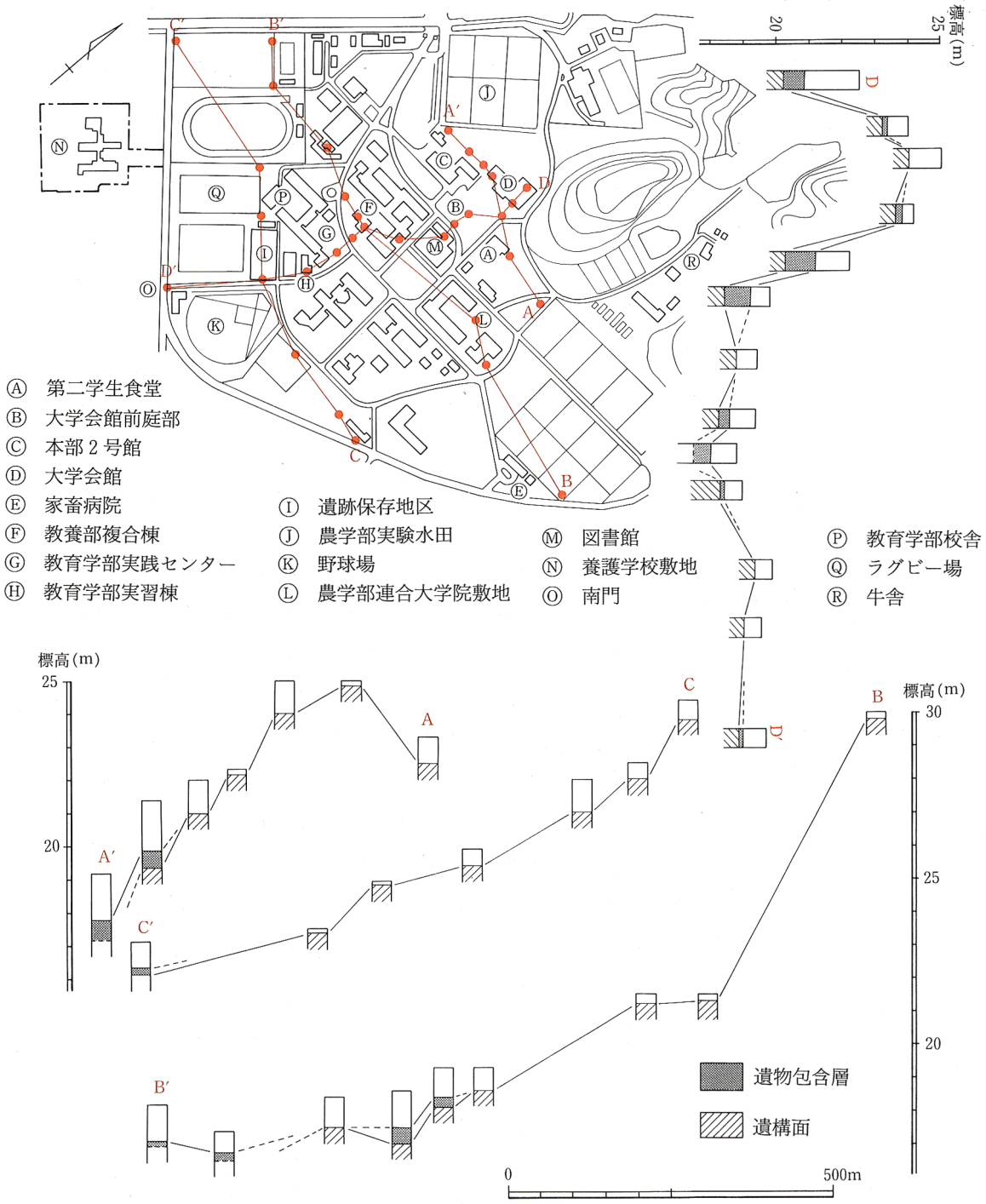


Fig. 80　吉田構内の土層断面柱状図

丘陵状をなし、その西側に所在する大学会館前庭部（Ⓑ地点）から本部２号館（Ⓒ地点）付近まで裾野を延ばしている。地山の落ち込みは大学会館（Ⓓ地点）北端部、本部２号館西端部で確認され、この落ち込みの上位に縄文時代晩期～室町時代の遺物を包含する遺物包含層が堆積している。構内中央部を東－西に分断するＢ－Ｂ′ラインでは、家畜病院（Ⓔ地点）周辺に緩やかに西へ下降する標高約25mの洪積段丘が認められ、その下位の段丘は構内中央部付近にまで裾野を延ばしている。教養部複合棟（Ⓕ地点）西端部付近からは急に西に落ち込み、その西側で谷状の地形を形成し沖積低地へと移行する。それより西側では地山はやや上昇するが、次第に下降しはじめその落ち込みに遺物包含層が堆積する。構内南端部を南東－北西に分断するＣ－Ｃ′ライン。標高約20mの洪積段丘は南東から北西に緩やかに下降し、Ⓟ地点付近から沖積低地へと移行する。構内中央部を北－南に分断するＤ－Ｄ′ライン。標高約20mの洪積段丘は大学会館前庭部南端付近で急激に南に落ち込み段丘崖を形成し、その落ち込み部分に縄文時代晩期～室町時代の遺物を包含する遺物包含層が堆積している。最大堆積厚は約80cm。落ち込み下面の地山の検出面の標高は教養部複合棟付近まで大差ないが、教育学部実践センター（Ⓖ地点）間では地山が落ち込み砂礫層が堆積している。この落ち込みはＢ－Ｂ′ラインの教養部複合棟以西で検出した落ち込みに連続するものと思われ、谷状の地形を形成しているものと思われる。以南は谷から丘陵への立ち上がり部分にあたり、教育学部実習棟（Ⓗ地点）付近が丘陵の最高所に位置する。

以上の所見もとに、標高約20、25mそれぞれの等高線を構内置図に投影すると、概略的に洪積段丘および谷の開析状況を把握することができよう。すなわち、標高約20mの等高線でみると、構内北部では西へ張り出す段丘面が発達し、中央部および遺跡保存地区（Ⓘ地点）周辺で東から西、もしくは南東から北西へ向かって張り出す緩やかな低段丘が存在し、その間に小規模な谷状地形が形成されていたと推察できる。標高約25mより高位の地域は現在まで調査があまり進展しておらず、得られる知見に乏しい。しかし、学外の東および南東の現地形、農学部実験水田（Ⓙ地点）以東の地域での谷の検出事例、および家畜病院以南の市道での古墳～平安時代の河川跡の検出状況[5)]などから、構内に延びる谷状の落ち込みは少なくとも２ヶ所存在すると考えられる。

２　吉田構内の遺跡の変遷

旧石器時代

層位的な出土例ではないが、構内南西部に位置する遺跡保存地区から出土したナイフ形石器がある。弥生時代中期後半の第９号竪穴住居跡の埋積土からの出土例で、縦長剝片を

素材とする二側縁加工のナイフ形石器である。後述するように、遺構検出面は縄文時代晩期の遺物包含層であり、それ以下の堆積層は無遺物層であることが確かめられている。したがって、竪穴住居跡掘削時に旧石器時代の包含層から遊離したとは考えにくく、遺跡保存地区の南東に存在する野球場（Ⓚ地点）周辺の洪積台地からの流れ込みと考えるのが妥当であろう。

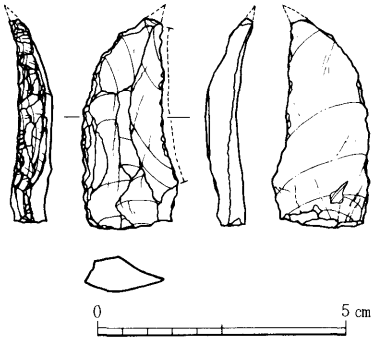


Fig. 81　ナイフ形石器実測図
（吉田構内遺跡保存地区）

野球場はその北東に広がる沖積低地との比高１～２mの標高約20mの閏面と呼ばれる低い洪積台地上に立地しており、その周囲には台地を刻む浅い谷が開ける。立地的には問題はないと思われるが、同敷地内での調査が進展していない現状では、少なくとも構内南端部周辺に旧石器時代の遺跡が分布する可能性を指摘するにとどめる。

縄文時代

遺構は河川跡２条、落し穴、土壙各１基が検出されている。河川跡は構内中央部からやや東の農学部連合大学院校舎棟敷地（Ⓛ地点）で、北西から南東に流路をもつ幅約13m以上の晩期の河川跡が検出されている。周辺地形および河川の流路方向などから同敷地の北方に丘陵を刻む谷にその起源をもつものと思われ、閏面の最奥部に位置する馬木段丘の侵食面に沿った流路が想定される。また、教養部複合棟敷地でも北東から南西に流路をもつ幅約29m以上の晩期中頃の河川跡が検出されている。図書館（Ⓜ地点）北方から洪積台地を刻み西に開く谷を開析する河川と思われ、その南に位置する教育学部実践センター間を流路とする。同一面ではこの河川跡のすぐ右岸側に落し穴が掘削されており、河川を意識した遺構の配置が看取できる。

落し穴は平面形態が隅丸長方形で、長軸約１m、短軸約80cm、検出面からの深さ25cmの規模をもつ。底面には径約25cm、深さ約60cmの円形の掘り込みが存在する。掘り込みの内部には板状の自然石が詰められており、中央部には間隙が存在する。構内北部に位置する大学会館敷地では同様な平面形態、規模、構造をもつ２基の土壙が検出されている。長軸方向を同じくし、尾根に直交して約５mの間隔をおいて並列する。検出地点は谷頭付近で、谷の埋積土からは早期に属すると思われる石鏃が出土しており、教養部複合棟敷地の例と比べて時期的に遡る可能性がある。吉田構内の南西約1.5kmに位置する小路遺跡[6]、約３kmに位置する西遺跡II[7]でも底面に円形の掘り込みをもち、落し穴と考えられる土壙が検出されて

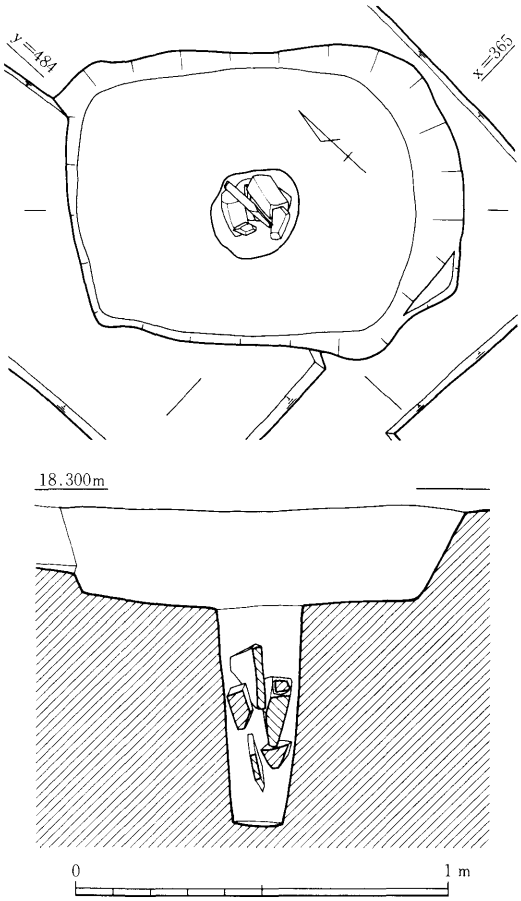


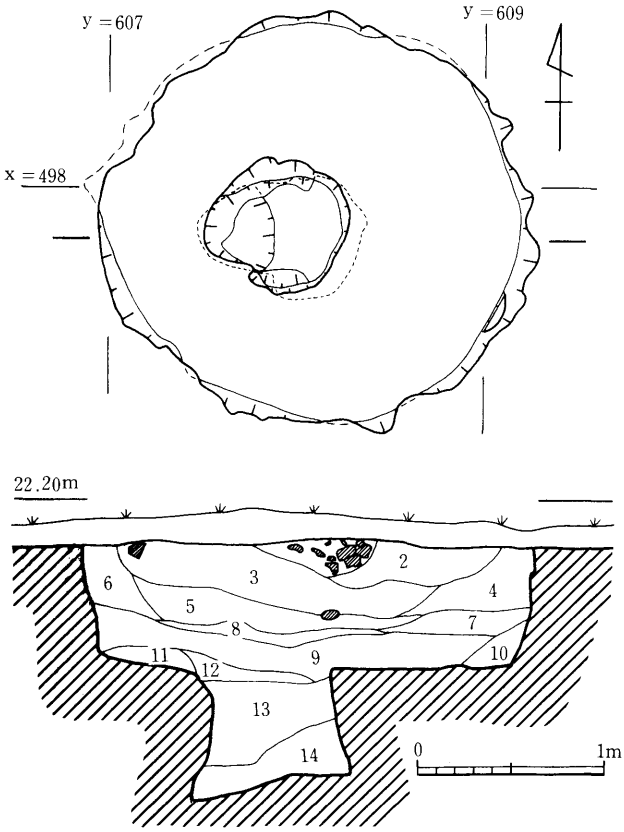
Fig. 82　落し穴実測図（吉田構内教養部複合棟敷地）

いる。調査者は平面形態、規模、構造の類似性から落し穴としての可能性は認めながらも、単一の埋積土、丘陵尾根上への立地、単独での存在などから落し穴としての機能に否定的である。検出面からの深さについては大学会館敷地、小路遺跡、西遺跡IIの土壙は、他の遺構の残存状況から後世の削平によって上面を大きくを削られていること、また、教養部複合棟敷地の落し穴の検出面は松尾征二氏が指摘するように[8]、落し穴の上部に堆積する小路層下部と呼ばれる堆積層の堆積過程で侵食、人為的な地表の改変を受けたと考えられることから、掘削時の深度を示すものではない。また、小路遺跡、西遺跡IIでの検出例が谷および河川を臨む丘陵斜面上に営まれていることは、水呑み場あるいはヌタ場を求めて集まる動物の獣道に意識的に掘削、配置されたものと考えられる。青森県鶉窪遺跡[9]、東京都霧ヶ丘遺跡[10]など、これまで東日本を中心に多数検出されている落し穴に普遍的にみられる立地条件である。また、福岡県門田遺跡（門田地区[11]）、同広田遺跡[12]などのように単独で存在する場合や福岡県立野遺跡[13]、同門田遺跡（辻田地区[14]）などのように、埋積土が単層の落し穴も存在する。したがって、小路遺跡、西遺跡IIの土壙も落し穴と要素を十分に備えていると思われる。

また、沖積面上に立地する遺構は、養護学校敷地（Ⓝ地点）の北端部で検出した晩期後半～終末の土壙がある。

遺物は大学会館敷地、同前庭部、本部2号館、教育学部実習棟、遺跡保存地区、教養部複合棟の計6地点で出土している。教養部複合棟を除く5地点では、弥生時代以降の遺物と混在しており、周辺からの流れ込みであるが、教養部複合棟敷地では晩期中頃の単純層からの出土である。なお、教養部複合棟敷地の所見ではこの遺物包含層の上位には刻目突

帯文土器の出現した晩期終末の谷状の落ち込みが検出されていることから、弥生時代以降の検出面である黄褐色粘質土で検出される縄文時代の遺構は晩期中頃～終末の時期が与えられることになった。[15] 松尾征二氏はこの黄褐色粘質土がアカホヤ火山灰に特徴的な火山ガラスを含んでいることを指摘[16]し、縄文時代中期～後期頃の二次堆積層であるとしたことはその傍証といえる。なお、教育学部実践センター敷地では姫島産黒曜石の大形剝片が出土しており、出土層順が教養部複合棟敷地の包含層と同一の色調、組成であることから晩期のものと考えられる。



1．暗茶褐色砂質土
2．暗茶褐色砂質土（1層より明るい）
3．暗茶褐色砂質土（2層より暗い）
4．明茶褐色砂質土（3層土多く混じる）
5．暗黄褐色砂質土（3層土含まない）
6．明茶褐色砂質土（4層より3層土少ない）
7．暗茶褐色砂質土（ブロック状の粘土を含む）
8．暗茶褐色砂質土（7層よりやや暗い，炭多く含む）
9．茶褐色粘質土
10．茶褐色粘質土（地山土混じる）
11．茶褐色粘質土（地山土多く混じる）
12．茶褐色粘質土（地山土少量混じる，9層より粘性強い）
13．暗茶褐色粘質土（地山土，黒褐色土混じる）
14．暗茶褐色砂質土（地山土混じる）

Fig. 83　弥生時代前期末～中期初頭の袋状竪穴実測図
（吉田構内大学会館前庭部）

以上のような遺構の分布、遺物の出土状態および周辺地形から、縄文時代の集落、特に晩期中頃以降の居住地は構内の大きく2地域にその分布が考えられる。一つは大学会館前庭部から第二学生食堂付近および教養部複合棟東方のいずれも閏面と呼ばれる標高約20～25m、周囲の沖積低地との比高差約1～2mの洪積段丘上、さらに一つは養護学校敷地周辺の沖積面に立地する集落の展開である。しかし、現在までのところ集落の存在を示す積極的な遺構は検出されておらず、今後の調査に負うところが大きい。

弥生時代

各時期の遺構が検出されている。

前期の遺構は前期末に限定され、それ以前の遺構は検出されていない。わずかに構内南部の野球場南東縁で竪穴住居跡1棟、構内北部の大学会館前庭部で土壙2基が検出されて

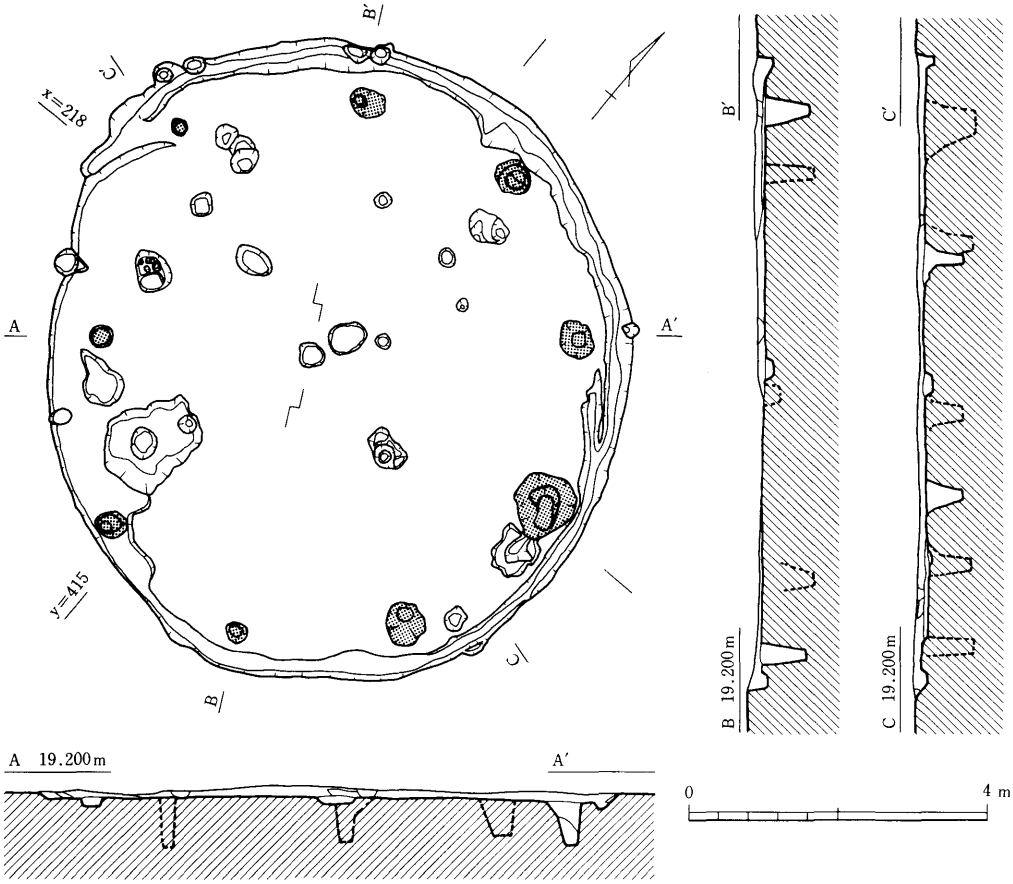


Fig. 84 弥生時代中期後半の竪穴住居跡実測図（吉田構内遺跡保存地区第９号竪穴住居跡）

いるにすぎない。土壙は前期末以降、県内で盛行する袋状竪穴で段丘の縁辺部に立地する。野球場南縁から南門（Ⓞ地点）付近の市道では暗褐色砂質土、粘質土を充填する落ち込みから前期末～中期初頭の遺物が出土している[17]。落ち込みの状況、埋積土から土壙もしくは溝と考えられ、構内南部に分布する前期の集落の南方への広がりを示唆する。

中期の遺構は構内南部に集中分布し、竪穴住居跡、土壙、溝などが洪積段丘の先端部に分布する。特に遺跡保存地区から教育学部校舎（Ⓟ地点）周辺にかけては竪穴住居跡が広範囲に分布し、前半～中頃３棟、後半７棟および中期のもの４棟が検出されている。土壙は前半～中頃５基、後半15基が分布する。遺跡保存地区では後半の竪穴住居跡の周囲を内径16～17mの規模で弧状に巡る上面幅１～1.2mの溝が検出されている。弥生時代における同時併存する住居間には最低約20m以上の距離が必要であると想定されており[18]、溝と住居の空間地には同時期の他の住居の併存は考えられない。また、この空間地には２基の土壙が並列し、住居に付設する土壙と考えられる。したがって、溝で囲まれた約250m²前後のエリ

アがこの地域周辺での中期後半の住居１棟あたりの一般的な占有面積として確保されたことが想定される。

また、ラグビー場（Ⓠ地点）東端では上面幅約5.5m、検出面からの深さ約1.1mの規模をもつ中期後半の大溝が検出されている。この大溝はその規模から用排水等の機能をもつ溝とは考えられず、遺跡保存地区周辺の集落の環濠である可能性が高い。構内南部での中期の遺構の多さに比べて構内北部、大学会館周辺の洪積台地上に立地する遺構は極めて少なく、袋状竪穴２基を含めた土壙３基が存在するにすぎない。段丘の最高所に位置する第二学生食堂以南、以西ではこの時期の遺物は出土しておらず、地形的にも大学会館、本部２号館、大学会館前庭部では、地山がそれぞれ北、西、南へ大きく落ち込んでおり、集落の立地面積は広くはない。南部構内での集落規模の優位性の反映と考えられる。

中期は外来要素の流入期でもある。そのひとつは下城式土器で遺跡保存地区で中期前半、後半の甕の出土がある。西遺跡[19]、内陸部の阿武郡阿東町突抜遺跡[20]では中期初頭、防府市大崎遺跡[21]では中期後半の下城式土器が出土しており、周防部では中期全般を通じて東九州の土器文化が断続的に流入したことを示している。須玖式系の土器も普遍的にみられる。

後期では中期の立地を踏襲し、構内南部の集落規模の優位性には変化は認められない。構内南部は前半では竪穴住居跡１棟、土壙６基、後半～終末・庄内併行期では竪穴住居跡５棟、土壙７基の分布状況を示す。北部は前半では竪穴住居跡は検出されておらず、土壙１基、後半～終末・庄内併行期では竪穴住居跡１棟、土壙２基がともに洪積台地の縁辺部に立地する。

また、この時期には系譜の異なる２つの土器文化が流入する。ひとつは口縁部が内弯して立ち上がる東瀬戸内系の高坏の出土で、共伴する土器から後期中頃のものと思われる。また、口縁部に凹線もしくは凹線状の沈線をもつ後期中頃の甕や複合口縁をもつ後期終末の甕など山陰系の土器の流入である。

したがって、弥生時代では前期の集落の立地は構内南北両地域とも洪積台地の頂部付近に立地しているが、中期になると南部の地域では緩やかな傾斜をもつ洪積台地の先端部付近にまで居住規模を拡大し、中期後半の段階では環濠をもつ集落を出現させる。さらに、環濠内には住居の附属施設として土壙２基を付設し、小規模な溝に囲まれた構造的には自立性の高い住居が存在する。構内南部地域の集落規模の優位性は後期まで引き継がれる。

古墳時代

構内南北両地域の集落に大きな変化がみられる。すなわち、弥生時代中期～後期にかけ

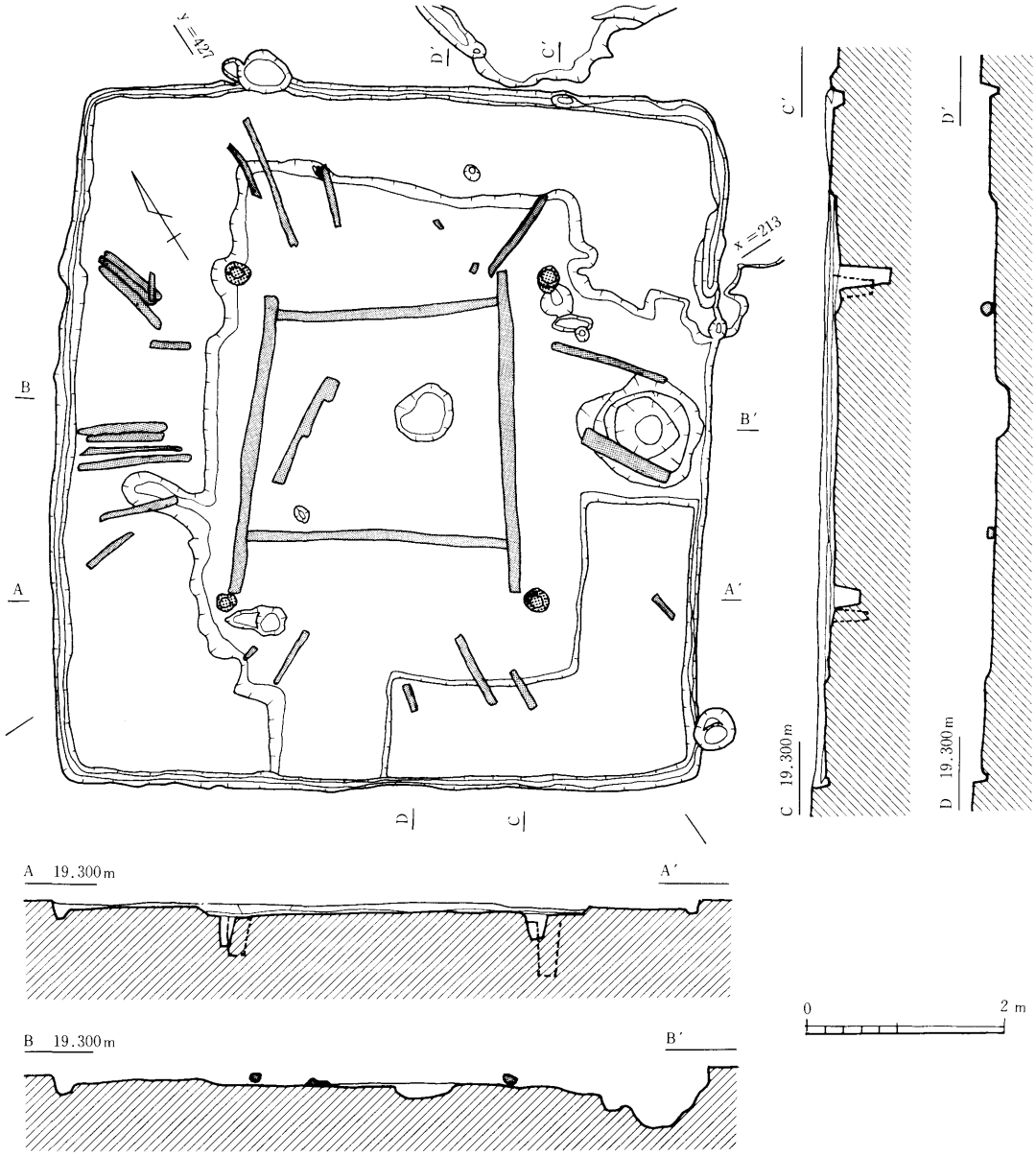


Fig. 85 弥生時代終末の竪穴住居跡実測図（吉田構内遺跡保存地区第13号竪穴住居跡）

て盛興した南部地域の集落は突然姿を消す。それと呼応するかのように構内北部の地域では洪積台地状の頂部平坦面には竪穴住居跡5棟、さらにその縁辺部に土壙、台地を刻む谷の谷頭部には井戸が営まれ、台地上を居住空間とする一様の居住環境を備えた遺構配置となる。この時期の集落は唯一この一帯に分布し、その後の構内遺跡の中核となる集落を形成するが、竪穴住居跡の検出された第二学生食堂付近は、統合移転に伴う削平によって旧

地形が大きく変化しており、往時の埋蔵文化財の分布状況を示していないと考えられる。集落の生産基盤となる可耕地はその全面の広大な沖積低地が求められたと推察される。

後期の集落もこの地域に存在しないわけではない。大学会館、本部２号館、図書館などの敷地では、遺物包含層中に６世紀後半の須恵器が含まれている。しかし、他の器種に比べて量的には極めて少なく、集落規模はさほど大きくなかったと推察される。この時期の竪穴住居跡はこれらの地域から北東約300mに位置し、北東から南西に開く谷を臨む標高約30mの馬木面上に立地する牛舎敷地（Ⓡ地点）で２棟が検出されている。構内でもこの時期の竪穴住居跡は少なく、集落は相対的に小規模で集住的要素が少ないと思われる。なお、構内の北方に位置する日吉神社の所在する丘陵斜面には６世紀後半～７世紀前半の横穴墓７基が存在する[22]。姫山から南へ派生するこの丘陵は、構内に接するあたりで急激に西側に落ち込み沖積面に達する。吉田構内でのこの時期の集落立地を考えると、日吉神社以西の沖積低地への展開は考えられないことから、横穴墓の造墓集団は吉田構内の集落の構成員である可能性が高い。しかし、横穴墓の基数と吉田構内の集落の住居数には隔たりがあまりにも大きい。したがって、当該期の集落は段丘上の未調査地域に分布している可能性が高く、少なくとも、古墳時代では集落の拠点が構内北部に移行していることが窺われる。

古代

現在までのところ、検出した遺構はないが、遺物包含層の出土資料をもとに類推可能である。構内南部の遺跡保存地区周辺では奈良時代以降、古代～中世の遺構は全くといってよいほど検出されず、出土遺物もほとんどない。集落の拠点となる地域は第二学生食堂－大学会館－同前庭部－本部２号館敷地等の所在する構内北部の洪積台地上である。これらの敷地から出土した須恵器の大半は８世紀～９世紀前半で、土師器は９世紀代に遡るものが含まれているが大半は10世紀後半～12世紀代である。また、12世紀中頃～13世紀前半の貿易陶磁器、10世紀代の黒色土器、12世紀～13世紀代の和泉型の瓦器椀も出土している。須恵器には円面硯（９世紀初頭）、墨書のあるもの（９世紀中頃）や銙帯（８世紀末～９世紀初頭）、付札など特殊な遺物が含まれている。これらは一般の集落ではもちえないもので、森田孝一氏が述べるように[23]中央集権的な律令国家体制に組み入れられた官衙的施設の存在が指摘されるが、現在までのところ関連する遺構は検出されていない。この時期の遺構は第二学生食堂の南東から家畜病院付近までの沖積低地を臨む台地上に馬蹄形状に展開していた可能性がある。以上のように、奈良・平安時代では構内遺跡の性格は大きく変化したと考えられる。

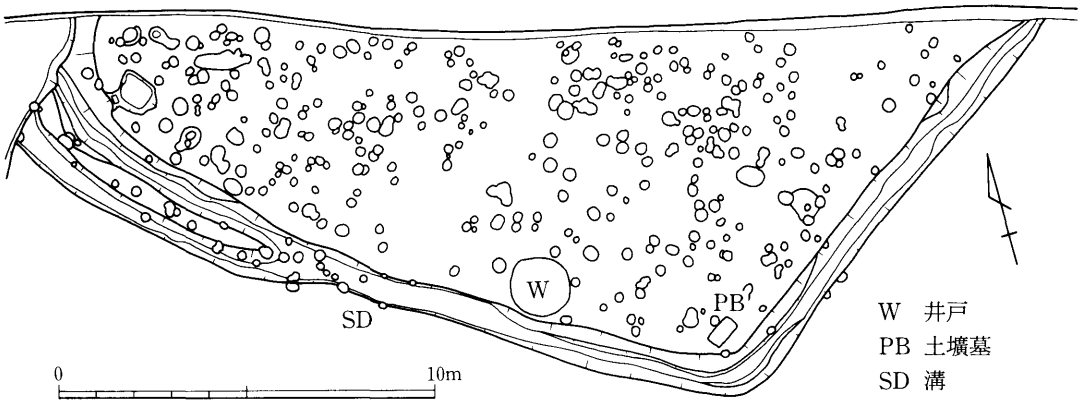


Fig. 86 室町時代の溝で囲まれた屋敷跡実測図（吉田構内本部２号館敷地）

中世 遺構は構内北部の本部２号館敷地で、溝に囲まれた16世紀末～17世紀初頭の屋敷跡がある。県下では防府市下右田遺跡[24]、防府市玉祖遺跡[25]などで認められるように、「コ」の字形に巡る溝の内部に井戸、土壙墓を併設する屋敷構造で、中世の富裕農民層の屋敷構えに共通する要素である。溝は完掘した一辺が約21mで、沖積低地を臨む標高約21mの丘陵上に占地する。溝の内側を完掘していないため、建物配置は明らかでないが、検出される柱穴の規模は一般のものと大差ない。

江戸時代

この時期の遺構の分布は詳しくは把握できていないが、沖積低地を臨む洪積段丘上に立地する教養部複合棟敷地で検出した17世紀代の掘立柱建物、井戸、埋甕土壙がある。掘立柱建物は１間×３間、１間×２間の小規模な２棟で、両建物に近接して素掘りの井戸、埋甕土壙が存在する。掘立柱建物の棟方向は直交し、井戸、埋甕土壙を併設する屋敷内の一連の建物と考えられる。吉田構内では中～近世の遺物は構内の各所で散発的に出土しているが、遺構は検出例が極めて少なく、集落復原への支障となっている。資料の増加を待って言及することにしたい。

小串構内

総面積は約11万２千m²で、平成３年度までの調査件数は21件である。昭和57年度以前の段階では遺跡の存在は全く知られておらず、同構内で最初に行った体育館敷地で旧石器時代および室町時代の遺物が出土したことで遺跡として周知されるに至った。小串構内は宇部市街地の北辺、埋積谷や小盆地を開析しつつ南流する真締川中流域の右岸に位置し、真締川による洪積台地の侵食によって形成された標高1.5～３mの沖積低地に立地する[26]。真締川流域には遺跡は少なく、周辺の低丘陵および段丘上に弥生時代から古墳時代の遺跡が散

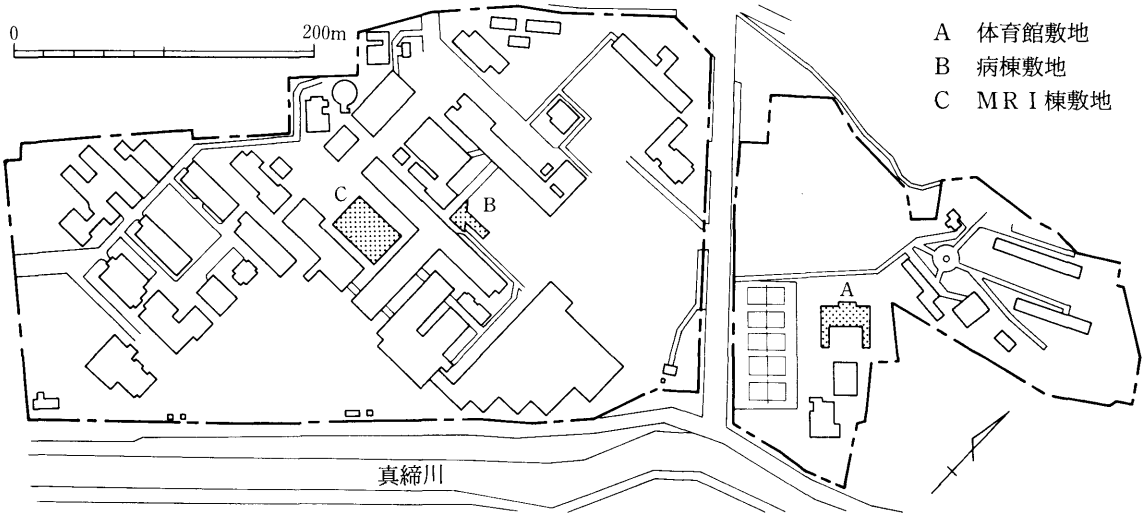


Fig. 87 小串構内旧石器時代の遺物出土地点位置図

在する[27]。これまでの調査での出土遺物は旧石器時代と室町時代との大きく2時期に大別されるが、各遺物の出土層順は旧水田耕作土、床土もしくは周辺の高所からの流れ込みによる二次堆積層からである。以下では、小串構内での遺跡の性格を反映すると思われる3地点での調査成果を述べる。

体育館敷地

小串構内で遺跡が周知されるに至った調査である。調査地点は構内の東端部に位置する。地表面の標高は約1.5mで、旧水田耕作土、床土の下位に上位から青黄灰色粘土、青灰色粘土、植物遺体を含む青灰色粗砂が堆積する。出土遺物には旧石器時代と室町時代のものがある。旧石器時代に属するものにはナイフ形石器、削器、剝片、細石核など5点があるが、地表面から約1.8m下位に堆積する青灰色粘土から出土した削器を除いてすべて旧水田耕作土あるいは床土からの出土である。出土した石器はいずれもチャート製で、このうち、ナイフ形石器は切出形を呈し、横長剝片を素材とする一側縁加工のものである。また、細石核は2点あり、小円礫を素材とし、原礫面を打面とするものと打面調整された平坦な単設打面をもつものとが存在する。後者は角錘状の最終形を呈するが、打点の方向は一定していない。

室町時代の遺物には床土、青黄灰色粘質土から出土した土師器、瓦質土器、磁器などがあるが、いずれも摩滅が激しく小破片が多い。床土以下の出土遺物は層位的には区分され、下位の堆積層に旧石器時代の遺物を包含するが、その堆積層はグライ度の強い不安定な二

次堆積層である。

病棟敷地

調査地点は構内のほぼ中央部に位置し、初めて旧石器時代の単純層を検出した。地表面の標高は約2.6～2.7mで、旧耕作土、床土およびそれ以下のオリーブ灰色もしくは灰色系の色調を呈する砂質土、砂の堆積層の上位では、体育館敷地同様、旧石器時代と室町時代の遺物が混在する。しかし、地表面から約140cm下位に堆積する灰色砂層は旧石器時代の遺物を包含する単純層で、ナイフ形石器、削器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、敲石、剥片など67点が出土した。調査区内での平面的・垂直的な集中部は認められない。

ナイフ形石器は2点あり、縦長剥片を素材とする二側縁加工のものである。うち1点は玻璃質安山岩製で、背面側は対向する剥離面で構成されており、両設打面石核の存在が考えられる。共伴する剥片は背面側の剥離面の方向が主要剥離面の打撃方向とほぼ同じ面と約90度ずれる剥離面をもつものが多く、4～5枚の剥離面で構成されている。また、側面に原礫面を残す小ぶりなものが多く、拳大の円礫状の原石の存在が予想される。打面は原礫面を打面とするものが多く、調整打面をもつものは少ない。使用される石材は、チャート、メノウ、玻璃質安山岩、黒曜石（姫島産・腰岳産）、水晶、蛇紋岩などでチャート、メノウ、蛇紋岩の占める割合が多い。通称宇部台地と呼ばれる洪積層からなる3段の海岸段丘[28]上に立地する、旧石器時代の遺跡群（宇部台地遺跡群[29]）の石器類の石材も同様な石材選択状況で大きな差異はみられない。なお、姫島産黒曜石は宇部台地遺跡群では縄文時代以降の石器素材として用いられており、病棟敷地の一部の石器は縄文時代に遡る可能性もある。

ＭＲＩ棟敷地

調査地点は構内のほぼ中央部、病棟敷地の南西約40mに位置し、旧石器時代と歴史時代の遺物が出土した。旧石器時代の石器群は削器、細石刃、二次加工のある剥片、剥片、石核など計12点で、病棟敷地での出土点数に比べて少ない。出土層順は旧耕作土、床土およびそれ以下の灰色系の色調を呈するグライ度の強い堆積層である。旧石器時代の単純層は認められず、石器を包含する灰色系の堆積層には歴史時代の遺物が混在し、周辺からの流れ込みによるものと考えられる。石器類は背面と主要剥離面との剥離方向が約180度ずれるものや背面が対向する剥離面によって構成されるものがあり、両設打面の石核の存在が予想される。また、打面は原礫面を打面とするものと調整打面をもつものとがある。使用される石材はチャート、姫島産黒曜石、玻璃質安山岩、蛇紋岩、流紋岩などで、出土点数に比

小串構内

Fig. 88　旧石器時代の遺物実測図（小串構内病棟敷地）

べて多種にわたり、病棟敷地同様、多様な石材を用いている。このうち、流紋岩を石材とする細石刃は背面に原礫面を残す第一次剥片で、宇部台地遺跡群でも類例がほとんどみられない石材である。剥片長から小ぶりな円礫素材の細石刃核が想定される。

以上述べたように、小串構内は県内では極めて少ない旧石器時代の遺物が出土する遺跡である。石器類は必ずしも同一時期の遺物包含層からの出土ではないため、石器組成を十分には反映しないが、ナイフ形石器文化期および細石器文化期大きく2時期に区分される。器種はナイフ形石器、削器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、敲石、細石刃、石核、細石核などで、剥片類が大半を占める。使用される石材も宇部台地遺跡群同様、多種にわたる。なかでもチャートの占める割合が約半数で、蛇紋岩を除くとその他の石材は極めて小量である。特に、流紋岩は宇部台地遺跡群でも南方遺跡[30]に1点だけみられる石材である。石器類は原礫面を打面とし、素材面に原礫面を残すものが多く、打面調整が行われるものは少ない。宇部台地遺跡群では姫島産黒曜石は旧石器時代の石器群には使用されておらず、小串構内の一部の石器は縄文時代に属するものが含まれている可能性がある。

現在までのところ、石器類は構内の東部および中央部で出土しており、海抜標高約1.5m前後に堆積する灰色系の砂層に包含されている。この包含層は真締川に沿って形成された谷底平野に堆積する高所からの二次堆積層で、プライマリーな堆積状況を示していない。小串構内の北方には北から南へ延びる標高約10mの低丘陵が存在し、構内で出土する石器群はこの丘陵上に所在が予想される旧石器時代の遺跡からの流れ込みと考えられる。同様な遺跡立地は小串構内の北東約1.2kmの真締川右岸に所在する川津遺跡[31]があげられる。構内には上記3地点での旧石器時代の遺物包含層と同様の色調、粒度、組成をもつ堆積層が普遍的に分布しており、堆積の要因などから今後の調査によって出土量が増加するのは確実であろう。

常盤構内

侵食谷を臨む標高約40mの洪積台地上に立地し、総面積は約13万2千m²である。東方約300mの同一段丘面上には旧石器時代から縄文時代早期の遺物が採集されている常盤池遺跡[32]が所在する。常盤構内での調査は立会調査が中心で、平成3年度までの調査件数は9件である。立地的には構内に旧石器時代から縄文時代の遺跡が分布する可能性は十分に考えられるが、現在までのところ、構内の中央部からやや南に位置する会議棟敷地で須恵器、磁器が出土しているにすぎない。構内の旧地形は北部が北から南へ、西部が東から西へ樹枝状に張り出した洪積台地の頂部および基部にあたり、構内東部の学生食堂付近が台地の先端部付近

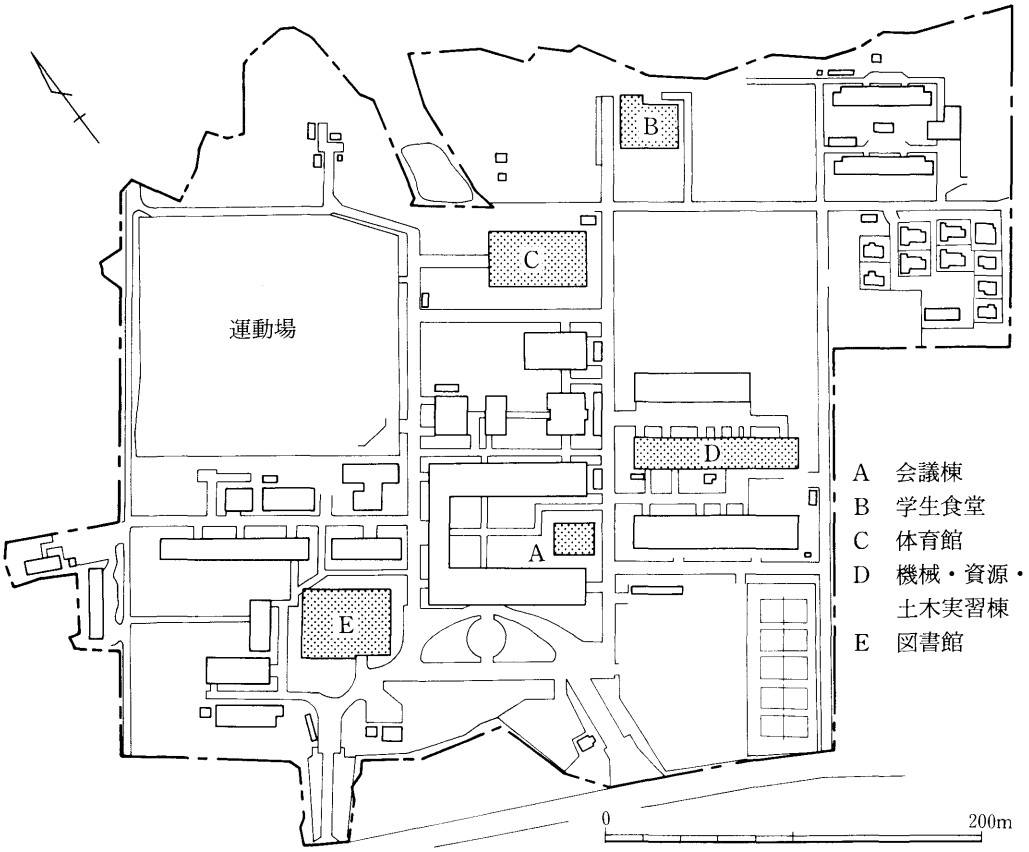


Fig. 89 常盤構内配置図

にあたる。構内の洪積台地は小規模な侵食谷に開析され、特に、西側の運動場の大半はこの侵食谷を埋積して造成されたものである。常盤構内の現況は基本的には東から西へ延びる洪積台地を北から南へ向かって階段状に4段にわたって平坦に造成されている。すなわち、上位から体育館以北の地域、体育館と機械・資源・土木実習棟との間の地域、機械・資源・土木実習棟と図書館北半部との間の地域、および図書館南半部以南の地域の各平坦面によって構成されている。各平坦面では構内造成時の埋め土の直下が赤褐色あるいは黄褐色粘質土の洪積層で、平坦面の境界崖面には造成によって洪積層が露出しており、削平が広範囲に及んでいることを示している。調査は各平坦面で行っているが、いずれも調査規模が小さく、構内の埋蔵文化財の有無を提示できる調査成果は得られていない。

亀山構内

亀山構内は吉田構内の北約3kmの山口盆地の北西部に位置する。周辺の山々を開析する

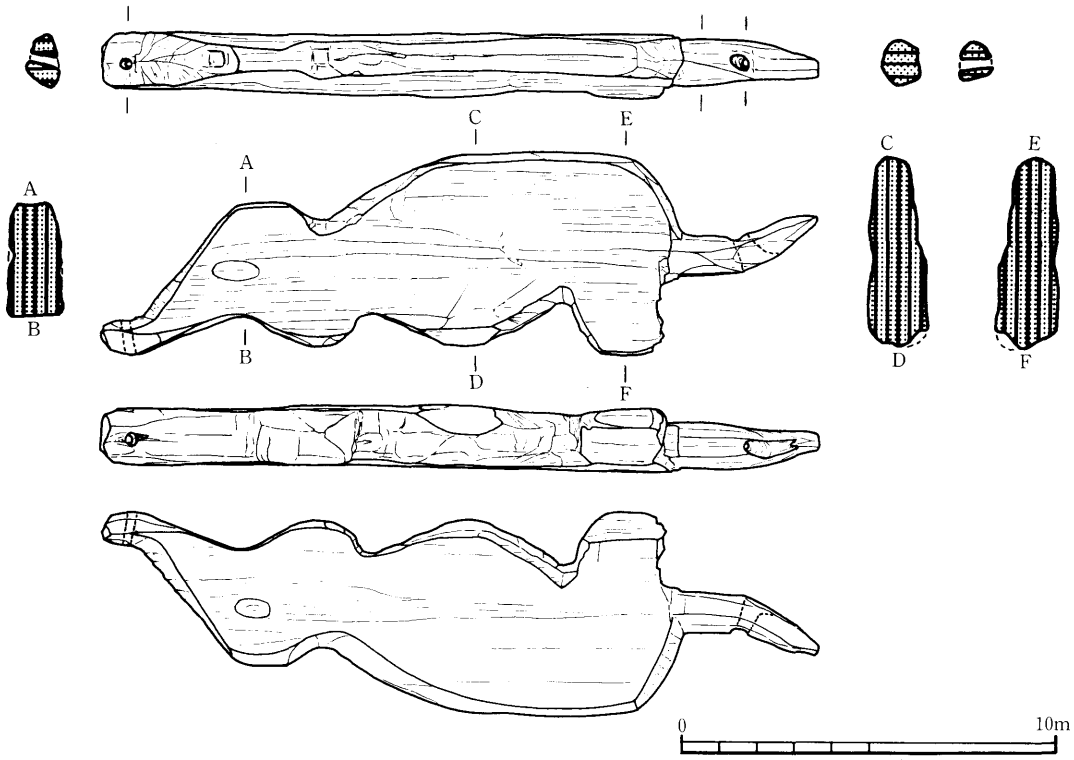


Fig. 90　鳥形木製品実測図（亀山構内教育学部附属山口小学校敷地）

河川の出口付近には小扇状地が盆地床に向かって張り出し、山麓帯には扇状地状の台地が形成されている。亀山構内はこの山口盆地の北西部に位置する標高約340mの鴻ノ峰の南麓裾部およびその前面に広がる沖積低地に立地[33]し、教育学部附属幼稚園・同小学校と附属中学校の敷地の総称である。

附属幼稚園・同山口小学校敷地

総面積は約2万5千㎡で、平成3年度までの調査件数は9件である。敷地内は北側の上位から標高約36mの幼稚園敷地、標高約34mの小学校東側の校舎敷地、および標高約33mの小学校西側の運動場敷地の大きく3段の平坦面で構成されている。遺跡の存在が周知されるに至ったのは昭和58年度のことで、小学校西側の運動場での溝状遺構と竪穴住居跡の検出が契機であった。

溝状遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭のもので、運動場の北西端部に位置する。地表面から約20cm下位で検出したが、トレンチによる調査のためその規模は明らかにし得ない。出土遺物は壺、甕、高坏などの土器類のほかに最下層の黒色粘土から自然木などとと

亀山構内（附属幼稚園・同山口小学校敷地）

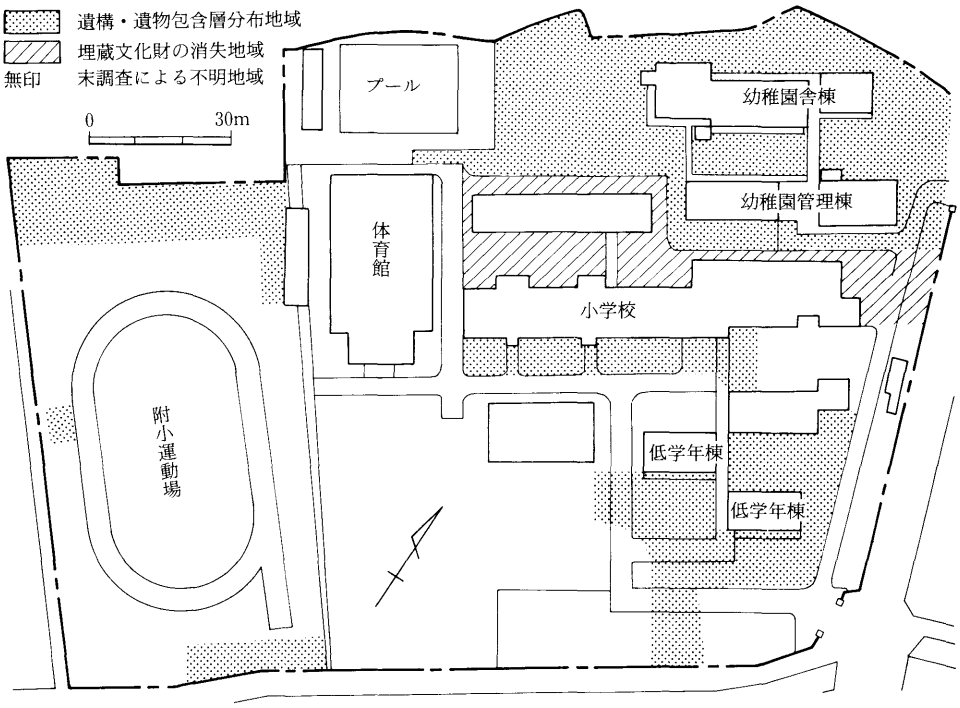


Fig. 91　亀山構内（教育学部附属幼稚園・同山口小学校）の埋蔵文化財分布図

もに出土した鳥形木製品、鋤、鍬、案などの木器がある。木器は農具、日常用具、祭祀用具で構成されており、このうち、鳥形木製品はその使用方法を理解できる好例で、尾の部分が竿に装着されたままの状態で出土した。偏平な板状を呈し、頭部は比較的大きく水鳥を思わせるやや長い先細りの嘴が表現されている。腹部はやや丸みをおびてふくらみ、比較的安定した脚部を造出する。尾部は長く、中位から後方は上位に屈曲し先細りとなる。嘴および尾部には穿孔が施されており、出土状況から尾部の穿孔は竿への装着時の目釘穴と思われる。竿は下端部が欠損しているが現存長106cm、最大径2.9cmの直線的な枝木を用いている。小枝は打ち払われているが表面の大半部分には樹皮が残存しており、全体の表面加工はほとんどなされていない。

竪穴住居跡は運動場の南東端部に位置し、地表面から約70cm下位で検出した。平面形態は方形系統で床面までの深さは検出面から約20cmである。住居北辺の壁面には住居内部に向かって黄色粘土が突出しており、その内側には焼土が認められることから竈と推定される。出土遺物から５世紀前半頃のもので溝状遺構とは時期が異なる。なお、竪穴住居跡は東方約25mの地点でも検出されており、弥生時代後期後半から庄内併行期のもの２棟、中～後期のもの１棟がある。したがって、幼稚園・小学校敷地では弥生時代中～後期、後期後半

から庄内併行期、および布留式併行期の少なくとも３時期の住居が営まれていることになる。幼稚園敷地の北端部で検出した河川跡、小学校校舎敷地の中央部付近の北側の低学年棟の南で検出した、東から西へ開く谷状の落ち込みからも同時期の遺物が出土していることもその傍証である。この谷状の落ち込みは、運動場の中央部付近に黒色もしくは黒褐色の砂質土、砂が堆積していることから、さらに運動場西端まで分布している可能性があるが、現段階では特定できない。居住地は運動場南半部から小学校校舎敷地の地域が考えられ、主体となる時期は庄内併行期から布留式併行期で、比較的短期間のうちに営まれた集落の存在が予想される。周辺では鴻ノ峰南麓の丘陵上に茶臼山墳墓群[34]、鴻ノ峰古墳群[35]、白石古墳群[36]など、弥生時代終末から古墳時代にかけての埋葬跡が多数存在するが、確実な集落跡は小学校敷地が唯一の検出例である。

なお、幼稚園敷地の下位に位置する小学校敷地の北端部から中央部付近にかけての地域は、地表面から約40cm下位まで客土されている造成土の直下が同構内の遺構面である黄褐色粘質土で、構内の他の地域とは大きく土層の堆積状況が異なる。現在の地勢からこの付近の地域は鴻ノ峰から派生する丘陵が削平を受けているものと思われ、遺構が消失している可能性が高い。なお、この他に遺構には伴わないが、縄文時代晩期、平安時代中期の黒色土器Ａ類、室町時代後期の大内氏館跡でいう「Ｂ式土師器[37]」が出土していることも付記しておく。

附属山口中学校敷地

総面積は約１万６千㎡で、平成３年度までに５件の調査を実施している。これまでの調査は校舎の周囲に集中しており、東半部については不明な点が多い。校舎・運動場は標高約28mで地表面は平坦に近いが、構内北西部に所在するプール敷地はこれより約１m上位に位置する。遺構は南北に長い校舎の南半部周辺で北東－南西に走行する溝状遺構２条が検出されているが、時期を決定できる遺物は出土していない。しかし、校舎西側の地域では地山の南側への落ち込み部分に庄内併行期を主体とする遺物包含層が堆積している。包含層は層厚約30cmで地表面から約30cm下位で検出される。３層に分層されるが、各包含層の出土遺物には時期差は認められない。出土遺物には壺、甕、鉢、高坏、支脚などがあり、在地系、山陰系、畿内系など系譜の異なる３種の文化要素をもつ土器群で構成されている。プール敷地東端部付近にも同時期の遺物包含層が堆積している。西側校舎の東側では地表面から約30～40cm下位で黄褐色粘質土の安定した地山が検出されており、包含層上面での検出面の標高と大差ない。したがって、遺物包含層は西側の校舎およびプール敷地付近以

亀山構内（附属山口中学校敷地）

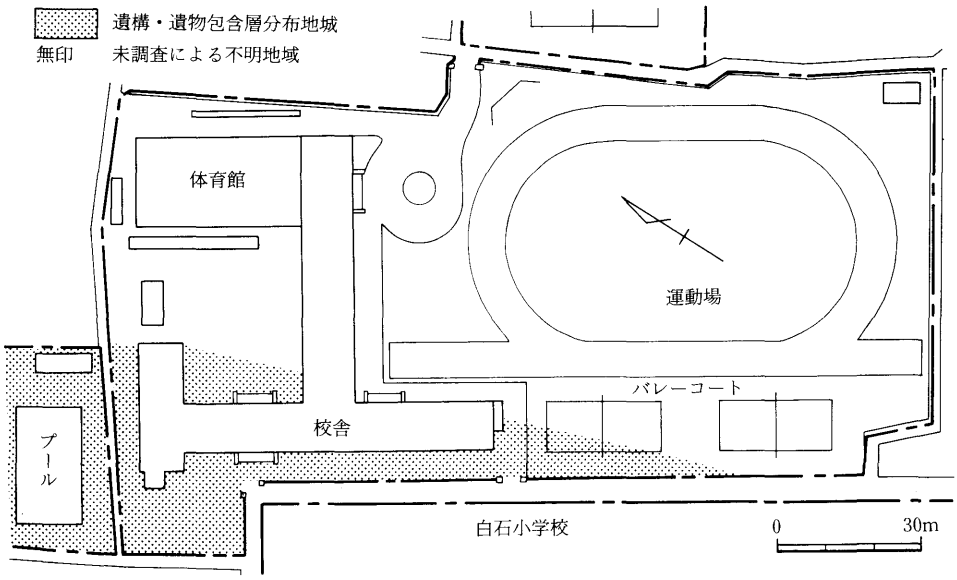


Fig. 92　亀山構内（教育学部附属山口中学校）の埋蔵文化財分布図

西および以南から白石小学校にかけてその分布範囲をもつものと考えられる。

また、庄内併行期の遺物包含層の下位には、縄文時代晩期の遺物包含層が堆積している。周辺での縄文時代の遺跡は、中学校の東に位置する標高約65mの亀山を隔てた沖積扇状地に立地し、河川による扇状地を形成する段階での二次堆積層に遺物を包含する後河原（松柄）遺跡[38]や、洪積台地もしくは丘陵上に立地する桜畠遺跡[39]などが知られているにすぎない。中学校敷地は東に位置する亀山によってこれらの河川の堆積作用を受けにくい地理的条件にあることから、上記の遺跡とは異なる低地指向型の縄文時代の遺跡が存在する可能性がある。その分布は立地等から構内北西部から以北の地域が想定される。運動場の敷地はほとんど未調査で地下の状況は明かでないが、中学校敷地の東半部、体育館から運動場にかけての地域は小学校敷地での遺構の検出面である黄褐色粘土の分布が予想され、庄内併行期の遺構の埋存している可能性がある。

光構内

山口県の南東部、光市室積浦に所在する教育学部附属光小・中学校構内とその周辺に展開する縄文時代から室町時代を主とする遺跡で、「御手洗（みたらい）遺跡」として周知されている[40]。室積の海岸部には、その西に位置する島田川の排出する土砂の東側への漂移現象によって砂浜が発達し、光構内の存在する室積半島は旧来島であった峨嵋（がび）山との間に形成された陸繋島である。光構内はこの峨嵋山北縁の御手洗湾に面した標高約3.5mの砂州に立地する[41]。敷

山口大学構内の埋蔵文化財の分布

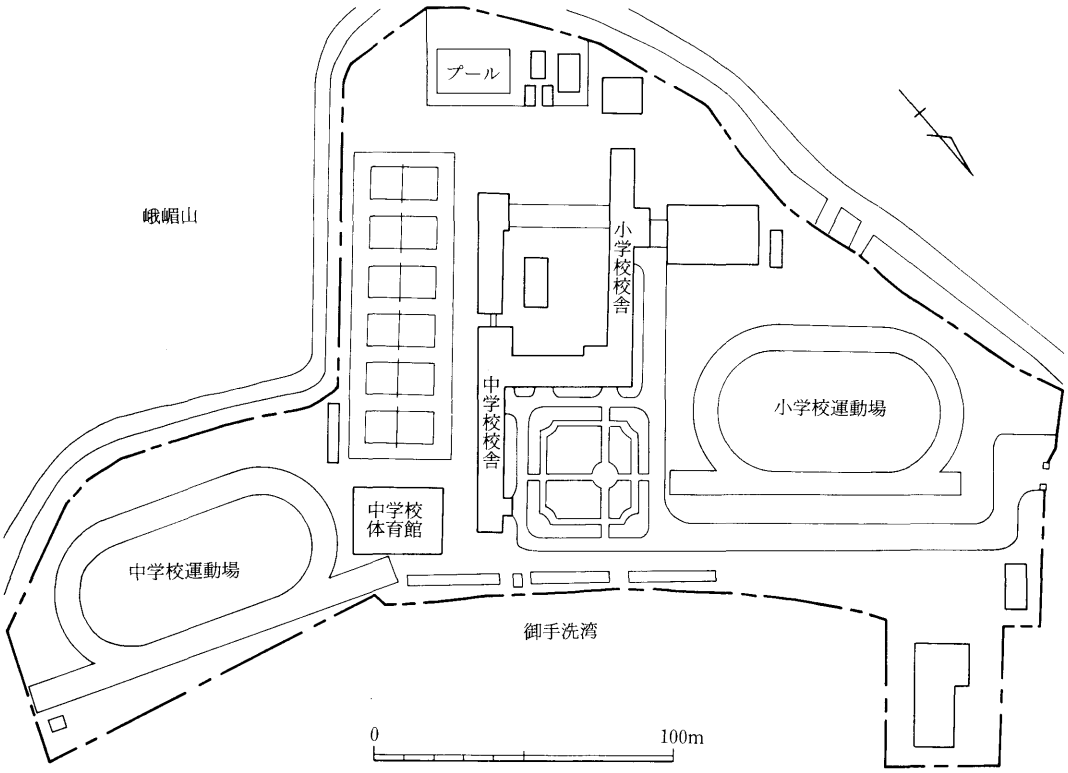


Fig. 93　光構内の埋蔵文化財分布図

地総面積は約4万2千m²である。

構内での遺物の出土が最初に報ぜられたのは昭和7年のことで、以後、昭和10年までに弥生土器や太形蛤刃石斧などが採集されていた。遺跡が周知されたのは昭和40年に中学校の体育館新営工事の際の遺物包含層の発見が契機であった[42]。包含層は黒褐色を呈する海成砂礫で、縄文時代晩期から古墳時代さらには中世におよぶ多量の土器を包含する。層厚は約50cmで、包含層の上下両面の堆積深度がいずれも南東から北西、すなわち中学校運動場側から小・中学校校舎敷地の方向へ下降しており、南東から北西への漸移的な旧地形の下降が予想された。

光構内では平成3年度までに13件の調査を実施している。平成元年度までの調査は御手洗湾縁辺の地域での調査が主として行われ、昭和40年調査時に検出された遺物包含層は認められなかったが、地表から約1.5m下位で19世紀代の石垣状遺構を検出した。光構内には毛利藩政時代に藩の御蔵会所などが設けられ、商業地、港町として栄えたとされており[43]、これらに関連する港湾施設の存在が想定される。

平成２・３年度は構内の内側で調査を行った。平成２年度は構内の北部および北西部の小学校運動場敷地で調査を行い、運動場北縁、東縁で遺物包含層を検出した。出土遺物は縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土錘など、縄文時代および古墳時代から鎌倉・室町時代のものである。出土遺物の時期的な組成は中学校体育館敷地と大差ないが、包含層は黄褐色もしくは赤褐色系の砂で、その色調、組成が大きく異なる。また、包含層は地表から約40～50cm下位で検出されており、中学校体育館敷地で検出された包含層上下両面の北西への下降傾向とは様相を異にしている。色調、堆積深度から両者は異なる堆積層である。また、小学校運動場東縁の南端部に位置する体育館付近で、光構内では初めて遺構を検出した。上下２面の検出面をもち砂層を掘り込む５基の土壙である。土壙は狭い範囲に近接して掘削されており、また、下面の土壙は切り合い関係にあることから少なくとも３時期の遺構が存在する。出土遺物が少なく時期はよくわからないが、土壙の上層に堆積する遺物包含層からの出土遺物から６～７世紀頃のものと思われる。なお、土壙の掘り込み面が砂層であることから、貯蔵等を目的とし日常生活に密接した一般の土壙とは性格を異にするものであろう。

平成３年度は構内の南端部のプール東側で実施した調査でも溝状遺構、土壙などを検出した。遺物包含層は地表から30～40cm下位に堆積する褐色系の砂質土で、同一層に古墳時代、鎌倉時代および江戸時代などの大きく時期の隔たる遺物を包含する。調査地点はその南側に位置する峨嵋山の谷あいの延長部分にあたり、出土した遺物はその谷あいを臨む丘陵上に営まれた当該時期の遺跡からの流入品と考えられる。また、中学校運動場の南端部でも地表から約50cm下位に堆積する黄褐色系の海成砂層から鎌倉時代の遺物が出土していることからも光構内の遺物包含層の堆積が一様でなく、数層におよぶことを示唆している。

光構内でのこれまでの調査は点的な調査に終始しているが、遺物包含層は埋蔵文化財地図に示したように構内全域に分布範囲をもつことが予想される。また、色調の異なる遺物包含層の堆積層順、遺物様相、小学校体育館付近で検出した古墳時代を主とする土壙群の性格、その分布範囲や他の遺構の有無など構内に分布する遺跡の性格の解明とあわせ将来の残された課題である。しかし、構内の堆積層は砂あるいは砂礫で構成されていることから居住の適地とは考えられず、遺跡の主体は峨嵋山もしくは月待山北麓の丘陵上に存在するものと思われる。なお、同様に砂堆上に立地する遺跡として宇部市月崎遺跡[44]、山口市美濃ヶ浜遺跡[45]などがあり、両遺跡では洪積台地の上部に堆積する海成砂礫層に縄文時代前期以降の遺物を包含している。光構内でもその南に位置する峨嵋山の一部は洪積台地を形成

しており、両遺跡に共通する立地条件にある。しかし、光構内では美濃ケ浜遺跡のように製塩土器の出土例はなく、出土遺物の量、質からも半農半漁の小規模な集落が近傍一帯に存在することを示唆している。

4　遺跡の整備・活用に向けて

以上、述べてきたように山口大学構内遺跡は山口市に所在する吉田・亀山構内、宇部市に所在する小串、常盤構内、および光市に所在する光構内の各キャンパスに分布する旧石器時代以降の複合遺跡の総称である。なかでも、吉田構内は弥生～古墳時代の集落跡として、昭和41年の統合移転工事に伴う調査以後、継続的に調査が実施されており、埋蔵文化財の分布状況を知る調査データが他の構内に比べて比較的蓄積されている構内である。この吉田構内の南西部には計21棟におよぶ弥生～古墳時代の竪穴住居跡が分布しており、教育・研究資料として吉田構内を代表する遺構分布地域であることから「遺跡保存地区」として現地保存されている。しかし、各遺構は調査後再び埋め戻され公開・活用は全くなされていないのが現状である。本稿は、空間を単なるスペースとしてではなく、新しい付加価値をもち、かつ現代的な利用形態がはかれる形で機能させるためのひとつの方法を提示するものである。

遺跡の現地保存はそれ自身、保存措置として極めて重要であるが、それとともに学内の環境整備の一環として、遺跡の構成要素である各遺構を修復し、遺跡本来の機能を表現できるように整備することによって、積極的な利用形態を図ることもひとつの効果的な保存、活用措置といえるのではあるまいか。そのために公共施設として整備し、歴史を追体験できる現代的な文化ゾーンとして公園化するのもひとつの有効な手段と考えられる。それには、住居の構造、形式の時間的な変遷過程が歴史的に理解できるように整備することが必要であろう。また、それとともに、教育・研究にふさわしい快適な居住空間を確保するために、遺跡が立地した往時の生活環境の復元を含めた植樹・植栽などの環境整備によって、憩いの場としての機能をもたせることも重要であろう。さいわい、「遺跡保存地区」は第一学生食堂や運動場、サッカー場などの福利厚生施設に隣接しており、環境整備によって遺跡とマッチングしたゾーンとして十分に機能しうるであろう。すなわち、歴史を単なる概念としてではなく実感、追体験できる、学習機能を付与した現代的な歴史ゾーンとして開放的に復原し、遺跡のリハビリテーションをはかるとともに、ワーキングミュージアムとして活用することである。

そのための基本作業として、

1　稲作受容期から古代国家成立までの集落構造、住居形式、遺跡保存地区の歴史的な位置や性格について通史的な視角からの体系的な検討

2　『土地分類基本調査』に基づく地形、表層地質、土壌分類による遺跡立地の検討

3　遺跡保存地区から出土した植物遺体の同定、花粉分析、植生調査などによる歴史景観の検討、復原

4　遺跡保存地区に分布する弥生時代から古墳時代の21棟の竪穴住居跡のうち代表的な5棟および古墳時代の河川跡を平面表示し、平面表示修景モデルの創出

を試みる。

具体的な計画・方法については後述するが、その前に平面表示する5棟の竪穴住居跡の特徴について概述する。

第7号竪穴住居跡

遺跡保存地区の南西部に位置する弥生時代中期の住居跡。平面形態は円形で、上面径約3.4m、床面積約35m²の規模をもつ。主柱は6本で、比較的壁面に近接して配置されている。炉跡は床面西部に偏在し、周壁に沿って壁溝が巡る。

第9号竪穴住居跡

遺跡保存地区の中央部からやや西に位置する弥生時代中期後半の住居跡。平面形態は楕円形状を呈する円形で、上面径約7.8～8.6m、床面積約48m²の規模をもつ。主柱は9本で、約2.3～3m間隔で、周壁に極めて近接して配置されている。また、中央穴を挟んで2ヶ所に支柱穴が認められる。壁溝はほぼ全周に巡る。西部では壁溝が途切れるとともに住居外への張り出しが存在し、出入口としての機能をもつ施設が想定される。

第13号竪穴住居跡

遺跡保存地区のほぼ中央部に位置する古墳時代前期の住居跡。平面形態は方形で、東西各辺約7.6m、南辺約7.1m、北辺約7.2m、床面積約54m²の規模をもつ。主柱は4本で、竪穴住居の平面形態と相似形をなして方形に配置される。屋内施設として周壁に沿ってベッド状遺構が巡るが、東・南各辺の中央部付近で途切れている。東辺部ではこの部分に周壁に接して、炭化物の充填した径約1.3mの平面形態円形の掘り込みが認められた。設置場所、性格、住居の時期などからカマドが出現する前段階の施設と考えられ興味深い。

また、この住居は火災住居で、床面上には桁および梁と考えられる12～15cmの4本の炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で検出されている。その周辺には棰木と推定される約20本の炭化材が床面中央に向かって放射状に確認されている。さらに、方形に組ま

れた桁・梁の内部の床面には棰木に比べてひとまわり大きい炭化材が認められ、その規模、検出地点、桁との重複関係などから主柱の一部と考えられた。桁・梁の検出状況、住居の平面形態、主柱配置などから寄棟造屋根が想定され、竪穴住居の上屋構造を知る貴重な資料である。

第19号竪穴住居跡

遺跡保存地区の南端部に位置する弥生時代終末の小形の住居跡。平面形態は長方形で、東辺約4.8m、西辺約5.5m、南北各辺約3.5m、床面積約19m²の規模をもつ。主柱は2本で、屋内施設として東西両辺の中央部を除いてベッド状遺構が巡る。西辺部のベッド状遺構が途切れた床面には平面形態長方形の掘り込みが存在する。壁面は熱変していないが、内部には木炭が充塡しており、炉跡に相当する施設と考えられる。この掘り込みに対峙する東辺中央部が出入口と想定される。

第20号竪穴住居跡

遺跡保存地区の南端部に位置する弥生時代中期前半の大形の住居跡。平面形態は楕円形で、上面径約6.8〜7.8m、床面積約44m²の規模をもつ。主柱は壁面に沿って8本が配置されるが、さらにその内側には同心円状に5本の補助柱が存在する。壁溝は存在しない。南端部には幅約1.1m、長さ約20〜35cmにわたって住居外に向かって階段状に高くなる張り出しが存在し、出入口としての機能が想定される。

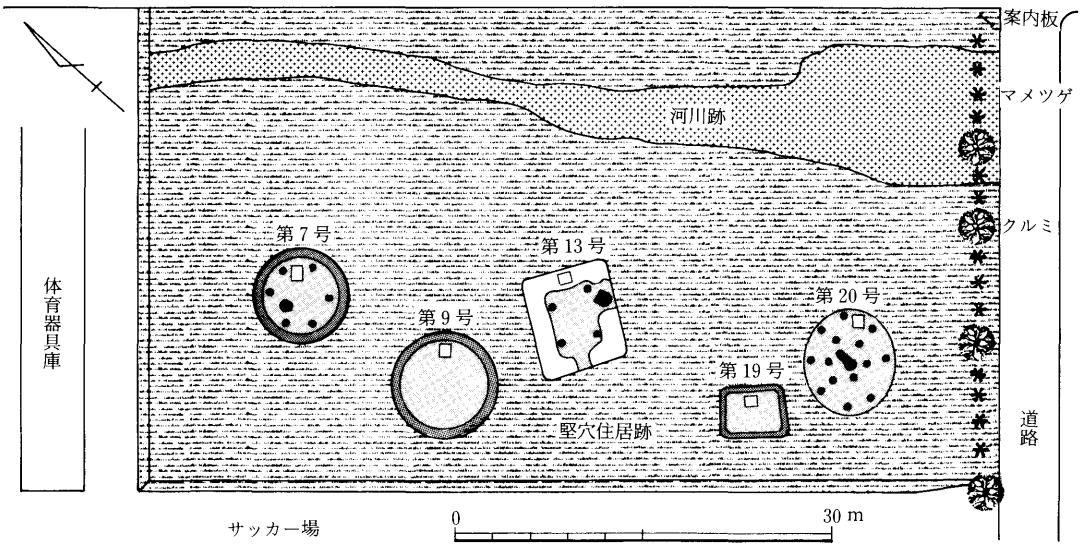


Fig. 94　吉田構内遺跡保存地区の整備試案

次に、具体的な整備案について述べることにする。

(1) 竪穴住居跡の修景表示

5棟の竪穴住居のうち第7・13・20号の各竪穴住居跡は、現地表面よりやや上位に平面復原する。若干の基礎工事を伴うが、遺跡保存地区の現地表面は覆土により遺構面から約45～50cm上位に位置し、整備に伴い遺構面を損傷しない範囲内での軽微な掘削は可能である。住居の平面形態、柱穴配置、炉跡・ベッド状遺構・壁溝などの屋内施設等はカラータイルを用い、色調の相違により平面表示し、床面構造を表現する。復原位置は、調査結果をもとに個別の遺構の検出された直上とし、各遺構には床面上にタイル転写により平易な文章で解説板を設置する。

また、第9・19号竪穴住居跡は、平面形態を表示することとし、現地表面にモザイクタイル等を用い表現する。

(2) 河川跡の修景表示

遺跡保存地区の東部を北西―南東に走行する古墳時代の河川跡を平面表示する。復原位置は竪穴住居同様、調査結果をもとに遺構の検出された直上とする。表現方法は流路内を若干掘削し、内部に石灰岩のクラッシャーを敷き詰めることによって、規模、河岸の状況、河川のイメージを表現する。

(3) 景観の修景表示

遺跡保存地区の南辺部には、周辺の調査で過去に出土したオニグルミの種子をモデルケースにして、寄贈を受けた現生種のクルミ3本がすでに植樹されており、往時のこの地の植生の一端が理解できる。南辺部は構内道路と境界を接しており、諸車の乗り入れが予想されるため、マメツゲを適切な配置で植樹することによってクルミとともに防護柵の機能をもたせる。遺構の修景表示されていない空間地は、張り芝によって散策、くつろぎの場とする。

(4) 全体の遺構配置説明

遺跡保存地区の遺構分布状況は、すでに東端部隈に概要の記述とともに平面図を掲載した総合案内板が設置してあり、来訪者の理解を助けることができる。

以上述べたように、遺跡の歴史的理解の一助として、遺跡保存地区に分布する竪穴住居の構造、形式の時間的な変遷過程を可視的に表現し、積極的に保存、活用、公開することは、古代の物質・精神文化に対する人々の知的好奇心・欲求にこたえ、また、地域の特性を理解するだけにとどまらず、新たな地域創造につながる有効な手段となるであろう。

5　おわりに

山口大学構内遺跡の調査に鍬が入れられてから四半世紀が経過した。他の構内に比べて調査が進展している吉田構内では、縄文時代以降の集落の内容が次第に明らかになりつつあるが、残された問題点も多い。調査の主たる要因が施設整備に伴うもので、調査地域は必然的に校舎棟の存在する構内中央部に集中し、その周縁の地域では未調査地域も多い。特に、各時期の集落が占地したと考えられる構内東部、南部の洪積段丘上での調査が極めて不十分で、埋蔵文化財の分布状況はいまだ十分に把握できていない。関連遺物は出土しているが、縄文時代の集落、奈良～平安時代の国家機構と関連する行政施設、もしくはそれに係わる上級階層の居館など特定できておらず、今後の調査に帰するところが多い。また、構内の北方の丘陵上に存在が予想される弥生～古墳時代の埋葬跡の調査は手つかずで、その実態は全く知られていない。他の構内においても状況は同様で、今後面的な広がりをもった調査の進展が期待される。

［注］

1）原則として各構内の調査成果は本書および下記の報告書によるが、平成３年度の調査成果は未発表で『山口大学構内遺跡調査研究年報XI』に掲載予定である。

a　山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）。

b　山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』（1982年）。

c　山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報II』（1984年）。

d　山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報III』（1985年）。

e　山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報IV』（1985年）。

f　山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』（1986年）。

g　山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』（1987年）。

h　山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』（1988年）。

i　山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報VIII』（1990年）。

j　山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』（1991年）。

2）a　山口県企画部企画開発課『土地分類基本調査　山口』（1975年）。

b　山口県立博物館『山口県の地質』（1976年）。

3）河野通弘・高橋英太郎「山口大学とその付近の第四紀層」（『山口大学教育学部研究論叢』第27巻第2号、山口大学教育学部、1977年）。

4）以下、吉田構内での個別の施設等の位置関係は構内の配置図を参照されたい。

5）山口市教育委員会「吉田遺跡」（『吉田遺跡・障子岳南（山水園）遺跡』（1991年）。

6）山口市教育委員会『小路遺跡』（1988年）。

7）山口市教育委員会『西遺跡II』（1990年）。

8）松尾征二「小路遺跡周辺の第四紀」(『小路遺跡』、山口市教育委員会、1988年)。

9）青森県教育委員会『鶉窪遺跡』(1982年)。

10）霧ヶ丘遺跡調査団『霧ヶ丘遺跡』(1973年)。

11）福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集』(1971年)。

12）福岡県教育委員会「広田遺跡」(『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告II』(1982年)。

13）福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告5』(1984年)。

14）調査者は報告書の中で、埋積土は「全体的に識別が困難なものが多く、単純な同一層と考えたほうが適当かもしれない」と指摘している。
福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集』(1978年)。

15）山口盆地内では、先に述べた遺跡に加え西遺跡および椹野川右岸の木崎遺跡などで縄文時代の遺構が検出されているが、いずれも晩期でそれ以前に遡る遺構の検出例はない。
a　山口市教育委員会『西遺跡』(1986年)。
b　山口県教育委員会「木崎遺跡」(『朝田墳墓群Ⅰ・木崎遺跡』、1976年)。

16）前掲注8)に同じ。

17）前掲注5)に同じ。

18）藤田憲司「単位集団の居住領域―集落研究の基礎作業として―」(『考古学研究』第31巻第2号、考古学研究会、1984年)。

19）前掲注15) a に同じ。

20）山口県教育委員会『突抜・馬場遺跡』(1985年)。

21）山口県教育委員会「大崎遺跡」(『奥正権寺遺跡II・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、1985年)。

22）須恵器の坏・高坏・提瓶・短頸壺、土師器の坏、耳環、鉄剣などが出土しており、人骨も残存していたという。出土遺物は山口県立博物館に収蔵されている。
a　山口市平川公民館『平川郷土の歩み』(1961年)。
b　石川卓美『平川文化散歩』(山口市平川公民館、1972年)。
c　山口県教育財団『山口県内出土考古資料目録』(1979年)。

23）森田孝一「周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相」(『山口大学構内遺跡調査研究年報IV』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)

24）山口県教育委員会『下右田遺跡第4次概報・総括』(1980年)。

25）山口県教育委員会「玉祖遺跡」(『玉祖遺跡・西小路遺跡』、1983年)。

26）a　前掲注2) a に同じ。
b　山口県企画部企画開発課『土地分類基本調査　宇部東部』(1972年)。

27）山口県教育委員会『山口県遺跡地図第1次改訂版』(1991年)。

28）河野通弘・高橋英太郎・小野忠熙「本州西端部海岸の洪積層とその問題」(『山口大学教育学部研究論叢』第14巻第2号、山口大学教育学部、1965年)。

29）山口県旧石器文化研究会によって表採・発掘資料が報告されている。

a　山口県旧石器文化研究会『長桝遺跡発掘調査概報』(1985年)。

b　山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(1)～(14)」(『古代文化』第35～43巻、1983～1991年)。

30) 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(6)」(『古代文化』第39巻第1号、1987年)。

31) 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(10)」(『古代文化』第41巻第6号、1989年)。

32) ナイフ形石器、削器、剝片尖頭器、細石刃、押形文土器などが採集されている。

a　宇部市教育委員会『宇部の遺跡』(1968年)。

b　山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(8)」(『古代文化』第41巻第1号、1989年)。

c　山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(9)」(『古代文化』第41巻第3号、1989年)。

33) 前掲注2)に同じ。

34) 山口市教育委員会「茶臼山石棺群」(『茶臼山石棺群・大判石棺調査報告書』、1978年)。

35) 山口県教育委員会「鴻ノ峰1号墳」(『朝田墳墓群II・鴻ノ峰1号墳』、1973年)。

36) 山口県教育委員会『白石古墳群』(1980年)。

37) 山口市教育委員会『大内氏館跡VII』(1987年)。

38) 浜田清吉『山口市後河原の遺物発見地』(山口大学教育学部、1953年)。

39) 山口県教育委員会『桜畠遺跡』(1991年)。

40) 前掲注27)に同じ。

41) 山口県企画部企画開発課『土地分類基本調査　徳山・光』(1978年)。

42) 福本幸夫「御手洗遺跡」(『先原始時代の光市』、1966年)。

43) 小川国治「近世のひかり」(『光市史』、1975年)。

44) 宇部市教育委員会「月崎遺跡」(『宇部の遺跡』、1968年)。

45) 山口県教育委員会「美濃ヶ浜遺跡」(『山口県文化財概要第四集』、1961年)。

付篇　III

化粧に用いる金属製の菊花形の皿

古　賀　真木子

1　はじめに

ここで取り上げる遺物は、銀、青銅または真鍮で作られた菊花形を呈する皿で、坏・高台・坏と高台をつなぐ鋲の3つの部品で組み立てられている。この皿に興味を持ったのは、昭和61(1987)年に山口市教育委員会が発掘調査を実施した中世墓群の瑠璃光寺跡遺跡[1]の出土品を見てからである。土葬の第55号墓には銅製の菊花形の皿と鉄製の毛抜が副葬され、化粧道具のセットの一部となっていた。被葬者は長櫃と思われる家財道具を棺に転用して葬られ、被葬者の階層と共に愛着の程が偲ばれる。当時これを紅皿として報告したがその後、同型のものが歯黒入・抹梠（頬紅）入・水入と用途が決められている例[2]や、紅皿・お歯黒皿として使用された例を知り、今一度考えてみようと思う。

菊花形の皿は室町時代に多くみられ、最も保存状態が良いのは和歌山県新宮市に所在する熊野速玉大社に明徳元(1390)年奉納と伝えられ御神宝にされているものである[3]。12社からなる大社と1つの摂社に化粧道具一式の内容品として3個1組でそれぞれ蒔絵の手箱に収められ、菊花形の皿は計39点（内8点は散逸）伝えられている。また、静岡県三島市に所在する三嶋大社には13世紀初めに奉納されたとの伝来をもつ梅蒔絵手箱に銀製の菊花形の皿が1点ある[4]。室町時代の遺物とは器形もかなり異なり同列に扱うのは危険であるが、化粧用具としての菊花形の皿の出現の契機となったのは事実であろう。出土例は、文明3(1471)年～天正元(1573)年に存続した福井市一乗谷朝倉氏遺跡で現在までのところ20点余り見つかっているが他の遺跡では少なく、化粧道具の良好なセット関係がみられるところは稀である。

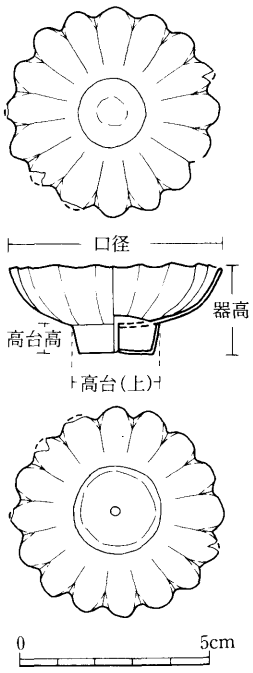


Fig. 95　瑠璃光寺跡遺跡出土の銅製菊花皿（山口市教育委員会所蔵）

本考では、菊花形の皿を軸に中世の化粧道具から化粧を行う人々の階層や性別を捉えて、できる限り当時の人々の生活の復原を試み、平安時代以前あるいは江戸時代以降といかにつながるか追ってみたい。そのため、化粧に使われる遺物のうち祭祀的色彩の強い埋納鏡や水中鏡、井戸に投棄された櫛などは原則として除外して考えてみた。

2　形式分類

菊花形の皿は先に述べたように、お歯黒・頬紅・口紅・水入のいずれかの用途が考えられるが、付着物のないものは用途の確定が難しいため一括して分類を行った。分類の要素は、坏の花弁数の変化、見込みの鋲の花央表現の変化、高台の形、口径・器高・高台の高さの法量比、花弁先端の形の５点が挙げられる。

（１）坏の花弁数の変化

三嶋大社所蔵の資料は花弁が32弁で上下２段になっており、おそらく複弁を表現したものであろう。これ以外は全て単弁である。復原分を含んだ出土遺物の花弁数は、22または21弁１例、20弁２例、18・17弁各１例、16弁８例、14・12弁各１例である。一乗谷朝倉氏遺跡では、14世紀末～15世紀初めと考えられる一乗谷の町ができる以前の館または屋敷地のＩ期整地層から出土した54次調査の815[5]（Tab. 6－5。以下Tab. 6に対応。）が、損傷が著しくはっきりしないが22または21弁、46次調査出土の167[6]（6）が20弁、II期の文明年間（1470年代）の遺構面出土と考えられる第50次調査の252[7]（8）が17弁である。15世紀末を遡る堺環濠都市遺跡（SKT-234地点）の柳之町[8]出土遺物（26）は18弁で、古いものほど花

Tab. 6　金属製の菊花形皿一覧表

法量はcm、（　）は復原値

No.	伝世品・出土遺物	口径	器高	高台径・高	花弁	鋲の格子	鍍金	用途	分類	時期
1	三嶋大社　梅蒔絵手箱				32枚	小突起	銀製			鎌倉時代初期
2	熊野速玉大社若宮殿　No. 1	5.2	1.6	0.4・0.4	16	0.5mm間隔	銀製	歯黒	II・III	明徳元年（1390）年奉納
3	〃　No. 2	5.0	1.5	0.6・0.2	16	1mm間隔	銀製	頬紅	I類	
4	〃　No. 3	5.0	1.5	0.6・0.2	16	1mm間隔	銀製	水	I類	
5	一乗谷朝倉氏遺跡　54次　815	(5.2)	1.5	1.7・0.2	(22)				I類	14世紀末～15世紀初、I期
6	〃　46次　167	5.0	1.8	1.8・0.4	20	2mm間隔	有	紅	I類	
7	〃　35次　75	5.8	2.6	2.3・0.6	(20)	格子あり		紅		
8	〃　50次　252	3.8	1.4	1.4・0.3	17	3mm間隔	有		I類	1470年代。II期。
9	〃　51次　23458				17					
10	〃　40次　33	4.9	2.0	2.1・0.4	16	1.5mm間隔			II類	1470年代。II期。
11	〃　40次　34	5.3	2.4	2.4・0.9	14	3mm間隔	有	歯黒	III類	1470年代。II期。
12	〃　40次　35	5.1	2.4	2.1・0.75	16	2mm間隔		紅	II類	1470年代。II期。
13	〃　40次　36	4.1	1.4	1.7・0.3	16	無　文	有	歯黒	I類	1470年代。II期。
14	〃　40次　46156									
15	〃　52次　83	5.5	3.0	1.9・0.5	16	2mm間隔		紅	II類	
16	〃　29次				16			歯黒		
17	〃　49次　23	5.2	－	高台欠失	(16)	1.5mm間隔				
18	〃　36次　22991	4.0	1.8	1.9・0.6	12	1mm間隔	有	歯黒	III類	
19	〃　36次　22216									
20	〃　36次　36429									
21	〃　43次　227	5.0	2.3	1.7・0.6						
22	〃　43次　228	4.1	－	高台欠失						
23	〃　42次　50	5.3	－	高台欠失						
24	〃　75次									
25	小谷城跡	4.4	2.0	1.5・0.5	16			歯黒	I類	15世紀末（天正以前）
26	堺環濠都市遺跡　柳之町	4.9	1.9	1.85・0.3	(18)		有		I類	16世紀半
27	〃　SKT61地点	5.7	3.1	1.8・0.8						16世紀末
28	〃　SKT289地点	5.6	2.5	2.4・0.75	16					
29	瑠璃光寺跡遺跡　第55号墓	5.6	3.0	2.3・0.9	16		有		II類	16世紀前葉～後葉

弁が多いと考えられる。16弁のものが半数を越えることから、当初の32弁から「菊の御紋」に代表される一般的な菊花の16弁へと花弁数は減少したのであろう。14世紀末の製作と考えられる熊野速玉大社の資料が全て16弁であることから、32弁から半数の16弁に直に変化する場合と、21…20…18…17…16と順次変化する２つの流れが考えられる。花弁数の少ない14弁の一乗谷朝倉氏遺跡第40次調査出土の34[9]（11）と12弁の同第36次調査出土のNo.22991[10]（18）は、器高に対する高台の高さの比が他の出土遺物と大きく異なり、同列では捉えられず１グループをなすと考えられる。

ここで、菊花形の皿の製作手順を考えると、坏は円形に切り抜いた金属板または碗形に鋳造したものを鍛いて花形にし、外面からヘラ状の工具を押し当てて弁間の筋を表現する。花弁数が多い分手間がかかる。簡略化は当然の流れであり、また、円形の銅板に花弁を割り付ける場合に16は最も容易な数である。一方、これらの遺物よりやや新しい16世紀後半の作と考えられる愛媛県大三島町の大山祇神社所蔵の菊枝鳥蒔絵手箱は、蓋表に14～16弁、蓋裏に17、18弁で菊花の文様が描かれ[11]、同一図案内でも強い規制力はみられない。同様に菊花形の皿においてもある時期では花弁数を限定する規制は強くなかったことも考えられる。事実、一乗谷朝倉氏遺跡第40次調査出土の33[12]（10）は坏が16弁、高台も菊花形を呈し17弁で上下の弁数は必ずしも一致していない。

（２）見込みの鋲の花央表現の変化

見込みの盛り上がりは、菊花のオシベを表現するだけでなく、坏と高台とを繋ぐ鋲となっている。三嶋大社所蔵の資料は、鋲の表面に円形の小突起を作り出し写実的である。熊野速玉大社若宮殿所蔵の資料は１点が0.5㎜間隔の細かい格子(2)、２点が１㎜間隔のやや細かい格子（3・4）で表現されている。一乗谷朝倉氏遺跡の出土遺物は銹や付着物のために判明しないものもあるが１㎜間隔（18）、1.5㎜間隔（10・17）、２㎜間隔（6・12・15）、３㎜間隔（8•11）の格子で表現され、40次調査出土の36[13]（13）のように明らかに無文のものもある。写実的な円形の突起→細かい格子→粗い格子→無文へと変化したことがうかがえる。ただ、三嶋大社所蔵の資料と熊野速玉大社所蔵の資料の間には各々の社伝によると150年以上の時代の開きがあり、この間に突起ではなく魚々子地風に陰刻される表現方法の存在した可能性も考えられる。

（３）高台の形

高台の形は、熊野速玉大社所蔵の資料２点（3・4）が花のガクを模して星形に切り抜いたドーム状の形、熊野速玉大社の資料１点（2）と一乗谷朝倉氏遺跡の第40次調査出土の

33（10）が底のある円筒形を細工した花形、他が一般的な底のある円筒形と3種類がある。円筒形の高台は、断面形が台形で上部の幅の狭いもの、断面形が長方形で上下の径に差がないもの、断面形が逆台形で接地する底面径の方が小さいものがある。見込みの鋲の格子目の変化から見て断面が長方形から逆台形に変化すると思われる。これは実用的な安定の良いものから、不安定だが見た目の良いものへの変化と考えられる。この逆台形を呈する中に鋲の先端が充分に叩かれずに突出したままのもの（29）もあり、非実用性が明らかであろう。また、見込みの鋲に格子をもつ遺物の中に断面台形のものがあるが、完形の出土例が少なくはっきりしない。

（4）口径・器高・高台の径・高台の高さの法量比

法量による分類は、口径・器高・高台の底径・高台の高さそれぞれの相関関係を求めてみた。その結果、器高に対する高台の高さの比、口径に対する高台上部の径の比の2つが分類の基準として有力ではないかと考えられた。ただし、熊野速玉大社の資料3点の数値はおおよそのものでしかない。

まず、器高に対する高台の高さの比は、Fig. 95とTab. 6に示した。2つの図表の番号は対応している。熊野速玉大社の資料では8.0（3）・7.5（4）・4.0（2）の値、一乗谷朝倉氏遺跡の出土遺物は10点中6.0以上の数値を示すもの1点(10)、3.0以下の数値を示すもの2点（11・18）とややばらつきを見せるが、おおむねの傾向としては、次第に器高に占める高台の高さの割合が高くなり数値は小さくなっていく。また、先に花弁数の変化の項でも述べたように、15弁以下の一乗谷朝倉氏遺跡の40次調査出土の34(11)、同36次調査出土の22991（18）はいずれも器高に対し高台が高く、グループ分けが可能である。

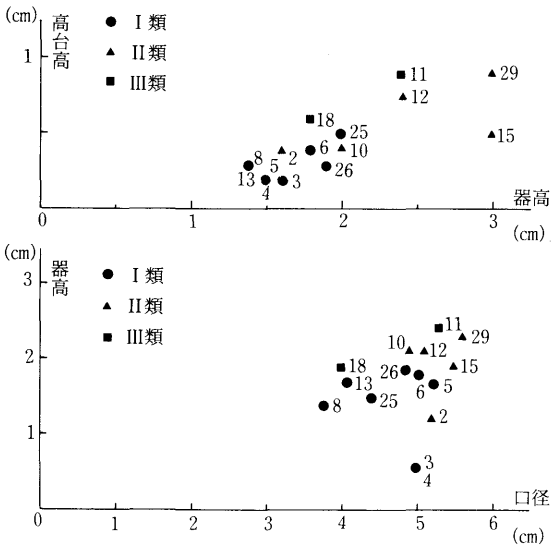


Fig. 96 菊花形皿の法量分布

次に、口径に対する高台上部の径の比を求めると、熊野速玉大社の資料は8.3（3・4）と4.3（2）、花弁20弁の一乗谷朝倉氏遺跡第46次調査出土の167（6）が2.8が、花弁17弁の同第50次調査出土の252（8）が2.7、堺環濠都市遺跡の柳之町出土遺物（26）が2.6、一乗谷朝倉氏遺跡第40次調査出土の

36（13）が2.4と花弁数が減るに従い数値が小さくなり、次第に口径に対し高台径が大きくなる傾向がうかがえるが、高台の高さは0.3〜0.5cmで比較的低いまま移行する。花弁数が当初から16枚のものは一乗谷朝倉氏遺跡第40次調査出土の33（10）が2.3、同第52次調査出土の8[14]3（15）が2.9、瑠璃光寺跡遺跡出土遺物（29）が2.4の値を示し、花弁15枚以下のものは一乗谷朝倉氏遺跡第36次調査出土の22991（18）が2.1、同第40次調査出土の34（11）が2.2となり、この両者は口径に対する高台径の比が時期によって変化せず、高台の高さは0.4〜0.9cmで高い傾向にある。

（5）花弁先端の形

花弁先端はカーブを描き丸いものと、ほぼ直線的なものとある。カーブを描くものの平面形は花形を呈し、直線的なものは円形を呈する。この違いは成形時に花弁間の筋を表現する工具を押し当てる強さに関連し、強ければ花形に弱ければ円に近くなる。花弁が22弁の一乗谷朝倉氏遺跡第54次調査出土の815から同第40次調査出土の36にむけて、時代が下るにつれ花弁のカーブはきつくなる。また、最も直線的なのは滋賀県湖北町に所在する小谷城跡出土の遺物[15]（25）である。小谷城は大永4（1524）年〜天正元（1573）年に浅井氏が3代にわたり本拠とした城である。先の大山祇神社所蔵の手箱を再び参考にすると、蓋表には丸味を帯びた花らしい形で描かれているが、蓋裏には円を放射状の線で区切っただけの形で描かれ、花弁数同様に強い規則性はみられない。この考えは菊花形の皿にも反映されているかもしれない。

以上5点をまとめるとFig. 96に示したように、菊花形の皿は大きく3つのグループに分けられる。Ⅰ類は三嶋大社所蔵の資料の系統を引き、花弁数が多く22弁から16弁へ順次変化し、坏と高台の法量比は熊野速玉大社所蔵の資料№2・№3の系統を引く高台の低いグループで、花弁が17弁以上ものには見込みの鋲に格子目が刻まれる。花弁数が多いほど花弁先端のカーブは緩やかだが、16世紀後半になるとただの円に近い崩れた形（25）も現れる。Ⅱ類は熊野速玉大社所蔵の№1の系統を引くもので、高台が高く、最初から花弁は16枚に限られる。Ⅲ類は同様に高台は高いが、花弁が15枚以下のものである。Ⅱ類およびⅢ類もⅠ類同様に、見込みの鋲に格子が刻まれるものから無文へと変化すると思われ、その画期は一乗谷朝倉氏遺跡の遺物からみて15世紀末〜16世紀初めの頃と思われる。また、同時に見込みの格子が消滅するやや前の15世紀末頃から高台の逆台形化が始まると思われる。

ところで、口径による時期差はみられなかった。また、Ⅰ類は紅とお歯黒両方の付着が認められ、Ⅱ類は4個中2個（12・15）に紅の付着が、Ⅲ類は2個共（11・18）にお歯黒

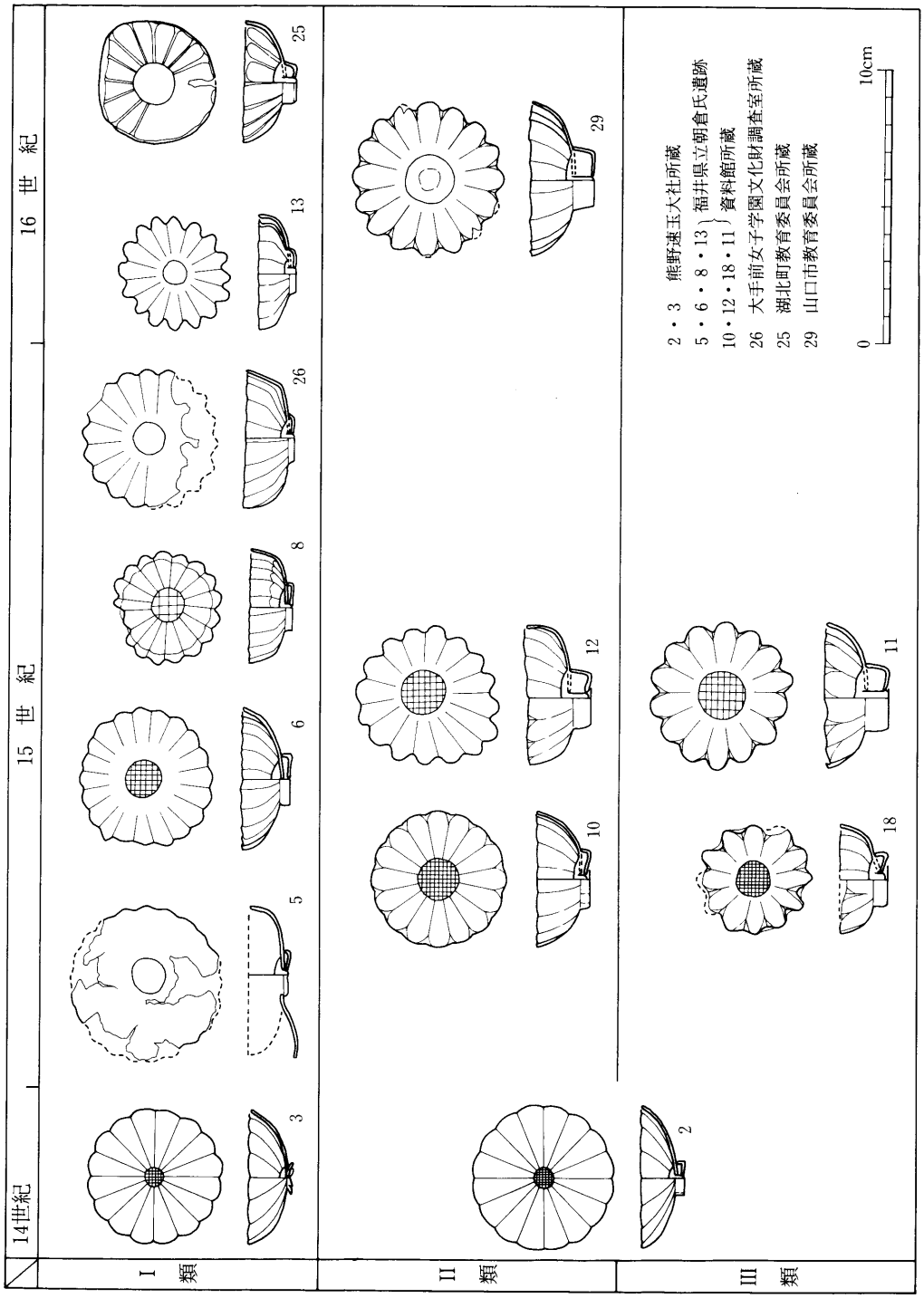


Fig. 97 菊花形皿の変遷

の付着が認められる。II類は紅用にIII類はお歯黒用にと、目的が比較的はっきりしていたのかもしれない。頬紅の素材が何かわからなかったので頬紅と口紅の識別は全くできず、混同している危険性もあるが、菊花形の皿は少なくともお歯黒や紅を入れていたことが証明でき、器形による使い分けも意識されていたと考えられる。

3　分布・出土遺構からみた所有者層

確認しえた資料は出土遺物が4遺跡25点、伝世品が2件32点にすぎず、遺漏が多いと思われるが、とりあえず出土地の検討を行ってみたい。一乗谷朝倉氏遺跡では13地点から20点が出土している。上級武士の屋敷が集中する平井地区（朝倉館の川向い）で2点、寺院・武家屋敷・町屋の集中する赤淵・奥真野・吉野本地区（平井地区の北東）で大規模な屋敷地と推定される所を中心に10点、武家屋敷と町屋群の混在する下城戸付近で3点検出されている[16]。明確な遺構から検出できた例は少ないが、武家屋敷が多く存在したII期に圧倒的に多く、城下に町屋が増加し、武家が再び各地の城へ移るIII期には減少していく。小谷城跡は、大広間跡から1点出土し、また口径8.2cmの大形の輪花の製品が清水谷から見つかっている。地頭職の家臣団の墓地と考えられる瑠璃光寺跡遺跡では、比較的厚葬と推定できる墓から1点出土している。以上のことから、菊花形の皿は武士階層に関連する遺跡から発見され、所有者を推定する大きな手掛かりとなる。また、熊野速玉大社の所蔵品は、足利義満が単独で、あるいは足利義満を中心に禁裡（天皇）・仙洞御所（上皇）・有力守護が奉納したと伝えられ[17]、公家もまた所有者層に含められるかもしれない。ところで、堺環濠都市遺跡でも3点見つかっているが[18]、遺構に伴っておらず所有者ははっきりしない。これらは一時滞在の武家や公家がもたらしただけでなく、富を蓄えた有力商人が持っていたと考えておきたい。つまり、ある程度以上の武家を中心に・公家・有力商人などの上層の階級の人々が所有していたと考えられる。伝世品は銀で作られ、出土遺物の大部分に鍍金が施されていることからも裏づけられよう。

熊野速玉大社の所蔵品が京都から施入されたことを考えると、本来京都に多く存在していたと考えられる。けれども、度重なる戦乱で破損、消失したのか、平安京内での出土例を確認することができず、公家の使用の可能性は薄いかもしれない。また、現在の分布が京都を中心に半径200km以内に大部分が集中し、製作地はおそらく京都の工房で、注文生産で作られ有力者の手でそれぞれの地に運ばれたと思われる。一般の商品としては流通していなかったのではないだろうか。京都系の手づくね成形の土師器皿の分布といかに重なるか検討が必要であろう。ただし、三嶋大社所蔵の資料は国産ではなく、高麗などからの舶

来品の可能性が高いと考えられる。[19)]

4　菊花形皿の使用者と同時代の出土遺物

前項で菊花形の皿の所有者層をある程度以上の武家を中心に公家・有力町人と考えたが、実際にお歯黒や紅を入れて化粧をしたのは男性だろうか、女性だろうか。杉山洋氏の指摘するように、化粧道具をもつから即女性と確定するのではなく検討が必要であろう。[20)] 性別を確定する最も良い資料は墳墓から見つかる人骨と副葬品だが、唯一の墳墓の瑠璃光寺跡遺跡第55号墓では人骨は腐朽し痕跡すらとどめていなかった。他はすべて生活遺構からの出土である。熊野速玉大社へは手箱同様に当時の衣装一式が御神宝として奉納されている。上位の4宮については男神へは男性の衣装と武具が、女神には女性の衣装と機織道具が納められて性別を意識していることが伺えるが、下位の8宮では男神、女神にかかわらず全てやや簡略化された（身分の下がる）女性の衣装が画一的に納められている。[21)] 下位の8宮の画一性が不安ではあるが、上位の4宮で手箱の装飾技法にランクづけがあっても内容品の組合せに差異がないことから、室町時代の初期には男女共に化粧をしていたと思われる。また、江戸時代に入ってから戦国期の思い出話をまとめた「おあん物語」[22)]には、合戦で取った敵の首級にお歯黒を施して値打を上げる話が描かれ、この時代までは上層の武士がお歯黒をしていたことがわかる。けれども、江戸時代前期には歯黒道具は婚礼調度の重要な一角を占め、女性のものになってしまう。津田紀代氏によれば、江戸時代にお歯黒をしていたのは、公家の男女・武家の女性・一般庶民の女性・遊女の一部に限られるそうである。[23)] 中世から近世への変革期にお歯黒は男性に不必要とされ急激に忘れ去られ、女性にのみ風習が伝えられたのだろう。おそらく紅をさすことを含めた一連の化粧の行為も、この時点に男性の手を離れたと思われる。逆に室町時代の菊花形の皿は、使用者は男女ともに使った可能性があり、単純に一方が使ったとは言い切れない。あえて言えば、武家社会のハレの日＝合戦の舞台に臨む時に男性が、婚礼の時に女性が使用したと考えるのが一番無理がないかもしれない。

同時代の化粧用の器の出土例は、鎌倉市内の遺跡では、紅が付着した瀬戸の入子の花形の皿が見つかっている。[24)] 一乗谷朝倉氏遺跡で紺屋と推定される地点の埋め甕（第35次調査SX1386の8号甕）から、青白磁の浅い菊形の紅皿が3枚見つかり、[25)] 共伴資料に青花磁器や12枚セットの白磁菊皿があり、15世紀後半から16世紀前葉のものと考えられる。広島県福山市の草戸千軒町遺跡では、青磁の紅皿と銀製のお歯黒用と考えられる皿が入子の状態で井戸（SE1560）の底から見つかっている。[26)] お歯黒皿は5葉複弁の輪花で、鋳造品であろ

う。室町時代初め～中頃の草戸千軒町遺跡II期後半にあたる。また、小谷城跡の銅製のやや大形の5弁の輪花の碗はお歯黒用と考えられる。製作技法は菊花形の皿と同じく、坏と高台を鋲留めし、鋲にはオシベを波形の放射状に線彫りする。これらのお歯黒用の金属製の器は、平安時代後期の『類聚雑要抄』に書かれた、歯黒目は銀製の5葉入角で径2寸7分（口径約8.2cm）の記述[27]にほぼならっており、更に初音の調度[28]など江戸時代の婚礼調度に含まれるお歯黒道具の碗に伝えている。ちなみに同書には、水入れは銀製の6花形で径2寸2分、頬紅入れは銀製の6花形で径2寸6分と記されている。

このように、意外にも室町時代になっても平安時代以来の形を伝えている部分もあることから、菊花型の皿の出現は、化粧という公家社会の習慣を取り入れながらも、一方では全てを倣わず対抗しようとする武家社会の意識の現れとも考えられる。

5　化粧道具のセットからみた菊花形の皿

化粧に使う道具は、化粧の内容により時代とともに変化し続けている。実用を主とした道具は、貴族階級で美の追求及び嗜みとしての化粧が行われ始める平安時代に入り確認できる。自分で化粧をする以上顔を見るための鏡が不可欠で、他に白粉や紅などを入れる器、髭や髪を整える道具、整理のための箱など必要である。けれども何が幾つあればセットとみなされるか化粧行為の内容で決まりなかなか決定できない。特に鏡や櫛は祭祀遺物として古墳、井戸、経塚に多く埋納され、単独の出土ではその意味はわからない。しかし、これらの遺構からの出土遺物であっても、黛（眉墨）や提子（お歯黒用）などと一括で出土する場合は化粧用具としての性格が強いと思われる。化粧道具の良好なセットは、平安時代には墳墓を中心に出土例もあるが、鎌倉時代以降は伝世品が中心になる。火葬の増加と、墓への副葬に対する意識の変化によるものかもしれない。時代ごとの主な例を次に掲げ、特徴をつかみたい。

平安時代では、10世紀の平安京右京三条三坊の木棺墓[29] ＳＸ46で漆皮の盆に載せた合子・毛抜・髪掻・漆皿と、同一墓壙内から和鏡・須恵器壺・黒色土器・土師器皿が見つかっている。12世紀の福岡市七反田遺跡土壙墓SK-01[30]では、和鏡と漆塗鏡箱・合子・刀子、木箱に収めたと思われる毛抜・白磁皿・白磁碗・土師器皿が、福岡市博多遺跡群第683土壙墓[31]では懸子をもつ漆塗の手箱から和鏡・櫛・櫛払・鋏・毛抜・刷毛、小壺・水引と、棺外から青磁碗・青磁皿・土師器皿・土師器坏が見つかっている。和歌山県田辺市高尾山経塚第2号経塚[32]では、鏡と鏡箱・青白磁合子・青白磁小壺・檜扇・櫛・黛・敷紙が、京都市稲荷山経塚[33]では和鏡・青白磁合子・青白磁小壺・輪花白磁皿・銀製合子・銀製提子・輪花土師皿

が見つかっている。これらの遺物の共通点は、鏡、青白磁の合子や蓋付き小壺、輸入陶磁器の皿や碗をもち、鋏をもたないことである。鋏の用途ははっきりしないが、博多遺跡群第683土壙墓は合子がないこと、鋏をもつことからやや後出するものかもしれない。

鎌倉時代では、江戸時代の『新編相模国風土記稿』にスケッチされた鶴岡八幡宮旧蔵の籬菊螺鈿蒔絵手箱[34]に硯、鏡と鏡箱、方形および円形の小箱、櫛と櫛払、銀製の合子２個が、三嶋大社所蔵の梅蒔絵手箱に鏡と鏡箱・薫物箱・歯黒箱・白粉箱・菊花形皿・鋏・毛抜・髪掻・紅筆・眉作・櫛・元結が含まれる。13世紀前半と考えられる兵庫県多利・前田遺跡土壙墓SK-01[35]では、和鏡・青白磁小壺・青白磁合子身・白磁小皿・鋏・毛抜・刀子が出土している。これらの遺物の共通点は鏡、鋏・毛抜・髪掻をもつこと、小壺をもたないことである。大分県日田市宮ノ原遺跡の土壙墓[36]は湖州鏡・青白磁合子・鉛製の紅皿・鋏をもつ。伝世品の２点は薫物箱、歯黒箱、白粉箱などの小箱が組み合わされ、新しい収納用品が登場する。

室町時代では伝世品に限られ、熊野速玉大社の資料が鏡と鏡箱・薫物箱・歯黒箱・白粉箱、花形皿３個・紅用茶碗・髪掻・耳掻・眉作・鋏・毛抜・櫛と櫛払いと櫛箱が組み合わされている。

ところで、最初に述べたように菊花形の皿の系譜は、熊野速玉大社所蔵の手箱群から三嶋大社所蔵の梅蒔絵手箱の菊花形の皿へと遡れる。鎌倉時代初期の作と伝えられる菊籬螺鈿蒔絵手箱は硯も含むが化粧道具箱とするならば、２個の銀製合子へ更に遡れる可能性が考えられる。１つは４葉の花形で、１つが菊花形を呈し大きさは口径6.5cm余りである。銀製合子は京都市伏見区稲荷山経塚出土遺物へつながると考えられる。稲荷山経塚出土の銀製合子は口径4.9cmで、青白磁の合子と全く同一規格であり、菊花形の皿はつまるところ経塚出土の青白磁の合子につながると考えられる。経塚出土の青白磁の合子には、ガラス玉などの玉類、砂金、抹香を入れた例が数例[37]あるが何が入っていたかはっきりせず、大部分は残存している遺物や付着物は確認されていない。小松大秀氏は合子の用途を特定できないとしながらも、内容品の良く揃っている手箱に合子が含まれないことから菊花型の皿が合子と同じ様な役割をしていたのではと推定されている[38]。けれども、むしろ薫物箱、歯黒箱、白粉箱などの小箱の出現が、合子の消長とより強い関係をもっているのではないだろうか。青白磁の合子や小壺は蓋付きで、内容物の保存ができる点が特徴であり、菊花型の皿の一時的に液体を溶くための用途とは異なっていたと思われる。漆器の小形収納容器が広まるにつれ、保存のための青白磁の合子や小壺が不必要となり、菊座をもつ合子から溶

くための容器に菊花の形を引き継いだのではないだろうか。ならば合子が消滅しても皿、碗、坏が残ればよいもので、菊花形の皿が出現する要因ははっきりしない。三嶋大社所蔵の資料に見られるように、朝鮮半島からなど外来の文化の影響が多分にあったと思われる。

Tab. 7　化粧道具の中でのお歯黒皿・紅皿

	陶磁器	金属製菊花	金属製輪花
10世紀	平安京右京三条三坊　合子		
11世紀	保存のための容器		
12世紀	七反田遺跡土壙墓　合子 博多遺跡群土壙墓　小壺 高尾山2号経塚　合子・小壺 多利・前田遺跡　合子・小壺	稲荷山経塚　銀製合子 菊蘢螺鈿蒔絵手箱　銀製合子	『類聚雑要抄』 紅·銀六花皿、水·銀六花皿 歯黒－銀五葉入角皿
13世紀		三嶋大社梅蒔絵手箱銀製菊皿	朝日宮ノ原遺跡土壙墓　鉛皿
14世紀	熊野速玉大社手箱　白磁碗	熊野速玉大社手箱　菊花形皿 一乗谷朝倉氏遺跡第54次815 一乗谷朝倉氏遺跡第46次167	
15世紀	草戸千軒町遺跡　白磁碗	一乗谷朝倉氏遺跡第50次252 堺環濠都市遺跡　柳之町	草戸千軒町遺跡　銀五花皿
16世紀	一乗谷朝倉氏遺跡　白磁皿	一乗谷朝倉氏遺跡第40次36 瑠璃光寺跡遺跡　菊花形皿 小谷城跡	小谷城跡　銅五花碗
17世紀			初音の調度　金五花碗

経塚出土の青白磁の合子は、1個だけ副納されるのが半数以上だが、3個以上では、合子が3の倍数個または合子が3の倍数個＋小壺1～2個の埋納をしている例が多い。広島県宮島町の厳島神社経塚[39]などで発見された合子内に小皿をもつものは小皿3個である。場合によっては中身を入れたつもりで形だけ埋納することも考えられるが、基本的に3種類の物質をそれぞれ青白磁の合子に入れて埋納したのではないだろうか。平安時代の白粉の原料は米粉もあったが鉛や水銀などの重金属が主で腐朽は考えられず、経塚副納の合子にはおそらく入れられなかったのだろう。けれども、この3個1組の合子が熊野速玉大社所蔵の手箱群の3枚の菊花型の皿に影響を与えたと考えられる。手箱には紅用の白磁碗が組み合わされているが、同型の菊花型の皿にしても使い勝手はいっこうに構わず、紅およびお歯黒は使用時には酢を使い銹化の点でも変わりはないはずで

ある。それなのにあえて異なる素材の器を使用するのは、『類聚雑要抄』の３個１組の花形皿だけでなく、経塚副納の合子にもその祖形が求められるであろう。

6　おわりに

化粧道具の変遷は、単なる風俗面での影響だけでなく、化粧を行い得る階層や時を選ぶため、社会全体の画期と強く結びついている。つまり、平安時代から鎌倉時代への過渡期に合子から漆器の小箱へ保存容器が変わり、菊花形の皿の原型が出現する。そして、同じ武家社会の中でも鎌倉から京都へ政治の中心が移った室町時代初期に典型的な菊花形の皿が出現する。

できる限り実用の道具で人々の生活の中での使用から考えてみたが、いずれ生産や流通、経塚出土遺物や埋納鏡などの祭祀遺物も含め考えてなおしてみたい。

また、江戸時代の伊万里系をはじめとする近世の紅皿は、山口大学構内でも３点見つかっている[40]が、これらと金属製の菊花形の皿と接点を見つけることができなかった。商品の器として大量生産・大量消費で全国に広まっているが主体は口紅であり、かなり次元を異にしていると思われる。こちらもいずれ考えていきたい。

資料の実見、写真の掲載に当たっては、福井県立朝倉氏遺跡資料館の水野和雄氏、滋賀県湖北町教育委員会の山崎清和氏、大手前女子学園文化財調査室の藤本史子氏、山口市教育委員会にお世話になりました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

［注］

1）山口市教育委員会『瑠璃光寺跡遺跡』（1989年）。

2）鈴木敬三「熊野速玉大社の御神宝」（『國學院雑誌』第65巻第10・11号、國學院大学、1964年）。

3）熱田神宮『特別展「日本の装い」－風俗に文化を探る－』（1987年）。

東京国立博物館『日本国宝展』（読売新聞社、1990年）。

4）小松大秀編『日本の美術№275　化粧道具』（至文堂、1989年）。

5）福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ第10・11次・第54次調査』（1989年）。

6）福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡ＸＶ－昭和58年度発掘調査整備事業概報－』（1985年）。

7）福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡ＸＶＩ－昭和59年度発掘調査整備事業概報－』（1986年）。

8）堺・柳之町遺跡調査会『堺－柳之町』（大手前女子学園考古資料室、1989年）。

9) 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡ＸⅢ－昭和56年度発掘調査整備事業概要－』(1983年)。

10) 福井県立朝倉氏遺跡資料館にて実見。

11) 小松大秀「大山祇神社蔵　菊枝鳥蒔絵手箱について」(『MUSEUM』№483、東京国立博物館、1991年)。

12) 前掲注9)。

13) 前掲注9)。

14) 福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡ＸⅦ－昭和60年度発掘調査整備事業概要－』(1987年)。

15) 湖北町教育委員会・小谷城保勝会『史跡　小谷城－浅井氏三代の城郭と城下町－』(1988年)。

16) 湖北町教育委員会にて実見。

17) 前掲注2)。

18) 堺環濠都市遺跡SKT61地点、や堺環濠都市遺跡SKT289地点からの出土があるが、損傷が著しい。
堺市教育委員会「堺環濠都市遺跡発掘調査報告－車之町東１丁　SKT61地点－」(『堺市文化財調査報告第23集』、1985年)。
堺市教育委員会「－SKT289地点：堺市中之町西２丁17－」(『堺環濠都市遺跡調査概要報告』、1991年)。

19) ボストン美術館の所蔵する高麗の銀製の仏具の中に、脚部の細工のよく似た承盤が見られる。
大阪市立東洋陶磁美術館『朝鮮陶磁シリーズ16　高麗の金属器と陶磁器』(1991年)。

20) 杉山洋「「今様の鏡」と「古躰の鏡」－出土八稜鏡より見た平安時代の鏡－」(『MUSEUM』№481、東京国立博物館、1991年)。

21) 前掲注2)。

22) 毛利博物館『特別展　毛利氏の女性』(1991年)。

23) 津田紀代「化粧と装い」(小松大秀編『日本の美術№275　化粧道具』、至文堂、1989年)。

24) 前掲注4)。

25) 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡ＸⅠ－昭和54年度発掘調査整備事業概報－』(1981年)。

26) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡　第24～26次発掘調査概要』(1980年)。

27) 郷家忠臣『箱　工芸文化史の断層』(毎日新聞社、1988年)。

28) 日本放送出版協会『ＮＨＫ徳川美術館①　奥道具の華～源氏物語絵巻と初音の調度～』(1989年)。

29) (財) 京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京三条三坊』(1990年)。

30) 福岡市教育委員会『都地・七反田遺跡』(1990年)。

31) 福岡市教育委員会『都市計画道路博多駅築港線埋蔵文化財調査報告 (II)　博多』(1988年)。

32) 前掲注4)。

33) 前掲注4)。

34)『新編相模国風土記稿』の挿図が郷家忠臣著『箱　工芸文化史の断層』(毎日新聞社、1988年) に掲載されている。

35) 加古千恵子・平田博幸「多利・前田遺跡発見の中世土壙墓」(『考古学雑誌』第74巻第4号、日本考古學會、1989年)。

36) 土屋和幸・友岡信彦「日田市朝日宮ノ原遺跡の中世墓壙」(『おおいた考古』第2集、大分県考古学会、1989年)。

37) 田中巳貴「経塚出土の青白磁合子－その蓋表面の文様とわが国への影響－」(『MUSEUM』№238、東京国立博物館、1971年)。

38) 前掲注4)。

39) 広島県立歴史博物館『瀬戸内の中国陶磁』(1991年)。

40) 吉田構内本部2号館敷地、山口市石観音町職員宿舎から出土している。

山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、1990年)。

山口大学埋蔵文化財資料館「人文・理学部7号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査」(本書79ページ)。

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

（設置）

第１条　山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

（資料館の業務）

第２条　資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

一　山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示および調査研究

二　山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行

三　その他の埋蔵文化財に関する必要な業務

（運営委員会）

第３条　資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会に関する規則は、別に定める。

（館長）

第４条　資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

２　館長の任期は２年とし、再任を妨げない。

３　館長は、資料館の業務を掌理する。

第５条　資料館には調査員若干名を置く。

２　調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

３　調査員は、資料館の業務を処理する。

（特別調査員）

第６条　埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

２　特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

（雑則）

第７条　この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

（趣旨）

第１条　この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第３条第２項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　委員会は次の事項を審議する。

一　山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと

二　資料館の管理運営に関すること

三　資料館の整備充実に関すること

四　資料館の運営に要する経費に関すること

五　その他必要な事項

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　資料館規則第４条第１項の館長

二　各学部および教養部の教官各１名

三　事務局長

２　前項第２号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

（任期）

第４条　前条第１項第２号の委員の任期は２年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

２　委員長は委員会を召集し、その議長となる。

（幹事）

第６条　委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（委員以外の出席）

第７条　委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

（事務）

第８条　委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

（雑則）

第９条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 8　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

（平成2年度）

部局名	氏　名	官　職	任　期	備　考
工学部	島　敞史	教　授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	委員長
人文学部	近藤喬一	教　授	平元. 6. 7～平3. 6. 6	館長
人文学部	中村友博	助教授	平元. 5. 29～平3. 5. 28	
教育学部	川村博忠	教　授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
経済学部	小島正己	教　授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
理学部	遠藤克彦	助教授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
医学部	福本哲夫	教　授	平2. 4. 1～平4. 3. 31	
農学部	時本　巽	教　授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
教養部	木村忠夫	教　授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
事務局	有地成光	事務局長	昭和63. 4. 1～平3. 3. 31	

（平成3年度）

部局名	氏　名	官　職	任　期	備　考
工学部	島　敞史	教　授	平3. 4. 1～平5. 3. 31	委員長
人文学部	近藤喬一	教　授	平3. 6. 7～平5. 6. 6	館長
人文学部	八木　充	教　授	平3. 5. 29～平5. 5. 28	
教育学部	川村博忠	教　授	平3. 4. 1～平5. 3. 31	
経済学部	見野貞夫	教　授	平3. 4. 1～平5. 3. 31	
理学部	永尾隆志	助教授	平3. 4. 1～平5. 3. 31	
医学部	福本哲夫	教　授	平2. 4. 1～平4. 3. 31	
農学部	平尾重太郎	教　授	平3. 4. 1～平5. 3. 31	
教養部	森　繁曉	教　授	平3. 4. 1～平5. 3. 31	
事務局	宗形郁夫	事務局長	平3. 4. 1～	

Tab. 9　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

部局名	氏　名	官　職	任　期	備　考
人文学部	中村友博	助教授	日本考古学	平成2・3年度
理学部	松本徑夫	教　授	岩石学	平成2・3年度

Tab. 10　山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	旧調査地区名又は調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L・M・N－15	1	30？	弥生式竪穴住居・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当　小野　忠熙	
	第Ⅱ地区家畜病院新営	S・T－19 R・S－20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	〃	〃	
	第Ⅱ地区	P・Q－19・20	3			弥生土器、土師器、	試掘	〃	
	第Ⅳ地区牛舎新営	S－10	4	300	弥生溝・土壙、古墳竪穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	〃	
	第Ⅳ地区	S・T－9～13	5				試掘		
昭和42年	第Ⅲ地区抗列区	E－20	6	1,100	抗列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木抗	事前	〃	
	第Ⅲ地区南区	G・H－22・23	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	〃	〃	
	第Ⅲ地区北区	I・J－20・21	8	1,400	竪穴住居、溝、土壙、柱穴		〃	〃	
	第Ⅲ地区東南区	H－23 I・J・K－24	9		弥生竪穴住居	弥生住居	〃	〃	
	第Ⅲ地区野球場	I－22・23 J－21・22・23 K－22・23	10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	〃	
	第Ⅴ地区学生食堂	I・J－19・20	11		弥生溝、古墳土壙	弥生土器、土師器	事前	〃	①
	第Ⅴ地区	H・I・J・K・L・M・N－18・19・20	12		河川跡、柱穴、土壙	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学吉田遺跡調査団	
	第Ⅰ地区C区大学本部新営	K・L－14	13	600	竪穴住居、溝、土壙	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	〃	
昭和44年	第Ⅴ地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	〃	
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	K－13	14		溝	弥生土器、木炭屑	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第2地点	L－13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第3地点	L・M－13	16		竪穴住居、土壙、柱穴	土師器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N－13	17		弥生竪穴住居、溝、土壙	弥生土器、土師器、石器、瓦質土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第5地点	L－13	18		弥生溝	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第6地点	M－13	19		古墳竪穴住居、弥生溝	弥生土器、土師器石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第7地点	〃	20		溝	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区E区第2学生食堂断営	N・O－15	21	900	弥生～古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	事前	〃	
昭和50年	第Ⅱ地区					弥生土器	試掘	〃	
昭和51年	第Ⅲ地区				竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	〃		
昭和53年	人文学部校舎新営	M・N－21	22	160			〃	調査担当　近藤　喬一	年報X
	教育学部附属養護学校新営	A・B・C・D－20～24	23	410	溝、土壙	縄文土器 弥生土器	〃	山口大学埋蔵文化財資料館・山口市教育委員会	年報IX
昭和54年	理学部校舎新営	O－18・19	24	250			〃		年報X
	農学部動物舎新営	P－18・19	25	380			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和54年	本部管理棟新営	L－14	26	740	溝、土壙、柱穴、中世井戸、土壙墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報Ⅷ
昭和55年	経済学部校舎新営	K・L－21	27				試掘		年報Ⅹ
	農学部農業環境観測実験施設新営	Q－15	28	50	溝、土壙		事前		
	本部	E・F－15・16 F－20・21 G・H－12・19	29				立会		
	農学部	L・M－12・13 N・O・P－10～12 P・Q－17・18	30				〃		
昭和56年	教育学部校舎新営	H－19	31	400	弥生竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		年報Ⅰ
	教育学部音楽棟新営	H－16	32	100	溝		〃		
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営	J－19・20	33	130	旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	〃		
	正門橋脚新営	H－11	34				立会		
	時計塔埋設	I－14	35				〃		
	本部構内擁壁	K－14	36				〃		
	教養部構内擁壁	I－16・17	37				〃	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J・K・L・M－15 M・N－16	38				〃		
	農学部中庭整備	O－17	39				〃		
	暖房施設改修	O－16	40				〃	工法等変更	
	学生部文化会車庫新営	L－8	41				〃	工法等変更	
	学生部馬場整備	M・N－8・9	42				〃		
昭和57年	附属図書館増築	M－16	43	600	弥生～古墳溝、土壙、柱穴、抗列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		年報Ⅱ
	大学会館新営	M－14・15	44	130	弥生竪穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属養護学校プール新営	B－22	45				立会		
	放射性同位元素総合実験室排水桝新営	O－18	46				〃		
	教養部自転車置場昇降口新営	K・L－17	47				〃		
	教養部中庭環境整備	J・K－16	48				〃		
昭和58年	大学会館新営	M・N－13	49	2,000	古墳井戸、土壙、柱穴、中世井戸、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、緑釉陶器、木簡、石器	事前		年報Ⅲ
	ラグビー場防球ネット新営	G・H－19	50	120	弥生溝、弥生～古墳竪穴住居、土壙	弥生土器、土師器、石製品	〃	竪穴住居は工法変更により現地保存	
	理学部大学院校舎新営	M・N－20 O－19・20	51	410			立会		
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営	H・I－23 I－12・13、J－13	52	180			〃		
	学生部アーチェリー場的台・電柱設置	M－8	53	30			〃		
	学生部厩舎整備	L－7	54	2			〃		
	学生部野球場散水栓取設	J－21　K－22	55				〃		
	教養部環境整備	I－16・17 J・K－17 K・L－17・18	56	80			〃		
	学生部テニスコート改修	C－8　D－17 E－16	57	12			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	大学会館ケーブル布設	N－12・14	58	160	弥生土壙、柱穴	弥生土器	事前		年報Ⅳ
	大学会館排水管布設	K・L－13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壙、古代～中世土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	〃		
	学生部テニスコートフェンス改修	B－17・18 C－16・17・18・19 D－15・16・17 E－15・16	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K－19・20・21	61	8			立会		
昭和60年	大学会館環境整備	L－14 L・M・N－15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生竪穴住居、貯蔵穴、土壙、古代～近世土壙、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鉄器、窯壁	試掘		年報Ⅴ
	経済学部環境整備（樹木移植）	K－21 L－20	63	5			立会		
	農学部附属農場飼料園排水溝修復整備	R－16～19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、鞴口、石器、鉄滓	〃		
	農学部附属農場農道改修	V－15・16	65	325			〃		
	教育学部前庭環境整備（樹木移植）	I・J－19・20	66	430			〃		
	中央ボイラー棟車止設置	O・P－16	67	2.5		須恵器	〃		
	大学会館環境整備（樹木移植）	L・M－15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓	〃		
	交通標識設置	J－20, N－14 O－18	69	3			〃		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備（実験動物運動場設置）	P・Q－17・18	70	16			〃		
	理学部環境整備（藤棚設置）	N－20・21	71	4			〃		
	農学部附属家畜病院舗装	S・T－19	72	270			〃		
昭和61年	国際交流会館新営	N－22・23	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鉄砲玉、加工痕ある剝片	試掘		年報Ⅵ
	山口銀行現金自動支払機設営（電線路埋設）	I・J－19・20	74	11	包含層（河川跡か）	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S－20, U－19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	〃	工法等変更	
	農学部附属農場農道交通規則（施錠ポール設置）	L－10 Q－15・16	76	2			〃		
	正門横（水田内）境界抗設置	I－10	77	0.25	包含層か		〃		
	経済学部環境整備（樹木移植・記念碑建立）	M－20	78	3			〃		
	吉田構内交通標識設置	H－23, J－9, P－22, S－20, W－16	79	3		須恵器	〃		
	市道神郷Ⅰ号線および問田神郷線の送水管埋設		80	2,100	古墳・古代溝、古代河川跡、杭、弥生包含層	弥生土器、土師器、須恵器（墨書のあるもの含む）瓦質土器、製塩土器、石斧、板石	〃	山口市教育委員会・山口大学埋蔵文化財資料館	
	教養部自動販売機増設（屋根設置および観覧席移動）	K・L－18	81	3.5			〃		
	教養部身体障害者用スロープ取設	L－15・16	82	3			〃		
	経済学部散水栓取設	L・M－20	83	4			〃		
	吉田構内水泳プール改修等	E・F－16, H－15	84	26.5	包含層		〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和61年	農学部附属農場水道管埋設	S—12	85	3			〃		年報VI
	吉田構内汚水排水管等総改修	M—18 O—15・16	86	15.5		土師質土器	〃		
	本部障害者用スロープ取設	L—14	87	12			〃		
	経済学部身体障害者用スロープ取設	K—20 L—18～20	88	88	弥生～古墳柱穴		〃	工法等変更	
	附属図書館荷物運搬用スロープ取設	L—16	89	8		弥生土器	〃		
	教養部37番教室改修	K—16	90	1			〃		
昭和62年	教育学部附属教育実践研究指導センター新営	K—18	91	240		ブランク、削器、植物遺体	事前		年報VII
	教養部複合棟新営	J・K—17・18	92	35	埋甕土壙、溝、柱穴	土師器、須恵器、土師質土器、石斧	試掘		
	教養部環境整備	I・J—16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		
	教養部複合棟新営	J・K—17・28	94	900	落し穴、河川跡、竪穴住居、土壙、溝、井戸、埋甕土壙、掘立柱建物跡、谷状遺構、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、須恵質土器、陶磁器、石鏃、石斧、木製品	事前		
	九田川河川改修	B・C—17	95	20			立会	県教委・山大理文	
	国際交流会館新営	M—23, N—22・23	96	195			〃		
	教育学部附属養護学校自転車置場移設	L・N—12	97	45			〃		
	農学部附属農場E7圃場排水管埋設及びE6圃場進入路拡張	L・N—12	98	45	中世土壙墓か	弥生土器、土師器、須恵器、輸入白磁、国産磁器、敲石	〃		
	農学部植栽	N—16	99	3			〃		
	経済学部集水桝取設	K—20	100	0.5			〃		
昭和63年	教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設	I—16	101	1	包含層か		立合		年報VIII
	国際交流会館新営に伴う排水館埋設	O—22	102	35	河川跡(溝か)、包含層	弥生土器、須恵器	〃		
	教養部複合棟新営に伴うケーブル埋設	K—18	103	1			〃		
	サッカー・ラグビー場改修	F—21, G—19 H—20・21	104	25	性格不明	弥生土器	〃		
	消防用水設置	K・L・M—22	105	7.5			〃		
平成元年	水銀灯新営	K・L—15	106	4	古墳溝状遺構 柱穴	弥生土器、土器器、須恵器、六連式製塩土器	事前		年報IX
	椹野寮ボイラー設備改修	O・P—20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新営	I・J・K—21 H・I・K—22	108	7	包含層	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器	〃		
	防火水槽配管布設	K—21・22	109	15	柱穴		〃		
	吉田寮ボイラー設備改修	L—8	110	4			〃		
	体育施設系給水管改修	G・H—16	111	50		陶器	〃	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M—13	112	6			〃		
	吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修	L・M—8	113	45	包含層	土師器、須恵器、土師質土器、陶器、剥片、二次加工のある剥片	〃		
	第二武道場排水溝新営	G・H—14・15	114	2	溝		〃		
	案内標識設置	I—114, L—18	115	0.5			〃		
	本部車庫給水管改修	L—13	116	0.5		弥生土器	〃		
	大学会館前庭部環境整備	L・M・N—14・15	117	35	中世溝		〃		
平成2年	大学会館前庭部環境整備	M—15	118	2			〃		年報X
	第一学生食堂設備改修	J—19・20	119	7			〃		
	教育学部附属養護学校案内板設置	E—20	120	1			〃		

小串構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報III
	医学部図書館増築		2				立会		
	医学部体育館新営		3				〃		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4		近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報IV
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	〃		
	医学部基幹整備（特高受変電設備）		6	28		動物遺体（貝殻）	試掘		
	医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営		7	38			〃		
昭和60年	医学部外来診療棟新営		8	409		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	試掘		年報V
	医学部基礎研究棟新営		9	11		近世陶器	〃		
	医学部看護婦宿舎改修		10	25		近世陶磁器	立会		
	医学部看護婦宿舎改修		11	20			〃		
	医学部環境整備（樹木移植）		12	40			〃		
	医学部附属病院外来診療棟新営		13	5			〃		
	医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等（雨水桝埋設）		14	18			〃		
昭和62年	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			〃		年報VII
	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、細石刃核	試掘		
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、敲石、礫、原石、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	立会		年報VIII
	医学部附属病院運動場整備		18	220			〃		
平成元年	医学部附属病院MRI棟新営		19	45		削器、細石刃、二次加工のある剥片、剥片、石核	試掘		年報IX
平成2年	医学部附属病院動物・RI実験棟新営		20	40		剥片	試掘		年報X

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新営		1	70		須恵器	試掘		年報III
	工学図書館増築		2	70			〃		
昭和59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報IV
昭和60年	工学部尾山宿舎擁壁取設等			65			〃		年報V
	工学部受水槽総改修		3	1.5			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和61年	工学部尾山宿舎排水管政修			6			立会		年報VI
	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			〃		
	情報処理センター(常盤センター)空調設備取設		5	30			〃		
昭和63年	工学部焼却炉上屋新営		6	225			〃		年報VIII
平成元年	工学部夜間照明装置および防球ネット設置		7	2			〃		年報IX
	工学部記念植樹		8	2.5			〃		
平成2年	工学部ガス管改修		9	45			〃		年報X

亀山構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小・幼稚園運動場整備		1	60	古墳竪穴住居、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報III
昭和60年	教育学部附属山口小学校散水栓改修		2	1			立会		年報V
	教育学部附属山口中学校球技コート整備		3	2			〃		
	教育学部附属幼稚園環境整備(樹木移植)		4	1			〃		
昭和61年	教育学部山口附属学校汚水排水管布設	幼稚園・小学校部分 中学校部分	5	57 20	中世土壙か 河川跡か抗列	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶磁器、不明鉄製品、石鏃、剥片、植物遺体	試掘		年報VI
	教育学部附属山口小学校電柱移設		6	0.5			立会		
昭和62年	教育学部附属幼稚園遊戯室拡張		7	40			〃		年報VII
昭和63年	教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剥片	〃		年報VIII
平成元年	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴、河川跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質陶器、黒色土器、擂器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、石核、砥石	事前		年報IX
	教育学部附属幼稚園バレーボールコート支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		11	175	弥生溝状遺構	弥生土器、土師器、打製石斧、削器、剥片、石核	〃		
平成2年	教育学部附属山口中学校汚水排水管布設		12		溝状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、不明鉄製品、石鏃、敲石、扁平打製石斧、砥石、剥片	事前		年報X
			13			弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器、扁平打製石斧、砥石	立会		

光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校自転車置場移設		1		近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報III
昭和59年	教育学部附属光小・中学校焼却炉新営		2				立会		年報IV
昭和60年	教育学部附属光中学校外灯改修		3	1		土師器	〃		年報V
昭和61年	教育学部附属光小学校創立記念事業（ブロンズ像建立）		4	2.5		土師器、須恵器	〃		年報VI
昭和62年	教育学部附属光中学校グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、瓦質土器、土師質土器、瓦	〃	御手洗湾採集	年報VII
昭和63年	教育学部附属光小学校遊器具移設		6	10		土師器、土師質土器、陶磁器	〃		年報VIII
	教育学部附属光小学校屋外スピーカー設党		7	0.5		土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、土錘	〃	御手洗湾採集	
平成2年	教育学部附属光小学校運動場改修		8	23		縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、施釉陶器、磁器、土錘、剝片、鉱滓	試掘	御手洗湾採集遺物含む	年報X
	教育学部附属光小学校運動場改修		9	15	土壙	土師器、須恵器、須恵器模倣土師器	事前		

その他の構内

調査年度	調査名	所在地	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート艇庫合宿研修所整備	宇部市大字小野字土井	0.5			立会		年報IV
	学生部ヨット艇庫合宿所整備	吉敷郡秋穂町東字中道				〃		
昭和60年	熊野荘給湯機器取設	山口市熊野町3－21	7			〃		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉六丁目8－29	35	抗		〃		年報VI
	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市旭通り二丁目3－32	1		土師質土器	〃	6号宿舎	
		山口市水の上町6－9	7		瓦	〃	2号宿舎	
昭和63年	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市白石二丁目8－7	1		須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃	7号宿舎採集	年報VIII
平成元年	本部職員宿舎公共下水道切替	山口市水の上町6－1	1			〃	1号宿舎	年報IX
平成2年	人文・理学部職員宿舎公共下水道切替	山口市石観音町1－25	0.5		陶磁器	〃	7号宿舎	年報X
	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市香山町3－1				〃	3号宿舎	

※文献①　山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）。

※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の関与した調査については調査名をすべて把握しているわけでなく、注意されたい。

Summary

This report accounts the results of archaeological researches in eleven excavated areas located on campus in 1990.

As appendix, we report the environment and development of the sites on the Yamaguchi University campus and the plate to mate up made of iron in the shape of chrysanthemum bloom.

Yamaguchi University Archaeological Museum was established as part of the cross-faculties public facilities of the University in 1978. We refer to a plan from the conference of the Management Committee first and gain approval. we then carried out the research in relation to the construction the past society, environment and so on.

The current year we carried out researches as follows:

1 Researches on the Yoshida campus

We carried out three examinations under cunstruction. As for the excavation in relation to the environmental adjustment at the University Hall garden located in the middle of the Yoshida campus, we found layers contained objects from the Jomon to the Muromachi period. We confirmed same layers contaned many objects in the time of soundings at the past, but could not enearth any objects in this time. There were not structual remains and objects about noter two examinations.

2 Researches on the Kogushi campus

We carried out soundings in relation to the construction of the Radio-Isotope equipment at the University Hospital, found a flake made out of serpentite. By the form, a great variety of the quarity, and many stone implement in the past excavations around here,we guessed that this flake also belonged to the Paleolithic age. And then it became clear that several layers contained such artifacts were distributed in southen part on the Kogushi campus still more.

3 Researches on the Tokiwa campus

As for the examination under consturuction in relation to a laying gas pipe under ground, we could not find any artifact.

4 Researches on the Kameyama campus

we excavated in relation to the laying drain pipes under ground at Yamaguchi Junior High School. As the result of the excavation, we found a river

and layer containing cultural remains from the late Yayoi to the early Kofun period. The majority of the artifacts was pottery kinds of jar, pot, bowl, pedestaled bowl, jar stand, and so on. These potteries were made up of ones of varied areas such as the western Setouchi, Kinai , San-in district, we obtained a good data to be able to make clear the cultural diffusion. Also we confirmed which some layers containing cultural remains were distributed in southern part on the Kameyama campus.

5 Researches on the Hikari campus

In this campus we uncovered many artifacts from the late Jomon to the Medieval in the past. Then this area has been called as the 'Mitarai Site', we excavated at several spots in relation to the repair of the play ground at Hikari Elememtary School. Generally speaking, there were two results of the excavation.

Firstly we discovered layer containing cultural remains in stratigraphy at the first time. At the four spots in the northern and eastern part on the play ground, artifacts dating roughly from the late Jomon to the Muromachi were found out the same layer. But at the trial trench in the south-east for the Gymnasium belonged to the Hikari Elememtary School, we found a layer containing cultural remains contaied artifacts within the limits of dating from the fifth century to the early seventh century A.D.

The other was discovery of the structural remains in the Kofun period have been unknown on this campus untill now. They were five pits for burial which belonged to the dating from the late sixth to the early seventh century A.D. and two stages in the sixth century A.D. at least, for two surface of occupation at a certain period and crossing of lower some pits for burial. These pits for burial suggested us that the settlement from the sixth to seventh century A.D. have been in existence around the southern part at this campus. So we can presume that peoples in this settlement have engaged in the agriculture and fishing in the same time , by what there are a gulf named the 'Mitarai gulf' in front of this Hikari campus and we enearthed a clay net sinker by the excavation in this time.

6 Researches on the another campus

We carried out excavation at two residences in the Yamaguchi City in relation to the laying drain pipes, but could not any notable object.

Fig. 98　山口大学吉田構内地区割および調査区位置図

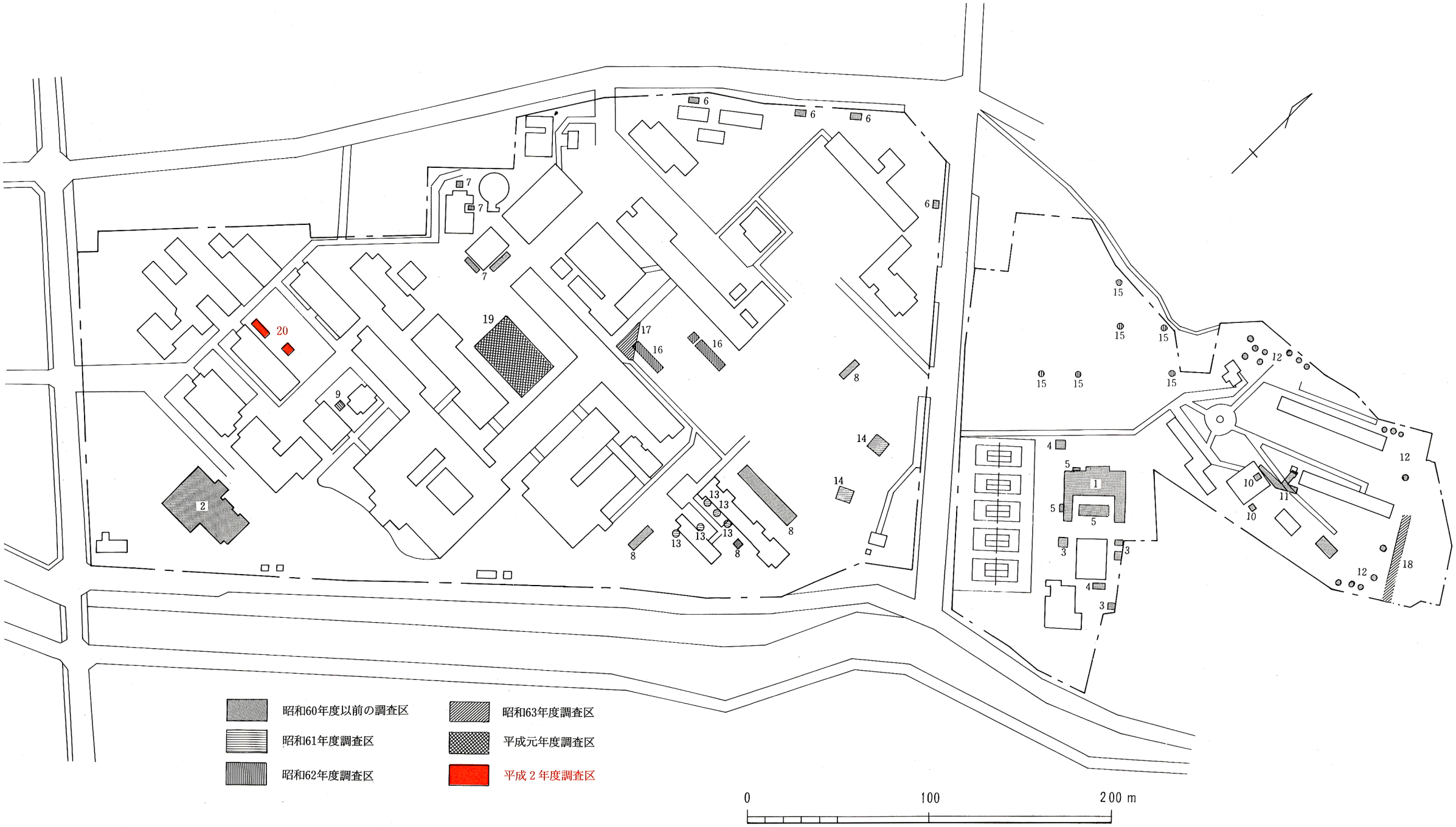


Fig. 99　山口大学小串構内調査区位置図

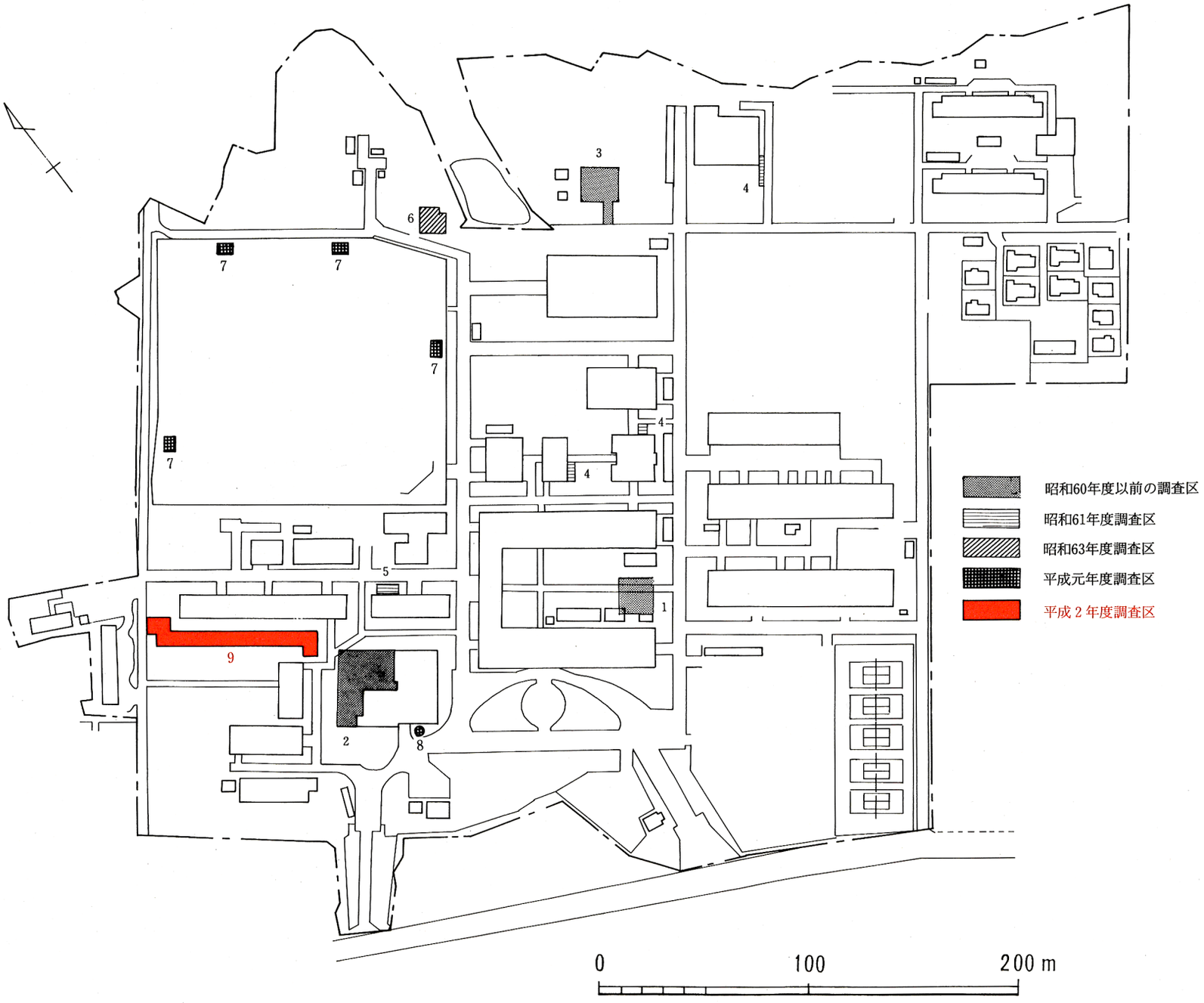


Fig. 100　山口大学常盤構内調査区位置図

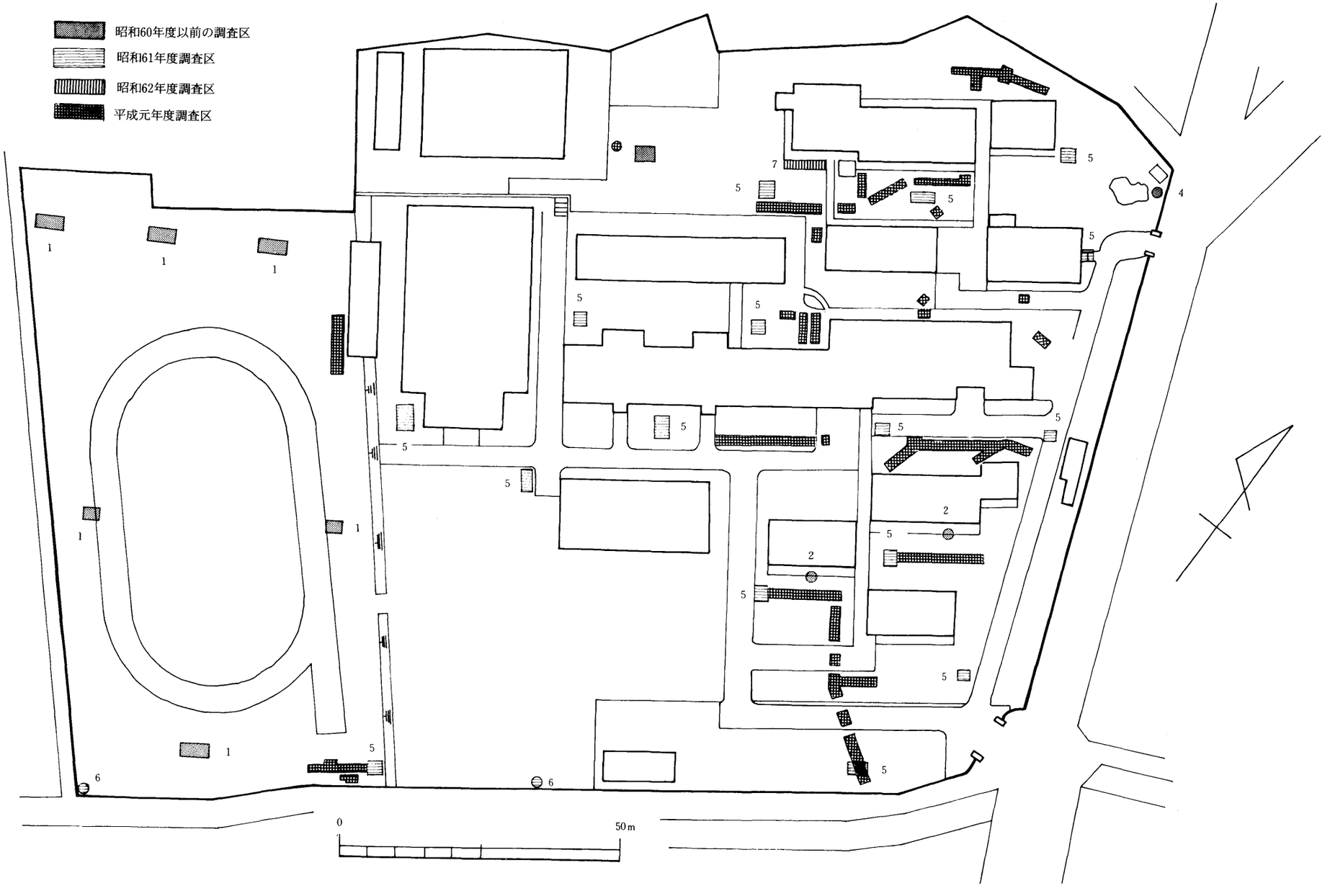


Fig. 101　山口大学亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

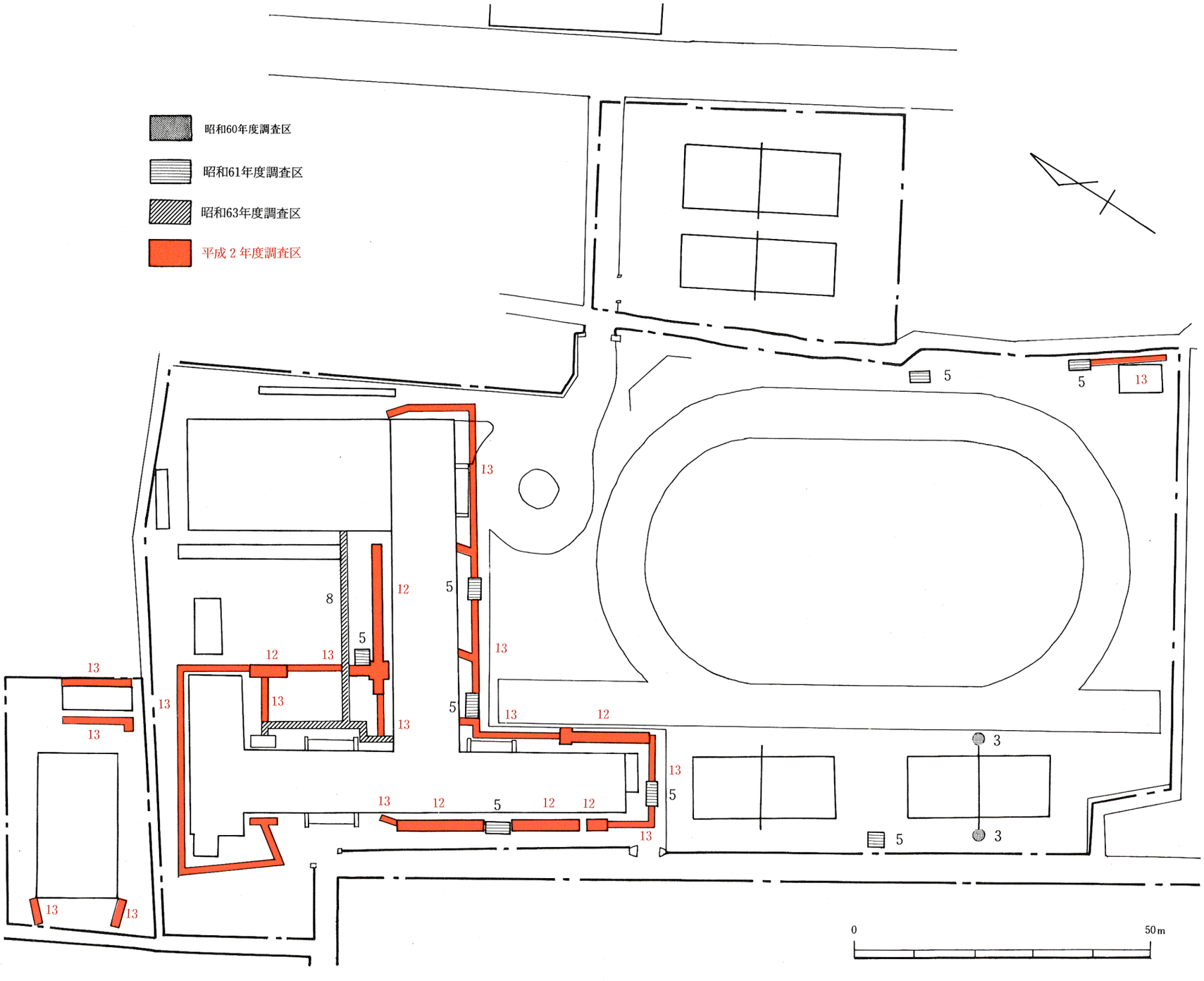


Fig. 102　山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図

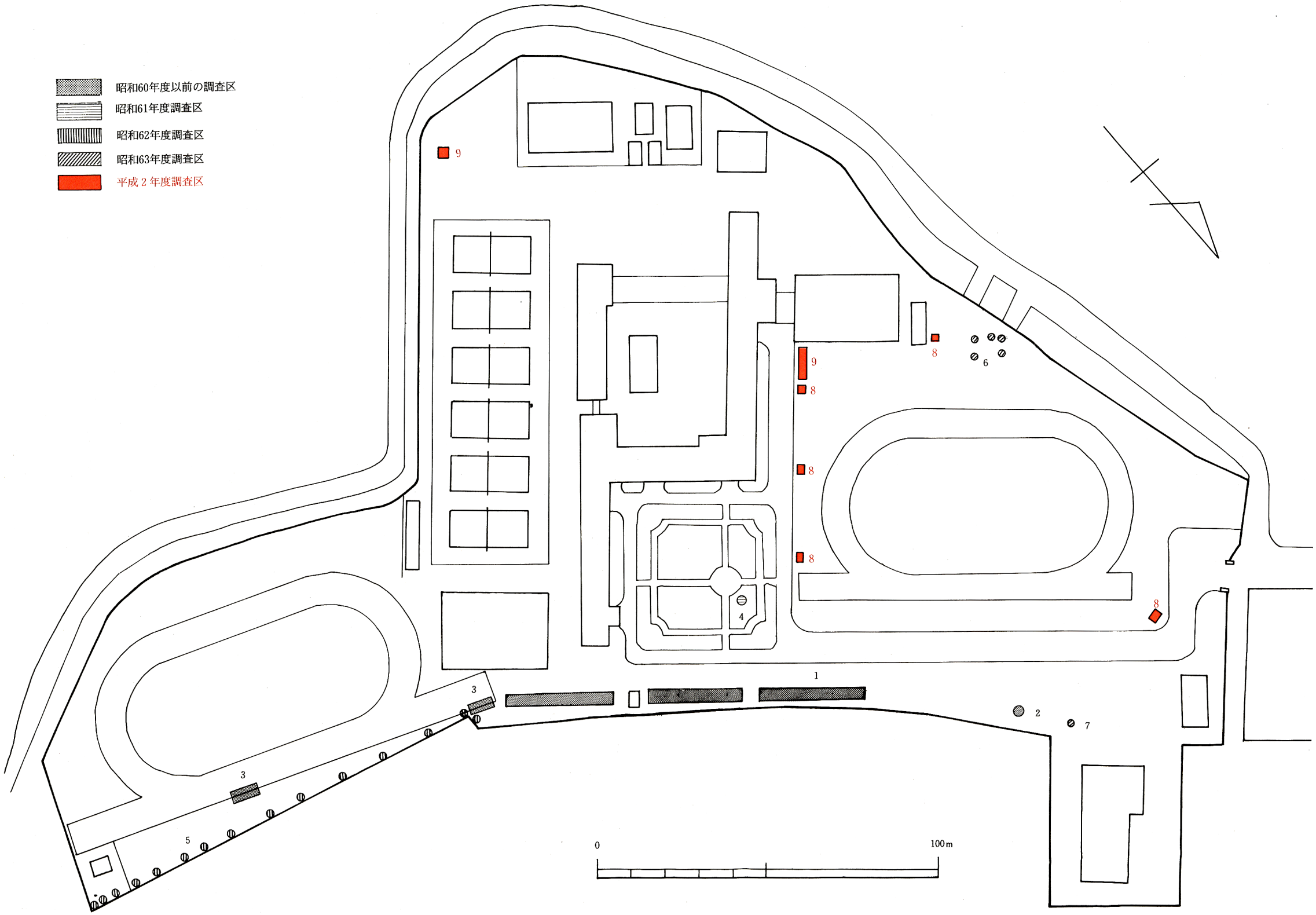


Fig. 103　山口大学光構内調査区位置図